

ハイスクールD×D～円
卓の銀鴉～

Licht10

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼少期を共に過ごした一誠のもう一人の幼馴染。麗しい容姿をした彼（彼女？）は英国での修練を積み、原作一年前に帰郷する。時を得て、赤龍帝の目覚めとともに彼は歴史の表舞台へと姿を晒すことになる。

これは、英国に結成された、二つの秘密結社が世界の歯車を狂わす物語である。

目次

旧校舎のメドラー

プロローグ

一話 銀髪の幼馴染

二話 動き出す日常

三話 ドーナシークの悲劇

四話 一誠の目覚め

五話 停戦

六話 和解

七話 悪魔契約

八話 はぐれ悪魔祓い

九話 墮天使

十話 悪魔の駒

179 158 138 108 82 70 49 33 20 4 1

十一話 尾行

十二話 蒼銀の騎士

十三話 討ち入り

十四話 墮天使レイナーレ

十五話 四翼の介人

十六話 聖女の祝福

エピローグ

番外編 突撃！ 不可侵のラウル邸

(上)

番外編 突撃！ 不可侵のラウル邸

(下)

季節編 ラウルクローズと聖夜の下陰

で暗躍する者々

414 387 365 359 333 318 288 267 240 204

戦闘校舎のセブンスミスト

プロローグ |

441

一話 襲撃の黒 |

445

二話 平穏な日常 |

470

三話 夕闇の旧校舎 |

492

四話 赤薔薇の夜露 |

513

五話 夜霧の侵入者 |

535

554
六話 造星の迎撃戦(上)(下)

554

七話 宵の煌き |

586

八話 朝露の協定(上) |

612

旧校舎のメドラー プロローグ

静まり返った公園の一角。

夕闇が迫る園庭で、若い一組の男女の影が交差する。

「ゴメンね。あなたが私たちにとって危険因子だったから、早めに始末させてもらったわ。恨むなら、その身に神セイクリッド・ギア器を宿させた神を恨んでちょうだいね」

胸に真つ赤な薔薇を咲かせ、血の海に沈みこむ少年を一瞥すると、少女は黒い翼をはためかせ夕闇の空へと去っていった。

「行つたか……」

小さく響くは性別の臆断を許さない中性で快い声。

舞い落ちる黒き羽根を見送ると、木陰より幾何学的な文字が装飾の施されたローブに身を隠した魔導師が姿を現す。

魔導師は血の海に沈み蒼白な顔をした少年に近づくと、片膝を折る。

「これで目覚めないとはな……噂に聞く赤き龍帝ウエルシュ・ドラゴンは随分と寝坊助のようだ」

鋭利な刃物で貫かれた、胸から背中まで到る切創に左手をかざす。

人影が微かに口元を震わすと、左手に仄かな光が灯る。

右手を振るうと宵に輝く星の様に魔方陣が次々と浮かび上がり、彼らを照らし出す。
【彷徨いし者よ、汝希望の生を掴まんと欲するなら、我が紡ぎし細糸を手繰り寄せよ】
左手の輝きが増し、魔方陣が呼応する。

瞬く間に少年の傷が沸き立つ様に音を立て、煙霧を上げ塞がっていく。

完全に傷が塞がると左手に集まっていた光は輝きを失い、辺りを照らしていた魔法陣も消えてなくなった。

治療の施された少年の顔色のは生気が戻ってきており、弱ってはいるものの確かに心臓の鼓動も取り戻していた。

「イツセー、貴方に降り掛かる不幸はこれが最後ではない、むしろ始まりだ。何時の時代も龍の気は災いを呼び寄せる。赤き龍帝なら尚のこと、数多もの厄災が貴方や周りの人々に降り掛かるだろう。ただ、イツセーなら乗り越えられると私は信じている。必要ならば、私もできる限り助力することを誓おう」

魔導師がそつと少年の頭を撫でると、血行の回り始めた堅い表情が僅かに緩む。

そんな姿を愛しむように魔導師は息を吹き返した少年を見つめる。

「だが……もし、貴方が堪えきれなくなり、龍の気に呑まれた時は……理不尽なこの世界に憎しみを抱くでもなく、貴方にその神器を宿らせた亡き聖書の神でもなく——」

閑静な公園に一陣の風が吹き抜ける。

「力無き私を恨め、盟友よ」

吹き付けた風が魔導師の美貌を顛わにする。

人形のような端正な顔立ち、猛禽類を思い起こさせる切れ長い目、ローブの中にまで伸ばされた透き通るような銀色の長髪は夜光を反射し、その姿はかの月の女神を連想させる。

まるで、雪を斯くような白い肌や愁いを帯びた薄氷の如き淡蒼の瞳は儚さを幻想させ、尚一層のこと神秘めいた美しさに拍車を掛けていた。

「!? 魔力反応……これはグレモリーか」

不調和な魔力が集まり、深紅の魔方陣が形成されるのを見て整然とした細眉を顰める。

すぐさま魔導師はフードを深く被り直し、右手を振るい己の魔力の残滓を消すと跡を残さずに立ち去ったのだった。

一話 銀髪の幼馴染

「おはよう、諸君」

「「「「きやあああああああ!!!」」」」

「ラウル様よ！」

「今日も御綺麗です……」

「ふふふ、ありがとう。でも、貴方も今日一段と可愛いく見えるよ。新しい髪型が良く似合ってる」

「はう／＼／＼／」

「衛生兵、衛生兵を呼べえー！」

「お、御姉様とお呼びしてもよろしいでしょうか……?」

「じゃあ、私は妹ちゃん、とでも呼ぼうかな?」

「お姉様ああ／＼／＼／」

「じゃあ俺も！」

「「「野郎は黙ってろ!!」」」

私立駒王学園。

数年前に共学となった元女子高である。

元女子高とあって男女比は3：7。

何気ない日常的一幕からも感じ取れるように男子学生の発言権は決して高くはない。そんな学園の校門で毎度恒例の一騒ぎの中心にいるのは銀髪の生徒。

腰辺りまで伸びる透き通るような銀系の長髪は女子生徒の羨望の的であり、日焼けのない白雪の様な肌は太陽を反射して光り輝く。

学業良好、スポーツ万能、その洋風人形めいた美貌と三拍子揃って人気も高い。

同じ学園の中で並ぶものと言えば、彫刻めいた美貌を持つ紅髪のリラス・グレモリー、絶滅危惧種の大和撫子・姫島朱乃の「二大御姉様」と称される最上級生二人である。

そんな彼女達を三人合わせて「駒王学園の三大御姉様」と称す生徒が大半である。【駒王学園の三大御姉様】の一人たる彼女……否、彼の名前を八幡ラウルと言う。

* * *

「ひっ」

ラウルが自身の教室に入ると、女子生徒の短い悲鳴が聞こえてきた。

「また、貴方たちか……」

女子生徒が悲鳴を上げた元凶を見て、彼はこめかみを抑えた。

視線の先にはいつもの三人組が学園と言う場にはそぐわない品々を高く積み上げていた。

彼らを一瞥した後、ラウルはクラスメイト達に挨拶をして回る。

「おはよう、村山、片瀬、藍華」

「あ、おはよう、ラウル君」

「おはよ！ ねえ、聞いてよ！ また、あの三馬鹿がね——」

「きしし、大人気ですなあ、お・ね・え・さ・ま」

挨拶をして回るラウルの中心に輪ができる。

彼の姿を見留めた途端、ほっと息を漏らす生徒も少なくない。

「イツセーが毎度済まない。気分は優れないだろうが大丈夫か？ 手がいるようならい

つでも言つて貰つて構わない」

「だ、大丈夫だよ！ 心配してくれて……ありがとう」

「ほーんと、あいつらも見習つてほしいわね」

「相変わらずの誑かしっぷり！ 惚れ惚れしちゃうね」

憂いを帯びた雰囲気を出しながらも、女神の抱擁の如き優しい笑みを浮かべ気遣う。

気遣いを受けた生徒は顔を赤らめ、周りの生徒は持てはやす。

それでも憂いが晴れることはない。

原因はかつて共に幼少期を過ごした幼馴染の兵藤一誠。

数年ぶりに再会した一誠は何処を如何間違えたのか性欲の権現と化していた。

性欲の権現たる彼の起こした騒ぎのフォーローに当たるのがラウルの日課である。

憂いを他所に、暴走を続ける一誠の行動はラウルにとつても頭の痛い問題であった。

もつとも、性格柄からして無関係な立場であつても彼らの暴挙によつて傷ついた女子生徒に手を差し伸べていたではあろうか。

そんな甘い空気を壊すように一人の男が立ち上がる。

「騒ぐな！　これは俺らの楽しみなんだ！　ほら、女子供は見るな見るな！　脳内で犯すぞー！」

松田の問題発言を聞いたラウルは嘆息し、暴挙を止めるべく動き始める。

「おはよう、イツセー、松田に元浜」

「お、おはようラウル」

「よー！　お姉様も一緒に見るかい」

「80・62・88、男にしては勿体ない。ラウルは生まれてくる性別を間違えている」
ラウルが見惚れるようなイイ笑顔をして変態三人組に話しかけるが、そのことに気付いたのは一誠のみ。

松田は畜生道に堕ちることを進め、元浜は性別の間違えを語る。

「引き込まれちゃダメよ、ラウル君！」

「……性転換でレズプレイ……濡瑠璃」

「兵藤×ラウル君が現実……ダメよ！ ダメ！ 御姉様は私の手で……」

「初めては譲れないわよ！ 御姉様の貞操は駒王学園が一番槍！ この——」

「……………」

変態三人組に触発された所為か、背後の女子たちが何やら騒がしい。

そんな女子たちの発言をここの一年で身に付けたスルースキルでラウルは聞き流す。

「ラウルとは幼馴染のはずだよな……。なのにこの落差……理不尽だ！」

「女顔のどこが良いんだよ！ あれか、今流行の草食系男子つぼさがウケるのか！」

「性転換した方が世の為、人の為になる」

「「同意!!」」

「そんなことで一致団結するな」

「「ぐぎやつ!!」」 「「はうっ!!」」

「「出た！ 御姉様（ラウル君）の神速六連撃!!」」

先程まで確執ができていた変態たちと腐女子たちが、ラウルを出しに団結を見せたところまで制裁が加わる。

変態たちには首筋に手刀を、女子生徒にはデコピンが炸裂する。

「ううう……頭が割れちゃう……」

「脳髓の端から端まで染み渡るこの感覚……これがお姉様の愛の鞭なのね！」

「おでこに痕が残っちゃったら、責任……とってね」

変態たちは地に伏せ、腐女子たちは涙ながらに訴える。

中には制裁されたことを逆手にとって責め落とそうとする強者もいる。

されど、ラウルにとって女子生徒の反応は逆効果であった。

「鏡花」

「あっ……」

責め落とそうとした女子生徒の顎を白魚の様な細い指で取り、心の真髄までもを覗き込もうと淡蒼の瞳を合わせる。

「貴方の爪の先から髪の毛の一本まで、全てを私に捧げる覚悟があるなら……責任を取るよ」
艶の乗った薄い花唇を耳元まで寄せ囁く。

言葉は紡ぎて詩となり、詩は声音を乗せて歌となる。

ラウルの美声によってゆったりと紡がれる歌は三半規管を狂わし、脳髓を犯していきく。

「ああああああ……」

脳髓まで犯された女子生徒は嘆声を上げ、腰砕けにへたり込む。

ラウルは腰砕けになった少女の肩とひざ裏に腕を回し、優しく抱き上げると黄色い声が教室を満たす。

「ふふふ、覚悟が決まったらいつでもおいで」

「ふあ……」

ラウルは片眼を一度閉じると去っていく。

席まで送られた女子生徒は瞳を虚ろに彷徨わせ、椅子の背もたれ体重を預けるのだった。

「さて、生徒会にでも届けるとしようかな」

自身の鞆から紙袋を出すと、本は本に、DVDはDVDに整頓して詰め込んでいく。

「や、やらせてなるものか……それには俺たちの夢と希望が……」

「お前とは分かり合え無いようだ。男装麗人ならぬ女装麗人たるお前とは……」

「……TPOを弁えれば誰も文句を言うまい。貴方たちはそれを間違えたのだ。相応の報いだろうよ」

地を這い蹲る変態たちがゾンビの様に抵抗を示そうとしたが、ラウルは一蹴する。

「……………」

いつもと違い変態の中でただ一人静かな一誠を見て、ラウルは用件を思い出す。

「放課後に重要な話がある。開けて置け」

「回収ついでにラウルは一誠に耳打ちする。」

「っ!? ラウル話っ——」

「今日こそ、その太腿貰った!」

聞き返そうとする一誠だが、ガバリツと起き上った松田の突拍子もない行動によって遮られる。

飛び掛かる松田に対して、問答無用の手刀の一閃が煌めいた。

「私は男だぞ、エロガキめ」

そうして、松田は今日も椅子に沈む。

* * *

朝の一件が気がかりで今日一日を悶々と過ごした一誠は、待ち合わせ場所でもある裏門へと向かっていた。

「遅かったな、イツセー」

「いやおかしいだろ、俺より後に教室を出たお前が何でももう居るんだよ!」

「慣れだ、慣れ。私ぐらいになると人垣の抜け方の一つや二つ、身に付けねばならないの

でな」

「ラウルはそういう奴だったな……」

一誠は改めて自身の幼馴染を見直す。

最初に目につくのはやはり絹糸の様な手入れ行き届いた優美な銀髪だろうか。

次に目につくのは銀糸に覆われた顔立ちであるろうか。小さく端正な輪郭、切れ長い眼や薄い花唇は知性的で尚且つ艶やかだ。薄氷の様な淡蒼の瞳に見止められれば、自然と心が高鳴ってくる。

雪の如き儂さを宿したほっそりとした手足も捨て難い。

また、胸こそないものの身体の描く曲線美は芸術品とも言える。

目の前の幼馴染を見て、女だったらと邪念を抱いたことは一度や二度ではなかった。

「なんだ……見惚れたか？」

「そ、そんな訳ないだろ！」

一誠は耳まで赤く染め、淡蒼の瞳から逃れようと顔を背ける。

「そうか……イツセーにとつて……私は見るに堪えない者か……」

淡蒼の瞳は悲しみを宿し、その美貌に影が差す。

絞り出した声は震え、哀愁の調べを奏でた。

「違うからな！ ラウルは絶対勘違いしてるからな！ 誰がどう見ても美人だし、そん

な美人に見つめられると恥ずかしいから……じゃなくて！ 俺達は男同士だろって話だからな!!」

「ふふふ、からかっただけに決まっているだろ。初心な所は相変わらずだな」

一誠が慌てふためく様を見て、一転ラウルは軽やかに笑う。

踊る銀髪は陽光を反射して一際眩しく輝いていた。

「まあ、イツセーがまた邪推していたことぐらいお見通しだがな」

抗議の声をあげようとした一誠が石像のように固まった。

石像と化した一誠の胸を軽く叩き、ラウルは肩を竦める。

「この身が女なればイツセーの更正に付き合えただろうに……残念な限りだ」

「……や、止めるよ、マジで！ 洒落にならないからな！」

百面相する一誠を見て、ラウルは笑みを浮かべる。

その笑みは老若男女問わずに魂までも解かしてしまいそうなほど、淫靡で妖艶な微笑みであった。

一誠は本能的に危険を感じたものの声を上げる間もなく捉えられてしまう。

「愛いな、愛いな。イツセーの素直な所は美德だ、私は好きだぞ」

「——っ!?!」

ラウルの胸に頭を抱き寄せられた一誠は、突然の告白に声にならない声を上げる。

柔らかさを持った体、女子の様に甘く酸っぱい香り。

米粒程の一誠の理性はラウルと言う名の掘削機によって削られていく。

「頭の中はすつきりしたか？ いや、煩惱で支配されたと言った方が正しいかな」

「……危うく、禁断の扉を開けるところだったぜ」

「それは困るな。私は至ってノーマルだ」

「嘘だ!! 本当でないと困るけど、絶対嘘だ!!」

一誠は拘束から逃れようとするが逃れられず、大人しく胸の中で言及する。

ラウルは嘘だ、嘘だと騒ぎ立てる一誠を見て目を細める。

「いつも通りのイツセーに戻って何よりだ」

「ラウル……」

一誠は心の機微を悟る幼馴染に感嘆の声を上げた。

顔こそ見えないがきつと聖母の様に見守っているだろうと。

「んんっ！ そーういやあ、重大な話があるって言っていたけどなんだよ」

このままでは幼馴染みが、本当に女に見えてしまうと危惧した一誠は、気を取り直し、ラウルに問いかける。

「……天野夕麻」

「ツ!？」

天野夕麻の名前を耳にした一誠は体を強張らせる。

初めてできた彼女

俺の彼女の天野夕麻ちゃん

本当に大切にしようとして

似合ってるよ、夕麻ちゃん

記念すべき初デート

ラウルに頭を下げて、一緒に考えたデートプラン

最後に夕暮れの公園で

私達の初デートの記念に……一っだけ私のお願いを聞いてくれる？

「……知らないんじゃないのかよ」

様々な思いが駆け巡る中で一誠の口から洩れたのは非難の言葉だった。

「……すまなかつたな、騙すつもりはなかつたのだが」

ラウルは片手で頭を抱きしめ、もう一方の手で背中を優しくさする。

「イツセーには現実を知って貰いたかつた。だから距離を置き、時間を置かせて貰ったのだ。イツセーが一人、悩み苦しんでいると知りながら、私は何もしなかつたのだ。すまない」

「なんだよ……それ……」

幼馴染から告げられた経緯に、一誠は肩を震わして耐え忍ぶ。

一誠の頭を抱きしめるラウルは何も応えずに、只々背中をさすり続ける。

「……誰も夕麻ちゃんのことを覚えてなくて………忘れようと思っていたのに………何で今さら……」

「……………」

思い起こすのはここ数日の日々。

自身の彼女であった天野夕麻の姿は何処にもなく、その痕跡ですら残っていないかった。

誰に尋ねようとも相手にされず、悪友には夢だと馬鹿にされ、まるで世界が敵に回ったかのように錯覚したりしたりました。

一日、また一日と時が経つにつれて、次第に一誠も自身が信じられなくなっていき、彼女と過ごした日々を夢だと思い込もうとしていた。

それなのに今更になって、目の前の幼馴染は覚えていたと、騙っていたと告げてきたのだ。

裏切られたという感情が……抑え込んでいた激情が奔流となり、捌け口を探して噴き出そうとした時、ラウルは沈黙を破った。

「辛かったろう……苦しかったろう……。イツセー……もう我慢しなくてもいいんだ」
「俺……俺！」

「必要なら、私の胸を貸そう」

ラウルの手は一誠の背中を軽く打つ。

「今は只、今は只……感情の赴くまま、全てを吐き出せ」

放課後の校舎裏に少年の嗚咽が響き渡った。

* * *

「わりい、服汚しちゃったな」

一頻り感情を吐き出した一誠は鼻をすすり、照れくさそうに笑みを浮かべる。

「気にするな、服なら幾らでも替えることができる。むしろ、イツセーの心を少しでも癒せたと思えば勲章物だ。それに——」

ラウルは自身の制服にできた、勲章の跡に手を翳す。

口元が微かに震え、翳した手が一瞬光を帯びる。

「はっ。」

「このぐらいいごうと言うことはない」

ラウルが手を戻すとそこには皺一つない、一誠が胸を借りる以前の新品の様な状態になっていた。

目の前で見せられた非常な光景に一誠の頭は追いつかない。

「静かに……聞きたいことは山ほどあるだろうが騒ぎ立てるな」

いつになく真剣な雰囲気をつらつらとしたラウルは、一誠の口元に人差し指を突き合わせる。

目を合わせて話しかけると、一誠はゆっくりと頷いた。

「よし、良い子だ」

「ちよっ！ また、お前！」

一誠の反応に満足したのか、小悪魔の様な笑みを浮かべると、再び頭を抱き寄せる。当然ながら、抵抗するまもなく一誠は拘束される。

「イツサーには教えたいたいことが大いにあるが、此処では監視が多すぎる」

ラウルは他人の……それも良からぬ者の視線があることを告げる。

監視という言葉の意味を理解した途端、一誠の頭には夕暮れの公園が思い起こされて、思わず身を縮こまらせる。

「校舎の影に1、雑木林に1、旧校舎に2、生徒会室から1。私たちの周りにも分かりにくい、使い魔と思われるものが3体居る」

明確に告げられた監視者の数に一誠は頭を殴られたような衝撃を受ける。

せめて首を動かし、位置だけでも確認しようとするがラウルによつてそれは遮られる。

「目で追うな。こちらが気づいていることがばれる」

一誠は自分の付いていける世界ではないことを知り、成されるがままにラウルに従う。

意図に気付いたと判断したラウルは、一誠を開放する。

そして、校舎に背を向けて裏門を出ると、突如として走り出した

「場所を移すついでに、尾行を撒くぞ。少し走るが付いてこれるな」

悪戯を思いついたかのような笑みを浮かべるラウルを見て、一誠はどこか懐かしさを感じるのであった。

二話 動き出す日常

追つ手を撒いたラウルたちはファーストフード店に入り密談がてら、軽食を取ることになった。

場所について言及した一誠に対しラウルは――。

「なに、英国育ちの私としてはティータイムを押しして然るべきだろうよ」

「味に当たりはずれがなく、万民受けする嗜好品としては最高の部類に入るのではないか？」

「格式の高い店を選んでも良かったが、イッセーは話どころではなくなるだろうからな」――等と宣い、反対する理由もなく決定した。

また、支払いは全てラウル持ちであり、一誠としてもこれ以上追及することはなかったが。

「滑稽無灯な話だが心して聞け」

端正な顔を寄せてくるラウルに対して、一誠は気が気でなかった。

漸く手がかりを得た、彼女の情報。

また、それ以上に目の前の幼馴染が原因であった。

中身は男だと頭で理解していても、見た目は稀なる美少女なのだ。

普段は自分が向ける嫉妬と羨望の眼差しを向けられていることも拍車を掛けていた。

「天野夕麻についてだが……確かに存在した」

ラウルは懐から一枚の写真を取り出すとテーブルの上に置く。

「つ!? 夕麻ちゃん……」

一誠は身を乗り出して、写真を手にする。

写真の中に映るのは濡れ羽の様に黒い長髪的美少女。

一誠の彼女にして、夕暮れの公園で殺そうと襲いかかってきた天野夕麻だった。

「焦るな。愚直なままで真っ直ぐで熱心な所はイツセーの美德だが、人の話を聞かないの

はいただけじゃないな」

「……褒めてんのか、貶してんのか、どっちかにしろよ」

「長所と短所は表裏一体、単なる言葉遊びに過ぎないものだ」

一誠はジト目をしてラウルを見るが、彼は軽やかに笑って応える。

「落ち着いたか?」

「ああ」

「続けるぞ。天野夕麻が存在したということなのだが、正確に言うとな……天野夕麻と言う人間を語った異形の存在が居たということだ」

「異形の……存在？ スライムみたいな？」

「す、スライムか……？ まあ、あれもあれで異形の存在には間違えないな」

「そ、そっか……」

一誠が異形の存在と聞いて、まず思い起こしたのはゲル状の生物だったのは流石としか言いようがない。

ラウルが是と答えると、一誠の表情がだらしなく崩れる。

今までの緊張感は何処に行ったのかと嘆息するラウルであった。

「スライムは置いておいてだな。イツセー、貴方が公園で彼女に刺されたことは覚えてるだろ」

「なっ!? なん……で……そのことを……」

夕麻に関しては一誠が紹介したことから知っていても問題ないのだが、公園の件は話が別である。

公園で刺されたことは一誠と彼を刺した夕麻しか知りえない事柄であったはずなのだ。

「ま、まさか……ラウル、お前が……」

「だから、落ち着け」

とんでもない結論に至ろうとした一誠は、手刀を見舞われる。

ラウルに夕麻を紹介した時点で、その可能性はほばないに等しいことぐらい、冷静に考えれば導ける筈だ。

テーブルに沈む一誠を見て、外野の野次馬たちは「修羅場！ 修羅場なのね!!」と勘違いしている者もいた。

「起きろ一誠。邪推するのは構わないが、話が進まないのだから家に帰ってからにしたい」

のそのそと起き上る一誠を見て、ラウルは話を続ける。

「公園での一件を知っているのは、尾行をしていたからに相違ない。彼女を一目見たときから異形の存在だと気付いていたからな。悪いとは思ったが後を付けた次第だ」

一誠は悪いと言いながら、悪びれもしない幼馴染を再びジト目で見る。

夕麻と居た当時に、異形の存在だと聞いても信じなかっただろうし、デートプランを立てた時に注意でもしてくれていれば、と思わないでもない。

さらに言えば、襲われた時になぜ助けくれなかったのかと高望みもしたりする。もつとも、言えるはずもないので結局はジト目で見ることしかできなかつた。

「それでだ、イツセーが刺された時の状況をよく思い出してほしい。彼女の背中に何があつたか覚えているか？」

「黒い……黒い翼！ 夕麻ちゃんの中には黒い翼が生えてた」

「生えていた……まあいいか、その黒い翼が異形の証だ。翼など本来、人間にあるはずもない器官だからな。つまり、イツセーは人ならざる者に化かされたという訳だ」

「化かされたって……そんな……でも、俺刺されたはずだよな」

自身の記憶とラウルの証言。

最早、夕麻が異形の存在であることを一誠は認めざる負えなかった。

しかしながら、理解できないのは刺されたはずの切創である。

切創は胸を突き抜けており、素人が見ても致命傷なのは疑いもなかったはずなのだ。なら何故、今もこうして生きているのか。

その答えを目の前の幼馴染が持っているとは、露程も思っていなかった。

「それは私が治したからな」

「治したっ!?!」

しれっと、想定外なことをラウルは言つてのける。

裏に精通してそんな感じ、いとも容易く致命傷を治療したこと。

そして何より人離れた美貌の持ち主だ。

こいつこそが異形の存在ではないかと、一誠が邪推してしまうのも無理ないことであつた。

「まあ、私だけではなかったが、そのことは追々話そう」

一誠の困惑を他所に、ラウルは紙ナプキンで口元を拭く。

使い終わった紙ナプキン綺麗に折りたたみ、トレーの上にある容器を纏める。

「今日はここまでだ。知りたいことはまだまだあるだろうが、今はゆつくり休んで気持ちを整理するべきだ」

ラウルはイツセーの肩を軽く叩くと、ゆつたりと席を立ったのだった。

* * *

「……撒かれました、すいません」

「申し訳ありません……」

神聖な校舎の裏手に位置する旧校舎の一角。

オカルト研究部と名を打った室内の至る所に描かれるのは幾何学文字。

中央より広がる人の目を引く円陣には、悪魔の家紋である紋章が面妖に輝いていた。

そして、部屋の奥——王座たる席に端座するのは、美しい紅の長髪を持つ姫君であった。

背徳的な雰囲気の漂う一室で、主である紅の姫に対して、男女一組の悪魔が頭を下げていた。

「そう……撒かれてしまったものは仕方ないわね」

紅の姫は麗しい顔を顰め、嘆息を吐く。

眉間を解きほぐすと、自らの下僕に姿勢を直すように促す。

「彼は思ったよりやり手の様ですわね」

微笑みを浮かべながら、頬に手を付き小首を傾げる女性。

まるで大和撫子を体現したが如き女性は、艶のある黒髪を駿馬の驥尾のように纏め、妖しく躍らせていた。

「もしかしたら、校舎裏の時点で気付かれていたのかもしれないわね」

「……校舎裏の時点ですか？ 尾行の途中ではなくて？」

「小猫たちと別ルートで追わせていた使い魔も撒かれてしまったわ」

「……部長の言う通りでしたら、かなり厄介なことになりますわね」

紅の姫たちは彼の存在を再評価する。

この部屋に集まった彼女達は人ならざる者たち。

その存在に気づき、包囲網を易々と潜り抜けるなど、並大抵なことではなかったのだ。ともすれば、彼は彼女達と同じ人外種。

もしくは、その存在を知りえ、裏の世界に精通する、稀有な力を宿した人間やも知れなかつたのだ。

「八幡ラウル、学年は二年生。成績、素行とも良好、性格は社交的。人離れた、その容姿から男女ともに人気が高く、近隣では女子生徒と間違われること多数。出生はこの町で、特記事項といえは半生を過ごした英国より舞い戻った帰国子女、ということぐらいかしらね」

「私たち二人と合わせて【駒王学園の三大美女】と呼ばれているのをよく耳にしますわね」

一般的には男の娘、学園内だと女装麗人なんて呼ばれていますわよ、と黒髪の女性は付け加える。

「佑斗、そういえばあなたは何度か彼と手合せをしていたわね」

「週に一度、剣道場にてやらせて頂いてます」

佑斗と呼ばれた、美男子の悪魔は流暢な口調で主に問いに答える。

その甘い顔立ちはうら若き少女達の視線を独り占めする。

「実力的にはどうかしら？」

「正直な所、底が見えません。お互い防具をつけるのを嫌がっているのです、ほぼ実戦に近い感じで竹刀を交えるのですが、未だ勝てたことがないのが現状です」

しかし、口から洩れたのは驚愕の事実。

件の女装麗人は、騎士を司る金髪の貴公子と互角以上の戦いを繰り広げると語る。

「……それは悪魔の力を開放してでもかしら？」

「はい、去年の秋に挑発に乗ってしまっただけからは、使わせて頂いています」

その偉業は悪魔の力を以ってしても、なお衰えることはない。

「冗談……ではなさそうですね。その様子なら、駒の特性も用いたことがありそうですね」

「……一度だけです」

「一度？ 意外に少ないわね……その様子だと何かあったのかしら？」

「ええ……ちよつとした事故で勝負は着きませんでした」

金髪の貴公子はバツの悪そうに曖昧な笑いを見せる。

本人も語り難いことなのだろうと、紅の姫は興味を引いたがそれ以上尋ねることはな

かった。

「とても特殊な訓練を受けた人には見えなかったのですが……やはり、神器持ちの方で

しょうか？」

「その可能性があるのは間違えないのだけど——」

黒髪の女性の問いに、紅の姫は首を振って見せる。

「——彼は悪魔^{エクソシスト}祓いかもしれないわ」

『っ!?!』

そして、紅の姫が導き出した結論は悪魔たちに緊張を奔らせる。

悪魔祓い——。

——曰く、聖書の神の下に集いし、使徒であると。

——曰く、神の威光を以つて、魔を滅することを生業にすると。

——曰く、人界に住む悪魔にとつて、最大の天敵であると。

悪魔にとつては古より続く戦にて、覇権を争う仇敵の使徒であつた。

「流星にそれは飛躍しすぎでは？」

「……先輩は意地悪ですけど……悪い人には見えませんでした」

「彼が教会の人間だなんて……僕には信じられません」

主が導き出した結論が信じられないと下僕たちは語る。

仮に事実だとすれば、かの麗人は使徒であることを微塵も感知させずに学園に潜り込

んだことになるからだ。

それ以上に、彼の人当たりの良さを目の当たりにしてきた少女達にとつて、受け入れ

難いことであつた。

「彼が住んでいた倫敦は聖公会の……その母体ともなつたと言われる英国国教会の御膝

元。可能性は少なからずあるわ」

「それは……」

「それに駒の力まで解放した佑斗の剣についてこれたのも説明着くわ」

金髪の貴公子が騎士の駒の特性を開放のなら、同じ悪魔であっても捉えることは難しい。

グレモリー眷属、随一の速度と剣の腕が彼の売りであったのだ。

「だけど、もしも教会の人間でなかったら、この駒を使う価値は十分にあると言えるわね」

人ならざる美しさを宿した紅の姫の白き指には、馬の頭部を模した一つの駒が弄ばれていた。

騎士ナイトと配役されるその駒は、一際紅く紅く輝きを放ち、宿主を待ちわび血潮のように脈動を繰り返していた。

「リアスは彼を眷属にする気満々ですわね」

「当り前よ、佑斗をここまで唸らせる人材を腐らせるには惜しいわ」

必ず自らの物にすると、紅の姫は豊満な胸に手を当て気概を見せる。

「それに……先日、眷属した子の幼馴染。これは何か秘めているものが、あるに違いないわ」

「兵士ポーンの駒、八つ分の子ですわね」

「そうよ、駒を八つも転生に消費した悪魔だなんて未だ嘗てないことよ」

駒八つ——およそ、転生悪魔八人分の価値が、新入りとなる兵藤一誠にはあった。

これは極めて異例な事であり、下手をすれば神の創造物、奇跡を織りなす神セイクリッド・ギア 器 八
つに相当し得る可能性を秘めていたのであった。

その幼馴染でもあるラウルにも、それと同等の期待を寄せるのも無理らしからぬことであった。

「……部長」

「なにかしら?」

「……新米悪魔の先輩は……悪魔祓いの先輩と行動中……」

物静かな白髪の美少女は発言する。

悪魔でもある一誠と悪魔祓いかもしれないラウルが行動をともしている危険性を。

「だ、大丈夫よ! 幾ら悪魔祓いとは言え、人間ですもの! いきなり親しい仲の幼馴染が悪魔になったから祓う、なんて展開にはならないはずだわ!!」

「リアス、落ち着いてください」

「朱乃! これが落ち着ける訳がないじゃない! 兵藤君は悪魔になったばかりなのよ!
! 右も左も分からないような子が悪魔祓いの犠牲になるだなんて……」

紅の髪を振り回し、姫は見目麗しいその玉顔に絶望の色を映し出す。

注意を怠っていた所為で下僕が危機的状况にあると。

このままでは幼馴染の皮を被った悪魔祓いに、自身が転生させてしまった一誠が討た

れてしまうと。

親愛の情念が深いグレモリー家の息女としては耐え難いことであった。

「八幡君が悪魔祓いかもしれない、という話をしたのはリアスですわよ。加えて、八幡君の話は可能性の域を出ない話。彼は案外善良な市民かも知れませんか？」

「そうね……落ち着いたわ朱乃」

警戒の対象が人畜無害な存在だと、微塵も思っていない女性ではあったが、敢えてその可能性を述べる。

いきの利いた冗談に、女性の心遣いを感じ取った紅の姫は落ち着きを取り戻した。
「でも……万が一、彼が悪魔祓いで、私のかわいい下僕を傷つけようものなら……」

「その時は私もお供させて頂きますわ」

暗幕の下りた一室で女悪魔二人は、一人の男の未来図を描いて高笑を上げる。

知らず知らずの内に伸ばされた魔の手は、ラウルの背中に悪寒を奔らせたのだった。

三話 ドーナシークの悲劇

「着いたぞ、イツセー」

ラウルたちは帰宅前に一度、一誠にとって運命の転機となった公園へ寄ることにした。

事の発端は一誠が発した一言ではあつたが、彼の目に宿る決意を見てラウルは快く承認したのであつた。

「ここで夕麻ちゃんと……」

くしくも、彼らが訪れたのは一誠が夕麻に襲われた夕刻時。

その時の光景を思い出してか、一誠の顔色は返事の現場である噴水に近づくに連れ、青褪めていく。

「無理するな、少し横になつて気を休めるぞ」

足取りの覚束ない一誠の手を引くと、噴水の淵に座り、己の膝で休むことを進める。

「ほんと、男だとは思えないよな……」

一誠は太腿から発せられる魔力に魅せられ、静かに身体を横たえた。

口では悪態を吐く彼ではあるが、効果はちゃんとあつたようだ。

頬をすり寄せる彼の顔色は、徐々に良くなりつつある。

どこか真面目な一誠に、ラウルは小さく笑いを漏らした。

「まあ、仮に私が女であれば、すでに私の貞操は貴方に喰い散らかされているだろうな」
「ばっ!!? そんな訳あるか!!」

からかい返すと、一誠の血行は瞬時に良くなり、目に見えて慌てふためく。

語尾を強め否認する一誠の姿を見たラウルは目を細め追及する。

「まったく説得力がないのだがな。イツセーは好きだろ? そういうことが」

一誠は首まで赤く染め、顔を太腿に埋める。

ラウルが語るのは一誠の所有する秘蔵本。

特に幼馴染の女の子が描かれていたものが、少なからずあったのだ。

口元に手を当て軽やかに笑声を漏らす麗人に一誠は為されるがままであった。

ラウルの笑い声が納まると、会話は自然に途切れ、夕刻の時間が静かに流れる。

夕日が一際強く差し込み始めた時、一誠は姿勢を変え意を決したように口を開いた。

「なあ……ラウルは——」

正体を問おうとする一誠に、雪のように白く細い指を押し付け、口の動きを封じる。

「秘密だ。私のことを知りたいのなら、それなりの覚悟がいるぞ」

「そっか……」

困った子を見るようにして、ラウルは微笑を浮かべる。

独りでに納得した一誠を見て、優しく彼の頭を撫でたのであった。

「イツセー、客人が来たようだ」

日が落ち閑静とした公園に砂を踏む音が響き渡る。

姿を見せたのは、時季外れのロングコートで身を隠し、古めかしい帽子を被る壮年の男。

一誠に肩を軽く叩き、膝の上から起きるよう指示する。

「やあ、墮天使よ。敵地まで乗り込み、いったい何用かな？」

旧知の友人を出迎えるかのように振る舞って見せる銀髪の麗人。

されど、臉上に隠された薄氷の眼は鋭い眼光を放っていた。

「貴様はこの地の管理者……ではなさそうだな」

「残念ながらも。この地の管理者は悪魔のお姫様……決して、私の様な善良な市民ではあるまいよ」

「……墮天使？ 悪魔？」

墮天使と呼ばれた男は、ラウルの正体を推し量る。

ただし、軽やかな笑みを浮かべるラウルの正体は幼馴染でもある一誠でさえも知りえ

はしない。

一度、会しただけの墮天使に推し量れるものではなかった。

「悪魔と共にいるような輩が善良な市民だと……馬鹿も休み休み言え！」

「イツセー、貴方と一緒にいた所為で私まで目を付けられてしまったのだが」

「俺の所為にすんな！ 大体、おっさんに話しかけたのはラウルじゃねえか！」

剣呑な雰囲気醸し出す墮天使に、ラウルは眉を顰める。

当て付けるように苦言を投げ掛けるが、一誠は納得がいかず、ラウルの言動に食って掛かる。

「それに墮天使とか、悪魔ってなんだよ……あれか、ラウルの言っていた異形の存在ってやつか？」

「よく分かったじゃないか、偉いぞイツセー」

ラウルは小出ししていた情報を繋ぎ合わせ、正解に辿り着いた一誠を頭を撫で讃える。

放課後から続いた過剰なスキンシップにより、一誠は借りてきた猫のようにおとなしい。

「だがな、気を付けろよイツセー。墮天使というのはな、年端もいかない女子供を付け狙い、非道の限りを尽くすような連中——」

「出鱈目を言うな!! 黙って聞いておれば、あることないことを吹き込みよって……その上、おっさんだと! 悪魔のくせに随分と生意気ではないか!!」

「どうやら琴線に触れてしまったようだ。これも相容れぬ者同士の宿命という奴か……」

ラウルは真剣な表情になり、自身が見聞きしてきた情報を切り抜いて伝える。

——墮天使は集いて神の子を見張る者と呼ばれる法規的組織を創っていること。

——グリゴリは世界の拮抗を保つ為、神器所有者に容赦ないこと。

——特にいかなる勢力にも属してない、立場の弱い者を付け狙うこと。

本来、伝えなければならぬ情報を口にしていない為、墮天使にとつては聞くに堪えない所業を為してきたことをラウルは平然として一誠に教え込む。

「さつきから悪魔、悪魔、俺に向かって言ってるけど、おっさん! 俺は全うとした人間だぞ!」

「え? なにを言っているんだ、イツセー?」

「何を馬鹿なことを」

一誠の言動に、ラウルは丸い目をし、墮天使は他愛ごとと吐き捨てる。

「冗談だよな……冗談と言ってくれよ、ラウル!」

告げられたまさかの事実茫然とする一誠。

詰め寄る一誠に、ラウルは皮肉気に口角を釣り上げた。

「貴方は、立派な……色情魔、だろ？」

「八幡君に座布団一枚!! じゃなくて、俺が悪魔かって話だろ!!」

「色情魔というのは否定しないのかな？」

「……否定したいけど、否定できない」

日頃の行いを省みた一誠は肩を落とす。

そんな様子を見てラウルは軽やかな声で笑みを浮かべた。

「状況が理解できていないと言うことは、やはり貴様ははぐれで間違えないな」

「ならば、奴何にせん墮天使よ」

一誠の存在をはぐれ悪魔と断定する墮天使。

ラウルは帽子を深くかぶり直した彼を見て一歩前に踏み出す。

位置するのは、悪魔を狩ろうと息巻く墮天使と状況のできていない幼馴染の合間。

戦闘に支障が出ないように近づかず、いつでも庇えるよう離れない間合いであった。

「はぐれだと分かった以上狩るだけのこと。行動を共にしている人間諸共な」

「それは……夕麻ちゃんの!」

夕闇に包まれた公園に眩いばかりの光が立ち昇る。

墮天使が手にするのはかつて神より賜った威光。

手にする光を槍と替え、怨敵を滅さんと黒き翼を顕わにさせ立ち構える。

「最近の墮天使は冗談がうまいようだ。貴方程度の実力で私を狩るなどと」

光の槍を目にしてもラウルの態度は変わらない。

むしろ、一層に挑発行為を強める。

ニヒルに笑うその姿は有り余る美貌と会い重なって、幻想的であり同時に蠱惑的であつた。

「ほざいたな！ 人間!!」

「ラウルっ!？」

墮天使は獲物を振りかぶり光の速さで投擲する。

矛先は道化の如き銀髪の麗人。

僅かにその軌道を捉えた一誠は悲鳴交じりに警告を送る。

無情にも、光槍はラウルを捉えんと疾走する。

そして——銀髪が月を映して輝き舞つた。

「……残念」

「ぐっ……あつ！ なんだ……と!？」

光槍は半歩、体を引いたラウルの手によって掴み取られ、標的を射抜くことはなかつた。

敵の獲物を掴みとったラウルは、舞うが如き無駄なき流麗な動きを見せ、墮天使へと投げ返す。

墮天使は驚愕の色に顔を染めながらも、辛うじて黒き翼を羽ばたいて宙に浮いて見せる。

されど、投げ返された光槍は、僅かに反応して見せた墮天使の右足を易々と貫いた。己の光槍に貫かれた激痛に呻き声を上げ、地に墮ちる。

「ぬっ……はっ……はっ……、貴様……いったい、何をした？」

「口程にもないな、墮天使よ」

光の槍を消した大股より流れ出る血潮に服を染め、額に脂汗を浮かべた苦悶の表情で墮天使は問う。

墮天使の問いに答えることもなく、ラウルは一步、また一步とゆったりとした歩調で歩み寄る。

近づいてくるラウルに気圧された墮天使は傷を負った右足を庇いながらじわりじわりと後退する。

「まるで親神に反逆した新米天使の元を飛び立った雛鳥の様ではないか」

ラウルは仰々しく腕を広げると、己を襲った愚か者を嘲る。

嘲笑われた墮天使は射殺さんとはばかりに睨み返すが動じることもない。

絶対強者の如きラウルの態度に墮天使の頭は冷えていく。

正気に戻った墮天使は再び光の槍を作りだすと、空に向かって投擲する。

「……これで時期に仲間が集まってくるぞ。精々、余生を楽しむがいい」

ラウルを憎々しく睨むと嘲り返した。

投擲された光槍は空で弾る。

白光の世界を作り、篝火の如く辺りを照らし出す。

「ひ、卑怯だぞ、おっさん！ 自分が敵わないと分かると仲間を呼ぶなんて」

「心配の必要はないぞ、イツセー」

一誠の心配を余所に、ラウルは露程も動じることはなかった。

むしろ、墮天使の態度に嘆息し、蔑みの視線を送る。

「私が結界を張ったことにも気づけていないとはな……呆れを通り越して、哀れですらある」

「ば、馬鹿な！ この私が人間の張った結界に気付けないなどあるはずがない!!」

「だから、哀れと言っているのだ」

結界の存在に気付けなかった墮天使は狼狽する。

醜態を見せ続ける墮天使から視線を外すと、背後の暗がりには潜むものへと問いかけた。

「貴方たちもそうは思わないか、悪魔の皆さん？」

問い掛けたものを除き皆が息を呑む。

それは暗がりには潜んでいたものも同様であった。

暫くすると、影に潜むものは意を決し、複数の人影が頭わになる。

「ごきげんよう、兵藤一誠くん、八幡ラウルくん」

「り、リアス先……ぱい？ それに、姫島先輩、イケメンに小猫ちゃんまで……」

口上を切った紅の姫リアス・グレモリーを筆頭に、黒髪の大和撫子、金髪の貴公子、白髪の美少女がぞろぞろと姿を現した。

悪魔と呼ばれた彼女達は皆、整った容姿をしており、尚且つ私立駒王学園の制服に身を包んでいた。

ラウルは姿を現した彼女達に問う。

「これは、これは……旧校舎を居城とする者たちで、間違えないかな？」

ラウルの問いを聞いた悪魔陣営に緊張が奔る。

白髪の美少女こと塔上小猫は主の前に出ると油断なく拳を構える。

金髪の貴公子、木場佑斗は魔剣を創り出し、同じく主の前で仮想敵を見定める。

黒髪の大和撫子、姫島朱乃は姫の傍らで雷を迸らせ、威嚇する。

紅の姫は臨戦体制を取る下僕たちを片手を上げ鎮めると、下僕たちの一步前に踏み出

した。

夜の帳の降りた公園で、紅と銀の視線がかち合う。

「いつから気づいていたの？」

「貴方の鮮血に染めたが如き紅髪を目にしたその時から」

「……そう」

質問の意味を意図的に逸らそうとするラウルの意思にリアスは息を漏らす。

紅髪の美姫は飄々とした姿勢を取る銀髪の麗人への追及を後送りになると、先んじて解決すべき問題に着手する。

「……赤い髪……グレモリー家の者か……」

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん。私の管理地でこれ以上、勝手な真似をするなら、容赦をしないわ」

現れた紅の姫を墮天使は憎々しく睨みつける。

睨み付けられたリアスは涼しい顔をして忠告する。

「もちろんあなたもね」

騒ぎを起こした片割れのラウルにも告げる。

忠告された本人は目を閉じたまま反応を示さなかった。

「くっ、あちらの悪魔はそちらの眷属で、奴は流れの魔導師と言ったところか。そして、

「この町はそちらの縄張りだったわけだ」

「理解が速くて助かるわ。この町は私の管轄なの。私の邪魔をしたら、その時は容赦なくやらせてもらうわ」

「今日のごとは詫びよう。手痛い傷も負ってしまったことだしな、暫くは私も動けまい」
墮天使は自らが負った大股の傷を見ると、苦々しい笑みを浮かべる。

まるで常沼のように底の見えない銀の麗人。

あのまま、戦いを続けていれば命を落としていたのは墮天使だったであろう。

忌々しい悪魔の登場によつてに助けられたのは癪であったが、命拾ひしたのは僥倖であつた。

「その下僕悪魔よー！」

「なんだよ、おっさん！俺は下僕と呼ばれるような趣味はないぞ!!」

突然、墮天使に下僕と呼ばれた一誠は、事実無根の言いがかりだと激怒する。

「今日のところは運よく、その人間に助けられたようだが、次の時はどうかな。所詮は主の庇護がなければ生きられぬ醜悪な存在なのだ。主より離れてうろついていたならば、私のような存在に散歩がてら狩られても文句言えまい」

「な……なんだよ……それ……訳、分かんねえよー！」

一誠の頭の中で夕麻に襲われた時のことが思い起こされる。

フラッシュバックに見舞われ顔を青ざめさせながらも、声を絞り出して必死に襲われる所以はないと抗議する。

必死に耐え忍ぶ一誠を背後から人影が優しく抱擁する。

「ごめんなさいね、兵藤一誠くん。いえ、イツセー。私が説明しなかった為に、あなたを混乱させてしまったわ」

人影の正体は、紅髪の持ち主で、一誠の主でもあるリアスであった。

一誠はその優しく抱擁に何処かラウルの抱擁を覚えながら、彼にはない胸の弾力に安息を覚える。

「でも、大丈夫。グレモリー家の名に懸けて、あなたに危害なんて加えさせないわ」

「たかが、下僕程度に家名を掛けるとは、余程入れ込んでいると見える。精々、首輪でも付け放し飼いにしないことだ」

リアスは警告と脅迫の意を込め堕天使に鋭い視線を送る。

一誠に入れ込む様子が可笑しかった堕天使は、高笑いを上げた。

堕天使の態度にリアスの血が高ぶるが、手を出すことはなかった。

「話は付いたか？」

ラウルはゆったりと目を開け問いかける。

その静々とした動作は、人を惹き付ける魔力が宿っており、悪魔であるリアスでさえ

も怒りを忘れさせ、一時、心を奪われたのだった。

「……………ええ、貴方もそれでいいでしょ？」

「……………」

ただ、無言で返すような態度には、気が食わないものがあつたが。

「貴様もだ、私に泥を塗つた忌まわしき人間よ。次に相見えることがあれば覚悟しておけ！ では——」

「では、さらばだ。名も知らぬ墮天使よ」

飛び立つ姿勢を取つた墮天使に追撃が入る。

銀の麗人が翳す左腕から光が集まり陣と為し、魔力は熱を為し雷撃と化す。

紡がれた雷撃は集いて雷槍と為し、灼熱の豪槍は墮天使へと放たれる。

それはまさに神速の一撃。

不可避の一撃は、服を纏つた皮膚を裂き、鮮血に満たされた肉を灼き、人体を支える骨格を溶かし、容赦なく術者の敵を呑み込む。

墮天使は祈る間もなく、灰塵と化し天に召されたのだった。

「……………」

墮天使が燃え去つた後、公園を静寂を包んだ。

状況がいまいち理解できない者、芸術とも言える魔方陣の構成に魅された者、突然の

暴挙に呆然とする者。

そして、術を放った本人は黙禱を捧げていた。

「——アーメン」

『?!』

ラウルの何気ない一言が空気を裂く。

軽い鈍痛に見舞われた悪魔たちはラウルの眼前に立ち、再び臨戦体制を取る。

王たるリアスは一誠を引き連れ、後方に控える。

「……悪魔祓い……そんな臭いは一つもしなかったのに」

「君が教会の回し者だなんて……正直、信じたくなかったよ」

「あらあら。墮天使が居なくなつたと思つたら、次は目星を付けていた生徒が悪魔祓い

だなんて、今日は一段と忙しい日ですわね」

「墮天使といい、いつの間に入り込んだのかしら？ 迷惑千番もいところね」

リアスたちグレモリー眷属は思い思いの言葉を投げかける。

特に面識のあつた木場と小猫に至つては動揺が顕著であつた。

木場の持つ剣は切つ先が揺れ、子猫の握る手は震えていた。

「先輩……なんで、ラウルと敵対してんつすか？」

「大丈夫よ、イツセー。貴方は絶対私たちが守るから……」

「先輩……」

状況を理解できない一誠はリアスに問いかける。

だが、返ってきたのは要領を得ない言葉。

要領の得ない言葉ではあったが、耳元で甘く囁かれ、圧倒的な胸の谷間に挟まれた一誠は、誘惑に負けて思考を破棄した。

だらしのない顔で悪魔の谷間に顔を埋める幼馴染の様子を見ながら、ラウルは細い眉を寄せ、これからのことを推し量る。

推量は、現状戦力に周囲の勢力図、その勢力の背後にある人物、果ては一誠の育成予定までと多岐に渡る。

そんな中、ふと思いついた案に目を見開く。

「ふむ、これもまた一興か」

ラウルは薄い唇を歪め、心得たと言わんばかりの満身の笑みを浮かべる。虚空より短剣を抜くとグレモリー眷属に向けて駆けだしたのだった。

四話 一誠の目覚め

「小猫！ 佑斗！ 相手は高位の術師よ！ 油断無くなさい!!」

ラウルは銀の短剣を逆手に持ち、グレモリー眷属の王リアス・グレモリーに駆け迫る。首級を狙われるリアスは自らの眷属に掛け声を掛け迎え撃つ。

「君とはいつの日にか、真剣で切り結べる日が来ると思ってたんだ。こんな形で残念だけど、本気で行かせてもらおうよ」

「……先輩の作るお菓子はとても美味しかったです……もし抵抗しないなら、その腕だけは残したあげますよ」

前衛を務めるのは騎士と戦車の二人。

有り余る速度で敵の足を刈り取るのは、八双の構えの佑斗。

王の御前に立ち、城塞の如き護りと砲台の如き一撃を以って、敵を押し返す小猫。

待ち構える彼らの数歩手前でラウルの脚から魔力が迸り、地面が弾ける。

銀の残像が音を置き去りにして、騎士に肉薄する。

「速いっ!!? がっ!!?」

「佑斗っ!!?」

銀閃が煌めき、甲高い金属音が響き渡る。

距離を見誤った佑斗は一刀の下に、得物を失う。

得物を弾き飛ばしたラウルは、魔力を纏った踏込みにより音速を突破したその身体を以って追撃に掛かる。

軸足となる左足を起点に魔力を消費する事で、得られた驚異的な脚力が身体を前へと押し出す。

右膝を折り畳み、得物を失いながら空きの身体に向け差し込む。

内臓まで抉り出さんとする膝蹴りによって、佑斗は目を口を見開く。

鳩尾を抉られ宙に浮き放れていく騎士の身体に対して、逃がすまいとラウルは右足で宙を蹴る。

腰の捻りを以って、繰り出されるのは蛇の一撃。

細脚は竹の如き撓りを見せ、爪先が再び鳩尾を捉える。

さらに、深く踏込み全体重を靴裏に乗せ、佑斗の身体を蹴り飛ばした。

「……足元注意です」

「頭上注意だ、小猫」

着地の瞬間を狙った小猫の攻撃は、ラウルが魔術を使って宙に身を浮かせたことによつて躲される。

宙を足場にしたラウルは、体を捻り頭部目掛けて蹴りを繰り出す。

上空から繰り出された蹴りではあったが、小猫は体を逸らし避けて見せる。

反撃を躲した小猫はそのまま、柔軟な体を以って宙返りによる逆襲を繰り出す。

ラウルが高度を上げ難く避けると、小猫は俊敏な動きをし距離を取った。

一瞬の攻防にて騎士は打ち砕かれ、戦車は後退を余儀なくされたのだった。

「朱乃!!」

「お痛の過ぎる子には少々、お仕置が必要ですね……雷よ!」

にこやかな表情を浮かべながらも、朱乃の眼は真剣さを帯びていた。

黒髪を躍らせると、天に向かって手を翳し、天空より一条の雷を呼び寄せる。

「風よ——」

ラウルは天空より迫る雷に対して、銀の短剣を掲げて見せる。

紡ぎし一節は内包する起源を呼び起こした。

短剣の表面に文字が浮かび上がり、周囲の空気が流動を始める。

ラウルが方向性を示すと渦巻き、雷を防ぎ辺りに散らした。

「消飛びなさい!」

「風よ、刃と化し切り裂け」

続いて放たれるのは本命であるリアスの魔力。

魔法陣より放たれるは黒光りする赤光。

有り余る魔力は迸り、ラウル目掛けて奔走する。

リアスの魔力を見たラウルは空気を圧縮し、風を鎌鼬と化せて迎え撃つ。

両者の間で赤光と鎌鼬が鬩ぎ合う。

「ちっ」

鎌鼬では打ち勝てないことを悟ったラウルは、射線上を離れる。

事実、鎌鼬は赤光を僅かに削いだ、呆気なく消飛ばされた。

「今のがグレモリーの……否、バアルの滅びの力か」

「ご名答。わたしがお母さまから受け継いだ、万物を消し去る滅びの魔力」

「降参なさるのなら、お早いうちが宜しいですわよ。部長の力に消されたものは、戻って

きませんかからね。それに……お話しするなら活きの良い内が、宜しいですし」

リアスは力を誇り、朱乃は見る者を蕩けさせる艶やかな恍惚の笑みを浮かべる。

高慢な態度で投降を促す彼女達にラウルは目を細めた。

「り、リアス先輩、いま物騒な言葉が聞こえたんっすけど嘘ですよ……」

「嘘ではないわ、イツセー。教会と悪魔は交わらない運命なの。残酷なことを言うよう

だけど、幼馴染とは言え彼が悪魔被いならば、いつかはこうなる運命だったのよ」

「でも、俺……悪魔じゃないっす。なのになんで——」

「現実を見なさい」

リアスは一誠の頬に手を当て、正面から澱みない瞳を言い聞かせるように合わせる。彼女が言い聞かせるのは裏社会の掟。

悪魔と悪魔祓いは相容れず、その背後にいるのは怨敵であると。

幾ら親しい幼馴染であつても、その運命から逃れることは適わないと、状況を呑み込めない一誠に説いた。

納得のいかない一誠は必死に考えを巡らせ、現状を打開しようとする。

されど、理不尽なこの世界に、一般市民であつた彼が抗う手段など存在しなかった。

必死に抗おうとする一誠の姿を目の当たりにして、良心の呵責に耐えられなくなつた彼女は、逃げるかのように目を逸らした。

「ごめんなさい……あなたを勝手に悪魔に転生させたのは私なのに、都合のいいことばかり言つて……」

「い、いえ……俺も夕麻ちゃ……堕天使に刺された傷をあのまま放置されてたら、死んでしまつちやつてますし、先輩が治して下さつたんですよね……先輩とラウルが二人で……」

「そ、それは……」

一誠が迫り迫りに紡いだ言葉に、リアスは碧玉を彷徨わせる。

生き残らせる為にと一誠は語ったが事實は違った。

彼女が到着した時に残されていたのは、血塗れの少年だけ。

語ることにない、悟られていない、彼女のみが知りえる隠された真実は、一層のこと良心を蝕む。

「私が治せたのは肉体の欠損部分だけで、失った血までは無理だからな。悪魔に転生することで、真の意味で死を回避できたのだ。感謝こそすれども、恨むのは筋違いというものだ」

「ほら、ラウルもこう言ってますし……って、なに二人とも争っているんすか！俺を治した時には、二人一緒に直したんつすよね？二人の共同作業……なんて」

見るに堪えない状況にラウルは手を差し伸べる。

ラウルが語るもまた真実。

治療こそしたが、失血による生命活動の低下は免れぬことであった。

血を失った状態で何もしなければ、一誠の灯は当に尽きていたことであろう。

仮に、ラウルが何もしなければの場合だが。

リアスは告げられた真実に、自身が行ったことは正しかったと、心を蝕む重科から解放される。

隠された真実に気付ける筈のない一誠もまたラウルの言に乗り、袂を分かった二人の

仲を取り持とうとする。

「勘違いをするな、イツセーよ。私が傷を治し去った後で、彼女は現れ貴方を悪魔に転生させたのだ。協力など、一度もしたことはあるまい」

「……彼の言う通りよ。わたしがイツセーを転生させたときには、すでに傷痕すらない状況だったから」

「そんな……」

だが、ラウルは和解の為に差し延ばされた手を払って見せる。

彼は一誠を治療しただけで、悪魔の力を借りたのではないと。

リアスも首肯し、ラウルの考えに同意した。

怨敵である、悪魔祓いの協力を得たわけではないと。

交わることもない紅と銀の宿命に、一誠は絶望の色を浮かべる。

一握りの希望を掴み損ねただけに、その絶望も一層深いものであった。

「さて、貴方の騎士も起き上った戦闘再開といこうか」

ラウルの視線の先には、蹲っていたはずの佑斗が口元を拭き、新たな剣を構えていた。

刺客を見つめる瞳は、内臓を抉り取られる程激しい襲撃を受けたにも関わらず、良く立ち上がるものだと言われ称えていた。

「君が足癖の悪い人だとは思わなかったよ」

「短剣装備で戦っているのだ。体術も使って当然だと思いがね」

やはり、先手を抑えるは銀髪の麗人。

風を纏い、更なる飛躍を以って騎士へと迫る。

対する佑斗も悪魔の駒を開放し、油断なく迎え撃つ。

ラウルは右手より掬い上げる剣戟を、佑斗は上段より振り下ろす。

得物がぶつかり合う瞬間、ラウルは身を引き刀身を滑らすようにして長剣を受け流す。

その勢いを殺さぬまま、左より掌底を放つ。

先の一合にて、四肢より放たれる凶悪な徒手撃蹴の恐ろしさを身を以って知る佑斗は、無理することなく身を引く。

一時離脱するよう見せかけた佑斗は、死角より切り掛かる。

ラウルは騎士の速さを以って放たれるそれを難なく受け流す。

反撃に次ぐ反撃の応酬。

一合、また一合、断続的に響き渡る剣戟は、不可視の領域に到達する。

「すげえ……音しか聞こえない」

「あらあら、思ったより楽しませてくれますわね」

「……目で追うのがやつとです」

「人の身でここまでやるなんて……教会から引き抜くべきかしら？」

観客たちが魅入られている間に戦いは徐々に変化する。

時が経つにつれて、ラウルの足が止まる回数が多くなっていた。

外野から見れば、人の身で切り合うラウルが疲れを見せてきたかと思われたが、実情は異なる。

現在掛けている術の身体強化だけでは、機動力に劣ると理解したラウルは、自身から攻めるのは不要と考え受けに徹する。

ただ、隙を見せたなら踏み切り掛かることは忘れない。

柳の如く受け流し、薔薇の如き鋭い棘を持つラウルに佑斗は攻めあぐねていた。

事実、手傷が増えていくのは佑斗だけであった。

「佑斗よ、いつまで出し惜しみする気だ？」

「っ!? 君には敵わないな」

ラウルの問いかけに佑斗はいったん距離を置く。

むろん、ラウルは見定める為に、追撃することはない。

「——喰らえ」

沸き上がる闇が光を侵食し、刀身を黒い靄が覆い隠す。

「ほう、魔剣使いだっただのか」

「『ホーリー・イレーザー光喰劍』。この劍の前に、光の攻撃は無意味だよ」

ラウルは感嘆の声を漏らした。

魔劍とは悪魔、悪神の力、もしくは『魔』を宿した劍のこと。

絶大な力を誇ることもさながら、強力な呪いを掛けられたものも少なくはない。そんな魔劍を手にする彼の人生は如何な物であったのだろうか。

闇の魔劍を構えるその姿は暗に全力での打ち合いを所望しているようだった。

「風を纏いて牙と為れ」

故に、ラウルは応える。

風の起源を込められし短劍を胸の前で構える。

紡ぐは付加の術。

短劍に風が纏わり付き、鋭利な刃と化す。

これで銀製の短劍は真の意味で風の魔劍と為す。

機動力で後れを取っていたラウルは、風の術を以って相対する。

魔劍を開放し合い、両者の間で緊張が高まる。

「……………」

魔劍より吹き付ける風が、砂子を攫い舞い上がる砂煙を合図に、どちらからともなく駆けだした。

佑斗が振るう闇の魔剣は天より降り注ぐ光を喰らう。

ラウルが振るう風の魔剣は周囲の空気を巻き喰らせる。

金と銀の剣士が、月照らす園庭で激突した。

闇が喰らい、風が押し切ろうと鬨ぎ合う。

幾度も影が交差し、甲高い剣戟が響き渡る。

先の切り合いにて受けに回っていたラウルも果敢に責め立てる。

短剣を右手左手と持ち換え、変幻自在の剣舞を見せる。

四肢より繰り出される徒手撃蹴も忘れてはならない。

凶悪な一撃が風を纏うことで剣刃と化し、騎士を叩き切ろうと迫る。

さながら、美しい撓りを見せるそれは蛇腹剣と称しても遺憾無くあった。

受けに回らざる得なくなった佑斗は、連撃に次ぐ連撃を防ぎ必死に隙を窺う。

身体に至る所に細かな裂傷を負いながら、涼しい顔で麗人の息切れを待つ。

その姿は孤高なる狼を幻視させる。

されど、風を司る魔剣を手にする麗人は隙を見せることはなかった。

極限状態の中、緊張の糸が切れたのは責め立てられる佑斗の方であった。

「風がつっ!」

騎士は吹き付けた風を足を取られ隙を晒す。

決定的な瞬間に踏み込んだ麗人は、魔剣の纏う風の密度を一段階上げ切りかかる。不利な体勢で受けざるえなかった騎士は健闘虚しく、闇の魔剣を叩き切られる。無手となった騎士に麗人はまたもや撃蹴を見舞う。

「風よ——」

ラウルが追撃を掛けようとすると、地を這う雷が襲いかかる。

襲いかかる雷を一瞥すると、短剣を構える一節を唱える。

風を呼び寄せ、佑斗を助けるべく朱乃が構成した雷を難なく防いだ。

「私が何時、光術を使ったのか説明してもらい所だ」

「……佑斗先輩……大丈夫ですか？」

「まだやれるよ、小猫ちゃん」

小猫に受け止められていた佑斗に、ラウルは選択の間違えを指摘する。

挑発された佑斗は子猫の心配を振り切り、砕かれた剣の柄を構える。

「——止まれ」

創造するのは新たな魔剣。

柄より伸びる刀身には円状の特殊な刃が形成される。

刀身にできた円の中央、その空間に生まれた不可解な渦が周囲の風を呑み込む。

「む、風喰らいの魔剣か」

「卑怯だと罵つてくれて構わない……弱点を突かせてもらおうよ」

自身の魔力で構成していた風を吸い取られ、ラウルは軽く頬を膨らませる。

苦汁を嘗めさせられている佑斗は動じることなく、鋭い視線でラウルに宣言する。

「当然だろうよ。手数が多さで攻めるのも戦術の内、讃えてこそ罵るようなことはありはしない」

佑斗の態度に心くるものがあつた彼は、小さく笑みを漏らす。

やつと、全力を出すのかと。

形振り構わず栄冠を求める取る気になつたのかと。

これから交える一合を思い浮かべ笑みを漏らしたのだった。

「ただ……手数の有無で負けるつもりはないかな」

劣ることはないと言つたラウルは短剣に手を翳す。

「術式停止——魔力刃構成」

風が止み、現れたのは銀光放つ純性魔力による光刃。

魔力で構成するにも拘らず、神の威光にも匹敵するその神秘に誰しもが息を呑んだ。

彼は虚空より紋章描かれし白銀の鞘を取り出すと神秘を覆い隠した。

そして、向き合ふは悪魔の騎士。

抜剣の構えを取り、風喰らいの魔剣を構える佑斗に接近する。

「……………」

「……………」あ

一刀——抜き放たれた神秘の前に模造の魔剣は断ち切られる。

銀閃は魔剣を断ち切るに留まらず、血肉を求め迸る。

「騎士撃破^{ティク}——貴方たち風に言うとこんな感じかな？」

「佑斗……先輩？」

「……………」

一瞬の交錯で残ったのは、血潮に身を染める銀の麗人のみ。

騎士であったものは、深々とその身を切り裂かれ、血の海に沈み込む。

「返事も無いとは、余程機嫌が悪いと見える」

顔半分を返り血で濡らしたラウルは、倒錯的な笑みを浮かべる。

血化粧に彩られた姿は、悪魔よりも悪魔らしかった。

「ラウル……ラウルがどうして……確かに木場は気に食わないイケメンだったけど！

殺すことはないじゃないか!!」

一誠は幼馴染が仕出かした、取り返しのできない所業に、憤りを見せる。

「イツセー、これが貴方の踏み入れた……リアス・グレモリーによって、踏み入れ込まされた裏の世界。悲しいことだが、敵対するものと会えばどちらかが動かぬ者になるしか

ないのだよ」

「だからって……なんでっ!」

「失いたくないのなら、強くあるしかない……それが、この世界の真理」

ラウルは目を瞑り静かに語る。

瞼の裏に映るのは、忘れることのない情景。

師と慕い魔導の道標を示した者、母と崇め敬愛の念を抱いていた者、友と認め情を育んできた者——そして、主と仰ぎ——。

救えなかった、届かなかつたこの腕に抱く無念と悔恨は生涯、彼を蝕み続ける。

自らの過去を以ってして、自覚のあるはずもない一誠に喚起を促す。

理不尽な現実を突きつけられた一誠は息を呑んだ。

「さて、次はどなたかな。『魔劍創造』^{ソード・パース}の使い手は鍛えれば——」

「——許さない」

瞼を開くとラウルは次なる獲物を探し求める。

薄氷の瞳は鋭く紅の姫を捉えていた。

「イツセー、小猫下がっていなさい」

「わ……わたしも……」

「下がっていなさい」

リアスは憤怒の炎を目に宿して、前に進み出る。

抑えきれない感情が魔力と為りて溢れ出し、奔流は紅髪とともに立ち昇る。

朱乃も怒りを顕わにし後に続いた。

「配役は王キングに女王クイーン。グレモリー眷属の主力『紅髪ルイ・ブリンセスの滅殺姫』に『雷の巫女』か——術式再稼働」

前に出る女悪魔二人を確認し、再び魔剣に風を纏わせる。

「実は八幡君を眷属入りにする話も出ていたのですが……正直、貴方はやり過ぎましたわ。私も含め、怒らせてはいけない、人を怒らせてしまったのですわっ！」

「消飛びなさい、佑斗の仇!!」

黒髪の巫女は黒雲を呼び出し、雷を束ね、天空を裂く一撃を見舞う。

象をも呑み込む特大の魔力は、大地を消し去り、怨敵を滅さんと迸る。

リアスと朱乃は怒りに任せ、魔力を最大限まで絞り出し、限界を超える一撃を放ったのである。

迫る魔力の奔流にラウルは嘲笑を浮かべる。

「解放——『蹂躪する暴虐の嵐』」

解き放つのは最奥に眠る神秘——

彼の周辺の空気は渦巻き、うねりを打ち大蛇と化す。

結界内の大気が呼応し流動を始め、主の命を待ち吹き付ける。

吹き荒れる旋風は、土壌を巻き上げ竜巻を引き起こす。

此処に風を司る王が君臨する。

——暴虐の嵐が一带を蹂躪した。

リアスたちが放った魔力は、圧倒的な質量を持つ嵐の前に為す術もなく、術者諸共呑み込まれた。

「後は貴方たちだけだ、イツセーに小猫」

「ラウル……お前……」

朱乃は毬球の如く何度も弾かれ、暗がりへと身を消した。

リアスは残った魔力を掛け集め直撃を免れたものの、身体を強く打ち付け呻き声を上げていた。

そして、残ったグレモリー眷属は小猫と一誠だけになった。

「いつまで貴方は少女の陰に隠れていれば、気が済むのかな？」

「俺は……」

ラウルは腑抜けと成り下がっていた一誠を見咎める。

暴君と化した幼馴染みを前に無力な少年は顔を俯かせた。

「小猫……イツセーを連れて逃げて……」

「……………」

「……小猫？」

地に伏せるリアスは声を振り絞り、生き残った下僕だけでも逃がそうと言葉を紡ぐ。

しかし、小猫は主の命に応えない。

敵であるラウルを見据えたまま動こうとしなかったのだった。

「ラウル先輩……」

「なにかな……小猫？」

ジト目で見つめる小猫にラウルは怯む。

ただ、臆面には出さず危機感を募らせていた。

「先輩はいつたいい何を考えてっ!？」

「小猫っ!？」

小猫の瞳が騎士を打倒した場所を向いたことに気付いたラウルは言葉を紡がせない。

小柄な肉体に特大の風塊をぶつけて吹き飛ばした。

「もう、やめて……………わたしの間違っていたから……………わたしが代わりになるから……………」

だから……………もう……………」

「……いいだろう。貴方の首を以って、私に敵対したことは不問にしよう」
懇願するリアスの願いを対価を以って聞き届ける。

虚空より一振りの長剣を取り出す。

長剣の収まっている鞘からは、既に光が漏れだしていた。

抜き放たれたその姿は洗練され、悪魔の処刑に相応しいものであった。

「最後に何か言い残すことはないかな？」

「あなたのごことはお兄様がきつと……地の果てまでも追って、裁くことになるわ。覚悟しておきなさい、悪魔祓い」

「それは、それは……また、恐ろしきことだ」

ラウルはニヒルな笑みを浮かべる。

瞳は笑っており、来るべき未来が楽しみだと物語っていた。

「では——」

光の剣を掲げ、紅の姫の首目掛け振り下ろそうとする。

「待ちやがれ!!」

肩に衝撃が奔り、ラウルはその腕を止めた。

「邪魔をしないでくれないか……イツセー」

ラウルは処刑を邪魔した下手人に鋭い声を浴びせ掛ける。

肩を掴むのは誰でもない、悪魔に転生させられた一誠であった。

「悪魔とか、悪魔祓いとか、正直分かんねえよ」

俯いた顔を上げる一誠。

その瞳には、決して揺るがぬ意思が宿っていたのだった。

「でもな——」

「————泣いてる女の子を甚振る様な輩を黙って見てるわけには、いかねえんだよ
よおおおオオオ!!!」

『Dragon booster!!』

一誠の左腕より光が立ち昇る。

光が晴れた後、姿を見せたのは赤き籠手。

肘から手首に掛け、前膊を覆いつくす籠手の先、手の甲に輝くは翠の宝玉。

表面には封印呪と思われる紋章が浮かび上がっていた。

一誠の変貌にラウルは目を見開いた。

心を震わす勇ましい叫び声に胸が高まる。

白雪の肌は赤く染まり熱を持ち、歡喜の涙が碧玉より溢れ出す。

これこそが、待ち望んだ赤龍帝の目覚め——否、煩惱から目覚めた勇者の帰還であつた。

五話 停戦

「おおおおおおオオオオオオオオオオ!!!」

『Boost!!』

激高した幼馴染の拳がラウルの顔面目掛け放たれる。

覚醒を果たした一誠の姿に見とれており、一瞬対応が遅れるが剣の柄を以って受け流す。

その際に千切れた銀髪が数本、風に攫われ、それを見たラウルは顔を曇らせる。陰鬱となる気分とは裏腹に、澱みない動作で一誠から距離を取った。

「酷いな、顔を狙うなんて……」

「うっせえ!! がたがた抜かしてねえで、おとなしく殴られやがれっ!!」

乙女のような態度を見せる麗人を無視して、一誠は拳を握る。

拳を握る無粋な幼馴染に心を痛めたが、ラウルは首を振り気分を入れ替えた。

光を纏う長剣を虚空へ納めると、頬を拭い後退を始める。

人知れず頬を伝った月の滴は夜露へと儚く消え去ったのだった。

「生憎、被虐趣味は持ち合わせていないのでね」

「そんなこと聞いてねえよ！　いいから、一発殴らせろ!!」

『Boost!!』

赤き龍と銀の妖精は月夜の園庭で舞い踊る。

片や怒りに任せ粗暴な動作で追い縋る。

片や風の如く奔放に舞い、白鳥の如く優雅に踊る。

ちぐはぐな筈の二人は、ラウルが導くことで見事な円舞を繰り広げる。

彼は絶妙な距離を取り続け、時が経つに連れ力を増す一誠にも対応して見せた。

「これでっ!!」

『Explosion!!』

赤龍帝の籠手から流れる五度目の声を合図に彼らの共演は終わりを迎える。

増幅された力が安定し、一誠が獲物に狙いを定めたのだ。

だが、ラウルは不敵な笑みを浮かべ一誠を欺く。

「しつこい男は嫌われるぞ」

「なっ!?!」

片眼を閉じ、可愛らしく唇に人差し指を添えるラウル。

一誠が迫ると霧が晴れるが如く、姿が喪失した。

「小猫起きてくれ、事態の收拾がつかない。針は抜いたから起き——ぐえ!?!」

そして、現れたのは小猫の傍ら。

空気の塊をぶつけた時に仕込んだ魔針を解除する。

自体を把握しているであろう小猫を抱き起すと、和解の為に助力を乞う。

しかし、帰ってきたのは容赦ない右腕の一撃であった。

「待った、待った。人の身は思った以上に繊細なん——だっ!」

「……さっきのはわたしの分……これは佑斗先輩の分」

崩れ落ちるラウルに対して、小猫は般若の顔をして逆襲を始める。

突如として始まった怒涛の展開に外野である一誠とリアスは開いた口が塞げなかった。

「割と冗談にならない。これ以上は御茶請けで代替しないか?」

「買収ですか……思考がまるつきり悪役ですね」

戦車の腕力を以って、数発殴られたラウルは生命の危機を感じ、代替案を提示する。

仁王立ちの小猫は白い目で下手人を見下ろす。

「和菓子との盛り合わせ一週間でどうだ?」

「一年で」

「……手作り菓子一ヶ月」

「手作りを一ヶ月……その他銘菓も含め半年で手を打ちます」

「……悪魔め」

鼻を鳴らす少女に対して、ラウルは毒突くのであった。

* * *

「結局、あなたは何がしたかったのかしら？」

小猫の尽力によつて事態を把握したリアスは額に青筋を浮かべる。

深々と切り裂かれたはずの佑斗には、切り結んだ際に負った細々とした刀傷を除けば、大事に至る傷一つなく、激しく身を打ち付けた筈の朱乃は打ち身一つもありはしなかった。

被害と言えば、佑斗と小猫の制服ぐらいの物。

リアスが自我喪失寸前まで追いやられた惨状は、すべて幻術によるものであった。

「イツセーの左腕にあるその籠手のことと一緒に明日お話ししよう。夜更かしは肌に毒だからな」

立腹な姫の視線を受け止めたラウルは、一誠の神器を見て軽やかに笑みを浮かべる。

「良いわよ。その代わり、あなたのことも含めてきつちり話してもらおうわよ」

「話せる範囲で良ければ、話そう。しかし、今日のごことは内密に……貴方のお兄様は存分

に恐ろしいからな」

リアスは明日の放課後に会合の約束を取り付ける。

身振り手振りを交え、ラウルは了承する。

さり気なく、事態を大きくしないでほしいとも示唆した。

悪びれもしないラウルの態度に、リアスは自身の兄に密告しようかと真剣に考える。

「小猫、明日は何を御所望する?」

「……ショートケーキをお願いします」

「米国式か? それとも仏国式か?」

「普通に日本式のイチゴのショートケーキで構いません」

「了解、朝早く起きて腕を振るうことにしよう」

小猫は莫大な甘味の候補に思いを巡らせ、無難な答えを導き出す。

要求に応え存分に腕を振るうとラウルが約束すると、小猫の目が輝いた。

彼女の背後に髪質に似た毛並みの尻尾が揺れたのは幻視であったか。

その微笑ましい光景を見ると、とてもではないが先程まで殺し合いを演じていた仲には見えなかった。

「それでは皆様、夕暮れの校舎でお会いしましょう。良い夢心地を」

ラウルは口上を述べるとともに優雅な一礼をする。

腰を折り曲げた体制のまま、瞬時に転移の魔法陣を展開する。

彼の姿が光に消えると、周囲に張られていた結界が解除された。

「地雷処理に行つて、地雷を踏みぬいた気分ですわ」

「……言い得て妙ね、それは」

「ラウル君……君はいつたい……」

ラウルが去つたことを確認したリアスたちは、溜めこんでいたものを思い思いに吐き出した。

グレモリー眷属を片手であしらうが如き異常な実力。

一誠の神器についても意味深な言葉を残して去つていた事を考えると、彼の正体は謎が深まっていくばかりであつた。

「なんか色々あり過ぎてわけ分かんねえや」

「……大丈夫です、兵藤先輩。失つたものは有りませんが、色々得るものがありました」
「小猫ちゃん……」

小猫は両手を握つて小さく、胸の前で力こぶを作つた。

今日一日で世界が大きく動いた一誠にとって、小猫の行動はどこか感慨に來るものであつた。

* * *

「悪い、遅くなった」

「おかえり、魔方阵で帰ってくるなんて……何かあったみたいね」

軽音を響かせ、元気よく駆け寄る人影。

魔法陣を通して帰宅したラウルの前にエプロン姿の一人の少女が扉を開け現れる。

ぶつくと膨らみ持った唇、紅玉の瞳は家主の風貌を忙しく探り、一纏めにされた流水のように清らかで麗しい蒼み掛かった銀髪は子犬の尾の如く盛んに振るわれる。

スリープレスのタンクトップに股下を僅かに隠すホットパンツは活発さを感じさせ、その垣間見よりすらりと伸びた手足は引き締まり、それでいて女性特有の丸みを忘れることはない。

されど、張りのある肌に浮かぶ、病弱な青白さは、彼女の活発な雰囲気にも宿らせる。

活発さの中に宿る儂さが少女の魅力をより押し上げていた。

「ああ、最重要案件の一つが、漸く動き始めた」

「赤龍帝を宿した幼馴染君だったよね」

ラウルが脱いだ上着を渡すと、彼女は半歩下がり歩き始めた。

立ち位置に上下関係がありながら、並んだその姿は仲の良い姉妹にも見えなくなかった。

「そういうえば……ユウは元気だった？」

成り行きでグレモリー眷属と戦闘になったことを伝えると、少女は上目遣いで一人の少年の安否を気遣う。

「襲いかかつてくるぐらいにはな。ただ……」

「ただ？」

対して、ラウルは息災であつたと答えた。

その後、不自然に途切れた言葉に違和感を持った少女は続けるよう促す。

——それが後悔することになるとは知らずに。

「雑な剣だった……竹刀で撃ちあつている時以上にな」

「ラウの評価は厳しいからね……」

「振るう剣には幾つもの雑念が乗り、得物の形状を間違えていた。あれでは、十二分に性能を発揮できまい。おそらく、師匠が西洋剣の使い手ではなく、東洋の刀使いなのだろうよ。速さで誤魔化してはいたが、動きがちぐはぐなところが、時偶垣間見えていた」

「辛いです、無茶苦茶辛いです」

ラウルを悪魔祓いと勘違いしていた時に発した憎悪。

切り結んだ時に振るったのは、叩き切る剣ではなく、断ち切る剣。

ならば、肉厚の西洋剣ではなく、脆さを宿した日本刀を創造すべきであると。

次々とラウルの口から溢れ出す酷評の数々に、少女はげんなりとした表情を送る。

しかし、一度口を開いたラウルが止まるはずもなく、批評は続く。

「特に神器の扱いが気になったが」

「もういいです、お腹一杯」

「魔剣・聖剣などの創造系の神器によつて創り出した刀剣は、精魂込めて打たれた一振りに比べ脆いことは明白だ。なのに、壊された時の対応が、まるでできていなかったな。あれは非常にまずいと思うぞ、最低でも自身の創り出した得物の強度を知っておかないと。もしや……佑斗のあのお気楽な所は、姉分であつた貴方に似たのではないか？」

「にやああ、まさかの私に飛び火!? 嘘でしょう!」

神器の取り回しの拙さを語る件から、一転その矛先は少女へと向かう。

不意打ちを浴びた少女は猫のような叫び声をあげた。

「悪いが、事実であろう。貴方は一人米の騎士になるまで何百本の剣を折ってきたのだったか？」

「む、昔のことは掘り返さないで! こゝろ、一年は十本以下に抑えているんだからね!」

蒼髪の少女は酷い謂われ様に抗議の声を上げる。

今でこそ、立派に騎士としての拜命を受けた少女であったが、修練時代は酷いものであった。

三日に一本消費するのは当たり前。華奢な手足から振るわれる苛烈な剣技を前に、一般的な鉄剣ではその身を損耗され、見る間に寿命を迎えるのだった。

その甲斐もあつて、歴代最短で騎士を拜命できたのだが。

ラウルは歳並みの膨らみを持った胸を張る少女を見て、眉を顰める。

「此処には折つて良い様な剣を置いてはいないぞ」

「え、!？」

「『え』ではない……また、折つたのだな」

「うううう……」

少女らしからぬ濁つた声を上げた様子を見て、ラウルは額に手を当て宙を仰ぐ。

「何番だ？ 何番の剣を折つたのかな？」

「五番の『エレクトリック・セイバー電子の聖剣』を四本と六番の『ウイングソード羽の魔剣』、『ギミック・ブレッド機甲剣』を一本ずつ……

かな？」

少女が消耗した剣の目録を上げる。

量産品の五番が大半であつたことに、ラウルは胸を撫で下ろす。

これで、襲名祝いに少女へ渡した七番の聖剣を折られていたりでもしたら、目も当て

られない事態に陥っていただろう。

「最近、倉庫で姿を見ないと思ったら、そういうことか。錬金で直すから隠すのは止めな
きゃ」

「……怒らないの？」

「折角、打った一物なのだから大切にしてもらいたい、と言う感情がなくはないのだが
……事情が事情だからな。倉庫の剣を使ったら、執務室の私の机にでも立てらかして置
いてくれ」

ラウルは少女の頭を撫で言い聞かす。

使用するのには構わないが、放置しないでほしいと。

後で整備をするので、届けておいてほしいと。

「ん……でも、なんか悪いよ」

「無理して、体調でも崩されたら大事だ。いいから、甘えておけ」

歯切れの悪い返事をする少女であったが、ラウルの一言に態度を一転させた。

「じゃあ、じゃあ、私が作った料理、温め直すから食べさせ相手しようよ！」

「今日は何かな？ 貴方の作る料理は幅が広いからな」

「ふふ、なんででしょう？ 食べるまでのお楽しみだよ」

「……匂いで分かると思うが」

「そこ！ 無粋なことを言わない!!」

他愛無い会話を交えながら、彼らは扉の向こうへと姿を消した。こうして、魔導師の一日は終わりを迎える。

運命の悪戯によつて交わつた、紅の悪魔と銀の魔導師。

赤龍帝の目覚めを得た世界は緩やかに激動の時代へと歯車を回す。

六話 和解

「……や。リアス・グレモリー先輩の使いできたんだ」

放課後、ラウルたちの教室に佑斗がぴりぴりした空気を纏いながら現れる。

付添としてきた小猫はもちろん、周りの生徒たちも不穏な空気を感取っていた。

そんな彼にラウルは手を上げ応え、半眼と睨み返そうとした一誠は息を呑むのだった。

「……ラウル先輩、早く来ててください」

「慌てるな、直に行く」

鞆に荷物を詰めるラウル。

彼はこれから行われるであろう、会談に思いを巡らせる。

辺りにいた女子生徒たちが沸き立つことも知らずに。

「こ、これが修羅場……本物を見ることになるなんて……」

「いったいどんな三角関係が……」

「木場くん×ラウルくんの鉄板が……まさかの木場くん×ラウルくん×小猫ちゃんに
！」

「きつと、ラウルくんが浮気をしたんだわ。ラウルくんも男の娘だもの。それを知った木場くんが……」

「それとも、小猫ちゃんが誘惑を。自慢のロリロリボディーで、二人を誘惑して修羅場に——」

「違うわ！ 二人は木場くんの奴隷にされていたのよ。毎日行われる酷い扱いに耐えれなくなった二人は、自然と引き合い禁断の恋に！ でも、そんな勝手を主たる木場くんは認めないのよ」

「何が真実でも、小猫ちゃんという新たなるファクターが加わって、薄くない本が更に厚くなるわね」

「今年の夏コミュはこれを題材に売り上げを独走して見せるわ!!」

腐女子たちは黄色い声を上げて、討論を繰り広げる。

題材にされた小猫は瞬時に正気度を削られ、目を虚ろに彷徨わせていた。

「お〜い、小猫大丈夫か？」

「はっ！ わたしはなにを……」

ラウルに肩を叩かれ、目に光を取り戻す小猫であった。

「先輩行きましょう……私では耐えられそうにありません」

「イツセー、貴方も逝かないのか？」

「行くけど、逝かないぞー！」

小猫は教室に充満する空気に耐えきれなくなり、ラウルの袖を引っ張り急かす。急かされるラウルは、一誠を呼び込む。

呼ばれて立ち上がる一誠であったが、それを阻むものが現れた。

「イツセー！ 貴様は学園の小さなアイドル小猫ちゃんとは何処に……いや、三大お姉様の一角、我がクラスメイトのラウルまで連れて何処に行こうとしているのだ!!」

「ついに紳士から覚醒したと言うのか!?!」

「んなわけねえだろ!! 呼び出しだよ、呼び出し」

彼の目の前に立つ少年たちは、難癖を付け一誠に掴み掛る。

邪推を以って、一方的な言い草をする彼らに一誠は声を荒げた。

声を荒げる一誠に、掴み掛った片割れである元浜が、肩を強く掴み真剣な表情で口を開いた。

「気を付けろよ、イツセー」

「も、元浜?」

「俺……この間、女の子に体育館裏へ呼ばれたんだ……」

元浜は眼鏡の奥で瞳を潤ませ、涙ながらに語る。

「生まれて初めてのかつあげされたよ……それも女の子に!」

「それは……」愁傷様で

涙誘う実話に、一誠は同情を浮かべる。

だが、慰めることもできず、お悔やみの言葉を送るのだった。
「少し待っていてくれ」

不安の表情を浮かべる小猫を一撫ですると、終わりそうにない変態三人組の会話を割って入る。

「松田、元浜。悪いがイツセーを借りていくぞ」

「そんじゃ、そういう訳で！ また明日」

一誠を回収することに成功したラウルは小猫たちの元へ戻る。

その際、教室に悲鳴が上がったが、いつものことなので彼は平然と受け流すのだった。

「……行きますよ……変態」

「おう……小猫ちゃんが辛辣」

散々待たされた小猫は、一誠に罵倒を浴びせかける。

胸を抑える一誠を余所にラウルは、剣呑な空気を纏う佑斗の腕を取った。

「佑斗よ、昨夜のことを根に持っているのか？」

身体を寄せ、昨夜何度を撃蹴を放った佑斗の腹を優しく撫でる。

その手には仄かな光が宿り、癒しの力をもたらす。

「そうじゃないよ……根に持つていないと言ったら嘘になるけどね。それ以上に、君は……君が持つていた剣は……」

佑斗の瞳に宿る昏き炎は、剣の話題を口にした途端、更に燃え上がる。問われたラウルは佑斗ただ一人に、聞こえるよう花唇を寄せ囁く。

「秘密かな。それに私は貴方が背負っていることを知っているつもりだ」
「君はっ!」

憤りを吐き出そうとする佑斗を見詰めていたラウルの瞳が妖しく光る。

「しかし、いまはその時ではない。だから……」

ラウルは違和感を感じさせない動作で顔を近づける。

「今はこれで許せ」

そして、頬にそつと唇をおとした。

「ら、ラウルくん……こういうことは男同士ですることじゃ……」

佑斗は麗人の突然の奇行に狼狽える。

奇抜な振る舞いを見せたラウルはすでに離れ、佑斗に背を向けていた。廊下は廊下で大喝采を巻き起こしていた。

「愛いな、愛いな、佑斗は。だが、これ以上やると、イツセーが嫉妬しそうなので勘弁……な」

「誰が嫉妬するかよ！ 誰が！」

「ラウルくん……」

ラウルは踵を返し、花開く様な笑顔を浮かべる。

普段は知的な表情を見せる彼の不意打ちじみた満身の笑顔。

魅せられた佑斗は心のわだかまりを忘れ、惚けた顔を見せた。

その様子に廊下では割れんばかりに悲鳴が再び響き渡る。

「変態ばっか……」

良識ある小猫は一人、廊下で咲き誇る黄色の花に僻々するのだった。

* * *

「部長、連れてきました」

「……ええ、入ってちょうだい」

佑斗が扉を叩き、訪問を知らせる。

返事を確認して彼が扉が開くと、中から緊迫した空気が漏れだす。

涼しい顔をして入っていくラウルは、部屋の主の前に立ち優雅に一礼する。

「グレモリー嬢、今日はお招きありがとうございます」

「空世辞は必要ないわ。誠意が籠っていないもの」

「……そちらの居城まで出向いたのだから、文句を言わないでもらいたい」

無愛想で、刺々しいリアスの態度に嘆息する。

肩を落としたラウルはゆったりとした動作で、手前のソファアに腰を降ろす。

「イツセー、あなたはこっちよ」

リアスが一誠を手招きし、ラウルの対面に座る。

向かい合うように座るラウルの隣には小猫が腰を下ろす。

リアスの左後ろには佑斗が位置し、朱乃は給仕の為、席を立っていた。

殺伐した空気の中、ラウルが口を開いた。

「ふむ。イツセーならこの部屋を見て、騒ぎ立てると思ったのだが」

「確かにびっくりしたけど、そこまで子供じやないぜ」

「……昨夜、充分騒いでました」

「小猫ちゃん、少しは格好つけさせて……」

ラウルは丁度良いと、だしに一誠を使う。

期待通りの活躍を見せた一誠が、部屋の空気を穏やかなものに変える。

「なるほど、すでに説き明かしていたか」

「ええ、一通りわね。だから、今日はあなたのことを話してちょうだい」

「心得た。だが、暫し待たれよ。お茶の準備が済んでないのでな」

掴みを得た彼であつたが、同意を求めたりアスに今日の対話の核心である所まで切り込まれる。

対話を楽しまない彼女の態度を無粋だと思つたが、会話を一度止めることで、険呑な雰囲気を取り戻した。

同時にお茶会の準備を促し、自身は虚空より今朝焼いてきたケーキを取り出す。

それは、雪原のように白く滑らかなホイップクリームで固められ、瑞々しいイチゴで彩られた、純白のショートケーキであつた。

ホールであつたそれは、同じく虚空から出された、低温で冷やされたナイフにより綺麗に切り分けられる。

切り分けるラウルの動作には迷いがなく、何処か年季を感じさせるものであつた。

「うめえ、超うめえ！」

「……美味です」

白いクリームは程よい甘さを感じさせ雪の如く溶けて消え、赤い果実は独特の甘さと僅かに感じる酸味を口内に広げる、重さを感じさせないスポンジは口当たりの軽さを感じ

じさせ、上品な味わいを醸し出した。

口の中に広がる甘味の素晴らしさに、小猫と一誠は舌鼓を打つ。

彼らの様子を見て、作り手であるラウル上機嫌で笑みを浮かべる。

作る側も口にする側も笑顔になる、この瞬間がラウルは好きであった。

「佑斗はともかく、姫島さんも座ったら如何かな?」

「……はあ、警戒して損した気分ですわ」

ラウルは騎士としての役目を果たす佑斗を一瞥すると、手持ち無沙汰になっていた朱乃に自信作を進める。

自身の行為が馬鹿馬鹿しくなった朱乃は息を吐くと、ラウルの隣に腰を掛けた。

「両手に蜂かな」

「華ではなくて?」

「警戒心を緩めてくれたら華なのだがな」

座っても警戒心を解かない朱乃に皮肉を言ってみせた。

花ではなく、蜜に集まる蜂。

態度に毒が残っていると暗に示していた。

朱乃は皮肉にこやか笑みを返すと、目の前の甘味に手を出した。

「っ!?!?」
「これはっ!?!」

「満足して頂けたかな？」

「……ええ、小猫ちゃんが押すのも領けますわ」

笑っていないかった目が驚きに彩られ見開かれる。

彼女の様子を見てご満悦のラウルは、朱乃の淹れたお茶に口を付けた。

「貴方が淹れたお茶も……なんだ、独特だと思うぞ」

ラウルは口の中に広がる異物の感覚に眉を顰める。

反面、これも仕方ないと思ひ悪意を享受する。

舌先より流し、喉の奥で呑み込んだ。

もちろん、毒舌は健在ではあるが。

「もう少し、肩の力を抜いてもいいのじゃないかな」

「淹れ直してきますわ」

朱乃は大変申し訳ないと顔に出すと、カップを回収し席を立った。

その小さくなった背中を見送ると、リアスに視線を移す。

「グレモリー嬢も如何かな？」

「それは……意趣返しかしら？」

「いや、純粹にご賞味頂きたいのだが」

「……問題ありません……先輩はそんな無粋な真似はしないでですから」

眼差しを向けると、リアスは顔を強張らせた。

勘ぐる彼女にラウルは味を聞いてもらいたいと返す。

事態を知らない小猫からも援護が入り、糾弾されたかと錯覚したりリアスは観念してフオークに手を伸ばした。

「……何故か、色々負けた気分だわ」

「お口に適つて何よりだ」

上品な味わいの白い悪魔は、リアスの心に罅を入れる。

昨日の追跡から始まり、戦闘に計略、果ては料理の腕前まで。

見せ付けられた格の差に気を落とす。

名家で育つたお嬢様には数少ない経験であった。

ラウルは膝から崩れ落ちてもおおかしくないリアスを眺め、ニコニコと笑顔を浮かべていた。

「粗茶ですわ」

「ん、ありがとう」

戻ってきた朱乃から、淹れ直したであろうお茶を受け取る。

色は濁りない緑色をしており、若葉独特の香りが鼻をくすぐる。

香りを一通り楽しんだ後、ラウルは迷わずカップの縁へと口を付けた。

「玉露は玉露で良いものだ……」

「……先程のことは許して頂けますか？」

「何のことだか……私は美味しいお茶を御馳走になっただけだが？」

朱乃の心配を余所に、ラウルは恍けてみせる。

彼にとつて、美味しいお茶にありつけたことの方が重要だったのだ。

「それじゃあ、貴方の素性について話してもらえるかしら？」

「駒王学園高等科二年B組、八幡ラウルです。一介の魔術師をやらせて頂いております。

以後、お見知りおきを」

「……ふざけているの？」

「いや、至って真面目なのだ」

白雪のような儂い細指で、持ち手摘むティーカップを静かに置くと、ラウルはゆつく

りと立ち上がった。

リアスの問いに対して、優雅に一礼をして答える。

だが、それはリアスの求めた答えに程遠いかった。

それでも、眉間に皺を寄せる彼女に、ラウルは飄々とした態度で応える。

「朱乃」

「私の出番ですわね」

艶めかしい声音と雷の奏でる空気を焼く音が部室に響く。

朱乃の掌には雷が奔り、顔には期待に満ちた表情を見せる

蚊帳の外にいた一誠などはその妖しさに恐怖を煽られ、顔を慄かせていた。

「暴力は良くないと思うのだが」

「あらあら、暴力ではありませんよ。後輩との軽いスキンシップです」

「パワーハラスメントだ」

「うふふ」

僅かに雷を宿した朱乃の双手は、ラウルの身体を撫で上げる。

大股に始まり、横腹、首筋、二の腕に指の間まで、神経の集中しているところを重点的に愛撫する。

癖に為りかねない甘い感覚を送られ続ける彼は、抗議の声を上げると大人しくソファアーに腰を掛ける。

腰を掛けた後も、その愛撫は続きラウルの身体を苛む。

「古代魔術の使い手だから、あまり素性を明かすわけにはいかないのだが」

「古代魔術？ なにかしら、初めて聞くわね」

「内に神秘を宿すことで力を得る、古風な魔術師一派のことだよ。もともと、戦闘などで手の内を明かしたり、後継者を育てるうえで神秘を晒したりする以上、当たり前のように

に廃れていったがな」

「そう……」

目を閉じると、ラウルは仕方なしに語り始める。

古代魔術師という存在。

それは、神秘を内包し糧とする古風な魔術師。

故に、安易に素性を明かすことはできないと、ラウルは語る。

話を聞いたリアスは真偽は確かでなくとも、情報を聞き出せたことを良しとし、詳しいことは時間を掛けて探ると結論付けた。

「その古代魔術師が何故こんなところにいるにかしら？」

「異国で十年近く修行を積み、一人前に認められたため、帰ってきたといった感じかな」
次に問われるのはこの地を訪れた目的。

リアスが浮かべる疑問は当然のこと。

言葉通りであるなら貴重である筈の彼が、何故悪魔の管理地で学生をやっているのか。

その疑問に対して、ラウルは帰郷しただけだと言う。

「どうして、この地なのかしら？」

「ん、生まれ故郷に帰って来たではダメか？」

「ダメね」

「望郷の念に駆られるのは、人情として当然だと心得るのだが？」

「……それだけではないでしょ？」

ラウルは人情として当然だとリアスに訴え掛ける。

その訴えにリアスは納得しない。

元々、正体を知れると御の字、目的は知って然るべきであつたのだ。

この地の管理者として、リアスは引く気がない。

むしろ、先ほどの質問は追及しなかつたのだから話なさいと、言わんばかりの視線をラウルに送る。

渋面を浮かべたラウルは、一誠に視線を投げ掛けながら口を開いた。

「……あまり本人の前では言いたくなかつたのだが、こちらに残してきた幼馴染が心配でな、一目見ようとこの地に舞い戻ってきたわけだ」

「俺!？」

まさかの名前が出た一誠は驚きの声を上げた。

悪魔に転生したばかりの彼の名前が出てくるとは、口に出した本人以外予想外であつた。

しかし、ラウルにとっては赤き龍帝を宿している幼馴染。

そんなことを知る由もない一誠に、ラウルは自身が溜めていた思いを吐き出した。

「そうしたらな、何処を如何間違えたか、女性の前で卑猥な会話を始めたり、更衣室を平然と除くような変態に成り下がっていたわけだ。これも、いきなり親しくしていた幼馴染二人ともが英国に渡ってしまった影響なのだろうか。昔は、その幼馴染と三人でおままごとをよくしたものだ。昼間に流れるドラマにも勝さず劣らずのドロドロした展開のおままごとではあったが、あの頃のイツセーは色んな意味で純粹であった。それがいまや、こんな風になっているとは……時の流れとは如何に残酷なのだろうか」

顔に影を差したラウルは幼馴染の現状を憂い嘆く。

あの頃の美しき思い出は何処に行ってしまったのかと。

無垢な一誠は何処に消えてしまったのかと。

自身が離れた間に一誠が変態に成り下がってしまったと。

愁色の表情を浮かべる彼は目を離せば儚く消えてしまいそうであった。

「やめて、昔のことを掘り起こさないで!! それに、お前がそんな表情で言うとは色々洒落にならないから!!」

「……変態」

「ラウルくんは……女性と見間違う時があるからね」

「うふふ、イツセーくんたちの過去にそんなことがあったのですわね」

赤裸々な過去を暴露された一誠は、喚き声を上げた。

小猫は白い目で一誠を睨み、佑斗は苦笑を浮かべラウルに眼差しを送る。

そんな彼らを見詰めて、朱乃は微笑んだ。

「納得して頂けたかな？」

「……いいわ、今はそういうことにしといてあげる」

ラウルが口にしたのは本当のこと。

幼馴染が心配で英国より帰ってきたのだ。

ただ、一誠のことが心配なのは確かだが、目的はそれだけではない。

語らない目的を現段階で口にするのではない。

それが分かっているが故に、リアスは不満そうにしながらも、一応納得して見せた。

「グレモリー嬢は疑り深いな」

「グレモリー嬢は止めて、私のことは部長と呼びなさい」

部長と呼べと言われたか分からなかったラウルは一瞬間を曇らせた。

だが、この場所が表ではオカルト研究部と名を打っていることを思い出した彼は納得する。

納得したラウルにとって入部の是非はどちらでも良かった為、差し当たらない言葉を口にした。

「私は入部する気はなかったのだが」

「この部屋に入室した時からあなたも部員の一員よ」

「……ならば、少しは歓迎してほしいものだ」

腰に手を当て、宣言する悪魔の姫君。

彼女の態度にラウルは苦い顔をして、肩を竦めるのだった。

* * *

「人払いを済ませて、次は何の話かな？」

「あなたも用があつたみたいだつたけど？」

「後にもらつて構わない。それより、貴方はどうしても聞きたいことがあつたのだろうか？」

夜の帳が居り始めた頃、部活は一応の解散を迎えた。

悪魔に生り立ての一誠は帰宅することになり、用心の為に小猫が連れ添うことになつた。

そして、蠟燭照らす部室に残つたのは、先の二人を除いた四人。

リアスは佑斗にも席を外すように促したが、本人が拒否。

会合は四人で再開を迎えたのだった。

口火を切ったのはラウルであった。

「あの時、使った剣のことよ」

「まだ、私を悪魔祓いと疑っているのか？」

心外だと言わんばかりのラウル。

疑われる要因を作ったのは彼であったが、ここまで疑り深いとは思ってもみなかった。

買収までして頑張ってもらった小猫の苦勞を無駄にするのかと、暗に仄めかす。

「いえ、そのことはもういいのよ。ソーナ……生徒会長も太鼓判を押したもの」

「ふむ、彼女が？」

ティーカップを摘んだラウルの手が止まる。

返ってきたのは予想外の答えに思考を巡らせる。

ラウルにとって、生徒会長は面識のある人物であったのだ。

「その様子なら、ソーナが悪魔だと知っているようね」

「ん!? 彼女は悪魔だったのか!？」

リアスに告げられた真実にラウルは驚きを隠せなかった。

摘んでいたティーカップは受け皿に落下し音を響かせたのだった。

「……もしかして知らなかったの？」

ラウルの反応に、リアスは頬を引き攣らせた。

悪魔と知り合いということは、悪魔と知っているものだと思っていたのだろう。

だが、ラウルは生徒会長が悪魔だとは知らなかった。

何らかの事情があつて、彼女は悪魔であることを隠していたのだ。

軽率な行動を取ってしまったと、リアスは後悔の色を浮かべる。

「くっ……」

そんな焦るリアスの様子を見て、ラウルは思わず嘔き出した。

ソーナの名が出た時から、リアスが彼女を悪魔だと口走ると予感していたのだ。

仕込みを行おうとした矢先、暴露されたのには驚いたが、見事に即興演技に引っかけられてくれた。

ご満悦のラウルは舌を出し陽気な顔を見せる。

「冗談だ……とつくに知っていたよ」

「あなたね……」

からかわれたと知ったリアスは肩を震わせる。

彼女の下僕たちは、怒りに身を染める主を気の毒そうに見ていた。

「彼女とは少しばかり縁があつてな、お互い少しばかりは知っているという話だよ」

「あなたもソーナもだけど、知り合いなら教えなさいよ！」

「機会がなかったただけだろう。その所為で昨夜は死闘を演じるようになったがな」

勇ましい剣幕で喰い掛かるリアスを諸共せず、ラウルはニヒルに笑う。

ある時は薄氷の如き儂さを、ある時は陽光の如き明るさを見せ、ある時は空虚に笑って見せる。

その姿は掴みどころのない雲のようであった。

百面相を見せる彼に、リアスの怒りが空回りし、無駄だと悟った途端げんなりした顔を見せる。

「んんっ！ ソーナの件は後できっちり話し合うことにして……あなたの剣のことよ」

ラウルのペースに吞まれてしまっていたリアスは空気を入れ替え、答えをはぐらかさず、来てしまった問いをもう一度ぶつける。

「あの風の魔剣も大概だけど、私に振るおうとしたあの剣……あれは、聖剣？」

リアスの問いに部室内の空気が一転する。

抑えきれない殺気によって、重苦しく剣呑な物へと変化する。

「聖剣の一言に過剰に反応する者がいたのだ。」

リアスの騎士、佑斗である。

その瞳に憎悪を宿し、魔剣を抜剣した。

「落ち着かないか、佑斗。辛抱ない男は損するだけだぞ」

殺気立つ佑斗にラウルは嘆息した。

先程、廊下で同じやり取りをしたばかりではないかと。

「それに——」

ソファアーに座すラウルの姿が霧が晴れるが如く消失する。

そして、現れるのは佑斗の背後。

「——あれだけでは我慢できなかつたか？」

背後に立ったラウルは、後ろを取られたと気付いていない佑斗の耳を甘噛みする。

甘噛みするだけではなく、舌先を耳裏に這わせ感覚を犯していく。

口内を使つた愛撫を以つて、堪え性のない少年の性感帯を刺激した。

「くくくくつ！　だ、だから君は！」

「あらあら、八幡くんは大胆ですわ」

佑斗は騎士の速度を以つて離脱し、離脱したその場で悶えた。

「それでは、話に戻ろう」

「え、ええ……」

理解が付いていかず、リアスは目を彷徨わせる。

そんな彼女を尻目にラウルは何事もなかったかのように席に着いた。

「光剣のことだが……あれは、厳密に言うとは貴方たちの言う聖剣ではない」
「……厳密に言うとは？」

「そうだ、広義で言えば聖剣になるが、狭義で言うとは光を放つ魔剣だ」
「待つて……いえ、待ちなさい！ 光を放つ魔剣つてどうということっ！」

ラウルは言葉遊びを始める。

聖剣、魔剣とは認識の違いであると。

彼が手にしていたのは、その境界線上を歩き来する剣であると。

ただ、光を放つ魔剣とも言い換えられると。

驚愕の事実を突き付けられたリアスは詳しい事情を求める。

「あの剣について、現段階で話せるのはここまでだ」

「話なさい！ さもないと——」

焦る気持ちは我を忘れさせる。

彼女は魔力を開放し、ラウルを脅しに掛かる。

ラウルは彼女の態度に嘆息すると姿を消した。

「私も一組織の人間だ。貴方も冥界に所属する悪魔なら分かるだろ」

「くっ！」

現れるのはまたしても彼女の背後。

その手に光の魔剣を手にして警告する。

これ以上探るようなら、組織の人間として動かなくてはいけなくなると。

力量の差を忘れてしまっていたリアスは歯を噛み締める。

「グレモリー眷属は情に厚いと聞いたが、主ともども些か直情過ぎないだろうか？」

「八幡くんがからかい過ぎるのがいけないのよ」

主も下僕の佑斗も、思慮が足りないのではと、歯止め役の朱乃に問い掛ける。

問われた朱乃はラウルの態度を指摘し返した。

遊びも程々にしないからこじれるのだと。

「まあ、いいさ。ゆっくり信頼関係を築いていきたいと私は思っている。そうしたなら、

明かせる情報も増えてくるだろうよ」

「わたしたちは信用にならないって訳ね……」

「そう不貞腐るな。第一、お互いの食の好みすら知りえないだろうに」

頬を膨らませてそっぽを向くりアスを見て、ラウルは苦笑する。

彼女になら近い将来、秘密を明かせる日が来るだろうと。

「佑斗もな」

「……分かったよ、ラウルくん。その時が来たら、誤魔化さずちゃんと話してもらおうから

ね」

「楽しみにしている。その時は一夜飲み明かそう」

何度問い詰めても、体良くあしらわれる未来しか見えない佑斗は大人しく時を待つことにした。

ラウル自身時が来たら話すと宣言したのだ。

人をからかいこそすれども、裏切るような人間ではない。

佑斗はラウルのことをそう考えていた。

そんな佑斗をラウルは好ましい人物だと捉えていた。

良くも悪くも一途であると。

周りが見えなくなることがあるが、高潔な志を持つ騎士の鏡のような悪魔であると。

道化のような魔術師と騎士のような悪魔。

そこにはある種の信頼が置かれていた。

「あらあら、お二人とも仲が宜しいようで」

「剣を交えたからではないか？ 古来より戦いは情を育む」

「なら、私は別の手段で情を育みましようか」

朱乃は身をすり寄せ、ラウルを誘う。

しかし、ラウルは見向きもしなかった。

「そちらの疑念は晴れたかな？」

「あなたはこれ以上答える気は無いでしょ？」

「まあな」

このあたりが妥協点。

秘密を隠すラウルも、保守のため秘密を探るリアスも、そのことが分かっていた。

「あなたも聞きたいことがあったのでしょ？」

「聞きたいことではなく話しておきたいことなのだが……」

リアスの問いに笑みを消した。

これから話すのは彼らの進退を決めかねない重要事項。

ラウルは居住まいを直し、真剣な表情で口を開いた。

「此方が話しておきたいことは一つ………イツセーの神器、ブリス赤龍帝の籠手テット・ギアについてだ」

七話 悪魔契約

人気がない深閑とした森の奥地。

静まり返った暗闇で二つの不穏な人影が蠢く。

片や、やせ形の男。四辺形の箱型を手にし、目を怪しく輝かせる。片や、活き活きとした少年。口元が如何わしい笑みを作っていた。

不審な態度を見せる男たちの前に、目的の人物がやってくる。

朧月を背に銀の長髪を風に靡かせ歩み寄る少女。

僅かに浮かび上がった輪郭は細く美しい。

靡く銀の絹糸の間で、儂い輝きを見せるのは淡蒼の瞳。

夜空の下で輝くそれは、星よりも綺麗であった。

影に隠れ表情こそ見せないが、美姫であることは間違えないだろう。

差し出される脚は膝丈まで、純白のブーツで覆われている。

丈の短いスカートとの間に垣間見える柔肌は、ある種の造形美を思わせる。

淡蒼の瞳が男たちを捉えると、細腰の剣帯に手を動かす。

すらりと剣を抜く腕は肘上から手首まで黒い布製の手甲で覆われている。

スリーブレスのドレスの間には、雪色のドレスよりなお白い肌が露出する。少女はその白雪を宿す華奢な腕で抜身の剣を携える。

「魔法少女ラウるん見参。悪しき墮天使たちよ、焔めく我が剣の前に平伏しなさい」
月明かりを纏い、口上を述べる女装の麗人。

不埒な願望を抱く彼らの前に、悪しきものを討ち滅ぼす正義の魔法少女が舞い降りたのだった。

* * *

遡ること数時間前。

「イツセー、あなたのチラシ配りも終わりよ。よく頑張ったわね」
数日に渡るチラシ配りが終わりを迎える。

新人悪魔としての下済みを次の段階に進めることになったのだ。
課せられるのは悪魔の生命線ともいえる契約。

これをなくして、悪魔の繁栄はあり得ないのだった。

「小猫に予約以来が二件入ってしまったの。両方行くのは難しいから、片方はあなたに任せるわ」

「……よろしくお願いします」

シユークリームを口にしていた小猫は、手にしていたものを置き立ち上がる。

一誠に向き合うと、小さくお辞儀をした。

今回、一誠に任せられることになったのは、小猫の代役。

重複した以来の片方を任せられることになったのだ。

「小猫、頬にクリームが付いてる」

「ん」

ソファアーに戻ってきた小猫にラウルは手を伸ばす。

指摘された小猫は動かず頬を差し出した。

ラウルは頬に付いたクリームを指で掬い取ると、薄い唇に指を付け掬ったそれを舌尖で舐めた。

「朱乃、準備はいい?」

「はい、部長。転送の準備が整いましたわ」

部屋の中央で行われる儀式。

転移の為のそれは朱乃の手で粛々と行われていた。

対となる認識の為の刻印は、リアスが一誠の掌に書き込む。

準備が完了し、朱乃は魔方陣の外で一誠を手招きする。

招かれた一誠が魔方陣の中央に立つと、リアスが注意事項を述べ、遂に一誠に取つて初の悪魔契約が始まろうとしていた。

魔法陣が輝き、一誠が光に吞まれる。

そして――。

「やはりか……」

「……魔力不足」

彼らの様子を冷やややかな目で眺めていたラウルと小猫は嘆息する。

光が納まつても依然、そこにいたのは今日初契約を迎える新人悪魔。

彼の魔力が人並み以下だと言うことは、誰しもが分かっていたはずだ。

なのに期待させるような真似をしてどうするのだと、ラウルは白い目でリアスを見る。

「イツセー、あなたの魔力は子供以下。魔方陣が反応を示さないほど低レベルなのよ」

「なんじやそりやああああああ!!」

「……無様」

背中に視線を感じながらもリアスは言い切った。

一誠は突きつけられた現実にも、頭を抱え絶叫した。

「あらあら、困りましたわねえ。部長、どうしますか?」

「依頼人を待たせるわけにはいかないわ。イツセー、前代未聞だけど、足で直接現場に向かつてちょうだい」

「チャリですか！ 今度はチャリでお宅訪問ですか！」

まさかの自転車訪問に落ち込む一誠。

その様子を見ていたラウルが立ち上がる。

「イツセー……難なら私が魔術で送ってもいいが……」

ラウルは魔術で送ることを口にしたが、考え直して自ら難色を示した。

これから幾度も一誠は契約を交わしていくことになるだろう。

しかし、契約の度にラウルが送り迎えをしていたのでは、流石に能がない。

悪魔より圧倒的に寿命が短い彼では、どう転がるにしろこれから一生の間、一誠に付き添うことはできないのだ。

それならば、前代未聞の自転車召喚もありか、と納得する。

幼馴染の未来を憂いて、背中を押すことにした。

「まあ、頑張れ。これも上級悪魔になるための試練だ」

「ちくしよおおオオオ!!」

一筋の希望をちらつかされただけに、一誠の衝動は大きかった。

幼馴染に裏切られた一誠は、咆哮を上げ扉を突き飛ばすように出て行った。

「なあ、部長」

「なにかしら？」

「赤龍帝の籠手で一時的に魔力を底上げすればよかったかもしれないな」

「……そうね」

既に後の祭り。

涙を浮かべ依頼者の下へ向かう一誠が、彼らには想像できたのだった。

* * *

「すまない、席を立たせてもらおう」

リアスとチェスを打っていたが、電話が掛かってきたためラウルは断りを入れて席を立つ。

残ったのは終盤に差し掛かったチェス盤と打ち手の片割れのリアスであった。

リアスは盤上を仇の如き睨み付けると、策を巡らす。

残る駒は女王こそ残っているものの戦況は押されていたのだ。

兵士の進撃、僧侶が幅を利かせ、騎士は自在に飛び回る。

自陣に残る戦車や女王は陰に隠れ隙を窺う。

リアスにとって、麗人の戦法は嫌らしいの一言に尽きた。彼は基本受けに回る。

受けに回るがそこから張り巡らせるのは罠であることが多く、誘い込んで逆襲まで繋げる。

逆に警戒して攻めなければ、真綿で首を絞めるようじわじわとミスを誘発させようと圧力を掛ける。

また、犠牲を前提とした釣りや強制被動などを平然と使う様には、リアスの琴線に触れるものがあつた。

勝率が低いこともその気持ちに拍車を掛ける。

三勝十六敗とラウルの勝ち越しであつたのだ。

誇り高き令嬢としては、何としても鼻を明かしたいところであつた。

「部長」

電話を終え戻つたラウルは、チェス盤を見て思いを巡らすリアスに用件を伝える。

「イツセーから救援要請が来ているのだが、如何しようか？」

ラウルに電話を掛けてきたのは一誠であつた。

一誠では手に負えない要求だつた為に、助けを求めてきたのだ。

しかし、幼馴染ではあるが、今の彼は目の前にいる紅の姫の下僕。

勝手に手を出すのは無粋だと思い、指示を仰ぐことにした。

「そうね……あなたはどうしたいの？」

返ってきた答えにラウルは目を丸くする。

「ふふふ、あなたでもそんな顔をするのね」

「私を何だと思っているのだ」

上機嫌で笑声を上げるリアスを見て、ラウルは肩を竦める。

リアスたちと違って自身はこれでも人間なのだ。

驚きもすれば、涙を浮かべたりするのだと、リアスに異議を唱えた。

「てつきり、貴方が判断をするものだと思っただけな……少し、意外だったな」

「何を言っているの。下僕の考えを聞き入れるのも、主としての役目よ」

「……人を下僕扱いするのは、貴方の趣味であったか」

ラウルは何故か自身が下僕扱いされていることに気付き毒づいた。

「初の契約取りだから、一人でやらせたいと思っていたのだが……救援要請がきた以上、手を貸すしかあるまい」

ラウルは瞼を閉じ、リアスに意見を述べる。

一誠には初契約を自身の手で成功させてもらいたかった。

契約成立を機に自信を付けて欲しいと。

これから何度も味わうであろう、挫折や劣等感を乗り切るための糧にでもなればと。ラウルは幼馴染の将来のため、見守ろうと考えていた。

だが、手に負いきれないと言うのであれば別であった。

仮にここで手を貸さずに契約が破算になれば、後々までしこりとして一誠の心に痕を残す事であろう。

堕天使に騙され、悪魔に転生した、不安定な時期ならなおさらだ。

見守ろうと考えていたラウルとて、そのような事態になること避けたいことであった。

「過保護ですわね……リアスと同じぐらいに」

「あ、朱乃！」

いつの間にかラウルの背後に現れた朱乃は、お節介を焼く彼らをからかう。

からかわれたリアスは抗議の声を上げる。

それは過保護と指摘されたことではなく、朱乃にからかわれたことと、ラウルと同列に扱われたことに対してであったが。

そして、ラウルはというと――。

「さり気なく胸を押し付けないでもらえないか？」

豊かな朱乃の胸に押しつぶされようとしていた。

頭を抱かれ、後頭部に胸を押し付けられる。

それは彼の級友たちが血涙を絞る、男冥利尽きる状況であった。

「あら、ラウルくんも似たようなことをしているのではありませんこと？」

「節度を守っているから問題はない。第一、同性だしな」

「それはそれで問題ですわ」

動じることのないラウルに、朱乃は困った顔を浮かべるのだった。

「それでどうする部長？ 私がこの胸に押し潰されない内に決めてもらいたいのだが」

「時間は無制限ね」

「私も一応男だぞ。我知らず、狼になるやもしれん」

「一応なのね、そこは」

一応と加える彼に、リアスは諦めの境地に達しようとしていた。

もう彼は女子でいいのではないか。

女子制服に身を包むラウルは、リアスの心境を察し微笑み返したのだった。

「いいわ、朱乃離してあげてちょうだい」

「了解ですわ、部長」

考えが纏まったリアスは解放を指示する。

元々、朱乃が勝手に抱き着いただけではあつたが。

「あなたにはイツセーの手助けに言ってもらいわ。その代わりに、ちゃんと契約を取って
くること。良いわね！」

「姫君が拜命、この八幡ラウル謹んで受諾申し上げます」

指を突き付けリアスは命令を下す。

対してラウルは片膝をつき、騎士の例を以って応える。

呆気を取られる彼女たちを見て不敵な笑みを浮かべると、光の中へと消え一誠の下へ
向かったのだった。

* * *

アパートの一室。

一誠と依頼者である森沢が、激しい討論を繰り広げるその場所に魔法陣が浮かぶ。

室内を満たす眩い光。

魔法陣からは白銀の羽が空高く舞い上がり、呼び出した彼らを祝福する。

羽根満ちる一室に、女装の魔術師が姿を現した。

「お呼びに授かり、八幡ラウル参上致しました。年端も往かぬ若輩者ですが、どうぞ良し
なをお願い申し上げます」

扇状に広がる長髪が光に照らされ銀に輝く。

初雪の白さを宿した細指を付け、掌を額の上で見せる。

ふわりと舞い降りるスカートの内垣間見えたのは純白の聖域。

邪な男たちの視線を釘付けにする。

聖域が臙脂色の布地で覆われた後、彼らの視線が捉えるのは床に面する膝との間の絶

対領域。

見る者を惹きつけて止まない脚線美を瑞々しい肌が描く。

姫君に取った騎士の礼のまま転移した銀髪の麗人は、頭を垂れたまま口上を述べた。

「て……天使……？」

「なんで……敬語？」

ラウルは呆然とする森沢に顔を上げ微笑んでみせる。

「お戯れを。私が彼の補佐役をお預かり致しました者に御座います」

「似合っているけど似合っていない……つうか何で敬語使つてんの！」

「私宛のお客様でない以上、粗相をする訳にはなりません」

「えくと、キミ。普段通りの口調に戻ってみてよ。なんか首筋がこそばゆいしさ……普

段のキミを見てみたくもあるんだ」

「畏まりました……これでいいかな？」

依頼人の希望を以って、ラウルは普段の口調に戻る。

「うん、いつものラウルだ」

「酷いな、私だって敬語の一つや二つ使えるぞ」

「悪魔くん、グツジョブだよ。可愛い系の小猫ちゃんもいいけど、カツコイイ系のお姉さんもありだね！」

大胆不敵な口調に戻ったラウルを見て一誠は安堵の息を漏らした。

酷い言い草にラウルはニヒルな笑みで対応する。

一方、依頼者はラウルの麗しい姿に気持ちを高揚させていた。

「さて、お客様、如何なものを御所望か？」

「これを着て貰おうと思っただけど……背が高いかな？ まあ、それもそれでいいか」

ラウルの身長は一般男子の平均並み。

依頼主が手にする服装を着る人物と比べ、些か高くあつた。

それでも納得した森沢はラウルに制服を渡す。

「これを着ればいいのだな？ 隣の一室を使わせてもらうが宜しいか？」

「うん、好きに使ってくれて構わないよ」

「では、着替えてくる」

ラウルは許可を貰い、隣のバスルームへと向かう。

ふと、性欲の権現がいたことを思い出した彼は振り向き注意する。

「覗くなよ、イツセー」

「誰が覗くかつ!!」

上品に笑顔を漏らしてラウルはバスルームへ消える。

こうして、アパートの一室で撮影会が始まったのだった。

* * *

「うくん、なんだかミスマッチだね」

短門キユの制服を着こなすラウルを前にして、依頼主の森沢が唸り声を上げていた。

そんな彼にラウルは目を潤ませ上目遣いで尋ねる。

「……何がダメ？」

「ぐはっ! いや、いや、キミが悪いわけじゃないよ。色々こつちの要望にも応えてくれたし、こんなにも写真が撮れたからね」

鼻血を吹き出した森沢は、ラウルの所為ではないと懸命に否定する。

手にするカメラに収められていたのは、銀髪の女子高生であった。

制服を着替えたラウルはあれから色々求めに応じてることになったのだ。

始めの内はテーブルを囲んで会話を楽しんでいたのだが、ラウルの一言で彼自身が森沢の要求に応えポーズを取る事になる。

次々と要求に応えるラウルに、記録を取らないともつたいたい、森沢はカメラを取り出した。

熱が入ったラウルは演技まで始め、被写体となる。

いつものお姉様キャラに始まり、高飛車なお嬢様、クールな委員長など多岐に渡った。現在は、原点でもある無口キャラを演じていた。

だが、此処にきて森沢が首を捻り始める。

ミステリアスな雰囲気を持つことには違いなかったが、方向性が違ったのだ。

美少女である短門キユが放つ電波系オーラと美女ともいえるラウルが纏う犯し難しい神秘的な雰囲気。

交わることのないそれは、心の奥底で違和感を生み続ける。

「そういや、ラウル。他の服を持っていたりしないのか?」

「いや、悪魔くんそんなに都合よくは……」

「あるぞ?」

「ある(あん)のっ!!」

「ああ、種類は多くないが手持ちに幾つか」

ラウルは然もありませんとばかりに答える。

彼にとつて女装は正装でもあり、趣味と化していたのだ。

「どのようなものを御所望か？」

「そうだね……ここは王道にワンピース姿を！ いや、ドレスとかはないよね？」

「どちらもあるが……どちらがいい？」

「あるんですか！ あっちゃんですか！」

「マジでっ!? 何で持ってるのっ!!」

驚愕の事実にもたちのテンションが高まる。

「さあ、お客様はどちらからが御所望かな？」

彼らの様子を目の当たりにしたラウルは小悪魔な笑みを浮かべ誘った。

* * *

薄暗い石造りの回廊で、短い悲鳴が上がる。

「くっ！ 魔王め！ 私にこのようなことをして、ただで済むと思っているのか！」

悲鳴の主の下に銀製のティアアラが転がる。

純白のドレスは裾口から大きく裂け、ガーターベルトを身に付けた大股が顕わになっ

ていた。

石張りの床に身を打ち付けた姫装束のラウルは、己に無礼を行った下手人を睨み付ける。

「ふあふあふあふあ。ラウラ姫よ、最早この国には我が物。貴様に何を行おうとも咎められる謂われはありはしない」

「馬鹿なっ!?! この国が落ちたなどと……父上は！ 聖合騎士団はどうなったというのだ!?!」

信じ難い事態を告げられた姫は、目を限界まで見開く。

高らかに笑う魔王を目の当たりにして、虚言でないと知ると顔を伏せ胸の前で両手を握りしめた。

「分かり切ったことを。いずれ貴殿も後を追わしてやろう。だが、それまでは——」

顎に指を掛けられ、顔を背けることの許されないラウラ姫。

気丈に振る舞っていた淡蒼の瞳は大きく揺れる。

我が身に降りかかる不幸を幻視して絶望の表情を浮かべた。

そして、魔王の顔がゆつくりと近づき——。

「はい、カット!! お疲れ様」

「いや、ラウルさんもいい仕事をするね。見ているこっちがドキドキしてくる」

「満足して頂けて何よりだ」

「やべえ、今日眠れそうにない」

目前まで迫った一誠の唇を細指で塞ぎ押し返す。

一誠が正気に戻ったのを確認したラウルは、手を借りて立ち上がる。

立ち上がり着衣の乱れを直し、依頼人の満足そうな顔を見ると、ラウルは手を翳し周囲に掛けた幻術を解く。

幻術が解けた後に現れたのは、何も無い広大で無機質な空間だった。

撮影はいる際に、依頼人の一室では些か狭さを感じたラウルは、結界を張り垂空間を創造。

その空間を幻術で上書きして、環境を整えたのだった。

「ラウルさんは演技派だね」

「そうですね……危うく襲いかけましたし」

ラウルが切れ長の目で見ると、一誠は冷や汗を浮かべていた。

無意識の内とはいえ、魔王を演じていた一誠は幼馴染の男の娘を襲おうとしていたのだ。

性格が決して良いと言えないラウルに何を仕返しされても仕方ないだろう。未来を予想して恐れ慄く一誠が面白くて彼は小さく笑う。

ラウルとて、登場人物になりきりすぎて、演技に熱が入ったのが分かっている。

しかし、内心複雑だったため、何も声を掛けず観察することにしたのだ。

「さて、次は何にする」

「ん？ これで終わりじゃないの？」

「もう満ち足りたのか？ まだ、三着目だろ」

「いやいや、まだまだいけるよ。でも、大丈夫？ 対価で命とか取らない？」

対価を心配して尻込みし始めた森沢。

そんな依頼主の為に、一誠は手元の機会を操作して対価を調べる。

「えくと、この撮影会自体で対価を取るの、時間は関係ないみたいです」

「だ、そうだ。次は何にする？ 希望がなければやってみたいのがあるのだが」

「なんでもOKだよ。ラウルさんのやりたいもので」

森沢の返事を聞いて、ラウルは不敵な笑みを浮かべた。

未だに機械の操作を行っていた一誠は背中に寒いものを感じた。

古今東西にて語り継がれる逸話。

魔王——それは物語で討たれる運命にある存在であった。

地が剥き出しになった荒野で一組の男女が向き合う。

頭に角を生やした男は、身体の到る所に裂傷を負い、片膝を立てて乱れた呼吸を整える。

純白の騎士服に身を包んだ女性は、天使の祝福を受けた白銀の剣を携える。

土汚れた銀の長髪は輝きを失うことなく気高さを纏っている。

憎しみを宿す蒼の瞳は澄み、曇ることなく怨敵を捉えていた。

荒野で死闘を繰り広げる彼らは、嘗ての故国を滅ぼした者と滅ぼされた者であった。

聖剣を掲げる姫騎士は忌まわしき過去を断ち切るべく告げる。

「魔王よ！ 私を生かしておいたこと、あの世で後悔するがいい」

「ま、待て！ 貴殿が望むならば世界の半分でもくれてやる。だから考え直そうではないか!？」

「世迷い事を！ 皆の苦しみとくと思いい知れ!!」

「待て！ 待たぬかああああ!!」

白光が荒野を疾走する。

振るうは世界より託された想い。

姫騎士は皆の希望を乗せ、絶叫する魔王を切り裂いた。

「父上、母上……皆の仇を取りました」

怨敵を討った姫騎士は天に向け剣を掲げる。

胸の間で柄を握りしめる両手は、亡き者たちへの想いで震える。

閉じた眼からは、歓喜の涙が止め処なく溢れ出す。

頬を伝う涙は、地を濡らし姫の苦行を物語る。

彼女を照らしだす陽光は、新たな世界の幕開けを祝福しているようだった。

「……はっ！」

涙流すラウルの姿に見惚れていた森沢は、慌ててシャツターを切る。

フラツシユ浴びるラウルは微動たりしない。

頬伝う涙も枯れることなく溢れ続ける。

「お疲れ様。悪魔業なんて止めて、女優目指したらどうだい？ いまなら、ファン一号が

付いてくるよ」

聖女の彫刻と化していたラウルに、森沢が労いの言葉を掛ける。

声を掛けられたラウルはシルクの織物を取り出して、涙流れた頬を拭く。

涙を拭く動作ですら絵になるラウルは、感極まり芝居が終わった後もスナツプを利か

せる森沢に微笑み返した。

「ふふふ、残念ながらすでに私は役者だよ」

「うそお!? 全然見たことないよ! 何処の会社のタレントさん!?!」

「秘密だよ。ファンになるなら自分で探さないとな」

ラウルは既に役者であると、片眼を閉じて伝える。

衝撃を受けた森沢は問い質すが、語っては面白みがないとラウルは唇に指を添えた。

「でも……………今は貴方だけのもの」

「ぼ、僕だけの……………」

「そう、貴方だけの……………」

ゆっくりと近づいたラウルは、森沢の頬に手を当て言葉を紡ぐ。

されど、今だけはこの身はあなたのものだと。

好きにしてくれて構わないと囁く。

長いまつ毛がくすぐり、熱い吐息が触れた森沢は顔を赤くしていた。

「いつつ……………マジで叩き切りやがったな」

怪しい雰囲気を纏い始めた二人の仲を無粋な少年が切り裂く。

「本気で襲いかかろうとした罰だ、暫しもがいている」

「……………容赦ねえ」

幻術を使い聖剣を模した木刀で叩き切ったこと。

それはお互い本気で演技した結果だと、ラウルは意趣返しを正当化した。冷たくあしらわれた一誠に魔の手が伸びる。

「悪魔くん！ キミってやつは!! キミってやつは!!」

「森沢さん放して……マジでヤバいから……げぷ」

生殺しに終わった森沢の衝動は一誠へと向く。

首元を掴まれ揺さぶられる一誠は吐き気を催した。

「その悪魔は放つて置いて、そろそろ最後の撮影には入らないか？」

「え？ ……最後？」

一誠を投げ出した森沢が信じられないとばかりに、終わりを告げるラウルを茫然と見る。

投げ出された一誠を一瞥すると、ラウルは凜とした姿で続ける。

「ああ、最後だ。もうじき夜も明けるしな」

「……………」

ラウルが魅せるは胡蝶の夢。

魅せられた者は夢と現実の境を失うのだ。

見境を失ったものは、過ぎ去る時などに気付くことはない。

されど、現実である限り終わりはやってくる。

「楽しい時間とは気付かぬうちに過ぎ去るものだ」

終わりがやってくる故に最後は期待以上のものを用意する。

ファイナレを盛大に飾るのもまた、役者であるラウルの役目であった。

「最後はとっておきのを見せよう」

そして、冒頭に話は戻る。

* * *

「こつちに視線寄越して……うん、そう……そんな感じ」

月明かりを背に、ラウルは樹木に身を預ける。

立てた片膝から見える聖域を抱える剣が遮る。

憂いを帯びた表情で片目を開け、淡蒼の瞳は遠くを見据えていた。

「次は剣舞をお見せしよう。ゆっくり踊るので、指示をお願いできるか？」

「任せてよ！ 絶対いい絵を取るからさ!!」

満足を浮かべる森沢の顔を見ると、ラウルは立ち上がり剣舞を見せることになる。

すらりと剣を抜くと、木々のない広場で足を肩幅に開く。

右足を引き、剣先を正面に向けると深く息をする。

仮想敵を定め、瞳に映すと踊り始めた。

流れる銀髪は一刀振るうごとに跳ね、月に照らされ輝く。

挙動を重ねるたびに丈の短いスカートの内が垣間見える。

振るう度に男たちの声が響くが、ラウルの剣舞は澁むことがない。

仮想敵と定めたのは、一誠とは違うもう一人に盟友。

ラウルの知る限り最優の騎士。

彼に並ぶ騎士は居れど、優れたる剣士は見ることがない。

盟友の優男が繰り出すのは、決してぶれることのない不変の剣術。

何処の誰が相手であろうが安定した戦いを見せる。

ゆつたりと踊るラウルの剣舞は一閃一閃が苛烈なものに代わっていく。

最優の騎士の守りを崩そうと、柔軟な身体を撓らせ剣を振るう。

しかし、その一撃が通ることはない。

最優の騎士は涼しい顔で防ぎ、逆刃を以って逆襲する。

麗人は剣を引き受け流すと、流れる動きで次なる一撃を放つ。

交わる剣の幻想は、火花を散らして現世に剣戟を響かせる。

すでに挙動を魅せる剣舞は、剣技を魅せる剣舞へと移ろっていた。

「そこで、ストップ！ 体勢辛そうだけど我慢できるかい？」

「問題あるまい。これでも、鍛えているからな」

描くは優雅な曲線美。

身体が伸びあがる瞬間を捉えた森沢は、忙しく駆け回りシャッターを切っていた。

「それにしても過激な服装だね。清楚な感じだった先程とは大違いだよ」

「魔法少女だからな、少しはファンサービスも必要なのだよ」

「なるほどね……」

ラウルは表情を動かすことなく語る。

魅せるのも魔法少女の仕事だと。

その為なら肌を晒すことも止む無いしだと。

納得できる言い分に森沢は露出する肩甲骨をしげしげと見詰める。

「それにしても、魔法少女ラウるんねえ、どこかで聞いたような無いような」

「企業秘密だ。名前は変わっているが、似た服装で私が出演しているかもしれないぞ」

「ハハハ！ 時間があつたら調べてみようかな？」

「……見つかるといいがな」

ふと重要ことを思い出したラウルは目を逸らした。

あれは、人界では放送していなかったと。

煽ったが故に言告げることができそうになかった。

「あれ……メモリーが切れちゃったみたいだ。落としてくるから待つてね」
カメラが音を上げ容量の空きがないことを知らせる。

画像を移して容量を空にしようとする森沢を見て、ラウルは首を振った。

「いや、ここまでにしよう。丁度、切がよきそうだからな」

「……うん、そうだね。名残惜しいけど、もう、こんな時間だしね」

手元の時計が示す時刻。

元の空間に戻れば朝日が出始めている頃だ。

「えくと、今回の支払いになるんっすけど——」

「イツセー、初回契約だ。もう少し負けれないのか？」

「そうっすね、これぐらいで如何でしょうか？」

「ハハハ！ お手頃価格だね！ これなら、またすぐに呼んでしまいそうだよ」

上機嫌で森沢は提示された対価を払う。

負けたこともあり子猫との契約の対価よりも断然に少なくあった。

「今日の契約はなかなか楽しかった。男の身である私で良ければ、いつでも呼んでくれ」

「……男？」

森沢の表情が固まる。

その様子を見ていたラウルは、舌を出し悪戯な表情を作る。
「俗に言う、男の娘つて奴っス」

一誠が機械を操作しながら、ぽつりと真実を漏らす。
「ええええええええええええ!!?!」

真実を知った森沢が心の底から絶叫を上げる。

それは魂の叫び声だったかもしれない。

「嘘だ!　嘘!　こんな綺麗な娘が男であるはずない!!」

「ほんとうス!　これで女の子であったならどれだけよかったことか……」

「……本当なのか、悪魔くん」

「はい、残念ながら……」

一誠は大変遺憾そうに俯く。

ラウルが女なればどれだけ良かったかと悔いた思いは数知れず。

この世において彼以上の被害者はいなかった。

「まあ、私が男であろうとも女であろうとも関係あるまい」

「あるよ!　無茶苦茶あるよ!」

ラウルは無い胸を張って堂々と宣言する。

しかし、半場騙された形の森沢は食い掛かった。

「ならば、今宵の契約は味気なかっただろうか？」

「そ、そんなことはなかったけど……」

「私が男であるのが気に入らないのなら、女と思うがいい。見て呉れだけなら問題あるまい。これでも、少しは自信があるのだぞ」

食い掛る森沢に動じることのないラウルは、澄んだ瞳を向け問う。

純粹無垢な瞳を向けられた森沢は面を食らい狼狽える。

反応に手ごたえを感じたラウルは流れる銀髪を掻き上げ常套句を述べる。

「今宵は貴方だけの役者……貴方の色に私を染め上げたではないか？」

「染め上げたって……それは、キミのことを男だと知らなかったから……」

「違うとは言わせぬぞ」

女装の麗人は艶やかな笑みを浮かべて迫る。

言い逃れしようとする彼の腕を捕らえて、逃げることを許さない。

最早、百戦錬磨のラウルを前にして森沢は赤子同然であった。

「それに——」

薄い花唇が形を作り、言葉を紡ぎ出した。

「貴方の為なら女にもなれるさ」

ラウルは止めに殺し文句を言い放ったのだった。

「……役者だね、キミは」

「だろ」

銀髪の麗人は軽やかに笑う。

その笑顔には隠しきれない喜びが詰まっていた。

「またの契約お待ちしている。貴方と過ごした夢の一時、再び訪れる事を願おう」

光に包まれ姿を消す、悪魔たち。

こうして、一誠の初契約は成功を収めたのだった。

八話 はぐれ悪魔祓い

一誠の初契約を終えて数日、ラウルはのんびりと学園生活を過ごしていた。

朝、普通に登校し、放課後になると部活。

少し遅めのティータイムを楽しんでリアスとチェスを打ち、夜の帳が下りた頃に下校する。

週一程度は腰を掛けている剣道部にて佑斗と一緒に打ち合うが、リアスたちと出会う前の生活と変わりなかった。

変わったことがあったと言えば、二点。

一つ目は同居人が賞金を見せびらかしてきたことだ。

帰宅した際に理由を尋ねると、賞金稼ぎ紛いのことをしてきたと告げた。

買い物途中に襲われて返り討ちにしたそうだ。

使い魔が付いていたからと言っても、ラウルの心情としては大人しくしてもらいたいところであった。

二つ目は再び契約に行った一誠が、ミルたんなる漢女に出会い救援を求めてきたこと。

しかしながら、ラウルは手を貸すことを禁じられていたため、止む追えず手を払うことになった。

前回の契約でやり過ぎたのだ。

最高評価を付けられたものの、もはやラウルの契約と言つてもおかしくはなかった内容に、リアスが頭を捻つたのだ。

リアスに部長権限で命令されたこともあり、ラウルは一誠に手を貸すこともできないでいたのだ。

そして、今日――。

「二度と教会に近づいちゃダメよ」

いつもの定例会議にて、一誠が不用意に教会へ近づいたとして叱られていた。

異郷に赴任してきた為に、言葉の通じないシスターを教会まで送り届けたのが原因だ。

リアスが下僕を心配して叱るが、危機感の薄い一誠では、何故怒られているのか理解できていない。

その様子を小猫を膝に乗せたラウルが、ティーカップを傾けながら優雅に眺めていた。

「こちらに来てみる、イツセー」

リアスとの会話では本質的に理解できない、と感じたラウルは、一誠を手招きする。小猫を膝から降ろし、虚空で手を搔いて一振りの得物を取り出す。

それはいつぞやの聖剣擬きの魔剣。

ラウルが魔力を込めると、刀身から光を放ち呼応する。

「ちよつと何をしてっ!？」

「……眩しいです。さっさと収めてください」

魔剣より発せられる光を目の当たりにして、皆が顔を顰める。

最も被害を受ける小猫は、白い目をして拳を振るつた。

「少し我慢してくれ小猫」

横腹を抑えることになったラウルは涙目で訴える。

一誠に光の恐ろしさを理解させるために、少々我慢してもらいたいと。

しばらく光の魔剣を見せつけていたラウルは、魔力の供給を止め魔剣を虚空にしまった。

「今の光を見てどう感じた？」

「……全身に鳥肌が立つような感じ……かな?」

一誠の反応は当然のこと。

悪魔にとって、仇敵の振るう光は猛毒でもある。

ラウルはその危険性を語る。

「光と言うのは悪魔にとつて毒と同義だ。一太刀浴びれば、無に還ると思つておけ」
「無？」

聞き慣れないであろう現象に一誠が小首を傾げる。

「何もなく、何も感じず、何もできない。イツセーに例えると、乳房を見ても何も感じなくなる状態だ」

「マジか……」

「……変態」

幼馴染のラウルは一言で理解させる。

用いた言葉が、卑猥だったために小猫に白い目を向けられたが。

「先程の感覚を忘れるなよ。近くに仇敵がいることを本能が感じ取っているのだから」

この言葉が、近いうちに役立つことになるとは、露程にも思つていないラウルであつた。

* * *

「ん?」

紅茶に口を付けていたラウルは、カップを傾ける手を止めた。

近辺で結界が張られたことにいち早く気づき、状況を整理する。

張られた結界は墮天使式の術式。

なれば、下手人は最近動きを活発化させているグレゴリの可能性が高い。

そして、結界が張られている場所には――。

導き出された結果に、ラウルは眉を顰めた。

「部長……イツセーがはぐれ悪魔祓いに襲われているぞ」

ティーカップを静かに受け皿へと置くと、ゆっくりと口を開いたのだった。

「つ!? なに、悠長にしているのよ!!」

ラウルが告げると、リアスは愕然とした表情を見せた。

彼女にとっては下僕と言えども家族同然。

家族とも言える存在が危機にあると知れば混乱しても仕方ないだろう。

現に瞳を揺らして動揺を顕わにしていた。

一方、世間話をするかの如く悠然と語ったラウルは、ゆったりと寛いだままだった。

そんな落ち着き払ったラウルに、リアスの動揺が形を変え矛先を向ける。

「焦って、私一人勇み足になっても仕方あるまい」

「だからと言って、悠長にしている訳じゃないでしょうが!!」

急かされたラウルは立ち上がって身嗜みを整える。

スカートの皺を直して、手櫛で銀髪を梳き、胸元のリボンを固く結ぶ。

そして、虚空より取り出すのは片割れの仮面。

中世の時代に流行した白面のそれを左半面に身に付ける。

身嗜みが整うと、息巻くりアスに視線を向けた。

「私が先に転移して場の安全を確保する。座標を送るから、後続は任せただぞ」

「待ちなさいー!」

魔法陣を描き、先行することを告げる。

呼び止めるリアスを置き去りにして、ラウルは光の残滓へと姿を消したのだった。

* * *

「キャッ!?!」

逆十字に打ち付けられた男性。

灯火によって、照らされる遺体からは鮮血が滴る。

壁を彩る血流は、床を濡らし紅に染め上げていた。

血に染まった凄惨な一室で宙に浮いた少女の悲鳴が響き渡る。

「婦女子に手を上げるとは、見下げた神父だな」

「ら、ラウル……」

修道服の少女を後ろから抱える麗人。

魔方阵より出でた彼は、か弱き少女に手を上げる神父を目の当たりにして、目にも止

まらぬ速さで場を乱した。

少女の脇に片腕を差し込み抱え上げると、半身を捻り拳を振り上げた神父に撃蹴を見舞う。

壁を突き破る神父から距離を取り、一誠の下に舞い降りた。

「イツセー、彼女のことを頼むぞ」

「お、おう！ あの神父、音の出ない銃を持つてるから気を付けろよな！」

片手で抱えていた少女を一誠に渡す。

アーシアを受け取った一誠が、神父と対峙するラウルに注意を促した。

「こおんのっ!! クソアマ!! いきなり出てきたと思つたら、俺様を蹴飛ばしやがつて

!! ふざけんな!! 糞!!」

突き破った内壁から出でるは、白髪少年神父。

右手で構えるのは光の刀身を持つ祓の剣。

聖なる力を以つて、魔なる者を焼き尽くす。

左手に握るのは白銀の短銃。

無音で放たれる特性の祓魔弾は、血肉を裂き内から仇敵を蝕む。

祓魔礼装を纏つた姿は、悪魔祓いそのままであつた。

悪魔祓いの少年神父は、ラウルに蹴り飛ばされたことで、怒りを顕わにして捲くし立てる。

しかし、その憤怒に染まつた形相が、ラウルの風貌を目にした途端、崩れ去つた。

「へえ、なかなかいい面してんじやんかよ!! いいぜ、今ならその悪魔の首をちよんばした後、ベットの所でアンアン喘ぐだけで許してやんよ!」

「なに言つてんだ、このクソ神父! ラウルをそんな目で見てんじやねえよ!!」

「うっせえ!! 悪魔くんはその汚らわしい口を閉じてろよ!! 俺はこのカツコイイ姉ちゃんと交渉中なの。成功したらアーシアちゃんも一緒にベツドイン! 悪魔くんには鉛玉をヘッドイン!」

聞き捨てならない神父の言い草に、一誠は喰つて掛かる。

喰つて掛かる一誠だったが、神父の勢いはとどまることを知らない。

それどころか、神父の魔の手はアーシアへ伸びる。

怒りを注がれた一誠は、更に顔を赤くし拳を握つた。

その不毛な二人の会話を無視して、ラウルは踏み込んだ。

「生憎、私にはそちらの気はないのでな。折角のお誘いだが、断らしてもらおう」
「ガッ!？」

麗人は暗闇に姿を消し、生れた間隙にて掌底を打ち込む。

打撃は劍構える右手に響き、持ち手を鈍らせる。

緩んだ神父の手に手指を絡ませ、握られていた柄を抜き取る。

抜き取ったまま、逆手にて光劍を奔らせる。

劍先奔らせるは心の臓。

本能で危地を悟った神父は後方に身体を逃がすが、血肉を求める刃はそれを許さない。
い。

閃く刃は腹部から肩口まで易々と切り裂いた。

激痛に声を滲ませる神父に、ラウルは容赦ない追撃を加える。

無駄を感じさせない華美な動きで身を翻す。

衣服の裾が花弁の如く花開き、初雪の大腿が姿を見せる。

されど、そこに宿るは必殺の一撃。

身体全体の撓りを以って放たれた白き凄槍は、神父の傷口を穿つ。

穿つ靴裏に魔法陣が浮かぶと神父の身体が弾かれ、激しい崩落音とともに再び壁へ姿

を消した。

「達者なのは口だけであつたか……これだから最近の悪魔祓いは」

瓦礫に埋まつた神父が起き上がらないことを確認すると、踵を返し一誠たちの下へ向かう。

神父の使用していた光剣を懐にしまい、連絡を待ち侘びているであろう彼女達に信号を送った。

数秒後、床に魔法陣が輝くと複数の人影が転移してきた。

「兵藤くん、助けにきたよ」

いち早く姿を現すのは、騎士である佑斗。

辺りを見渡し魔剣を油断なく構える。

「あらあら、すでに終わってしまったみたいですね」

「……事後」

後から現れた彼女たちは、ラウルが構えを解いていることから、安全と判断する。

最後に出てきた主のリアスは一誠がシスターを庇っている様子を見て顔を曇らせた。

「重役出勤ご苦労様。神父が、一人いたが片づけておいたぞ」

魔法陣から出てきた中でただ一人、顔を曇らせていたリアスに報を入れる。

「……ラウル。あなたには部屋に戻り次第、お仕置きを受けてもらうわよ」

リアスは独断専行の過ぎるラウルにも、腹を立てている様子であった。

「謹んでお断りしよう。虐げられて喜ぶような趣味は持ち合わせていないのでな」
「勝手な行動をした罰よ、甘んじて受けなさい」

断固として譲らないリアスに肩を竦める。

彼女の碧玉は紅く染まり、不変の意志を貫いていたのだった。

「イツセー、ごめんなさいね。まさか、この依頼主の下にはぐれ悪魔祓いが訪れていたなんて計算外だったの」

ラウルと話し終えたリアスは一誠の下へ向かう。

一誠の前に立った彼女は愛しむようにやんわりと抱きしめる。

その声音はラウルと話していた時から一転、眷愛溢れるものであった。

「……イツセー、ケガをしたの？」

「すいません……そ、その、撃たれちゃいまして……」

リアスは一誠の右脚にできた怪我を指でなぞらえる。

慈愛の満ちた表情で、痛ましい傷跡を撫ぜるのだった。

「あ、あのー！」

「何の用かしら、シスターさん？ 妙な真似をするようなら消し飛ばすわよ」

「ひっ!？」

リアスの胸刺す怒気に当てられアーシアは悲鳴を漏らす。

一誠を傷つけた神父が始末された以上、リアスのやり場のない怒りがアーシアに向くのは必然だった。

「そのシスターは訳ありのようだ。少なくとも、敵ではあるまい」

ラウルは彼女の肩に手を置き、いきり立つリアスの宥める。

「そうツスよ！ アーシアはそんな子じゃないですよ」

「イツセーさん……」

胸の谷間に挟まれながらも、アーシアの無実を訴える一誠。

その姿にアーシアは涙を浮かべた。

「……そういうことね。アーシアさんと言ったかしら？ あなたがイツセーが教会まで送ってあげたシスターさんね」

「は、はい」

リアスは一度強く抱きしめると一誠を開放した。

そして、向き合うは敵であるはずのシスター。

改めて確認を取るように彼女へ話しかけたのだった。

「先程はごめんなさいね。消し飛ばさない怖がらなくて大丈夫よ」

「……分かりました」

柔和な笑みを浮かべるリアスに、アーシアは安堵の息を漏らした。

「私にイツセーさんを治療させて頂けませんか？」

「治療？」

「はい。回復系の神器を授かっているのですが、ダメでしょうか？」

またとないシスターの申し出にリアスは逡巡する。

苦痛を取り除く際の生じるリスク。

下手な判断を下せば、彼女にとつて愛おしい下僕が不義の行為にあつてしまふかもしれない。

判断を下し切れずに悩む彼女の背中をラウルは軽く押した。

「やらしてみればどうだ？ 責任は私が取ろう」

「……いいわ。やってみなさい」

「ありがとうございます！」

「シスターの持つ回復系の神器。これにて悪魔を治癒させるとは、また一興だな」

これから起こるであろう、珍事を思い浮かべてラウルは不敵に笑った。

現状を楽しむラウルを背後から白い目で見つめる者がいたことにも気付かずに

「ズボンも上げてもらつていいですか？」

「ああ」

一誠がズボンを捲し上げると、神父の祓魔弾に穿たれた傷痕が顕わになる。

その傷跡を真剣な表情で診察するアーシアは、おもむろに手を翳した。

翳した手指に現れたのは、一対の指輪。

翠色の宝石より発せられる光は向けられる者に癒しの力を与える。

光が一誠の右脚を包むと、彼の顔は目に見えてよくなっていた。

「うそっ！ 悪魔であるイツセーの傷が治っている」

「あのシスターが墮天使と居る時点で、ある程度予想はできていたはずだ」

分け隔てなく他者を癒す力。

彼女の力に貴賤はなく、敵対してなくてはいけない悪魔をも易々と直してみせた。

これは本来、教会に属していないとならない彼女が、このようなどころにいることか

らも予想できた、ラウルは言う。

「これでいかがでしょうか？」

「おっ。おっ。すげえ！ すげえよ、アーシア。違和感も痛みもなくなったよ」

「よかったです」

元気になった一誠を見て、心優しきシスターは涙を浮かべていた。

『トワイライト・ヒリシグ聖女の微笑』……遂にシステムの枠組みから外れたか」

「システム？ なんのことかしら？」

「こちらの専門用語だ。気にするようなものではないぞ」

「……そう」

ぼつりとラウルの口から独り言が漏れる。

漏れた独り言をリアスは追及するも、ラウルは詮無きことと切り捨てる。納得がいかなかったリアスは、胡散臭いものを見るような目をしていた。

「なあ、アーシア。アーシアはなんであいつらのところにいるんだ？」

「……それは」

——それは聖女と祭られた少女の末路。

——少女は生まれてすぐに両親に捨てられた。

——拾われたのは教会の孤児院

——そして、信仰深く育った少女に一度目の転機が訪れる。

——負傷した子犬を不思議な力で治療したのがきっかけであった。

——少女は治癒の力を宿した聖女として担ぎ出される。

——訪れる信者を次々と治癒を施す少女。

——噂は噂を呼び少女は聖女として祭り上げられることに。

― 言われるがままに、神から授かった力を振るう日々。

― 少女は自らの力が役立つことを嬉しく思った。

― しかし、人は欲を欠かない生き物。

― 聖女としてそれは例外ではなかった。

― 故に寂しさを感じて欲すことになる。

― 心を許せる友人が一人でもほしいと。

― 聖女に祭り上げられた彼女は小さな願いを抱いた。

― 願いを抱いた矢先、少女に二度目の転機が訪れることになる。

― 心優しき少女は悪魔を治療してしまったのだ。

― その光景を目の当たりにした教会関係者が内通する。

― 神の加護を持たない悪魔を、墮天使を治療できるのだと。

― 波紋は波紋を呼び、教会内部は荒れた。

― 荒れた教会内部で司教たちは処遇を決めた。

― 教会は少女を異端者とする。

― 聖女ではなく、魔女の烙印を押して。

——追放された少女は墮天使へと身を寄せることになったのだった。

「これも主の試練なのです。私が全然ダメなシスターなので、こーやって修行を与えて下さっているんです。いまは我慢の時なんです」

涙ながらに語ったアーシアは現状は試練によるものだと思ひこくった。

「そんなことねえよ。アーシアはいまでも立派なシスターだと思うぜ」

「でも、わたし……」

一誠はアーシアの頭に手を乗せ優しく撫でる。

「それに我慢しているってことは、墮天使のところにいるのが嫌なんだろう？」

「……嫌です。私、あの教会には戻りたくありません。人を殺すところへ戻りたくありません……」

彼らの会話を聞いていたラウルは頬を掻いた。

ここ最近、彼が手に掛けたのは墮天使側の二人。

一人は目の前で潰したのだが、どう思っているのだろうか、居た堪れない気持ちになつてた。

「アーシアさえよければ、俺達のところに——」

一誠が手を差し伸べた時、辺りを新たなる結界が覆った。

結界の術式は墮天使式。

強度からこれは墮天使手ずから張った結界だと推測した。

「!? 部長、この家に墮天使らしき者たちが複数近づいていますわ。このままでは、こちらが不利になります」

裏付けるように朱乃が墮天使の気配を察知する。

「……朱乃、墮天使が姿を現す前に、本拠地に帰還するわ。ジャンプの用意を」
「はい」

リアスたちは墮天使と接触する前の離脱を図る。

「部長！ あの子も一緒に」

「無理よ。彼女は墮天使の下僕。それに魔方陣では悪魔しか移動できないわ。しかも、この魔方陣では私の眷属しかジャンプできないの」

「でも、あの子が……」

転移による脱出がアーシアでは不可能であることをリアスが告げる。

告げられてなお、一誠は食い下がろうとしていた。

彼女たちの会話を聞いて、ラウルは苦笑いを浮かべた。

「仕方がない、私が預かるわ。アーシアと言ったか？ 貴方もいいな？」

「……はい」

ラウルが肩に手を置くと、アーシアの身体が強張る。

目の前で彼女が嫌がることをしたのだ、好かれるはずもない。

彼女の反応を寂しく思ったラウルだったが、目を細めるに留めた。

「待ちなさい！ なに勝手なことを——」

「問題ない。墮天使とトラブルが起これば、こちらで処理しよう」

胸を張ってラウルは言い切る。

一介の魔術師であつても、この程度の問題なら後腐れなく処理できると。

「……分かったわ。好きになさい」

「恩に着る」

ただし無茶をするなど視線で釘を差されたが。

案ずるなどラウルは片眼を閉じて返した。

「ラウル、信じてるからな！ アーシアのこと、頼んだぞ！」

「任された。小一時間で戻るから大人しくしているよ」

転送用の魔方陣に消えゆく中、一誠は声を上げる。

アーシアを悪いようにするなど。

ラウルも無事に戻って来いと。

心配性な幼馴染をラウルは笑顔で送った。

「さて、アーシア。暫くは私のところで預かることになるがいいな？」
「はい。お世話になります」

花開く可憐な笑顔を浮かべるアーシア。

無性を守りたくなる彼女にラウルは知らず知らずの内の手を伸ばす。

しかし、その手が届くことがなかった。

「それは叶わない願ひよ」

舞い落ちる黒き矢羽根。

無慈悲な声が天より二人を切り裂く。

「勝手なことをされては困るわね、アーシア」

「——っ!? レイナーレさま……」

結界を抜けて現れる墮天使。

それは一誠を殺した少女——天野夕麻であった。

九話 墮天使

「始めましてだな、墮天使のお嬢さんたち」

優雅に一礼をするラウル。

彼は逃げることなく、対峙することを選んだのだった。

「クソ悪魔といた割には、案外まともじゃん」

「お嬢さんか……悪くないな」

レイナーレに続いて結界を抜ける二人の墮天使。

フリルをあしらったゴスロリ服を着飾る少女。

胸前を開いたスーツを纏う女性。

彼女たちはラウルの口上に気をよくしていた。

「おべっかはいいいから、さっさとアーシアを渡しなさい、薄汚い人間」

出端を挫かれた形になったレイナーレは、原因となったラウルに蔑みの視線を送った。

「酷い言われようだ。墮ちた天使は醜さだけが残ったわけか」

ラウルは左反面の仮面に手を当て顔を振る。

最近の墮天使は世辞の一句も言えないのかと。

欲に溺れて墮ちた割には、美徳感性もなくなってしまったのかと。

衰退した墮天使の実態を嘆いたのだった。

「あははは！ チョーウケるんですけどー。チョット褒めただけで、人間風情が粹がっちやって！」

「言つてやるな。高々、人間ごときに私たちの価値が分かるわけないだろ」

ラウルの嘆きを知らない、墮天使たちは声高に笑い声を上げた。

「さあ、アーシア。私の下に帰つてきなさい。あなたの神器は私たちの計画に必要なのよ」

目の前の存在を取るに足らないと判断したレイナーレは、ラウルを無視してアーシアに帰還を促す。

帰還を促されたアーシアは困惑の表情を浮かべた。

天平に乗るのは、勝ち取れるかもしれない輝かしい未来と、嫌悪する暗い過去。

根が優しいだけに我が儘を言えない少女は、ラウルとレイナーレの狭間に視線を彷徨させた。

「好きな方を選ぶといい。決めるのは貴方だ」

ラウルは思い煩う少女の背を押した。

これはアーシアの人生。

決めるのは貴方であり、その決定を何人たりとも犯させないと。

微笑みを讃えるラウルは悠然と物語っていた。

背に風を受けたアーシアは意を決したようにして、レイナーレの前に立った。

「ごめんなさい、レイナーレ様。もう、私はあの教会には戻りません」

「何を言っているの、アーシア!？」

アーシアの決断にレイナーレは悲鳴を上げる。

まさか、拾ってやったのに捨てられるとは思うまい。

固まったままのレイナーレにアーシアは別れを告げる。

「私を拾ってくださって、ありがとうございます。ごさいました」

最後に頭を下げた少女。

涙を浮かべるその姿は、実に健気であった。

「だ、そうだ。アーシア・アルジェントの身柄はこちらで保護することが決まったわけ

だ。敵地まで無駄足ご苦労様、墮天使諸君」

アーシアの前に立ち、ラウルは不敵な笑みを浮かべる。

墮天使に暗に尻尾を振り逃げると、よく回る舌は毒を吐き出す。

それは挑発であり、同時に警告でもあった。

「……へえ、言うじやない。なら、あなたを殺してアーシアを連れ戻すだけだわ」
略奪を宣言するレイナーレ。

挑発に乗った彼女は目を細めて剣呑な雰囲気を纏った。

「できるかな？ 下級墮天使ごときが、幾ら群がろうとも結果は変わりはない」
レイナーレの答えを聞いたラウルはニヒルに笑う。

悪寒を感じるほど冷たく深淵よりもなおも昏い。

生存本能に語りかける、切れるような笑みであった。

「ほざいたわね、人間!!」

「ナマいつちやって、身にほどを思い知らせて、ア・ゲ・ル」

「精々、酒の肴程度にはなれよ」

挑発に挑発を重ねられた墮天使たちは、戦いの口火を切る。

彼女たちが携えるのは、墮天してなお輝き続ける神の威光。

光は形を為し、携える彼女たちはラウル目掛けて投擲する。

仄暗い部屋を眩い閃光が満たし、蠟の灯火を吹き飛ばした。

「キャッ!?!」

狙われるラウルは墮天使が攻撃の動作を取ったと同時に、行動を開始していた。

虚空より抜いた銀の短剣をスカートの中に差し、軽く一叩き。

後ろ手でアーシアを押し倒すと、もう一方の手でケープの内より神父から奪った光の剣を抜剣。

迫る三条の光を迎え撃つ。

右正面より急所を狙う光刀を斬り落とす。

研ぎ澄まされた一閃は墮天使の放った光を霧散させた。

低空に這い脚を貫かんとする光槍を薙ぐ。

横薙ぎされた光槍は目標を失い、内壁を貫いた。

光剣を手の内で回転させ、正面より穿たんと迫る光槍を逆手にて斬り上げた。

より力を込められていたそれは、軌道を変えられ天井を貫き、天へと疾駆した。

僅か三閃にて斬り払う妙技。

強度や出力で劣る光剣で行った偉業は、彼の技量の高さが垣間見える。

墮天使の攻撃を易々と防いだラウルは攻勢に転じる。

間髪入れずに墮天使たちの下へ飛び込んだのだ。

「まずは一羽」

「——あ」

「ミツテルト!?!」

手始めにゴスロリ服の少女の腹部目掛け掌底を打ち込む。

打撃の瞬間に腕から魔光が発せられる。

練られた魔力が氣と交わり、音速の一撃に乗せ腹部へと放たれた。

防ぐことも敵わなかったミッテルトは、芯まで伝わる衝撃に身体を折ることになる。

打ち込まれた魔力と氣、過剰なほどの衝撃によって、息をすることも許されない。

残されたのは、意識を手放し力の入らぬ身体を投げ出すことだけだった。

「余所見をする暇などないぞ」

「がっ!?!」

全身の力を失った少女を投げ捨てたラウルは、次なる獲物へ疾駆する。

狭い部屋を駆ける常闇の狩人は、スーツ姿の女性に襲いかかる。

強靱な脚によって支えられた身体は、鋭い踏み込みを以って跳躍する。

暗闇に奔るは一条の白光。

撓りあげる健脚は腰の捻りを以って、首筋を捉える強烈な撃蹴となる。

影でさえ見失っていた女性は、為す術なく内壁を突き破ることになった。

「これで二羽」

手を軽く叩いて衣服の裾を整える麗人。

視線が向かうは、最後の墮天使であった。

「さて、これで残るのは貴方だけだ」

「……ありえない。たかが人間にこんなこと……」

一瞬にして部下二人をやられたレイナーレは放心状態に陥る。

ラウルの姿を認めると、覚束ない足で距離を取ろうとする。

「悪い夢なら覚めるといいな」

「」

茫然とするレイナーレの背後へと回ったラウルは首元へ手刀を打ち込む。

力無く崩れる墮天使の身体を受け止めると、ゆっくりと床に横たえた。

「押し倒してすまなかったな」

「いえ……あの、レイナーレさまたちは」

墮天使たちを倒したラウルは、自身が押し倒したアーシアに手を貸す。

迎る迎るラウルの手を掴み取ったアーシアは状況を尋ねた。

一瞬の交錯であった以上に、灯りの消えた一室では、彼女が状況を把握することは叶わなかったのだ。

「大丈夫、気絶させただけだから」

「……よかったです」

「優しいなアーシアは」

敵の心配までするアーシアを見て小さな笑みを漏らす。

同時に墮天使たちに視線を向けて目を細めた。

ラウル自身、敵と分かりきっている者に手心を加えることは稀である。

きつと心優しき元聖女に感化されたのだろうと、おかしなことを考えながら優しく撫でた。

「さて、帰ろうか」

「はい！」

彼らは墮天使を置き去りにして、凄惨な現場を後にする。

後悔するときに訪れるとも知らずに――。

* * *

魔方陣で自宅に転移したラウルたち。

彼らの帰宅をエプロン姿の少女が蒼銀の尾を活気よく揺らして出迎える。

「おかえりラウ、またな……にか……」

出迎えた少女はラウルの傍らにいるシスターを見て、驚愕の色を顕わにした。

目口は開かれ、活気よく動いていた尾髪も動きを止める。

忙しなく瞬きを繰り返し、現実を直視しようとしなない。

ラウルは停止した同居人に連れて帰ったアーシアを紹介する。

「ただいま。こちらアーシアさん、これから数日ここで生活することになるのでよろしく頼む」

「アーシア・アルジェントです。不束者ですが、どうかよろしくお願いします」

「……うん、こちらこそよろしくね」

紹介されたアーシアは丁寧な頭を下げた。

固まっていた少女も、笑顔を浮かべて出迎えた。

その光景を見てラウルは、よく反射で対応できるものだと感じる。

これも彼女の教育の賜物かな、と皮肉な笑みを浮かべながら。

「じゃなくてー」

何事もなく彼女を招き入れられると思われたその時、少女の思考が回り始めた。

「犯罪はダメだよ、ラウ！ こんな純粹無垢そうな娘を攫ってきちやって!! しかも、シスターじゃん!! 天使さまに怒られちゃうよ!!」

少女は声高にラウルの所業を糾弾する。

誘拐はこの国において犯罪ですと。

純粹そうな娘を騙くらかしたのねと。

教会関係者なんてものを攫って、後で天使に怒られても知りませんと。

聞くに堪えない言い分にラウルは眉をひそめた。

「人の話を聞いていたか？」

「聞いてたよ！ あれでしょ、自身の性的欲求を満たすために、連れてきたんでしょ！

今回は、『天使を墮落させてやるぜえ、ぐへへ』とか思つて連れてきたんでしょ！」

「……私はどこの赤龍帝だ」

遺憾ながらその役目は、赤き龍帝を宿した幼馴染の役目だと言い直す。

もつとも、大事な局面で臆しうるので、大胆なことはしないだろうが。

「それともなに！ 新薬の人体実験をするために、被検体として攫つてきたというの！」

「薬の開発は専門外だ」

非道德的な研究が嫌いな彼は、厳しい目で少女を咎める。

それに、ラウルの専門は武器や神秘の研究。

万民受けする分野の研究は専門外であった。

「させないからね！ こんな無垢な娘、ラウに指一本触れさせないんだから!! この娘

はわたしが——」

「いい加減落ち着け。また、体調を崩すぞ」

気持ちは高まっていく少女に、ラウルは手刀を入れた。

ラウルとしては、少女に落ち着きを持ってほしいところであった。

毎度の如く少女には手を焼いているのだ。

静かにして居るとは言わないが、自重を覚えてもらいたいのが本音であった。

頭を押さえて蹲る少女を確認すると、顔を振って気分を入れア－シアに向き直る。

「愚妹が騒がしくてすまない」

「い、妹になったつもりなんてないんだから！」

ア－シアが口を開く前に、少女が起き上がって抗議を始めた。

「書類上は義兄妹だろ」

「まずそこがおかしいんじゃない！ わたしの方が生まれが早いんだよ！ なのに、義妹ってありえない！」

「保護者が私になっていいるからだろ、仕方ないじゃないか。それに、義弟が身元引受人では格好がつくまい」

元々、少女の出生は不明であった。

一度は教会にて作られたが、諸事情があり破棄される。

彼女を引き取り、もう一度作り直す際に自身の兄妹として登録し直した過去があった。

ラウルは半場騙す形で、少女の同意を勝ち得たことが、今も遺恨として残ってはいるのだが。

「うううう……。ラウの意地悪！ けちんぼ！ 甲斐性なし！」

「……少なくとも甲斐性はあるのではないか？ 私が養っているだろ」
喚き声を上げる少女に、ラウルは不敵な笑みを浮かべて返した。

得意顔を浮かべるその姿は、少女の琴線に触れたのだった。

「うわああああん!! 絶対、分かってて言ってるんだあああああ!!!」

少女は泣き声を残して、家の奥に消えていく。

その身の翻し脱兎の如く。

流石のラウルでも止めることも敵わず、見送るしかなかった。

少女を見送るとやれやれと肩を竦めた。

「色々騒がしい家だが、よければ寛いでくれ」

困り顔のアーシアにラウルは優しく微笑むのだった。

* * *

「さて、落ち着いたところで、自己紹介といこうじゃないか」

少女を宥め、仮面を外したラウルは席に着く。

円形の四人掛けテーブルで向き合い顔合わせをすることに。

テーブルの上に陶磁器のカップやポットなど、紅茶が準備されているのはご愛嬌だろ
う。

「私の名前は八幡ラウル。ラウでも、ラフィーでも、ラウルでも、好きなように呼んでく
れ」

「よろしくお願いします、ラウルさん」

手始めに家主であるラウルが名乗りを上げた。

対面に座るアーシアはこれから数日、世話を掛けるラウルに深々と頭を下げた。

「次はわたしね！ 八幡・F・ルチア、欧米風に言うるとルチア・F・ヤハタになるかな？

気軽にルチアって呼んでね」

蒼銀の少女は元氣よく後に続く。

活気溢れる姿で、ルチアと名乗った少女。

右手を差し出し握手を求めた。

「お世話になります、ルチアさん」

アーシアは笑顔で応じる。

しかし、握手を返されたルチアは、不満があつたのか唇を尖らせる。

立てた左手の人差し指を横に振り不服を顕わにした。

「ノン、ノー！ わたしのはルチアでいいからね」

「えくと、ルチアさん？」

「そうじゃないの！ わたしのことは呼び捨てでいいから」

「る……ルチア……さん」

「もう一回」

「……ルチア」

ルチアは自身を呼び捨てにするまで何度も迫る。

根負けしたアーシアは、声を振り絞って彼女の名前を呼んだ。

顔を赤らめ、上目遣いで相手の顔色を何度も確認する姿は、小動物の様であった。

その健気な姿に感化されたルチアは、勢いよく抱き着き、頬擦りを始める。

「はう!？」

「うく、可愛いわアーシア！ お姉さんは最近こんな妹が欲しかったのです！」

「や、止めてください、ルチアさん！」

「もう、また戻ってるよ！ 悪い娘にはおしおきだ〜」

「ひゃん!!? ダメですよ！ そこはダメですよ、ルチアさ、ひゃう!!?」

「ル・チ・ア。そう呼ばないと止めてあげないから」

部屋に響き渡る艶めかしい声。

ルチアは過剰なスキンシップで刷り込みを始めたのだった。

刷り込まれるアーシアは、鍛えられた四肢に捕まり最早為されるがままであった。その様子を外野であるラウルは目を細め、優雅に紅茶を啜っていた。

「これで仕込みは完璧ね！」

「仕込みとか言うな。たかが、名前を呼び捨てにさせただけだろ」

「分かってないな、ラウは」

名前を覚え込ませたルチアは、ぐったりと四肢を投げ出したアーシアを解放する。解放された少女は上気した惚けた顔で、色に濁った碧玉の瞳を彷徨わせていた。

「うゝ、汚されちゃいました。主よ、こんな私をお許してください」

椅子にもたれ掛かっていた少女は、暫くしてから正気を取り戻した。

アーシアは身体をまさぐり服装を確認する。

顔を羞恥により真っ赤に染めて、思い出すのは先の醜態。

聖女であつた少女は、不徳を犯したとして、応えない神に許しを乞っていた。

「最後はアーシアの番よ」

「ぐすぐす。ルチアに汚されてしまった、アーシア・アルジエントです」

ルチアに促されたアーシアは、泣き真似をしながら応じた。

元聖女の挙動は庇護欲を刺激する。

これが、天然なのか、ルチアに感化された結果なのか、ラウルには判りかねるところ

だった。

「ふふふ、これでわたしとアーシアは友達ね」

「友達……ですか？」

アーシアは目を見開き瞳を潤ませる。

それは神に願ってまでも欲した存在。

教会を追放されてなお願ひ続けた少女の下へ、遂に現れたのだった。

「そう！ 日本には名前を呼び捨てで呼び合ったら、友達になれる文化があるのよ！」

「そ、そんな文化が……！」

ルチアは素晴らしい文化を教える。

寝耳に水を掛けられたアーシアは、口までもを広げ、驚きを顕わにする。

叫びかねないアーシアたちを見ていたラウルは、白い目をしていた。

少なくとも、日本での生活がルチアよりも長いラウルは、そんな話を聞いたことはない。

小さな子に聞かせる例えなら理解できるが、それを文化と言い張るのは過大ではないか。

無垢な娘を詭弁を使って、丸め込もうとするな、と声には出さないが、目で訴えかける。

「だから友達よ」

「ルチアと私が？」

「そう、わたしとアーシアは友達なの！」

視線を涼しい顔をして受け流したルチアは、熱烈にアーシアに迫る。

無垢なアーシアは、ルチアの態度に心打たれ、口元に手を当て涙を流し始めた。

「私、世間知らずです」

「今から覚えていけば問題ないのよ。ラウも一緒に連れつて行つて色んなことを経験しましよ」

財布兼荷物持ちにされようとしているラウルの白眼は健全だった。

「……日本語もしやべれません。文化も分かりませんよ？」

「当然じゃない。アーシアは日本にきたばかりなんですよ？ それに、そのくらいのことラウとわたしの特別講習を受ければ一発よ」

白眼を維持していたラウルは、眉間に皺を寄せる。

言語を覚えるのは簡単ではなく、準備するのはラウル自身だ。

加えて、結社の技術を用いても、一発で全てを覚えるのは無理であった。

「友達と何をしゃべったらいいかも分かりません」

「特に考える必要はないのよ。しゃべりたいことをしゃべる。友達なんだから、遠慮は

いらぬのよ」

ルチアの無責任な言葉に頬が引き攣る。

親しき仲にも礼儀あり。

日本の文化を語る割には、なぜ知ろうとしないのか、ラウルには不思議でならなかつた。

「……私と友達になってくれるんですか?」

「何を言っているの、わたしたちはもう友達よ。不安なら姉妹の契りでも結びましょうか?」

ルチアは謎の誓いを持ち出す。

何のことだと思う一方、簡単に言わないでもらいたいと、ラウルはげんなりした。

現在、アーシアは墮天使側に身を寄せていることになっている。

身を引き取る為には、グレゴリとの接触は必須である。

異端者扱いされた普通のシスターなら、交渉を行えば幾つか制約が付くことになるが、引き取ることも可能だろう。

しかし、アーシアは貴重な回復系神器所有者なのだ。

身を寄せて日の浅い彼女であっても、交渉は難航するだろう。

加えて、問題はあの墮天使総督。

神器マニアである彼が、貴重な神器持ちを手放す筈がなかった。最悪、ラウル自身がグレゴリ本部へ出向くことになるだろう。

そうなれば、色々と面倒事が起こるのは確実なので、避けて通りたい道ではあつたが、どうなるにしろ、アーシアの身の振り方は考えて、手を打たないとならなかつた。迫りくる困難な未来を思い描いて、ラウルは微笑みを浮かべた。

「アーシアはラウの幼馴染……一誠君と知り合いなのよね？」

「……はい。以前困っていたところを助けて頂きました」

会話に花咲かせる少女達。

彼女たちの為に骨を折るのも悪くはないかと思うのだった。

「——仲直りがてら、逢引に誘ってみてはどうかしら？」

「あいびき？ ……ですか？」

「そう！ またの名を、アート大作戦ともいうのよ！」

「はう！ はうわ！」

微笑ましい光景を尻目に、ラウルは紅茶を啜る。

ふとティーカップに視線を落とした。

紅の水面に映る己の姿。

流れる銀髪を見て、記憶を呼び起こした。

それは初めて友達ができた時の懐かしく忘れることのない記憶。

木陰で一人、雲を見上げる少女に話しかけてきたのは茶髪の少年。

幼稚な少年は辿る辿る言葉を紡ぐ。

気を引こうと健気な姿を見せる少年に少女は問う。

なぜ、わたしにかまうのか、と。

異端であつた少女は鋭い視線を向けた。

淡蒼の瞳は少年の真意を捕らえようと離れることはない。

少女の見幕にたじろいだ少年であつたが、居住まいを直して応えた。

最早その言葉を覚えているのは、少女だったものしか覚えていないだろう。
幼き日の幻影。

埋没した記憶を大切に覚えている方が異常なのだ。

懐かしの記憶を掘り出したラウルは、自嘲の笑みを浮かべた。

「ねえ！ 聞いている!? 今度、一誠君を誘つてダブルデートに行こうよ！」

「……ルチア、貴方はイツセーと知り合ひではないだろ？」

「そこはラウが誘つてよ！ ねえ、アーシア」

「お願いします、ラウルさん。私、イツセーさんともつとお話したいです！」

「……………分かった。貴方の周辺の整理が付いたら考えよう」
不確かな口約束であるにも拘らず、手を合わせて喜び合う少女たち。
ラウルは無邪気な彼女たちに幸があらんことを願った。
たとえ、我が道が深紅に彩られようとも――。

十話 悪魔の駒

「少しは反省したかしら？」

放課後の旧校舎。

部室にて、リアスは片手に深紅の魔力を纏わせ、悪戯娘を見下ろしていた。「酷いではないか。私の美尻が崩れたらどうするつもりなのだ？」

悪戯娘ことラウルは、臀部を軽く擦りながら、ゆっくりと立ち上がる。

原因は昨夜の一件。

家で騒いでいたラウルは連絡を入れ忘れたのだ。

余計な心配を掛けたとして、独断専行を含め折檻されたのであった。

「……もう一度、躰が必要みたいね」

「部長、ここは私にお任せください」

軽口を叩くラウルを見て、リアスは掌に魔力を集める。

殺気立つリアスの前に出て、朱乃が妖艶な微笑みを浮かべる。

雷を奔らせラウルに歩み寄る。

「先程は甘んじて受けたが、これより過分は何としても死守させてもらおう」

「そう仰らずに。きつと、新しい扉が見えて来る筈ですわ」

「いまのところ、性癖を増やす予定はないのでな。謹んでお断りしよう」

「ふふふ、必死に逃げ惑う表情を見せてください」

臍脂のスカートが浮かび上がり、充血した赤肌が顕わになる。

痛ましい臀部を抑え、逃亡を図るラウル。

銀兎を追う朱乃は加虐的な笑みを浮かべ、おつとりとした動きでじわじわと距離を詰める。

こうして、雷の巫女による狩りが始まったのだった。

「私も手荒な真似をしたくない。そこを退け、イッセー」

「ラウルは一回反省するべきだよな？」

「佑斗よ、そこを退く気はないか？」

「ごめんね、部長命令なんだ」

「くっ！ 全ての元凶は紅鬼部長の所為か」

「……………」

始まって数分後、ラウルは追いつめられていた。

一誠や佑斗の妨害に会い、部室を脱することができないでいたのだ。

指示を出した件の鬼部長は、朱乃と連携してラウルを端へ端へと追いやる。

ラウルは魔力を纏い着実な歩みで迫る彼女たちから、絶妙な距離を取り逃亡を図るが掴まるのは時間の問題であった。

「連絡一つ忘れただけで……」

「もう、追いかけてこは、お終いのようですね」

不意に逃げる足が止まることになる。

皮靴の踵が壁を蹴り、後退することが許されなくなったのだ。

後方には内壁、左右は壁と鬼部長に挟まれており、正面からは朱乃が嗜虐の笑みを浮かべる。

逃げ道がなくなったことを悟り、ラウルは端正な顔に絶望の色を浮かべた。

「良い声で啼——ひゃっ!？」

「随分と可愛い声をするではないか」

遂に朱乃は手を掛ける。

しかし、その手がラウルを捉えることはなかった。

霧が晴れるように姿が消失する。

次に現れたのは朱乃の背後。

ラウルは不敵な笑みを浮かべ、朱乃の耳たぶを甘噛みする。

そこからは先日、佑斗に対して行った光景の巻き返しであった。

「もう、先輩にお痛をするような後輩にはお仕置きしますわよ」

「生憎、狩られる側は性分に合わないのよな」

「……しかたありませんわね」

耳を抑えて立ち上がる朱乃は董色の瞳を潤ませ、ラウルの行動を咎める。

ただ、声音には悦が入っており、満更でもない感じではあった。

ラウルは片目を閉じ、指を立てて応えた。

大胆不敵なラウルの態度に朱乃が折れることになる。

【挫かれし者よ、我が宿木に泊まりて、汝が翼を休めよ】

包囲網を突破したラウルは魔術を詠唱する。

展開するのは複数の魔方陣。

淡い光は赤に染まった柔和を癒す。

術部はもちろんしごかれた臀部であった。

「……どうした？」

ラウルはスカートを整えると、何事もなかったかのようにソファアーに腰を下ろした。

その様子に唾然とするリアスたちを尻目に、虚空から一式を取り出しお茶の準備を始

める。

茶葉を蒸らす過程に到っても、固まったままの彼女たちを見兼ねて、ラウルは声を掛

けた。

「……ここまで、意味がないと虚しくなってくるわ」

「糠に釘ですわね」

「せめて、柳の風とでも言ってくれないか？」

カップに紅茶を注ぐ手を止め、ラウルは訂正を要求した。

朱乃の言い分は流石に酷くあると。

「ラウル、アーシアは無事なんだよな……」

紅茶を啜り、優雅に寛ぐラウルに一誠が問う。

放課後になるまで、何度も聞いたが問題ないとはぐらかしてきたのだ。

信用しているといっても、気に掛けた娘が気になるのは仕方ないだろう。

「無事……と言つては偽りになつてしまふかもしれないな」

「っ!?」　　なんで、あんな優しい子が……」

難しい顔をして話し始めたラウルを見て、一誠は失意のどん底に突き落とされる。

不敵に微笑む麗人に任せておけば、何処か安心だと思つていただけにその失望はなお

さら深いものだった。

ラウルは勝手に沈み込む早計な幼馴染に微笑み掛けた。

「相変わらずの早とちりだな、イツセーは。あの子は五体満足、傷一つなく家にいるぞ」

「へ？ だって、ラウルは無事じゃないって」

「ああ、言ったぞ。家の護衛の者が大層気に入つてな、今頃弄ばれているかもしれん」
「も、弄ばれているって……ラウルの護衛なんだから！ なに好き勝手させてんだよ！」

アーシアが白肌に傷一つなく息災であることを告げる。

ただし、家の中でどのような状態になっているか分からないとも告げる。

一誠はラウルの言い回しに嵌まり、妄想を爆発させる。

無垢な娘が、言葉では言い表せない目に遭っているのかと。

いまにも詰め寄らんとする一誠の鼻を掴み、目を合わせて誤解を解く。

「何を勘違いしている、エロガキめ。私の護衛は女性だぞ」

「なななな、なに言つてんだよ！ か、勘違いしてるのはラウルだろ！ 第一、護衛がいたなんて初めて聞いたぞ！ それに女の子と同棲だなんて……羨まし過ぎるぜ！ ちくしよう!!」

からかわれたと理解した一誠は、錯乱気味に喚き声を上げる。

そんな中、妬むことを忘れないのは流石だと言える。

「護衛がいたなんて、初めて聞いたわよ」

「言う必要性を感じなかったからな」

顔を顰めるリアスに、ラウルはあつけらかんとして答えた。

この事實は管轄地を納める悪魔令嬢にとっては、不穩分子が一つ増えたことに。四苦八苦する者を眺める麗人においては、手札を一枚見せたことになる。

「その護衛の女性……ラウルくんより強いのかな？」

「佑斗よ、私に勝てないのに、次々と手を出そうとするんじゃない」

興味を示した騎士をラウルは咎めた。

佑斗の気持ちも分からないではないが、簡単に目移りされたのでは、ラウルとて面白くなかったのだ。

「そうだな……剣の腕は私よりも勝っているのではないか？ あんなのでも、仮にも護衛だからな」

「はは、目標が増えちゃったね。まずは、ラウルくん打倒からだね」

「楽しみにしておこう。私が老いない内に一太刀でも入れれるといいな」

目に闘志を燃やす佑斗に、ラウルは不敵な笑みを以って応えた。

同時に、近い未来で本気の手合せが実現することを祈って。

「部長」

紅茶を一啜りすると、リアスに視線を投げかけた。

「イツセーに悪魔の駒について教えたか？」

「イーヴィル・ピース？」

「もしやと思ったが、話し忘れていたようだな」

「ま、まだ早いと思ったのよ!」

一誠は嬉々ならない言葉に首を傾げる。

疑問符を浮かべる様子を見たラウルは嘆息して問い詰める。

「その所為でイツセーが危険な目に遭ったのだが?」

「うっ!」

リアスの言い分をバツサリと切り捨てる。

時期を図るのは構わないが、逃しては意味がない。

見誤っては大事に発展すると、厳しめに追及した。

「私が説明するのは筋違いだと感じるが、請け負うことにしよう。悪魔の駒——これは他種族を悪魔へと転生させる契約の道具のようなものだ」

肩を落とすリアスに代わって、ラウルが悪魔の駒について説明を始める。

「もちろんこの駒は悪魔へと転生したイツセーの中にも入っている」

「俺の中にも……」

「そうだ。胸に手を当てて、己の中に眠る駒を揺さぶってみろ」

ラウルは手始めに、悪魔の駒を認識させるところから始める。

しかし、胸に手を当てて一誠は首を再び傾げた。

「? 何も感じないんだけど……」

「すまない。魔力もろくに使えない貴方では難しかったか」

「謝らないで! 惨めになるだけだから!」

「……どこのコントですか」

「上げて落とすとは……やりますわね、ラウルくん」

自身の不手際を理解し、ラウルは陳謝する。

貶められた一誠は声を上げて嘆いた。

その光景を小猫は白い目で、朱乃は感心したように見ていた。

「悪魔の駒によって転生する際、転生悪魔は使われた駒に応じて能力を得ることになる」

居た堪れない空気を咳払いにて換気する。

空気を戻したラウルは卓上にあつたチェス盤を手繰り寄せて、駒を取り出した。

「種類は『兵士』^{ポーン}『騎士』^{ナイト}『僧侶』^{ビショップ}『戦車』^{ルーク}『女王』^{クイーン}の五種類。これが、『王』^{キング}たる上級悪魔

に与えられる魔法具だ」

盤上に並べるのは五つの駒。

悪魔の駒はこのチェスの駒を模して造られた魔法具だとラウルは語った。

「そして、イツセー……貴方に与えられたのは」

視線で儀式を施した者に答えるように促す。

リアスは頷くと、一誠の前に立つ。

片腰に手を当てて、細指を突き付けた彼女が告げた。

「兵士よ」

一誠が転生する際に使われた悪魔の駒。

それは、兵士の駒であると。

「ほ、兵士ツスか？」

一誠は告げられた役割に拍子抜けする。

大袈裟な態度で告げられたこともあり、肩透かしを食らったようにがっかりとしていた。

「何か不満そうだな？」

「兵士っていったら、捨て駒だろ！ その一番前に並ぶ奴だろ！」

一誠は盤上に並ぶ兵士の駒を指差す。

不満を顕わにする彼を見て、ラウルは顎に手を添えて考察する。

「ふむ。また、いつもの早とちりか」

「そんなこと言ったって、部長とそのゲームやつてる時、ポンポン捨ててたじゃねえか！」

一誠が見ていたのは、ステールメイト引き分けとなった一局。

中盤で決定的なミスを犯したラウルが、駒を強引に相殺させ引き分けまで持ち込んだのだ。

もちろん、その際には兵士も数多く犠牲に出していた。

おそらくは、捨石のように扱った兵士の駒のイメージが、一誠の頭の中にこびりついてしまったのだった。

「イツセーの言った通り、序盤オープニングを飾る駒で間違えない。犠牲を強いられる場面でも、一番失うことの痛くない駒になるな」

「そうだよな……やっぱり、そうなんだよな……」

嘘を付いても仕方ないと判断したラウルは、正直に話した。

失うとしたなら、兵士の駒が一番痛手にならないと包み隠さずに教えた。

「イツセー違うのよ、あなたはいらぬことなんてないわ」

「でも、一番切り捨てやすい駒なんつすよね……」

「違うわ！ わたしは下僕を切り捨てたりなんか、絶対にしないもの！」

リアスが崩れ落ちる一誠を抱き留めた。

目を虚ろに彷徨わせる下僕を必死に宥める。

例え兵士であろうと、見捨てはしないと。

誇りあるグレモリー眷属において、居なくていい下僕などいないと。

自身にも言い聞かせるようにして、一誠を諭そうとする。

「まあ、なんにせよ話は最後まで聞くものだ」

主従ともども最後まで話を聞かないと損をする。

苦笑いを浮かべながら、ラウルは苦言を呈した。

「兵士の駒は一番切り捨てられやすいことは、どうあつても覆しようがない事実。ただ、何の為に切り捨てられるか考えてほしい」

盤上でラウルが駒を動かす。

紅の兵士が前に進むと、黒の僧侶が迎撃する。

「何のためって……それは……勝つ為に？」

「そう、勝つ為だ。戦況を好転させるために生贄を出すこと、この戦術を犠牲と呼ぶ」

紅の兵士を撃破した黒の僧侶を尻目に、紅の騎士が右前へ跳ぶ。
為すは王手。チエック

騎士は兵士を囿にして、王と僧侶に剣先を突き付けたのだった。

「犠牲が戦術の一つである以上、兵士の真価は別のところにある」

そして、兵士は捨てる為にあるのではないと語る。

「兵士は他の駒と連携させることにより……」

ラウルは迷いなく駒を並べていく。

盤上で形成されるのは、俗にいう序盤。

中央に駒を寄せ、覇権を争い始める戦局だった。

「攻防戦の要として機能し、奇襲や支配領域の確保など多彩な戦術を生み出すことが可能だ」

チエス盤の中央で先槍を交えるは兵士。

兵士を後方に携え、戦いの先端を開く。

後方で待機する兵士は連なり、堅硬な肉壁と為りて守りの要となる。

先鋒にて矛を交える兵士が退けば、控える駒が敵影を射程に収める。

「特に支配領域の確保は重要だ。戦と言うのは支配領域の奪い合い。古代においても近代においても、歩兵はいなくならない」

盤上の支配領域を幻術で色付ける。

紅と黒、二つの陣営はお互いの領域にて闘ぎ合う。

凌ぎを削り合う中、ラウルは先槍たる兵士の駒を取り除いた。

先端の兵士が姿を消すと、敵陣に食い込んでいた二マスの領域は黒く染まることになる。

「故に、戦略上もつとも重要になる駒、それが兵士だ」

ラウルは手で弄んでいた兵士の駒を盤上の中央に置いた。

置いた兵士の両前のマスが紅に代わったのだった。

「加えて、兵士の駒にはある特殊技能が備わっている」

「と、特殊能力があるのか!？」

「ああ、相手陣営に乗り込んでの昇格——プロモーション」

敵地の最奥にて昇格する、兵士のみが備える特殊技能。

一誠は謳い文句に食い付いたのだった。

「兵士は王の決めた敵地にて、王以外の特性を得ることが出来るわけだ」

ラウルは指を立てて、各駒の特性について話し始める。

「騎士——華麗に舞踏を繰り広げる武芸者。私と佑斗の戦いを見たならわかると思う

が、騎士に転生した者は比例なき速度を得える」

「……ラウルは騎士の木場と打ち合ってなかったか?」

「不思議なことはあるまい、私の方が上手だったという話だ」

無い胸を張るラウル。

「当たり前だと言い切られた佑斗は、心なしか肩を落としているようだった。

「戦車——城塞の如き堅さと砲撃の如き一撃を持つ蹂躞者。気を付けろ、小猫を怒らせ

たらただでは済まん?!」

「……ラウル先輩は無駄口が多すぎです」

「もし、怒らせてしまったのなら、甘味を献上するといい。きっと許してくれるはずだ」
「私はそんなに安くありません」

小猫はラウルの横腹を殴って否定する

口元に付いたチョコレートソースはご愛嬌か。

「僧侶——はいいか。イツセーが一番、世話になりそうにない駒だしな」

「な、なんでだよ!？」

「魔力が上がるだけだ。素が話にならないイツセーでは使いどころがない」

ラウルは容赦なく一刀の下、切り捨てる。

魔力がないと言い切られた一誠は膝を着いたのだった。

「これら、三つの駒の特性を持ち合わせた女王。兵士が昇格する際に至るべき駒になる」

中央に置いてあつた兵士の駒が、幻術によって女王に成り替わる。

「もちろん、状況に合わせて、下位に当たる三種の駒に昇格することもあろうがな」

手元の駒を一步一步進め、敵地の最奥にて昇格させる。

騎士、僧侶、戦車の三つの駒に昇格できることも忘れるなど、ラウルは兵士の心得を

説いたのだった。

「最前線にて武器を取る兵^{強者}たる戦士。例え歩みが遅くとも、積み上げた先に栄冠を掴み

取る者……それが兵士だ」

「……なるほど。兵士は単なる捨て駒じゃなくて、確実に歩みを進める戦士ってところなのか」

兵士であることの納得した一誠は何度も首を振る。

一誠を説得することに成功したラウルは、おどけた態度で更に煽った。

「上級悪魔を目指すイツセーには、ぴったりの駒だと思わないか？」

「兵士と兵藤……どつちも兵、繋がりだしな！ 部長……リアス・グレモリーが兵士、兵藤一誠！ 改めてよろしくお願いします！」

「……え、ええ。頼りにしているわよ、イツセー」

一誠は主であるリアスに威勢よく宣言する。

これからは心機一転、リアス・グレモリーの兵士として力を尽くしますと。

突然の宣言に驚いたリアスであったが、愛しむように笑顔を向けた。

「貴方は上級悪魔リアス・グレモリーの尖兵。決して、卑下する必要などない」

ラウルは可能性を秘めた新人悪魔へ優しく微笑んだのだった。

* * *

「散々、チェスにおいての価値を前提として話したが、悪魔としての価値は別物だぞ」

「へ？」

クレープを両手で持つラウルが、重要なことをさりと告げる。意表を突かれた一誠は間抜け面を晒すことになった。

「悪魔とは生き物だ。本人の在り方次第では、その価値は一にも百にも変わる」
チエスの駒は作り物であり、公平性を保つために価値は不動である。

対して、転生悪魔は思考をする動物である。

神の創造物ではあるが、一個体ごとに能力はまばらである。

努力次第では変動し、絶対値など存在しない。

ルールにこそ価値の指定があるが、それですら主の資質によって変動するのだ。

「だから、イツセー……貴方が目指すのは最高の兵士。部長に『あなたなしでは生きられない』と言わせる兵士になって見せろ」

「ぶ、部長にそんなことを……」

「そう、貴方が主様を骨抜きにするのだ」

「お、俺が……部長を……」

瞳を怪しく光らすと、ラウルは手に持つクレープを置いて、端正な顔を寄せる。

小さな口付きから漏れ出す熱い吐息は鼻先をくすぐる。

仄かに漂う柑橘の香りが一誠の理性を狂わせる。

蜜のように甘い言葉を受けて、軽い洗脳状態に陥った。

「変なことを吹き込まないでちょうだい」

「満更でもあるまい。あれが頼もしい存在になることは」

「そうなのだけど……」

リアスは露骨な表情を浮かべ始めた一誠を目の当たりにして、顔をしかめた。

下僕を好き勝手されるのは彼女にとつて我慢ならず、眉を寄せてラウルに抗議する。

抗議を受けたラウルは、温かい目をした応えた。

核心を突かれることになったリアスはしおらしくなる。

その頬が赤いのは、心を見透かされた恥ずかしさゆえか、それとも自覚なき思慕ゆえか。

「イツセーの持つ神器は規格外。力の使い方さえ覚えれば、直向な心を持つ彼のことだ、きつと貴方を支える者となるだろう」

不満顔をするリアスに、ラウルは我が子を自慢するように語る。

将来、一誠は必要とされる人材になるだろうと。

リアスのかけがえのない存在になるだろうと予言する。

「まあ、それが色恋沙汰にまで及んでも知らないがな」

深入りしすぎて嵌まり込む。

微笑ましい事態になっても知らない、ラウルは不敵に笑うのだった。

「それでは、今日は帰らせてもらおうか。家で可愛い子猫たちが待っているからな」
自身の使っていた食器を虚空に放り投げると、鞆を持って立ち上がった。

「ま、待ちなさい！」

引き留めようとするリアスに、後ろ手を振って去ろうとする。

「……待ってください、先輩」

「ん、何かな小猫？」

しかし、すんなりと退室することは叶わなかった。

小猫が袖を引き、ラウルを引き留めたのだった。

「……か、可愛い小猫はここにもいます」

袖を引く小猫は上目遣いをして、甘えた声で迫る。

顔を上気させ、身体をもじもじと擦り合わせる姿は、まさに可憐の一言に尽きた。

「——っ！ こ、小猫がそんなことを言うなんてっ!？」

「う、うるさいです!!」

その姿にラウルは頭を鈍器で殴られたかのような衝撃を受けた。

小猫は物静かで儂さを纏う少女。

決して、このような大胆な行動に出る娘ではないというのが、ラウルの見解であった。

動揺を隠しきれないラウルは、意外だと口走ってしまふ。

渾身の演技を否定された小猫は、戦車の腕力に羞恥を乗せ、ラウルに拳を見舞う。迫る拳にラウルが気づいた時にはすでに遅し。

避けることも敵わず、身体は地を離れることになる。

「~~~~つ!?!」

身体を後方に流して威力を軽減。

また、拳を打たれた腹部を魔力と内氣によつて強化して持ちこたえた。

辛うじて致命傷を避けた彼は、床の上で悶えることになる。

「か、帰る前に家の場所を教えといてください!」

「待て! 教えるからその脚を降ろして貰えないだろうか」

小猫の羞恥は留まることを知らず、矛先は床で蹲るラウルに向く。

腹部を脚でなぶられるラウルは、有無を言わせぬ所業に屈することになった。

「私に聞かないでも、悪魔なのだから調べれば分かるだろ」

グレモリー眷属は、現在この地の一帯を納めている。

本人に聞かずとも連絡一つで確認が取れるのだ。

ラウルはなぶられた腹部を抑えながら恨み言を吐く。

「……昨夜、尋ねてみましたが辿り着けませんでした」

ラウルの言い分に小猫は首を振る。

住所を調べて安否の確認を行おうとしたが、昨夜の内に叶うことがなかったのだ。た。

「ああ、そういえば普通の手段では侵入不可だったかな」

保安ゆえに張った結果。

家から出入りするためには、特殊な手段が必要であった。

その手段の鍵を知る一誠に近づく。

「戻って来い、イツセー」

ラウルはだらしない顔をした一誠に手刀を見舞った。

「いたたた、なんだよラウル。折角、部長といいところだったのに」

妄想に浸っていた一誠は、ラウルの暴挙に腹を立てる。

曰く、リアスといい雰囲気だったようだ。

「私が昔住んでいた家は覚えているな」

「あれだろ、でっかい邸宅だろ」

「……邸宅と言うほどでもなくないか？ 古民家ほどの大きさだろ」

「ブルジョワめ！ 一般ピーポの俺からしてみたら十分でかいんだよ!!」

「価値観の相違だな。論議しても仕方あるまい」

住居の広さについては横に置き、ラウルは話を進める。

虚空に手を差し入れ、手元に目的のものを手繰り寄せる。

取り出したのは六角形の金属の板であった

「その別邸の庭にある大理石の台座に、この紋章を翳すと先ほど言った住所の工房……住居に転送される筈だ」

「あのでかい邸宅は別邸かよ！ つうか、普通に歩いていけないのか……」

「悪いな。何重にも結界を張っているんで、私以外の術者では突破困難だ」

金属板の中央に彫られたるは六翼の霊鳥。

三本の脚を持ち、蹄には一対の龍が驚掴みされていた。

ラウルは厳めしい紋章の彫られたメダルを別邸の台座に翳すと、家にかかることができると言う。

もつとも、それ以外の手段で侵入するのは困難であった。

結界を張った術者であるラウルならともかく、他の術者ではおいそれと突破できない。

術に嵌まった者は惑い彷徨い、外へと返される。

それでもなお、奥に立ち入ろうとする者には、罠による迎撃がなされる。

術者であるラウルも、他人によるものならば、余程のことがない限り突破しようと考

えない代物であった。

「報告には聞いたけど、人様の管轄地で随分と勝手をしているのね」

「今までは聞かなかったしな。それに私有地だろ、あれこれ言われる筋合いはないと思うがな」

「あなたね……」

ラウルが物騒な行いを続けていることを知った管理者はご立腹であった。

毎度の如く爆弾を投下する銀髪の麗人。

リアスは半眼で睨むが、当の本人は飄々としていた。

「それと、別邸に置いたある台座だが、むやみに触れるなよ。即死級の罠が発動するぞ」

「ちゆ、忠告感謝しておくわ……」

ラウルは更なる爆弾発言を落とす。

別邸に配置された門となる台座には、侵入者抹殺用の罠があると。

下手に調べようものなら容赦なく、下手人を殺しに掛かるものであった。

忠告を受けたリアスは引き攣った笑みを浮かべていた。

「ほら、イッサー受け取れ」

一誠に紋章の彫られたメダルを投げ渡す。

宙舞うメダルは、綺麗な放物線を描いて一誠の手中に収まった。

「アーシアも喜ぶだろ。いつでも遊びにくるといい」

「お、おう」

ラウルは片目をつむりエールを送る。

家にいる少女たちの良き話し相手になるだろうとの判断であった。

「普通は主であるわたしに渡すところではないかしら？」

「生憎だな……まだ信用にならない」

実質、一誠に渡したのは家の鍵。

情に厚いグレモリー家の子女と言えども、実利を重んじる悪魔に鍵を預けるのは、家を預かる家主として現段階では許容しがたいことであった。

「小猫、これを貴方に預けておこう。一応言っておくが、複製するなよ。台座の罨に掛かる」

「……分かりました。しっかりと預かることにします」

しかし、何も渡さないままではリアスが立つ瀬ないと考えたラウルは、鍵をもう一枚取り出す。

それに加え、注意事項を伝えて小猫へ渡すのだった。

信頼の証を受け取った小猫は、決意を目に宿しメダルをしっかりと握りしめる。

「私は信用しないのに、小猫は信用するのね」

「小猫なら問題あるまい。万が一、荒らされるとしても、食糧庫ぐらいつつ!」
小猫に渡すのは、万が一不義に走られた時の損害を考えて。

もちろん信用の差もあるが、難癖を付けられる意趣返しも含めてリアスには渡さなかつたのだ。

そのことを冗談半分で口にしたラウルは、白き獅子の鉄槌に会うことになった。

「……デリカシーなさすぎです」

仁王立ちで怒れる少女はラウルを見下す。

乙女の逆鱗に触れ、地に墜ちた麗人は、腹部を奔る激痛に喘ぐ羽目になったのだった。

十一話 尾行

陽光照らす林地の奥深く。

広大な敷地を誇る大屋敷が姿を現す。

大きな正門から続くは整然と並べられた石畳。

辺りは数多もの垣根が築かれ、多彩な薔薇が園庭を彩る。

道沿いに家屋へ向かうと、水のアーチが目に残る。

水の芸術を創り出す泉は訪れる者の心を解きほぐす。

立派な庭園を備えた屋敷は豪邸と言って差支えない程の佇まいであった。

三階建ての家屋の玄関から一人の少女が勢いよく飛び出した。

頭に被った野球帽からは、髪留めで一纏めにされた後ろ髪が躍る。

春先にも係わらず、少女はすらりとした手足、引き締まったくびれを大胆に露出して
いた。

露出した青白い肌は、病弱さに負けず陽光を浴びて一際輝いていた。

活動的な少女は春先の空気に触れると、身体を震わせる。

予想外の寒さを感じたのか、取り急ぐようにして、亜空間を開き虚空から衣服を取り

出す。

シヨールを肩口からしつかりと纏い両腕で身体を抱きしめる。

その場にしゃがみ込み、雪兎の如く身体を小さくして、ひとしきり震える。暫くして、震えが止まった少女は顔を上げた。

足のアンクレットを一撫ですると、凛々しい顔つきをして立ち上がる。

決意を目に宿した少女ルチアは、腕を天に掲げ高らかに宣言した。

「追跡ミツシヨンスターです！」

こうして始まった、アーシアの初デートを見守ろう大作戦。

蒼銀の尾髪を揺らす少女は、霧に包まれ姿を消したのだった。

* * *

ラウルが家の鍵たるメダルを渡した翌日。

一誠と小猫は、ラウルの拠点を訪れていた。

「鍵を渡した明くる日に来訪するとは……せつかな奴だ」

冷涼な空気が滞留する石造りの堂。

日差しを取り込むステンドグラスは、鮮やかな造形を以って七色に輝く。

透過光によって彩られる儀式場の中央で、彼らを迎え入れたラウルは、昨日の今日で訪れる行動の早さに嘆息した。

「えくと、お邪魔します?」

「許可を出したのは先輩です……問題ありません」

「覚えがないのだが……」

「鍵を渡しました」

「……そうか」

ラウルは手ずから鍵を渡したので、仕方がないと割り切る。

「物珍しそうに辺りを見回す一誠には、既に許可を出していたので気にも留めはしなかつた。」

「ラウ、お客さん? わざわざ、転移門を使っているってことは、メイ? リン? それとも、黒にゃん? ここは大穴でティアとか?」

部屋の扉を開けて姿を現すのは蒼銀の髪の少女。

次々と女性の名前を上げながら、来訪者を予想していた。

「残念ながら、全て外れだ」

「へ? ええええええええ!」

部屋に入ったルチアは、転送陣の中央にいる一誠と小猫を見て、驚愕の表情を見せる。

「ら、ラウが知らない人呼んでるうう!？」

ルチアの驚きの原因はラウルが人を呼んだこと。

この家には基本、身内しか招くことがなかったのだ。

「友人の一人や二人招いても不思議なكارうう？」

「だ、だって、ここ建ててから顔見知りしか呼んでないじゃん!」

「勝手に来たのだから」

その身内も正確に言うと、断りもなく訪れるのだ。

中には、結界が張ってあることを知ってなお、直接転移してくる猛者もいた。

「お姉さん、感動だよ!」 ラウって、悪戯娘なところがあるでしょ! 度が過ぎて、友達

が一人もいない——痛っ!？」

「余計なお世話だ」

「もう、折角心配したあげたのに……ラウの意地悪!」

ラウルは無駄口を叩くルチアに手刀を見舞う。

手刀をもらい頭を押さえることになった少女は、非道な行いに頬を膨らませていた。

「ルチア、ラウルさん……置いていかないでください」

「アーシア!？」

「イツセーさん!？」

開け放たれた扉から飛び出してきたのは、シスター服の少女。

アーシアの姿を認めた途端、一誠は彼女に向けて駆けだした。

そして、それは姿を認められたアーシアも同じこと。

墮天使によって、引き裂かれた悪魔と元聖女は、麗人の導きの下、再び巡り合ったのだった。

「心配したんだぞ、アーシアー！」

「イツセーさんこそ、無事でなによりです」

二人は無事に再会できたことを手を取り喜び合った。

「ん……墮ちた天使によって引き裂かれた禁断の絆。赤き龍帝は悪魔に成り果てようとも探し求め、穢れなき聖女は思いを胸に秘め待ち焦がれる。しかし、そんな二人の希望を打ち砕かんと次々と刺客が放たれる。白き猫又——非道な毒を以って、龍帝の心を脅かす。紅髪の悪魔姫——王の威光を笠に着て、龍帝を我が物にせんと欲す。銀の魔天使——御業を振るい、無慈悲な裁きを下す。赤き龍帝は立ち塞がる難敵に、九死一生を重ねようとも歩みを止めることはない。そして、幾多もの試練を乗り越えた先に、遂に二人は再開を果たしたのだった……つてところかな？」

「……………最早、なにも言うまい」

ルチアは二人の姿を見て、英雄譚を作り上げる。

それは勇ましい龍帝の少年と優しき聖女の物語。

幾多もの困難を乗り越えて、二人は禁断の恋を成就させるのだった。

好き勝手に語るルチアの行為をラウルは目を瞑り、聞き流すことにした。

その混沌とした輪の中に入り込まず、厳しい顔をしている少女が一人いた。

「なに怖い顔してるのかな？」

「っ!? あなたは何者ですか？」

「ふっふっふっふ。いいでしょう! その問いに答えてあげましょう!」

警戒心をむき出しにする小猫に、ルチアは両手を広げ、仰々しく名乗りを上げた。

「人呼んで! 薄幸美少女ルチアとは、私のことなのです!!」

煌めく閃光。

ルチアの背後で、幻術による光と音の演出が巻き起こる。

「すまない、愚妹が馬鹿で」

「……いえ、兄妹似た者同士なのは、よく分かりましたから」

ルチアの行動に、ラウルは目を伏せ、小猫は冷めた視線を送る。

一方、外野になってしまっている一誠とアーシアは、手を繋いだままお互いの顔を見て赤らめていた。

自分たちだけの世界にの二人と悪戯な会話を繰り返すラウルたち。

同じ部屋にいるにも係わらず、各人の体感温度は天と地ほど違っていた。

そんな混沌とした空気を吹き飛ばすが如く、ルチアが大声を上げた。

「だ・か・ら！ 妹になったつもりはありません！」

「往生際が悪い。小猫もそう思わないか？」

いつもの取り留めない会話が始まり、ラウルは肩を竦める。

事情を知らない小猫に同意を求めようとするが、当の彼女はラウルから遠ざかるように後ずさりしていた。

「近づかないで下さい。変態がうつります」

「……小猫。貴方は大きな勘違いをしている」

「勘違いではありません。ラウル先輩は女装癖こそあるものの、良識ある人だと思っただけなのに……軽蔑します」

絶対零度の視線がラウルを射抜く。

ルチアにも目くじらを立てられラウルは針のむしろであった。

苦笑いを浮かべると、説得が楽な小猫の誤解を解き始めた。

「これとは血こそ繋がっていないが、兄妹だぞ」

「これって、なによ！ それに、わたしの方が年上なんだからね！」

「妹プレイですか……姉弟揃って変態だったんですね」

「違うよ!! 違うからね! ラウの所為で変な誤解されちゃったじゃない!!」
誤解が更なる誤解を招く。

事態をややくしくしたルチアが八つ当たりを始める。

「……色々と複雑なんだ。うちの家庭はな」

八つ当たりを受けたラウルは目を瞑った。

思い浮かべるは我が家の家庭事情。

義妹として戸籍を作り直したルチアは、いつになつても納得しない。

しかし、ラウルとしては納得してもらわざる得なかつた。

実家に戻れば、一族の問題が待ち構えている。

結社における所属派閥や権限や財産等の後継者の問題。

余計な利権問題に係わらせないためにも、ルチアに長子を名乗らせるわけにはいかな

かつたのだ。

そんな日の陰の争いなど知るよしもない彼女は声高に糾弾する。

ラウルは飄々とした態度で、非難を受け流すしかなかつたのだつた。

哀愁に塗れたその姿は、実に儂くあつた。

「………分かりました。先輩は嘘を付いても、悪い人ではありませんから」

「うそっ!? 白にゃんはラウの方に付いちやうの!?!」

ラウルの様子に、小猫はしぶしながらも理解を示す。

小猫が理解を示したことに、ルチアは失望の色を隠せないでいた。

「……白にゃん」

「そう、白にゃん！ 白い猫又だから、白にゃんなのよ！」

雰囲気を一転させ、ルチアは自身の付けた愛称を自慢するように熱弁を振るう。

白い髪をした猫又の妖怪だからと。

本人は良い出来だと思っっているようだが、酷く安直な名付けであった。

「……先輩」

「ああ、こいつはこういう奴なんだ」

咎めるような視線を送る小猫に、ラウルは首を振る。

小猫の正体をしゃべったわけではなく、ルチアが出会い頭に見破ったのだった。

「これもある種の才能だからな」

目で捉えた者の素性を見破る能力。

ルチアの本質を見抜く才能は、類い稀なるものであった。

実際にラウルもこの能力に助けられたこともあり、ルチアの目利きはある程度信用していた。

また、心眼ともいえる能力は、剣士としても遺憾なく発揮される。

相手の、場の、気を読み、先手を押さえる。

彼女の實力を一流からさらに上へ押し上げていた。

「無遠慮な奴だが、よかつたら仲良くしてやってくれ」

ただ、持ち前の性格の所為か、憚りがないのが難点であると、ラウルは忠告した。

「よろしくね、白にゃん」

当の本人は小猫の手を気付かぬ間に握っていた。

屈託のない笑顔を浮かべるルチアに、小猫は僻々とするのであった。

* * *

「私は部長に話を付けてくるが、おとなしくしておけよ」

小猫が訪れたのは、リアスの言伝を伝えにきたのであった。

ラウルとしても、アーシアを引き取る工作に移るために、話を付けて置きたかったので、都合が良かったのだった。

もつとも、食糧庫を荒らしに訪れたのではないかと、冗談を述べたラウルは小猫の拳によつて、一度沈むことになったのは余談である。

「ラウル、俺も——」

「折角、遊びに来たのだ。私はいなくなるが、ゆつくりと寛いでいってくれ」
「ゆつくりなんかしてられねえよ。俺も話し合いに参加する」

これから行われるのは、アーシアの身の振り方を決めるかも知れない話し合い。そのことを知って、付いて来ようとする一誠を押し留めた。

露程も納得を示さない一誠に、ラウルは手札を切った。

「それに、彼女は見惚れた娘だろ。傍にいたらどうだ?」

「ななな、なんでラウルがそれを!!」

ラウルは耳元まで寄って囁く。

彼女の容姿や性格は、一誠の好みのだ真ん中を射抜いているのではないかと。

秘めた思いを見破られた一誠は、声をももらせ酷く狼狽する。

「伊達に幼馴染をやっているわけではないのだな。貴方の好みぐらい知っていて当然だろ?」

「ラウル……」

純情な幼馴染の反応に悪戯な微笑みを浮かべる。

その無邪気な微笑みは、異性も同性をも虜にしてしまう魅力があった。

ふと、ラウルは惚けた顔を見せる一誠を見て忠告する。

「一応言っておくが……襲うなよ。同意の上でなら構わんが」

「やつぱり、俺をそんな目で見ているんだな！　ちくしょう!!」

「……帰ってきたときに、事後だつたりしたら絶交します」

「こ、小猫ちゃんまで……」

ラウルだけではなく、小猫にまで釘を差された一誠は肩を落とした。

「昼食は保温室の中にあるからな。夕食前には戻ってくるつもりだが、遅かったら頼む

ぞルチア」

「頼まれなくても、わたしがやるのに」

何処か過保護な様子に、ルチアは苦笑いを浮かべる。

なんだかんだ言つて、ラウルは身内に甘い家主であつた。

「アーシア、イツセーのことをよろしく頼むぞ」

「分かりました。ラウルさんも、お気を付けて」

顔を綻ばせ、小さく手を振る少女に手を振つて応えようと、彼らは転移の光に吞まれていった。

「さてと……一誠君！」

「な、なんつすか？」

邪魔者が消えた途端、ルチアは透かさず行動を開始する。

目標は家主の幼馴染である兵藤一誠。

彼の手を取り、茶目っ気のある瞳をして告げた。

「あなた、デートしてみたくない？」

蒼銀の尻尾を振るう少女は、小悪魔な笑みを浮かべたのだった。

* * *

窓の外を見て小さく息を吐く少女。

もの思わしげな雰囲気纏う彼女に周囲の目が集まる。

すつと高い鼻に凜とした瞳、蒼銀の髪を揺らす少女の日本人離れした美貌は人の目を惹く。

注目の的となっていた少女の視線の先では、一組の男女が仲睦まじく会話を楽しんでいた。

「初々しいわね。今度、ラウでも誘ってみようかな」

一誠たちのデートに出かけた後、ルチアはそれに続くようにして尾行を始めた。

現在は、こじやれた喫茶店の二階。

向かい側にある、ハンバーガーショップで昼食を取る彼らをコーヒーカップ片手に眺めていた。

「相席、宜しいでしょうか？」

「ん？ 別に……げっ!？」

ルチアは声の聞こえた方に目を向ける。

そこにいたのは、二人組の黒髪の女性たち。

ラウルと同じ制服を着ていることから、駒王学園の生徒だと言うことが窺い知れる。

されど、問題は別にあつた。

ルチアの五感が捉えたのは、異形の気配。

それも、尾行していた片割れと違い、明確な悪魔の気配であつた。

「結界を張りましたので、ご安心を」

「ぜんぜん安心できないからー!」

前に立ちスレンダーな女子生徒が魔方陣を描く。

僅かに空間が張り詰めた後、テーブルを囲むようにして外界との隔たりが出来上がる。

結果、少女たちを集まっていた視線が、一つ残らず外された。

その光景を見て準備が整つたと言わんばかりの女子生徒に、ルチアは席を立ちあがって抗議した。

「善良な一般市民を捕らえてなんの用なのよ……悪魔さん」

臆することなく向かいの席に座る彼女たちに、しぶしぶ席に座った。

席に座り直したルチアは、鋭い目をして用件を尋ねた。

「裏社会に精通しているような人を一般市民とは言いません」

「言葉の綾つてやつでしようが！」

人の揚げ足を取らんとする女子生徒。

揚げ足を取られたルチアは声を尖らせるのだった。

「折角、初々しいカップルを眺めて悦に浸っていたのに……」

ルチアはカップルに視線を落とし、邪魔者が現れたことに嘆息した。

なかなか、外に出る機会のない少女にとって、彼らの尾行はまたとない機会だった。

せつかくの楽しみを潰された形になったルチアは嘆き悲しんでいたのだった。

嘆く少女の様子を見て、対面に座る女性は眼鏡を光らせた。

「なるほど。善良な市民でもありませんでしたか」

「なんでよ！」

「ストーカー行為は犯罪です。人界でそのような定めがあったはずですが」

「なななな、何を言っているのかな？ こっそり付けてたんだよ、悪魔さんに判るわけな

いじゃない！」

ルチアは動揺の余り、口を滑らせた。

尾行に自信があつた彼女にとって、気付かれていたという事態は沽券に係わる失態であつたのだ。

「その恰好ですね。春先なのに薄手すぎます」

「うっ！」

「尾行自体は巧妙な手口でしたが、それが仇になりましたね」

「ちゃんと雑踏に紛れていたのに……」

原因はルチアの薄手の服装。

日の光を目一杯浴びようとして、露出の多い服装を選んだのが失態であつた。

「い、いつから気づいていたのよ！」

「不審な人物だとは思っていましたが、同業者だと気付いたのはつい先程。まさか、同じ人物を尾行しているとは思いませんでした」

「っ?! あの子たちをどうするつもりなの!?!」

女子生徒の言葉に、険呑な空気を纏い始める。

剣こそ構えていないが、一足で首二つを狩れる体勢へと移っていた。

ルチアの行動に後ろに控えていた女子生徒が対応しようと動くが、スレンダーな女子生徒は片手をあげ冷静に対処した。

「心配はいりません。私たちは親友の眷属を見にきただけですから」

「ふうん。シトリー家のお嬢様は、あの派手好きにお姫様のお友達なんだ」

言っていることが本当ならここで争う必要はない。

同棲しているラウルは、紅髪の悪魔と行動しているのだ。

それでもなお、疑わしい目をしてルチアは警戒心を緩めない。

「……あなたも派手好きなのでは？」

「良いのわたしは！ 真っ赤っ赤だったたり、滅びの魔力なんて大袈裟なもの持っていないから」

女子生徒は、腰のくびれや大股を大きく露出した格好を見咎める。

見咎められたルチアは、露出しているのはファッションであり、紅髪の悪魔とは断固として違うと言い張った。

「……………そうですか」

女子生徒は目を瞑り熟考した後、ルチアの言い分を埒外に追いやることにした。

「私やリアスを魔王の妹と知っているあなたは何者ですか？」

眼鏡を指で押して気を取り直すと、先程口から零れた言葉の核心に迫る。

ルチアが口にした、お姫様やお嬢様という言葉は魔王の妹と暗喩していることに気付いていたのだ。

核心は突かれた薄幸少女は、口唇を細く鋭く三日月の如く歪ませた。

——貴女たちの首を狩るものよ——

少女は虚空から一振りの業物を取り出す。

細身の刀身に僅かに反り持つそれは、明らかに魔の力を宿した剣であった。

同時に何処からともなく立ち込めた霧が、少女の姿を包み隠す。

結界の内は濃霧に覆われ、一寸先も見通すことができない。

「っ!??!」

咄嗟に女子生徒は自身の魔力を使って、霧を排除しに掛かるが、突如としてその手が止まった。

叩きつけられる殺気。

出所の判らない威圧感は、うねりを上げて女子生徒に襲いかかる。

女子生徒は身体中から冷や汗を流し、恐怖のあまり息をすることすら忘れる。

軀体を丸め震える両腕で身体を抱き、力の入らぬ足腰は膝を着いて圧力に屈した。

恐怖に身を竦めるほどの濃い殺気をぶつけられて、止めざる負えなかったのだ。

視界を遮る深い霧の中で、紅蓮の双眸が妖しく光る。

獲物を捉えた少女は感うことなく女子生徒へ疾駆する。

青白い腕に携えるは鈍色の魔劍。

振るわれる凶刃は銀閃と為りて、禁断の領域に踏み入った不屈き者を討たんと欲す。

白刃が首皮を切り裂き——そして。

「ふふふ、冗談、冗談。そんな怯えなくても、からかったに決まっているじゃない」
陽気な声が響くと、立ち込めていた霧が幻の如く霧散する。

ころころと鈴の音を奏でる少女の腰には、魔劍が携えられていたが刀身は鞘に収まっていた。

その姿を目にした女子生徒は、首筋に手を当て傷を負っていないことを確認して、安堵の余りその場にへたり込む。

へたり込んだ主を目にしたもう一人の生徒は、駆け寄って介抱を始める。

「はあく、とんだ大失敗よ。このことが伝わったら、マリーにしごかれちゃう……」

事を起こしたルチアは席に戻ると、テーブルにだらしなく身体を投げ出す。

自身の失敗を顧みて、これから訪れかねない未来を想像して悲嘆に暮れるのだった。

「……交渉の席で、相手を威嚇するような行動は褒められません」

女子生徒は従者の支えを得て立ち上がる。

震える身体を押して席に着き、額に張り付いた黒髪を拭う。

冷たい視線でルチアを捉え眉間に皺を寄せると、軽率の行動を咎めた。

「交渉も何も、悪魔さんたちが押しかけてきたんじゃない！」

「確かにその通りですが……」

元々、ルチアが一人で昼食を取っていたところに、目の前の悪魔たちは押しかけてきたのだ。

非難される謂われないと、ルチアは頬を膨らませた。

「それに、わたしは化かし合いより、剣を取る方が得意なの！ 切った張ったで話を付ける方が、よっぽど性に合うし」

腰に携える鞘を叩いて、武芸者であることを示した。

話し合いたいならこちらで話そうと。

「話し合いの方が有意義です」

「チェンジ！ 後ろの刀を隠したお姉さんと交代してください！」

ルチアは交渉役の交代を要求した。

このままでは話し合いは平行線で終わるのは目に見えていた。

彼女にとって、剣での語り合いの方がよっぽど有意義であり、対話は不本意であるのだ。

「まさか、お姉さんも堅物!？」

「堅物と呼ばれるのは心外です」

ルチアの要求を受けて、控えていた女子生徒が応じた。

スレンダーな女子生徒の横に座る。

彼女が答えたのは、ルチアの要求通りではなく、話し合いでの対話であったが。

「前門の眼鏡、後門の眼鏡ってやつね。わたし、大ピンチじゃない」

ルチアは眼鏡にあまりいいイメージを持っていなかった。

経験則から言って、堅物Ⅱ眼鏡、眼鏡Ⅱ天敵の方程式が成り立つ程。

目の前にいる悪魔たちも、きつとそうなのだ。ルチアは断定する。

故に、軽薄な態度をとって天敵に抗って見せる。

しかし、帰ってきたのは無言の圧力。

打ちのめされたルチアは、げんなりした様子で窓の外に目を逸らした。

「つて、あれ!? 一誠君たちは!？」

「私たちが話し合っている間に、離れてしまったようです」

「そんな……。探し出さなきゃならないじゃん」

ルチアが窓の外に視線を向けると、すでにそこには追っていた二人の姿はなかった。

知らず知らずの間に、目の前の悪魔たちと話し込んでしまっていたのだ。

事態を理解したルチアは、深々と肩を落とした。

「よし……じゃあね、悪魔さんたち。また、縁があつたら会いましょう」

気を取り直し立ち上がったルチアは、茶目つ気のある笑顔を送る。

次の瞬間にはその姿は霧に包まれた。

そして、霧が晴れるとルチアの姿は跡形もなく消えていた。

それは悪魔たちが張った結界を意ともせず、姿を消したことを意味していた。

「会長良かったのですか？」

「問題ありません。彼女が何か起こせば、彼に抗議すれば済む話です」

従者の女子生徒は主に問う。

素性不明の少女を捉えなくとも良かったのかと。

対して、会長と呼ばれた女子生徒は構わないと答えた。

霧に包まれ消えた少女。

その少女が携えていた鞆の表面には、六羽の紋章が彫られたのだ。

関係者の割り出しに成功し、交渉の席にて得るべきものはすでに得ていたのだ。

「まずはこの請求からですね」

テーブルの上に残る伝票を見て、女子生徒は冷笑を浮かべた。

飄々とした麗人が泡を食う未来を思い浮かべ、笑みをさらに深くしたのだった。

* * *

「イツセーさん……」

店を巡り歩いた一誠たちは、街路樹の脇にある長椅子へと腰を下ろしていた。

「私と……私と、友達になつてはいただけませんか？」

アーシアは身体を寄せて、上目遣いで訊ねた。

それは教会にいた頃から抱いていた切望。

今でこそ、ルチアという友を得たが、この町にきて初めて親切にしてもらつた一誠と友になりたい気持ちは変わらない。

そのルチアに発破を掛けられたこともあり、迷いなく胸の内に秘めた思いをさらけ出したのだ。

「……いいのか、アーシア。俺は悪魔なんだぞ」

訊ねられた一誠は、嬉しい表情を顕わにするが、自身が悪魔であつたことを思い出して一転、険しい表情をしてアーシアへ真剣に問いかけた。

「構いません。今日一日、イツセーさんと一緒に遊んで、とつても楽しかったです！ だから、これからも……これから何度でも、一緒に遊んでおしゃべりしたいです!!」

アーシアは自身の思いを語る。

昼時に訪れたハンバーガーショップ。

こつてりとした味付けは真新しく、パンを紙に包むなど斬新であった。

その後、入店したゲームセンターでは、目まぐるしい音と光が出迎えた。

レーシングゲームで遊ぶ一誠は格好よく、クレールゲームで獲得したラッチュー君の

ぬいぐるみをプレゼントされた時はとても嬉しかった。

歩き巡った店舗では、初めて目にする物が数多くあった。

そして、立ち寄ったブティックで見入ってしまったのは、花を模したヘアピン。

四苦八苦していた一誠に、洋服と一緒に手渡された時は、申しなく思いながらも喜んで

しまった。

何もかもが新鮮で心躍る一日だったと、アーシアは潤んだ瞳をして物語った。

「アーシア……」

飾ることない少女の言葉に、一誠は心を打たれることになる。

「そうだな。俺とアーシアは友達だ！ これから何度でもおしやべりして、笑いあつて

……時には悲しいことも共感するんだ」

一誠は、友を欲する聖女の想いに応えた。

楽しい時も、苦しい時も思いを分かち合おうと。

そして、笑いあつて楽しい時を共に過ごしたのだから、友達であると。

「今日のは行けなかつたけど、一緒に買い物に行こう！ 本だろうが花だろうが何度でも買いに行こう！ な？」

「ふふふ、それは楽しみです！ その時には、ルチアに今日のお礼も買わないといけませんね」

これから訪れるであろう未来を思い浮かべて、花開くようにアーシアは顔を綻ばした。

そのきつかけを作り出したルチアへの感謝の気持ちも忘れない。

「イツセイさんとルチアは知り合い……ではないんですよね。なら、私が紹介させてもらいます！ ちょっと……え、エッチですけど、いい人なんですよ」

「ルチアさんって、エッチなのか……」

ルチアがふしだらだと聞いて、一誠は如何わしい妄想を始めた。

流れるように肩口で踊る錦糸。

慎ましい乳房や秘所を覆う布切れ。

赤みが差した玉肌は熱を帯びる。

過激な格好をした少女は、後ろで纏めた蒼銀の髪を解く。

艶やかに微笑むと、紅玉の瞳が怪しい光を宿した。

漂うは胸を軽くする清涼な香り。

細くしなやかな両腕は背中に回される。

ぷつくりとした花唇から熱い吐息が鼻に掛かり――。

「むう〜」

だらしのない顔を颯わにする一誠の様子に、アーシアが可愛らしく頬を膨らませる。

「俺も紹介するよ！ 松田、元浜っていつてな！ あいつら、ちよつとスケベだけど、すつげえイイ奴らなんだぜ？ 絶対にアーシアの友達になつてくれるよ！」

妄想から戻ってきた一誠は、アーシアの姿を見て我に返った。

手の届かない少女と遊んでいる場合ではなかったと。

失態を隠すように矢継早で友を紹介することを約束する。

「それでな、ラウルも一緒に……って、ラウルも紹介した方がいいよな」

「え〜と、お世話になつているのですが……」

「友達じゃないだろ」

相変わらずな幼馴染を思い浮かべて、一誠は苦笑いを隠せなかった。

「ああ見えて、アイツ意外と奥手なんだよ。妙なところで壁を作るからな。わざわざこつちから手を出さないといけないんだぞ。ホント手の掛かる奴なんだぜ」

今でこそ社交的ではあるが、昔は頑なな内面が強く出ていた為に酷かった。

自ら人の輪に入ろうとせず、仏頂面でこちらを眺めるばかり。

放っておけば、木陰で寂しそうな目をして、流れる雲を見上げる始末。

二年、三年経つに連れ、かなり真面になってきたが、幼馴染の一誠たち以外からは、やはり距離を取りたがる。

再開した時に、随分と愛想の良い性格になっていたのには、その相まった美貌のこともあり別人と見間違えたほどだ。

小難しいことを考えて、友を自ら作らない姿を見た時には、安堵を漏らしたほどだった。

「意外です、ラウルさんは何でも、てきぱきと出来る人だつて思っていましたから」

「だろ、あれでなかなか可愛いところがあるんだぜ。でも、気を付けろよ、アーシア」
「何をでしようか?」

「あんななりして、男だからな」

一誠の告げたことを理解できなかったアーシアは、丸い目をしたまま何度も瞬きをす
る。

ゆっくりとゆっくりと、一誠の言葉をかみ砕いていった少女の顔が、真実に辿り着いた瞬間、驚愕に彩られた。

「ふええええええええええ!!?!」

辺り一帯に響き渡る驚嘆の声。

告げられた真実を理解したアーシアは、飛び上がり身体全体を使って驚きを顕わにする。

「ら、ラウルさん、男の方だったんですか!？」

「俗に言う、男の娘って奴だ」

「お、男の娘ですか……」

ラウルが男だとしたアーシアは動転して、己を見放した神に祈りを捧げ始める。

世界には不思議がいっぱいですと。

女の子みたいな男の子を男の娘と呼ぶようですと。

主よ、残酷な仕打ちはなさらないで下さいと。

未知に触れたことを報告し、ラウルが男として生まれてしまったことを嘆いた。

何度も何度も、直面した真理が認められず祈りを捧げる。

祈りを捧げ終わった後、辺りに漂ったのは居た堪れない空気。

アーシアは取り乱したことを恥じ、一誠はバツの悪い顔をしていた。

「そ、そうだ! あ……イッセーさん……イッセーさんのこと、一誠って呼んでもいいですか?」

「ぶっ!? あ、アーシア……いま、なんて?」

「一誠って呼んでは、ダメですか？」

大切なことを思い出したアーシアは、思い切って訊ねた。

その表情は真剣であり、冗談など一欠片も含まれていなかった。

「い、いや、ダメじゃないさ……でも、いきなり呼び捨ては、なんと言うか、恥ずかしいと言うか……そいやあ、俺、部長には呼ばれてんだよな……それもなんと言うか、子弟を見るみたい……」

異性に慣れていない一誠はしどろもどろになる。

現在、一誠を呼び捨てにする異性は母とリアスのみ。

それも異性と見られているのではなく、親愛の情を以って接せられる。

母性一杯な彼女たちでも呼ぶのも愛称であり、名前を呼び捨てにするような異性などいなかったのだ。

「アーシアはいきなりなんで呼び捨てに？」

「ルチアが名前を呼び捨てで、呼び合ったら友達だって……」

アーシアは涙目で伝える。

それは初めて友達が出来た夜のこと。

初めての友達とルチアが、自信満々で言い放った。

名前を呼び合うことこそ、友達の第一歩であると。

舞い上がっていた少女は、隣でげんなりしていたラウルには気付くことはない。

無垢な聖女は勘違い娘の牙に掛かってしまったのだ。

「そ、それは同性同士での話じゃないのかな？ 異性で呼び合うのには、もつと特別な意味があるんだよ」

そんな事情をまつたく知るよしもない一誠は、問題を先送りしようと動き始めた。

「例えば、好きあつてる恋人同士とか、な」

「はわわ!? そ、そんな風習があつたのですか!」

一誠は頬を掻きながら、己が思いつく一番の例えを上げる。

「だからな、アーシア。お互いの事を深く知ってから、呼んでくれるようになる嬉しいかな」

「わ、分かりました、イツセイさん」

アーシアは一誠の示した妥協点に同意した。

その姿を見て、一誠は安堵した。

示したのは本心であり、紛れもない心内であつた。

いずれは、目の前の少女と望むような仲になれたらと。

ただし、行き成りという事態は、初心な一高校生には敷居が高かつたのだ。

「これから、末永くよろしくな」

「はいー」

一誠は友情の証に握手を求めた。

応えるように、アーシアもまた手を伸ばした。

「え？」

されど、アーシアがその手を取ることはできなかった。

一誠から贈られたワンピースに鮮血が飛び散る。

目の前の少年が苦悶の表情を向けて倒れてきたのだ

「穢わらしい悪魔から離れなさい、アーシア」

「がふっ!!」

「イツセーさん!?!」

胸間から生える光の槍。

光槍に犯された一誠は、夥しい量の血を吐き出す。

悲鳴を上げるアーシアは、迷うことなく一誠に近づき治療を始めた。

「聞こえなかったの？」

「……いやです、レイナーレさま……」

天より降り立った墮天使に、アーシアは涙を浮かべて首を振る。

少女にとって数少ない友達であり、見捨てると言う選択肢は最初からありはしなかつ

たのだ。

「……やっぱり……夕麻ちゃんは……墮天使だったのか……」

「黙りなさい下級悪魔！ あなたのような下賤な存在と話している暇はないの！」

激痛に蝕まれる一誠は、半眼を開けて墮天使の姿を捉える。

墮天使の正体は天野夕麻。

一誠の初めての彼女にして、レイナーレという名を持つ墮天使であった。

「さあ、帰るわよ、アーシア。わがままを言うようなら、その下級悪魔を消滅させてあげるわ」

「止めてください!! イツセーさんは関係ありません!!」

「関係あるわよ、あなたを連れ去った……人間の仲間なのよ」

ラウルの関係者。

上司からの命令故でもなく、悪魔故でもない。

レイナーレが一誠に危害を加えようとする理由は、その一点のみに尽きた。

「そうね……あなた、アーシアを連れ去った人間のことを教えなさい。ちゃんと話したら、アーシアともども逃がしてあげてもいいわ」

「っ?! だが、ラウルのことを話すかよ……」

レイナーレの厚かましい行為に一誠は嘔み付いた。

一誠にとってラウルは、かけがえのない友であり、命を救ってくれた恩人だ。

そんな存在を命惜しさに売ることなどできなかつた。

「うふふふふ、アハハハハハハ!!!」

突然、レイナーレは狂ったように笑い声を上げる。

「い、一体なんだっていうんだよ!」

「ラウル……ラウルっていうのね、あの人間!」

瞳は狂気に彩られ、憎悪の余り端正な顔は醜く歪んでいた。

「下級悪魔に分かるかしら、この屈辱が。地を這い蹲るしか能のない下等生物が、至高の墮天使たるこの私を地に塗れさせたのよ!! そのくせ、顔も思い出せないときたじやない……ふざけないで!! 私に恥をかかせたこと、泣きわめいてもなお、後悔させてみせるわ!」

ラウルによつてもたらされた敗北。

完膚なきまで叩きのめされ、自身の宿願の為に確保したアーシアまで奪われる始末。

それは自意識の強いレイナーレにとって堪え難いものであった。

相手は見下していた人間でもあり、感情はなお一層のこと暴走を始める。

堪え難い屈辱は、恨みと為り深い憎しみに変わる。

肥大する憎しみは理性の檻を壊して、渦巻く狂気へと変貌した。

その狂気はラウルの名を以つて忘却の鍵を外し、レイナーレに更なる動機を与える。「そう、そうよ……思い出したわ、あの憎たらしい顔。ふふふ、あの澄ました顔を苦痛で歪ませてやるの……アハ、想像しただけで、ゾクゾクしてきちやった。爪を一枚一枚剥いたら……ああ、どんな声で啼いてくれるのかしら？ 身の毛もよだつ恥辱に塗れたなら、あの瞳はどう染まるのかしら？ アハハハハハハハ!!!」

「れ、レイナーレさま……」

「ラウルの奴、とんでもないのに目を付けられたようだぜ」

レイナーレの変貌に一誠たちは怖気づく。

高貴な姿しか知らなかった故に、狂気に堕ちた姿は一層のこと畏怖の念を起こさせた。

「うふふふ……ああ、いいことを思いついたわ」

恍惚の笑みを浮かべるレイナーレは、ひとしきり笑い声をあげると、目の前の下級悪魔を見据えた。

「あなた、あの人間の知り合いなのよね」

「……それがどうした？」

一誠の答えを聞いたレイナーレは艶やかに微笑んだ。

「決めたわ、一誠君。あなたも私と一緒にきてくれない？」

一転して、レイナーレは優しい表情を作る。

心地いい声音を響かせ、一誠を誘惑し始めた。

「っ!? 誰がお前なんかについていくかよ」

夕闇の公園を想起した一誠は反射的に拒否を示す。

天野夕麻は初めての彼女にして、自身を殺した敵なのだ。

ラウルのことに関係なく、着いていく気など微塵も起きなかった。

「そう……なら仕方ないわね」

拒否を示されたレイナーレは深く息を吐く。

彼女にとって一誠など価値の見いだせない存在。

精々、ラウルを引き寄せるエサ程度でしかなかったのだ。

故にレイナーレは両手に神の威光を集め、用事を果たすべく動き出した。

「四肢を腕いでも連れ去ってあげるわ!」

「イツセーさん!」

レイナーレは両手の槍を投擲する。

放たれた二筋の光の刃が、一誠の四肢に向けて殺到した。

「それは無理よ」

一誠とレイナーレの間に漆黒の人影が割り込む。

振るうは鈍色の魔剣。

魔力を纏った刀身は神の威光を振り払う。

流れる身のこなしで、飛翔する光槍を一閃にて叩き折ったのだった。

突如として現れた乱入者にレイナーレは顔を歪めた。

その墮天使を見据えた乱入者は、剣を掲げて高らかに名乗りを上げた。

「ラウンド・オブ・マーセナリー円卓の黒騎士が騎士、マスター・ルチア！ 友の危機を悟って、ただいま参上！」

蒼銀の髪を揺らす少女は颯爽と、一誠たちの危機に登場したのだった。

十二話 蒼銀の騎士

「……る、ルチアさん？」

一誠たちの危機に現れたのは、黒一色の装束に包まれた少女。襟に刻まれた黄金の薔薇。

左腕は肘まで制服の袖に覆われ、肩口には薔薇に加えて、十字架を携える二頭の黄金龍が踊る。

対照的に右の袖は肩口で切られて、晒す二の腕から先は、指ぬきの布手甲が病的な肌を隠していた。

慎ましい左胸の上には、舞い落ちる銀灰色の六羽が親い者を指し示していた。

「は〜い、アーシアのお友達のリチアさんよ」

公園の景色が移り変わる。

空を覆う霞によって日差しが遮られ、辺りにもやが立ち込める。

景色が変わる中、呼ばれたルチアは片目閉じて、一誠たちに目くばせを送った。

漆黒の騎士服を纏った少女は、お茶目な仕草をする間に公園一帯を霧で囲ったのだった。

「……やっぱり、あの人間には仲間がいたのね」

ルチアの登場にレイナーレは忌まわしげに顔の皺を深める。

手に新たな銃を創り出すと、少女の背後にある林へと合図を送った。

「ミツテルト！ カラワーン！」

「ほいさ！ レイナーレ姉様のために、ここでタヒつちやつて」

「待機して、正解でしたね」

林から飛び出したのは、レイナーレの配下の墮天使。

光を携え、死角になっている背後より、奇襲を敢行した。

「ルチアさん、危ない!？」

墮天使の影に気付いた一誠は、ルチアに危険を知らせる。

同時にレイナーレも総攻撃に参加した。

四条の光の悪意がルチアに迫る。

「甘いよ、墮天使さん！」

一誠が警告を発する以前から、墮天使たちの存在に気づいていたルチアは、迫る光の悪意に冷静に対処する。

半身になりながら、正面から放たれた二本の槍に剣先を当てる。

右の槍を弾きカラワーンへと。

左の槍を掬い打上げ、ミッテルトに向け受け流した。
細腰より流れる黒布が翻る。

ルチアは身体の流れを殺さぬまま腰を捻って、迫る二条の光を迎え撃つ。
振り向き様の一撃にて光刀を断ち切った。

「羽よ——」

そして、目前まで迫った槍に対して、ルチアは起源を解放する。

魔剣に込められし力を前に歪曲する空間。

ルチアが振るう魔剣は、容易く迫る光を絡め取った。

「キャッ!?!」

「ぐふっ!! なんだと……!?!」

一方、受け流された光槍は墮天使たちに牙を剥く。

片や翼を掠め、片や深々と胴を貫かれる。

「まずは「羽ね」

」

ルチアは致命傷を負った墮天使に躊躇なく止めを刺す。

残るは一条の光芒。

振るう魔剣から、絡め取った光が矢と為り射出される。

「か、カラワーナ!?」

悲鳴を上げるミツテルト。

脳天を貫かれた墮天使は、断末魔を上げる間もなく地に墜ちたのだった。

「あ」

「戦場で気を抜くなんて……余りにもお粗末なのね」

背後から響く鉄閃。

ミツテルトの首筋から血潮が溢れ出す。

墮天使の最期を看取ったルチアは、魔剣を振るい鮮血を落とすのだった。

「カラワーナ!? ミツテルト!?」

「ごめんね、墮天使のお姉さん。わたしたちへ喧嘩を売った相手に、情けを掛けるわけにはいかないんだ」

「いや……そんな……」

力差は歴然であった。

ルチアは誰にも気づかれずに、背後に回りミツテルトを屠ったのだ。

力の一端も理解できないレイナーレに、抗う手段など残されていなかった。

「……遺言があるなら聞いた上げるよ。ラウのこと相当恨んでみたいだし」

手癖の悪い麗人のこと。

きつと、目の前の墮天使にも、何か仕出かしたのだろう。

可哀想に思えたルチアは、せめて遺言をラウルに伝えようと思ったのだった。

「ゆ、遺言なんて……至高の墮天使たる——っ!? そ、そうよ! こんな真似をして、アザゼル様やシエムハザ様が黙っていないわよ!!」

「三下の言うセリフは聞き飽きたわ。結局の所、みんな同じなもの」

虚勢を張るレイナーレに、ルチアは嫌気が差した。

危機に陥れば、他人の権勢を笠に着る。

追いつめられているのは理解できるが、自身の力で乗り越えようとする気概はないのか。

もう少しは、困難に立ち向かおうとする意思があつてほしいところだった。

「少しは自力で抗ってみなさい」

一陣の風吹き抜ける。

ルチアは敵対者たるレイナーレを討つべく、血の気盛んに黒革の編上靴で地を蹴つた。

「くっ!?!」

必死に抗うレイナーレ。

二柄の槍を創り出して、空へ逃げる時間を稼ぐ。

されど、追うは蒼銀の騎士。

一振りの魔剣を以って槍を打ち払い、脚を奔る魔力を以って空へ跳び上がる。

「これで終わりよー！」

ルチアは空を蹴りあげ、爆発的な跳躍を成し遂げる。

音に迫る速度を剣に乗せ、レイナーレへ止めの一撃を放つ。

「い、いやっ!? イッセーさん!?!」

突然響いたアーシアの悲鳴に、ルチアは素早く反応する。

宙にて身体を捻り、自身に向けられる悪意に向けて、魔剣を振るっていない左手を翳す。

織り成すは水の矢羽。

迫る無音の凶弾に向け撃ち出す。

水矢は祓魔弾を呑み込み、射手の体勢を崩す。

しかし、想定外の敵に対処したこともあり、振るう魔剣は足を軽く切り裂くに留まる。

音速のまま斬り抜けたルチアは、反転して無理な体勢を立て直す。

追撃を掛けることも可能であったが、止むを得ずレイナーレを空へと逃がすことになった。

「ちよー! あのお嬢ちゃん、ばねえんすけど!? 普通は、脳みそぶちまけて、おっちゃん

じゃうとところでしょ！ それがなに!? 頭の後ろにでもお目目がついてんの!? あの体勢から、魔法を放つなんて……ぼくちん自信無くなっちゃうじゃん!!」

ルチアの邪魔立てをしたのは、白髪の若い神父。

足元には、背中を赤に染めた一誠が呻き声を上げ、片腕には力ないアーシアが抱かれていた。

「よくやったわ、神父。帰ったらご褒美を上げちゃうわ」

「よっしゃー！ 天使さまから見返り頂いちゃいました。やったね！ それじゃあ、速く帰りましょ！ つと!!」

傍らにレイナーレが舞い降りる。

神父から気絶したアーシアを受け取ると、ルチアに向けて嘲笑を浮かべるのだった。嘲笑を向けられたルチアは、その挑発に乗った。

霧へと姿を解かし、レイナーレに強襲を仕掛ける。

「邪魔よ、雑魚神父！」

レイナーレの背後で響いたのは、甲高い衝突音。

ルチアの振るう魔剣を得物を持ち換えた少年神父が、両手の光剣にて受け止めたのだ。

「ああん?! 誰が雑魚だつて！ 頭、湧いてんのか！ このクソビッチ!!」

「……誰がビッチなのかな？」

鏢迫り合いを始めた剣士たちの間で、火花が飛び散る。

「ははん、ホントのこと言われて、頭イっちゃったのね。自覚ないとか、マジワロス。同ジイクでも、喘いでアンアン啼いた方が、俺様うれちい」

「その汚らしい口を今直ぐ閉じることをお勧めするわ。舌を噛み切る羽目になるわよ」
「ビッチが何言ってるの？ 大胆に肌晒しちゃってさ。どう考えても、男を誘ってんしょ！ んんんん、どうせなら、ぱっぱと全部脱いじやえよ。すっぽんぽんでさ！ いつでも、男を迎えられるぜ、やったな！」

少年神父は粘りつく視線で少女の身体を辱める。

衣服の継ぎ目から顔を出しすのは腹部のくぼみ。

裂け目の入ったスコートからはインナーが垣間見える。

股下からすらつと伸びた健脚は膝丈まで覆うものが存在しない。

背面に回れば、大胆に開かれた背中空きの衣服から、肩甲骨や頸椎が顕わになる。

不用意にさらす肌を指摘する少年神父。

聖職者とは思えない下種な顔をして、ルチアの羞恥心を煽った。

「残念だけど、わたしの貞操はそんなに軽くないの。せめて、私より強い人じゃなくっちゃ……ね！」

後ろ手で描いていた魔法陣が発動する。

背後で横たわる一誠を霧と光が包む。

準備の整ったルチアは攻勢を強めた。

右脚を踏み出し、空いた左手で神父の腕を引く。

腕を引くと同時に力を込めて右腕を押し、剣先を倒して首筋を狙う。

細腕からは考えられない膂力に押し負かされた少年神父は、舌打ちをして剣先から逃れようと脚に力を込める。

逃れようと離れる少年神父の下腹部を狙い撃蹴を放った。

直感で気付いた神父は腰を折り、急所に放たれる撃蹴を見送る。

体勢を崩した所に、少女は刃を滑らした。

舞い散る白髪。

得物が空を切る感覚。

首級を狙う凶刃は、驚異的な生存本能を前に躲される。

「うおい！ 掠っちゃいましたよ!? ぼくちんのほつぺに掠っちゃいましたよ!? ってか、容赦ねえ！ 思わず俺様ちびっちゃいっ!?」

「随分と余裕ね！」

頬を切り裂かれながら、どうにか刹那の防戦を乗り切った神父。

されど、ルチアの攻勢から逃れることは叶わない。

神父の勝ち得た間合いを、少女は僅か一步で詰める。

繰り出すは怒涛の剣戟。

空を断ち切る斬撃。

風を裂く迅雷の穿刺。

鋭い打突は受ける者の感覚を麻痺させる。

「タンマ、タンマ!! お姉さん激し過ぎ! このままじゃ、ぼくちゃんが先にイツちやう」

「……待つわけないでしょ!!」

気合一閃。

ルチアの振るう魔剣が、神父の持つ光剣を纏めて断ち切る。

振るった腕をたたみ、魔剣を腰だめに構える。

穿つは心の臓。

神父に止めを刺すべく構えた時、視界の端で堕天使が動いた。

「今の内に立て直しなさい!」

ルチアは手首を返して構え直し、迫る光槍を打ち払う。

追いつめたところで、またしても邪魔が入ったのだ。

「めっちゃ、サンクス!! 天使さま、ちよー美人!! ぼくちん、惚れちやいそう」
「いいから早く引きなさい!」

レイナーレが作り出した一瞬の隙に、神父はルチアの間合いから離脱する。

離脱を許したルチアも、向こうにアジアがいることが枷になり、追撃することはなかった。

「あくあ、天使さまの祝福を受けた剣がボツロボロ。マジありえねんですけど!? お姉さんなにも? やっぱり、あの時のお姉さんのお仲間さんなのでしょいか?」

見るも無残な姿になった光剣を見せ付ける。

光の刀身は弱々しく点滅を繰り返し、柄頭は斬りとられて傷だらけの姿を晒す。

「ラウのこと言っているのならそうよ」

ルチアは律儀にも足を止めて答えた。

お姉さんと言うのが、ラウルのことを指しているのなら間違えないと。

「へえ、じゃあ、俺様が顔を思い出せない原因を知ってたりするんでしょかね?」

「あなたが馬鹿だからじゃないの? 髪も真っ白だし、脳も老けてるのね」

好き放題言ってくれた神父を嘲り返す。

本当のことを知ってはいるが、わざわざ教える必要もなかったのだ。

「……言いたいこと、言ってくれんじゃん! いいぜ、お姉さんに切られたこの胸の傷の

分まで、あんたをギツタンギタンにしてやんよ!!」

「キャンキャンキャンキャン、よく吠える犬こつろね!」

感情を剥き出しにした罵り合い。

神父が懐から新たなる得物を取り出したのを合図に、二人は再び剣を交える。

「お姉さん、アーシアちゃんのお友達なんだって?」

「……分かつているなら、アーシアを返しなさい。これ以上、痛い目に遭いたくなかったら……ね!」

神父は身軽な動きで掴みどころのない剣技を見せる。

攻め立てるルチアは、流れを止めることなく動き続け、瀑布の如く雪崩を打つ。

飛び散る火花。

幾多もの剣戟が響き、鉄の調べを奏でる。

「はっはん! ビッチのお友達はビッチってな! お似合いだぜ、お二人さん」

下種な笑い声を上げて、アーシアまでもを罵り始めた神父。

彼の物言いはルチアの琴線に触れてしまう。

「……いいよ、少しだけ本気を出したあげる——羽よ、重枷より解き放て」

「刃に魔力が集まっていますけど、もしかして、俺様ピンチ!?」

刀身を迸る蒼銀の魔力。

神父はその光景に目を奪われるも、真価は別のところに現れる。

ルチアが携える細剣に込められた起源は重力。

掛かりし星の枷から、自身を解き放つ。

身体は自然に浮くほど軽くなるが、四肢の生む爆発力は依然とする。

翼の祝福を受けたルチアは、緻密な重力操作を以って相対した。

「つ!?! 結界が破られた!?! どうして!?!」

辺りに響いた金切り音。

公園の周囲を覆っていた霧が晴れる。

魔剣を構えていたルチアは、突然の事態に悲鳴を上げた。

張っていたのは、結社でも信頼の高いもの。

同じ結社の中でも、破れる者は数少ないはず。

その結界が無慈悲にも音を立てて破られたのだ。

「よく分かんないけど、撤退するわよ!」

「じゃあな、クソビッチ! あのクソアマにもよろしくな!」

当初の目的であった、アーシアの奪還を成し遂げたレイナーレ。

引くのは癪だが、仕返しは至高の力を手に入れてから。

英断を下して撤退を始める。

「逃がすわけないでしょうが！」

蒼銀の魔力を纏ったルチアは、爆発的な加速を以ってレイナーレたちに迫る。

「時間を稼ぎなさい！」

レイナーレの一声にて、神父服を着た男たちが現れる。

何処からともなく湧いて出た神父たちが、ルチアの道を阻んだのだった。

「邪魔よ！ どうせ死ぬんだから退きなさい！」

ルチアが展開するは五十を超える魔術。

万が一の為に編んでいた神秘の贋作を解き放つ。

荒れ狂う超常現象。

魔力が火炎、氷柱、雷撃、水刃と化して、ルチアの前方を埋め尽くす。

放たれた魔術は神父たちをも呑み込み園庭を蹂躪した。

「くっ！ 逃げられたっ!!」

しかしながら、魔術の奔流はレイナーレを捕らえることはなかった。

担がれていたアーシアを傷付けぬために、威嚇程度にしか放てなかったのだ。

結果、レイナーレたちを転移させてしまったのであった。

「あ、アーシア……」

「っ！ 動いちゃダメだよ一誠君！ 直ぐに手当てするから！」

繭を作るが如く渦巻く濃霧の中から、一誠の声が響く。

呻き声を上げる少年の状態を思い出したルチアは、目頭を拭うと急いで駆け出した。

* * *

「疲れただろ……後は任せて、休んでいなさい」

ルチアの張った結界が、何者かによつて破られたことに気付いたラウルは。即座に転移した。

服を血で染め、呻き声を上げる一誠。

傍らで魔術による治療を施すルチアは大粒の涙を流していた。

飛び散った血痕。

千切れた手足。

辺りを見回すと、到る所で血の花が咲いていた。

また、血だまりに沈む骸の中には、堕天使の姿も見えた。

敵影が見えないことから、戦闘後だというのが鑑みえた。

ルチアに事情を聴き、一誠の治療に手を貸す。

断片的な情報から、言の顛末を悟りアーシアが攫われたことを知る。

治療が終わると、後から転移してきたリアスに断りを入れて、ルチアを抱え自宅に帰ってきたのだ。

「で、でもー！」

「私に任せておけ。目が覚めた時には、全て終わっている」

ラウルは安心させるように優しい笑みを作る。

目を腫らし不安そうな表情を浮かべる少女の頭の上に、やんわりと手を置いて心を休めて安静にしておくように促した。

「うう、アーシアの柔肌に傷一つでも付いていたら、噛み付いてやるんだからー！」

唸り声を上げていたルチアは葛藤の末、大人しくして居ることにした。

為すと言いつつ切った目の前の麗人にアーシアを託すことにしたのだ。

「それは……ご褒美か？」

調子の戻ってきたルチアを見て、ラウルは不敵な笑みを浮かべた。

「あ、あ、あ、あ、あ」

「あ？」

「あほラウ!! 馬鹿ちゃん!! ド変態!! ラウは、血を吸われて喜ぶようなマゾだったんだね!!」

ルチアは不敵に笑うラウルに心を乱される。

怒りと羞恥のあまり顔を真っ赤にして、茶々を入れるラウルの態度を激しく罵り上げた。

「あの感覚はなかなか癖になるぞ。それに、私が変態だと言うのなら、貴方の方が変態――」

瞳に嗜虐の光を灯らせたラウルはあらぬことを口にする。

これ以上喋らせてはいけないと経験則から悟ったルチアは、強引にラウルの唇を塞いだ。

突然の出来事にラウルは目を見開くが、蹂躪されるのを受け入れた。

ルチアの深紅の瞳に見合わせる淡蒼の瞳は笑っており、むしろこの状況を楽しんでいますらいた。

「ん。……少しばかりだが、風情が足りなくなかないか？」

「う、うるさいー！」

自然と離れる折り重なっていた影。

離れてなお見つめ合う彼らであったが、ラウルが口から零した言葉により甘い雰囲気
が崩れ去る。

それは、言葉のナイフ。

凶刃と化して、容赦なくルチアの心を抉った。

「ちやんとアーシアを連れて戻つてきてよね！ ラウも怪我しちやダメよ！ 絶対！ 絶対だからね！」

心を抉られたルチアは気を沈めることなく、ラウルに声援を送った。

先程の言葉はラウルがからかっただけのこと。

証拠に目も口元も笑っており、頬にも赤みが差していた。

そのことを惑わされることなく見抜いたのだ。

付き合いが長く、心の機微を捉えることのできるルチアだからこそ、できる芸当であつた。

「ああ、乙女の祝福を受けたのだからな。きつちりと、やり遂げて見せるさ」

ラウルは唇に指を当てて応えた。

もちろん、口元を歪めるのも忘れない。

「も、もう！ アーシアをちやんと連れて帰りなさいよおおおおお
!!!!!????」

全身を羞恥の色で染め上げ走り去っていく。

その姿からは憑き物が取れて、一時的でも元気を取り戻していた。

「まったく、恥ずかしいならやらなければいいのに。行動が大胆な割には、初心なやつだな、ほんと」

ラウルは非常ににこやかな顔でルチアを見送った。

ルチアの姿が完全に見えなくなると真顔に戻り、アーシア奪還の準備を始める。
為すは招集の円陣。

魔法陣を描き、任を課していた使い魔を呼び寄せる。

「調べはついたか、黒歌？」

「にやん。もう少し、ロマンチックな呼び方はできないのかにや？」

魔法陣より召喚に応じたのは、悪戯な笑みを浮かべた艶めかしい女性。

着崩した夜色の着物からは豊満な胸部がラウルを誘う。

頭上で動く獣耳は、彼女が人外であることを足らしめた。

「別の機会にな。いまは忙しいんだ」

「ルチにやんとは、あんやに熱々のキスをしたのに、なにいつてんのよ？」

軽くあしらおうとするラウルに、黒歌と呼ばれた女性は待ったを掛ける。

ルチアとの情事の後に何を言っているのかと。

気配を消して、辺りで覗き見をしていたのだと悟って、ラウルは天を仰いだ。

ならば、先ほどの意趣返しに似た言葉の意味も納得できる。

「……………」

光る黄金の瞳は獲物を捕らえて離さない。

ラウルは無言の圧力に屈し、黒歌の頬に唇を落とした。

「これで手打ちにしないか？」

「嫌にやー、最近ご無沙汰だったから、身体が疼くのよー」

理性を溶かそうとする妖気。

首筋に回された細腕。

開けた着物から覗く豊満な胸を押し付ける。

満足しない黒歌は身体をすり寄せ、妖艶な仕草で訴えかける。

「報告を寄越して貰おうか」

「そんなにや……ご無体にあや！ けちん坊なラウるんには、教えてあげないにあや！」

相手にされなかった黒歌はそっぽを向いて不服を顕わにする。

ラウルは黒歌の態度に、抱き付く身体を押しつけることで対応する。

黒歌を引きはがしたラウルは肅々と準備を始めた。

「ちよつと！ どこに行くつもりなのよ!？」

身に付けるは漆黒の騎士団服。

上半身は顔と指先を残し皺一つない礼服に覆われる。

スカートの膝丈まであり、膝より下は太腿から覆うソックスが防護する。

ルチアの纏っていた制服とは違い露出はほとんどない。

女装している以外、遊びのない戦闘服であった。

魔法により一瞬で戦闘服に着替えると、虚空より片割れの仮面と鴉羽のローブを取り出した。

「教会に忍び込むつもりだが……何か問題か？」

「問題あり過ぎよ！ 調査の報告を聞かないつもりにやのかにや!」

「報告するつもりがないのだから仕方あるまい」

仮面を付けたラウルは、黒歌の言い分を一蹴した。

調査しても、報告する気がないのでから、これ以上の問答は無用であった。

「それに、別筋からすでに裏付けは取れているからな。黒歌の報告は必要ない」

ラウルの情報源は探りを入れさせた黒歌だけではない。

仔細は分からないにしろ、墮天使たちが立てた計画を把握していたのだった。

「ほ、骨折り損にや……私のこの数日って………一体にやんだつ!」

黒歌は膝を着いて打ちひしがれる。

ここ数日、野外で寝泊まりした苦勞。

監視のため、教会から離れられず、まともな食事にありつけることもなかった。

その苦行がすべて水の泡と化してしまったのだ。

あまりに酷い仕打ちに黒歌は、断固として抗議の声を上げようとする。

しかし、その言葉はするりと割って入って来た影によって紡がれることはなかった。

「そんなことはないさ。黒歌が私の心配をしないのは、深刻な問題がないと言うことだろ」

「にやにや、不意打ちは卑怯なのよー」

気配を感じさせずに唇を奪ったラウル。

黒歌の輪郭に指を当てて上を向かせ、逃げられないようにして目を合わせる。

真剣さの帯びた表情で、誤解をする黒歌を口説き始めた。

「実地でのフイーリングは、作戦決行において重要事項だ。誰かが遂行しなければならぬ任務に間違えない。その点、隠密行動に優れた黒歌は重宝しているぞ」

作戦の手始めに行われる偵察任務。

敵陣に乗り込んでの潜入調査。

それらは単独で危険の伴う役目であった。

危険な役目を成し遂げる黒歌の有能さをラウルは語る。

「もちろん、私的にも傍にいてほしいと思っっているよ」

また、黒歌のことを家族としても慕っていた。

時には、姉分として皆を見守る。

時には、恋人のように甘えてくる姿。

多彩な顔を見せる彼女のことを気の置けない存在として、大切に想っている。

仮面を外すと、ラウルは甘い顔をしてその思いを口にした。

「……この女殺し……ラウるんは、ほんとひどい人じゃ」

よよと泣き真似をする黒歌。

そんな彼女にラウルはもう一度、唇を落とした。

「愛しい娘ほど、愛でたくなるのは、人として当然の道理だろ？」

「そうやって、甘い香りに引き寄せられた乙女を手折っていくのよね……ラウるんは、ほんとうしようもない人じゃ」

肩を竦めながらも、にやけた口元を隠し切れていない。

ラウルの行動に現金な猫娘は機嫌を直したのだった。

「報告するようなことは特になかったか？」

機嫌を良くする黒歌に問い掛ける。

「ん、近くに上級悪魔が一体、鳥の使い魔が一匹、墮天使っぽいのが一羽いたぐらいなのね」

「上級悪魔？ グレモリー家のお嬢様のことか？」

不穏な勢力が動いていることをラウルは知っていた。

墮天使っぽい何かの正体に関しては素性を知っており、あるとすれば小石を投げてるくらいのこと。

使い魔に関しては、主従の繋がりを迎れば済む話。

問題はこの上級悪魔であった。

二人の公爵令嬢が納める地に現れた、三体目の上級悪魔。

妙に引き際が良く、顔すら表さない。

襲撃を掛ければどうともなるが、この地に居たいラウルとしては悪魔とことを構えるべきではない。

おそらく、墮天使っぽい人物と繋がっているのではと、ラウルは見ていた。

ラウルは黒歌の推測を聞くために、敢えてリアスの名前を出したのであった。

「違うのよ。アスタロトの紋章だったのにや」

「現ベルゼブブの家系か……あの家系は代々、好色などところがあるからな……異端視された聖女でも、見にきたか」

アスタロト。

かつて女神とされながらも、聖書の神が侵略したことによって悪魔へと落とされた一柱。

また、座天使の長であったともされ真偽は定かではない。

その本質は怠惰とも、野蠻とも、淫乱とも言われた悪魔であった。

ラウルから見た印象は好色であり、堕ちた聖女の存在を探りに来たところで可笑しく

はなかった。

「なににせよ、辺りを五月蠅く飛ぶようなら、叩き潰すしかあるまい」
敵対者は葬り去る。

これがラウルの所属する結社の不文律であった。

それを破った結果、墮天使にアーシアを奪い返される事態に発展してしまったのだ。ただ、ラウルは後悔していなかった。

一時とは言え、少女の想いを汲むことができたのだ。

誉れこそすれど、嫌悪するようなことではなかった。

アーシアを容易に連れ去られたのは失態であったが。

己のためにも、友好を築いた者たちのためにも、アーシアは無傷で連れ戻す。

その邪魔立てをしようものなら、例えば上級悪魔であろうと葬る腹積もりであった。

「なにをしている黒歌?」

「私も付いて行くのよ」

ラウルは自身と同じ、闇色のローブを身に纏う黒歌に問い掛ける。

問われた黒歌は可愛らしく瞬きする。

「小猫……白音が心配なのは理解できなくもないが、貴方が見つかるの色々拙いだろ」

「む。悪魔なんか、見つかるはずないにや! ラウるんは私を侮り過ぎよ」

軽く頬を膨らませる黒歌に、ラウルは首を振った。

「それよりも、ルチアの世話をお願いできかないか？ 日中、動き回っていたようだから。私のためにも、あれが無茶しないように見ていてほしい」

心に引つ掛かるのはルチアの様子。

任せると言つたものの、彼女がじつとしていられる性分でないのは、よく知っていた。故に黒歌に付いてもらえないかと申し出た。

「仕方がないにや……その代わり、主様の言うことをきつちりこなす飼ひ猫に、ご褒美を留意してほしいのよねー」

事情を察した黒歌は主の願いを聞き届ける。

ただし、対価が欲しいと悪魔的な笑みを浮かべ、上目遣いですり寄つた。

「……猫飯が御所望か」

「流石、うちの主人様は猫心がよく分かる……つて、違うにやー」

ラウルの冗談に危うく流されかけた黒歌。

どんな場面でも悪戯を考えるのは、ニヒルに笑う麗人の切れ味だった。

「生憎だが、子作りはしないぞ。マリナに殺されかねんからな」

「にや、ラウるんのいけずー。男の娘でも、据え膳に手を出すくらい在意気地を見せてほしいにや」

祖国に置いてきた一人の女性を思い浮かべてラウルは肩を震わせた。

決して嫉妬深いわけではないが規律に厳しい。

もしも、彼女との約束を破れば、如何な処罰を下されるか分かったものではなかった。

「せめて、二年待つてくれれば助かるのだが」

「幾ら抑える術を持つているからって、身体に悪いことには変わらないのよ」

「迷惑を掛けるな」

「ほんとはだにや……その分、まぐわる時はしっかりしてもらおうつもりよ」

黒歌の金目がギラギラと輝いているのを見て、ラウルは苦笑いを浮かべた。

「それでは、往つてくる。ルチアのこと頼んだぞ」

「任されたのよー。夕食作つて待つているから、早く帰つてきてほしいにや」

ラウルは仮面に隠されていない右目を閉じて応えようと、転移の光に消えたのだった。

十三話 討ち入り

「肝心な時に繋がらないじゃない！ もう！」

「会長にも確認して頂きましたが、彼の所在は分からないようです」

旧校舎の一室にて、喚き声が響いた。

声の主はリアス・グレモリー。

象徴たる紅の髪を振り回して、不満を顕わにしていた。

事の発端は、昼間に結んだ協力関係。

今までのように、リアスが一方的に押し付けるものでもなく、ラウルが気ままに手を貸しす訳でもない。

書面による四角四面の契約であった。

契約に基づき緊急時の連絡を行おうとしたのだが、応答はなかった。

そのことが不興を買っているのだった。

「本当にどこに行ったのかしら？」

「……案外、単独で教会に乗り込んでいるのかもしれませんがね」

「あり得そうで怖いわ……」

保護対象を攫ったことに難癖を付け、堂々と教会に乗り込む麗人の姿が目には浮かぶ。

「リアス……そんなに心配なら行きましょう」

「ダメよ！ 私まで出向いてしまつては、お兄様にご迷惑が掛かるもの」

落ち着きのないリアスに、朱乃がそつと声を掛けた。

ラウルに知らせようとしたのは、一誠たちのこと。

アーシアを取り返しに教会へ討ち入りを仕掛けようと言うのだ。

自身の生まれと、悪魔社会のことを考えると動くことができない。

ただ、真剣な眼差しに負けて許可を出してしまった手前もあり、眷属の心配をして手を打ちたかつたのだった。

「うふふふ」

「なにが可笑しいの、朱乃？」

半眼をして、自身の片腕である朱乃を睨んだ。

「ラウルくんはきつとこうなることを読んでいたのですね」

睨みを利かせる主に朱乃は一纏めの書類を差し出した。

「っ!? これを……どこで……っ」

リアスは目を剥いて驚きの声を上げた。

手にするのは、近辺で活動する墮天使たちの調書。

出生や経歴などの素性に始まり、ここ近年の活動内容、墮天使としての能力などが事細かく記されていた。

中には墮天使幹部が連名で発行したと思われる文書まで存在していた。

「イツセーくんを迎えに上がった時にですわ。どうやって、こんなものを手に入れたのやら」

その様子を見ながら頬に手を当てる朱乃。

悩ましい声を出しながらも、ラウルと言う末頼もしい味方を手に入れことを喜んでいようだった。

「後で聞いても……答えるわけないわね」

リアスも朱乃に同調して深く息を漏らす。

何度、思い浮かべようとも、麗人は不敵な笑みを浮かべるばかりであったが。

「いいわ、行きましょう！ 朱乃、ジャンプの準備をして」

「了解しましたわ」

最早、墮天使たちの不義が分かった以上、リアスを止めるものは何も無い。

朱乃に命じて、攻め入る準備を始めた。

「待ってなさい墮天使レイナーレ！ 私の管理地で好き勝手したこと、後悔しながら消飛びなさい」

教会に在るであろうレイナーレに向けて宣告する。
リアスの瞳は決意の紅で彩られていた。

* * *

暗雲が垂れ込める小夜。

知らぬうちに、先陣を切る事になった一誠たちは、古びた教会前の茂みに潜んでいた。

「ラウルの奴、何処に行つたんだよ……まさか?! 捕まつてるんじゃないだろうな」

ラウルが出ないことを確認して、通信機を納める一誠。

悪態を吐く中、ふと最悪の展開が頭を過る。

狂気を宿した一誠の元彼女。

ラウルを捕まえる為には手段を選ばないだろう。

救出にきたラウルに対して、アーシアを人質に使う光景が容易に想像できた。

「それはないと思います」

「小猫ちゃん?」

静かに口を開いた小猫は、一誠の懸念を否定した。

「ラウル先輩が捕まっているところなんて想像できません」
「確かに……」

大胆不敵な幼馴染。

例えアーシアが人質に取られた所で、捕まる振りをして、騙し討ちぐらいはやつてのけそうであつた。

「さあ、行こうか兵藤くん。援軍が期待できない以上、留まつても仕方ないからね」
腰の剣を鳴らして佑斗が勇み出た。

顔は強張り、瞳には憎悪が渦巻く。

隠し切れない魔力が身体から立ち昇り、覇気と悪意が狂熱となりて吹き付ける。

「それにラウルくんが捕まっているなら助けなきゃ……ね！ つと、ごめんね。アーシアさんを助けにきたんだつたね」

「木場……」

思わず息を呑んだ一誠であつたが、その言動に何とも言えない様子で見ることになる。

「イツセー先輩の変態がどんどん広まっています……」

「違うよ、小猫ちゃん!? 俺のせいじゃないからね!!」

一誠の変態が、ラウルに、佑斗にうつつたのだと、小猫は白い目をして糾弾した。

無実の罪を擦り付けられそうになった一誠は、必死に否定するのであった。

「凶面は頭に入ってるよね」

一誠たちの姿に絆された佑斗は表情を和らげた。

「入ってすぐの聖堂にある祭壇から、階段を下りて地下の祭儀場まで一直線だったよな！」

「うん、そうだよ。そこでおそらく、儀式が行われているからね」

最終確認を終え、遂に教会への討ち入りが始まる。

「皆、準備はいいかな？」

「おう」

「……はい」

佑斗を先導に彼らは正面より侵入する。

入口の扉を僅かに開ける騎士。

空いた隙間に拔身の剣を差し入れ、反射により聖堂の様子を確認する。

「見通しよし。聖堂には誰も居ないみたいだね」

刀身に映るのは静かな祈りの間。

人気一つない様子に、神父たちは地下で待ち構えているものと断定した。

「待つてるよ、アーシア！」

「いま行くよ、ラウルくん」

勢いよく開けた扉の向こうに、男子二人が勇み足で踏み入れる。

雲の切れ間より光が差し込み悪魔たちを照らし出す。

それは今宵の宴の参加者を歓迎しているかのようだった。

「とっころがぎつちよん!!」

月の祝福に同期するかのようになり、覆いかぶさる人影。

咆哮を上げ、天井より降下する神父の洗礼が襲いかかる。

「っ!? 下がって、兵藤くん!!」

「ふ、フリード!?」

「やあやあやあ。ご対面だね! 再開だねえ! 俺、感動してきちやっつたよ! 悪魔くんは名前を憶えられてるなんてな! ホント涙が出てきそうですよ。もちろん、悲哀の涙でござんすが」

佑斗が前に出て神父の剣を受け止める。

奇襲を防がれたフリードと呼ばれた少年神父は下種な笑みを浮かべた。

「兵藤先輩」

「ああ、そうだったな! セイクリッド・ギア!!」

『Boost!!』

子猫に促されて一誠は左手を掲げた。

翠緑に輝く左腕。

神器の輝きが止んだ時には、赤き籠手が装着されていた。

同時に、籠手の宝玉から機械音が流れる。

部室を出る前にリアスより受けたアドバイスの一つ。

それは、一誠に宿る赤龍帝の籠手の使い方だった。

「天井の梁から奇襲だなんて……はぐれ悪魔狩りは、何でもやるんだね」

「最近、連敗！ 連敗！ こうでもしなきゃ、やってられねえんつすよ!! あのお姉さんたち、ちよー強かつたんですよ!! って！ ふざけんな!! なんて俺様が二度もやられなくちゃならないんだよ!! そのクソ悪魔をぎゅちゅんする時に、邪魔した糞アマは思い出せねえし!! 尻を振っていたあの蒼銀の髪の毛のクソビッチにはボロボロにされるし！ あくムカつく！ チョーむかつく!! このフラストレイションを解放するぜ！

俺様!!」

フリードは罅迫り合いをすることなく、佑斗から距離を取った。

彼が思いだすのは先日の二戦。

ラウル一派に味わされた屈辱の傷痕であった。

「蒼銀の……髪?」

「そう！ 尻軽姉ちゃんの蒼髪！ あれが頭の中でちらちらと揺れるたびに、ぼくちん達しちやいそうになるのです!!」

佑斗はフリードの言葉に目を見開く。

食い付いたのは、ラウルではなくもう一人の女性のこと。

普段なら口汚い神父に注意を行うのだが、頭の中を埋め尽くす思考に、そのような余裕の一つもなかった。

「……その話、もう少し聞かせてくれないかな？」

「いいぜ！ た・だ・し！ その首と引か替えだけだな!!」

『Boost!!』

険むな雰囲気を纏って問い質す佑斗。

フリードは剣を以ってして応えた。

「いきなり斬り掛かってくるなんて、ひどいね」

「なに防いでんだ！ 『騎士』^{ナイト}くん!! おかげで、頭が爆発しちやいそうですよ！ ストレスが溜まり過ぎて、溜まり過ぎて……憤死してしまいそう」

打ち捨てられた聖堂に響く甲高い衝突音。

フリードは防がれたことに腹を立て、瞳に怒りを映した。

「それは困るな……最悪、達磨の状態にしても、吐いてもらうことにしよう」

佑斗が振るう剣が闇に染まる。

それは以前に、ラウルとの戦いで見せた魔剣。

『ホーリー・イレイザー光 喰 剣』であつた。

「今、流行のヤンデレっすか!? それに神器持ち!? もしかして……もしかしなくても、俺様流行に乗り遅れてる!?!」

佑斗が神器を出したことにより、神父は狼狽を顕わにする。

「小猫ちゃん、木場が言っている蒼銀の髪的女性つて……」

「はい、間違えないかと思ひます」

『Boost!!』

着々と力を溜める一誠には心当たりがあつた。

なにせ、自身を救つた騎士。

感性豊かな彼女は蒼銀の髪を揺らしていたのだ。

「喰われてる! 喰われてる! 俺様大ピンチ!? ……なんちつて」

闇が光を喰らい浸食を始める。

得物を無力化されて、慌てふためくフリードであつたが、一転して嘲る。

「ぐっ!」

「木場っ!?!」

左手で隠し持っていた短銃を抜き、佑斗に突き付けて引き金を引いた。死角から放たれた祓魔弾は佑斗の脚を貫く。

身体を奔る激痛と不意を打たれたこともあり、踏ん張りが利かず佑斗は体勢を崩した。

不覚を突かれた佑斗は死に体を晒した。

決定的な隙を晒した悪魔に、神父は勝ち誇った目をして裁きを下す。

「隙ありー。悪魔くんの首をちょん——」

「……させません」

絶体絶命の佑斗を救うべく、一誠たちが動いた。

舞う長椅子。

それはフリードの行動を妨害する為に、小猫が投げつけたものであった。

「うおい!? なに邪魔してんだ! この糞チビツ!!」

「……チビ……」

フリードは堪らず佑斗から離れる。

いくら凄腕の悪魔祓いとて人間である。

圧倒的質量を持つ小猫の一撃に、後退を余儀なくされたのであった。

『Boost!!』

「木場から離れろ！ このクソ神父!!」

『Explosion!!』

力強い輝きを放つ宝玉。

浮かび上がる刻印。

外殻が幾つも開き、鋭い棘が飛び出す。

赤龍帝の籠手は武張った姿に変貌を遂げる。

一誠は溜めに溜まった力を解放してフリードに迫る。

「しやらくせえ！ 邪魔くせえ!! 悪魔が粹がつてんじゃねえよつ!!」

フリードは口悪く罵り声を上げながら、降り注ぐ長椅子に対処する。

当然、一誠たちへ祓魔弾による牽制を忘れない。

「プロモーションッ！ 『騎士』^{ナイト}ッ!!」

張られる弾幕の前に、一誠は昇格を成し得る。

「『騎士』の特性。それは比例なき速さ」

「! プロモーション！ 『兵士』^{ボーン}か！」

俊敏な動きを始める一誠。

祓魔弾による弾幕を振り切って、仇敵である神父に迫った。

「幾ら足が速くなっても、先読みできりや世話ねえぜ!!」

されど、所詮は付け焼刃。

百戦錬磨のフリードの前には到底届かない。

「プロモーションッ！ 『戦車』ッ！」

故に一誠は一度、兵士の駒に戻して再び昇格を果たす。

『戦車』の特性は、城塞の如き堅硬な防御力と！」

フリードの張った弾幕に有無を言わず突入する。

襲いかかる祓魔弾は展開する魔方陣が弾き返した。

そのまま一誠は、戦車の特性に騎士の飛翔を上乗せして、拳を振り翳した。

「マジですか……………なんてな!!」

一誠の暴挙に一瞬、気を取られたフリードではあったが、すぐさま体勢を立て直す。

左手の短銃を投げ捨てると、袖口に隠し持っていた光剣の柄を握る。

二振りの祓魔礼装にて、一誠を迎え撃つ。

「やらせないよ」

一誠とフリードの間に割り込む影。

佑斗が光喰剣で二振りの光剣を受け止める。

「砲撃の如き……………ありえない攻撃力だ!!」

がら空きになった腹部を一誠の拳が捉えた。

倍加の力を以って為す、人外が生み出した衝撃。

吐瀉物を撒き散らしながら、フリードの身体は毬球の如く弾かれる。

「背中から切ってくれた分だ!! めっちゃ痛かったんだぞ!」

『Reset』

折り重なった長椅子。

跡形もなくなった祭壇。

石壁は崩れ、外気が流れ込む。

赤龍帝の籠手より機械音が響くと、荒れ果てた聖堂に静寂が戻った。

一誠は瓦礫の向こうへと消えたフリードに、恨みを晴らすことに成功したのだった。

「木場、フォローありがとうな」

「当然のことをしたまで、なんだけど……はあ。これは期待できないかな」

佑斗が見据えるのは、外壁を突き破りフリードが姿を消した方向。

上級悪魔に匹敵するような腕力にて吹き飛ばされ、あちらこちらに身体をぶつけたのだ。

生身の人間では生存は期待できなかつた。

「佑斗先輩……」

「大丈夫だよ、小猫ちゃん。手がかりはきつとあるから」

力なく笑う佑斗に、小猫は首を振る。

「そのことなんです……」

「ラウルの奴が絶対知ってるぜ」

「っ！ ラウルくんが……」

小猫の言葉を継いだ一誠の発言に、佑斗は目を見開く。

「そうか！ ラウルくんが！ 僕のことについて知ってたのも、やっぱり！」

佑斗は納得がいったと言わんばかりの顔を見せる。

あの日、ラウルが告げたこと。

——貴方が背負っているものを知っていると。

今なら、あの言葉の意味が理解できた。

落ち着きを取り戻した佑斗は、薄笑いを浮かべて一誠の向き直る。

「本当に食えないね彼は」

「木場もそう思うか？ きつとアイツは煮ても食えねえぜ」

一誠も佑斗の意見に同意する。

あの麗人は頼りにはなるが、何処が気が許せない。

油断していると、間違えなく掌で踊らされることになるであろう。

「佑斗先輩、足は大丈夫ですか？」

落ち着きを取り戻した佑斗に、小猫が沈痛な面持ちで話し掛けた。
佑斗の右脚に空いた小さな穴。

神父に穿たれた銃創からは血が溢れ、制服を赤に染めていたのだ。

「歩くのは大丈夫だけど、戦闘は無理かな。剣を振るうぐらいならできけど」
「……そうですか」

佑斗は足を動かして、止血が終わっていることを教える。

ただし、身体の中に回る猛毒は、佑斗を蝕んでいたのだ。

「ここからは小猫ちゃんと二人で——」

「ううん。僕も行くよ」

堅い表情を崩さない佑斗を見て、一誠は決断する。

戦力は厳しいものになるが、佑斗をここに置いて先に進むと。

しかし、決意を目に宿した佑斗が一誠の言葉を遮った。

『魔劍創造』の使い方は、これだけじゃないからね」
ソードパース

自身の創り出した魔剣を掲げ、未だ見ぬ力があるのだと誇示する。

魔剣も佑斗の思いに応えて鈍い輝きを放つ。

その覚悟を一誠も、小猫も、確かに受け止めた。

「そっか……頼むぜ、木場。小猫ちゃんも一緒に、アジアを連れて帰ろうぜ」

「うん、ラウルくんには聞かないといけないこともあるからね」

「はい……みんなと一緒に帰りましょう」

アーシアを救出にきた彼らは、それぞれの思いを胸に教会の地下へと踏み出した。

* * *

「いらつしやい、悪魔の皆さん」

祭儀場に突入した一誠たちを出迎える声。

十字架に吊られたアーシアの隣で、レイナーレが不気味に微笑んだ。

「アーシアアア!!」

一誠は祭壇の上でぐったりしているアーシアに、声を張り上げて名前を呼んだ。

「……イツセーさん?」

「ああ、助けにきたぞ!」

「イツセーさん……!」

一誠の登場に気付いたアーシアは瞳を潤ませる。

感動の再開もおさなりにレイナーレが前になる。

「あら、あの憎つたらしい人間たちは一緒にでないのね。いいわ、私が至高の力を手に入れ

た試しに、遊んであげる。生き残ったら、誘き寄せさせるための餌にしてあげるからね。光栄に思いなさい」

「誰が、そんなことを」

アーシアの力を手に入れ至高の存在へと、昇格を果たすつもりでレイナーレ。

彼女は一誠たちを以って、小手調べをすると語る。

その上、生き残ることが出来たら、ラウルに対しての釣り餌として用いると伝えた。厚かましいレイナーレの好意に、一誠が喰って掛かる。

「あなたたちよ、主に見捨てられた下僕悪魔くん」

「部長はそんなことをする人じゃねえよ！ お前と違ってな」

「あははは！ ならなんで、貴方たちの主はここにいないのかしら？」

「部長には部長の都合があるんだよ、きつとー！」

渋い顔をしながらも一誠たちを送り出した彼らの主。

情の深い彼女のことだ。

必ず何かしらの手を打とうとするだろう。

何をするかまでは、一誠には分からない。

それでも、姿を見せない主のことを信じていた。

「まあ、いいわ。いま、儀式が終わるから、おとなしく見ていなさい」

レイナーレが指を鳴らすと、アーシアを拘束する十字架を幾何学的な文字が隙間なく覆いつくした。

「……あああ、いやあああああッ！ 助けて……イツセーさん！」

堪え難い激痛に悲鳴を上げる少女。

アーシアは掠れた声で一誠に助けを求めた。

「アーシアッ!!」

一誠は駆け出した。

心優しき聖女の下へ。

ようやく夢の叶った、か弱き少女の下へ。

ただただ、一誠は駆け出したのだった。

「邪魔はさせん!!」

「悪魔め! 滅してくれるわ!」

「死に逝った者の無念……いまここで晴らしてみせる!」

一誠と祭壇の間。

数え切れないほどの神父が一誠に牙を剥いた。

「どけ! クソ神父ども! お前らに構っている暇なんてないんだよ!!」

一刻の猶予もない一誠としては、神父たちは邪魔者以外のなんでもない。

そんな先を急ぐ彼の下に仲間たちの支援が届いた。

——『魔劍創造』
ソード・パース

魔力を振り絞った佑斗の渾身の一撃。

神父たちは地より出でる劍軍に、腹部を貫かれ血を垂れ流す。

劍の花が咲き誇り、一誠の道を創り出した。

「早くいつてください、兵藤先輩」

「っ！ 待つてろよ、アーシア！ いま行くからな!!」

劍花を越えてくる神父に小猫が対応する。

己の道を創り出してくれた仲間たちの行動に、胸の底から熱いものが湧き上がってくる。

しかし、感動している暇などない。

一誠は力強く右手を握ると、愚直に走り出した。

「いやあああああつああ……!!?」

走り出した一誠の目の前で、心優しき少女の断末魔が上がる。

胸の中から飛び出す翠色の光球。

無情にも、神器を抜き出す儀式は終わるを迎えたのだった。

一誠の顔が絶望に彩られ――。

「ほう……これが『トワイライト・ヒルンゲ聖女の微笑』か」

地下の祭儀場に響くのは不敵な調べ。

アーシアの吊られる十字架の先端にその声の主は現した。

十四話 墮天使レイナーレ

「ほう……これが『トワイライト・ビリング聖女の微笑』か」

十字架に腰を掛ける瘦躯。

鴉羽のローブに覆われ、その表情を見ることは叶わない。

「——っ!? か、返しなさい！」

彼の者が手にするのは、癒しの奇跡。

レイナーレが手にする筈であったそれを手中に収めていた。

「返せとは言いが……貴方のものではないだろ？」

「ふざけないでっ!! それを手に入れるために、私は上を騙してまでこの計画を進めたのよ! どの馬の骨とも知れない者が、横から奪うなんて許されるはずないじゃない!!」

神器を弄ぶ様子にレイナーレが怒りを顕わにした。

長年追い求めてきた『聖女の微笑』。

その神器に宿る癒しの奇跡を以って、同胞たちを見返す。

また、心内に秘めた悲願を叶え、添い遂げるためにも必要であった。

そんな恋する少女が思い描いた、輝かしい未来へと進むための鍵。

未来への足掛かりが、目の前で奪われたのだ。

レイナーレの失望は計り知れない。

失望から生まれる負の感情は、希望を盗み去った下手人へ向く。

憤怒に染まった表情は抑えきれぬ激情に押されて、怒りの色をなお濃くした。

「ふふふ……」

「コソ泥の分際で私を嘲笑っているつもり？」

怒気を高める墮天使を見て、瘦躯の人物は深めに被った黒布に手を掛けた。

「なに、私のことを忘れるなど、酷い人だと思つてな。まあ、一時にも満たない僅かな時

間であつたのだから、仕方がないのかな？」

「あ、あなたは……」

闇夜でもなお輝きを忘れない銀の光沢。

さらさらと流れる絹糸のような長髪は、束の間の幻想を生み出し見る者すべてを虜にする。

口元は不敵に歪み、蒼き双眸は憂いを宿しながらも、奥で妖しく光るのは無垢な邪気。

下手人の正体は鴉羽のローブを纏った銀髪の麗人——八幡ラウルであつた。

「アハハ！ アハハハハッ!! わざわざあなたから出向いてくれるなんて！ ホント、

最高よ!!」

ラウルの姿を認めた途端、怒りを納めていく墮天使。

代わりに滲み出るのは、毛並みの異なる怒りを内包した狂気。

三日月に歪められた口際は横に大きく裂け、歯牙を剥き出しにして憎しみを顕わにする。

「なにしてんだ、ラウル! そいつはホントにやべえんだよ! アーシアを連れて早く逃げてくれ!」

「イツセーこそ、何を言っているんだ? 目の前の墮天使を一人で——」

「いいから、早くしてくれ!」

「……うむ」

ラウルは有無を言わせぬ一誠の剣幕に押されて口を噤む。

幼馴染がここまで自身の心配をしているのか理由が浮かばなかったラウルであったが、彼の指示に従い大人しくアーシアの下へ降り立った。

「聞いていたか、アーシア? どうやら、私は貴方を連れて逃げなければいけないようだ」

「ううう……。あんなに痛いなんて聞いてませんでした! 少しだけ恨んでしまいです」

「……それは済まなかった。次の機会があれば、優しく助けると誓おう」
ラウルは心底申し訳なきような表情で謝る。

アーシアに苦痛を与えたのは不本意なことであった。

本来なら、アーシアと接触した際に助出することができたのだ。

助けられたにも関わらず、少々外せない用事があるために、一人ではアーシアを助けなかつたのだった。

その事実は助けられたアーシアも把握していた。

なにせ、縛られている彼女を不憫に思ったラウルが姿を消したまま会話を交わしたのだ。

どのような事態に陥ろうとも必ず助けると。

しかし、少女に過剰な苦痛を味わせたのも事実。

アーシアの恨み言を甘んじて受け入れたのだった。

「夕麻ちゃん……」

「あなたに用はないの、下級悪魔。そこを退きなさい」

「……………」

一誠はラウルたち前に出て宿敵と対峙する。

対峙するレイナーレは取り付く島などないと、一誠に行動を一蹴する。

「聞こえなかつたかしら？　いまのわたしは、あなたみたいな下つ端を相手にする時間も惜しいの。早く退いてちょうだい」

レイナーレは無言のまま見据えてくる一誠を興味がないと嘲る。

馬鹿にされた少年は瞳に静かな怒りを宿して佇むばかり。

二度の警告を以つて、なお動こうとしない悪魔の少年を埒外に置くと、ラウルへと視線を投げ掛けた。

「さあ、ラウル……あなたには私の相手をしてもらうわよ。うふふふ、心配しなくても大丈夫。堪え難い屈辱を味わってもらうだけだから。火で炙り、水で苦しめ、蠟を垂らすのよ……アハ！　いい声で啼いて、私を満足させてちょうだいね。……飽きがきたら、神父たちの慰み者にするのもいいわね。アハハハ！　そんな怖い顔しないで、存分に可愛がつてあげるわよ」

レイナーレは狂うように哄笑を奏でる。

歪みきつた口先より走るのは、聞くに堪えない言の葉の数々。

彼女の黒髪よりも一層昏い悪意が溢れ出す。

「……なるほど、イツセーが危惧するのも理解できるな」

ラウルにぶつけられる狂気。

怒りと憎しみが渦巻き皮膚を差す。

確かに抵抗のない者にはこれは辛いと。

一方でレイナーレの狂気は手緩いとも感じていた。

所詮、一時の感情の暴走だ。

何かきつかけを与えられれば、恐怖へと転じてしまうだろう。

本物の狂気をぶつけられ、自身も狂気に半身を犯されている彼からしてみれば、兇戯もいいところであった。

「俺の初めての彼女がこんな奴だなんて……正直、信じたくなかったよ」

「アハハ、なにを言っているのかしら？ 信じるものにも、騙されただけじゃない」

「それでも、初めての彼女だったんだ」

「最初で最後の彼女になってあげようと思ったのに……悪魔になって甦るなんて、冗談も程々にしてほしいわ」

「……大切にしようと思ったんだ」

「なら消えてちょうだい。うろつかれると目障りだわ」

本性を顕わにしたかつての恋人を前にして、一誠は後悔の念を漏らした。

恋人ができて舞い上がっていた自分を。

こんな毒婦を大切にしようと言う気持ちを中心に抱いていたのかと。

不様な過去の己を悔やんだ。

「そうか……やっぱり、夕麻ちゃんは……」

「素敵な名前でしょ？ あなたを夕暮れに殺そうと思つて付けたのよ、イツセーくん」
頬を伝う一筋の涙。

瞼を固く閉じて確固たる決意を固める。

最早、目の前にいるのは彼の惹かれた少女ではない。

人を貶めるしか能ない醜い墮天使であつた。

「レイナーレエエエエエツツ!!」

「腐つたガキが私の名前を気安く呼ぶんじゃないわよ!」

一誠は咆哮を上げて宿敵に拳を翳す。

襲いかかられたレイナーレは心底からの險悪を面にだし、光槍を構え忌々しき悪魔の少年を滅さんと迎え撃つた。

『Explosion!!』

「なっ!?!」

赤龍帝の籠手に溜めていた力を一誠は解放する。

それは祭儀場に向かう途中に思い付いた秘策であつた。

性質上、神器に力を溜め込むには、どうしても時間が掛かってしまう。

時間が掛かってしまうならば、あらかじめ力を溜めておくのはどうか。

一誠は思いついた奇策を試すことなく実行に移す。

力が安定することなく、分の悪い賭けであったが、宿敵を打ち倒す最大の好機を手繰り寄せることに成功する。

虚を突かれたレイナーレは、力が爆発的に膨れ上がった彼の前に光の槍は握り潰される。

「吹き飛びやがれ！ クソ天使ッ！」

「そんな！ 嘘ッ！ こんな——」

得物を失った堕ちた天使は、翼を羽ばたかせ最後の抵抗をするが、一誠は目前まで迫っており、逃れられる距離ではない。

憎き元彼女に、一誠は断罪の拳を振り下ろした。

「お逃げください、レイナーレ様！」

「くっ！ 邪魔すんなよ、クソ神父！」

しかし、拳は空を切ることになる。

階段を駆け上がった神父が、横合いから渾身の体当たりを仕掛けたのだ。

大人大の力に押された一誠は体勢を崩すことになる。

「よ、よくやったわ、神父。私が逃げる時間を稼ぎなさい」

「御意に。御身は一度退き、再起を図って下され」

「逃がすかよっ！」

逃げ出すレイナーレを追おうとするが、神父が立ち塞がる。

「だから、邪魔すんなって言ったんだろがっ！」

「なにを吐かすか、悪魔風情が！ レイナーレ様の下には行かせん！」

悪魔の天敵である光の剣を構えて、陸路を封じに掛かったのだ。

止む追えず、一誠は神父と交戦することになる。

「レイナーレ様、レイナーレ様って、なんでお前らはあんな奴の下についてんだよ！」

「貴様に分かるか！ 悪魔に家族を奪われ、教会に異端視された俺の心が!! レイナーレ様に救いの手を差し伸べて頂いた俺の気持ちがあ!!」

「——っ!? 分かんねえよ！ 好き勝手に人を殺したり、か弱い女の子を攫って生贄にしようとするような輩のなんてな！」

ぶつかるは交わることのない意思。

片や、危険因子として一度は始末された悪魔の少年。

片や、信じる神に異端視され、敵対者であった墮天使に救われた元悪魔祓い。

拳と剣を交えて己の意思を突き通そうとする。

上級悪魔クラスまで、力の跳ね上がった一誠が、圧倒するかと思われた戦いは意外な展開を見せる。

常に半身であり続ける、動きを止めない体裁き。

巨大な力に逆らわず流し、払うような神父の剣裁き。

巧みな駆け引きの前に、必殺の拳はことごとく空を切る。

一誠は戦い慣れしている玄人の神父に、決めの一手が打てず攻めあぐねるのだった。

「アーシア、いいと言うまで目を閉じていろよ」

「は、はい……」

見兼ねたラウルは彼らの戦いに手を出すことを決めた。

元々、神父の目的はレイナーレが逃げ切るまでの時間稼ぎ。

力の膨れ上がった一誠とまともに戦いあう訳がない。

焦らしに焦らして隙を窺う。

決して自身から攻めることのない剣技。

加えて、戦士の心得もできていない少年に、言葉を突き付け精神に揺さぶりを掛ける。

言葉巧みに怒りや同情を誘い、理性を鈍らせる。

このまま戦い続けられれば、赤龍帝の籠手の限界時間が先に訪れる。

そうなれば、経験の浅い一誠では敗北を期してしまうのは、火を見るより明らかだっ

た。

一誠には悪いと思っただが、早急に止めを刺すためにラウルは術式を織った。

これから起こるは、一方的な蹂躪。

戦いと呼ぶにはおこがましい殺戮劇だった。

故にアーシアには目を閉じさせたのだ。

無垢な少女に穢れを教ええない為に。

凄惨な現場をこれ以上目にさせない為に。

瞳に憂いを映す、麗人なりの配慮であつた。

ラウルが神父に向けて手を翳す。

指先より放つは不可避の光芒。

閃光に脳髓を貫かれた神父は、地に伏せ二度と起き上ることはない。

呆気なく最期を迎えた彼の者の姿に、拳を交えていた一誠は呆然とするのだった。

神父を屠つたラウルはすぐさま行動を開始する。

一の句も告げさせない間に、一誠に近づくと纏めて転移した。

座標は、入り口の大扉。

織つた術式を介して、刹那の移ろいを成し得る。

「くっ！ このチビ悪魔め、大人しく滅せられろ!!」

「……また言いましたね」

「容赦ない一撃……まさに悪魔かつ！」

光に包まれた彼らが次の瞬間に目にしたのは、小さな躯体で群がる神父を打ち倒す小猫の勇姿であった。

「小猫ちゃん!!」

「兵藤先輩？ それとシスターに……ラウル先輩」

「小猫よ。何故、私にだけそのような視線を向ける？」

背後から聞こえた声に子猫は一度後退して辺りを見回す。

入り口辺りにいたのは、祭壇へと登ったはずの彼らであった。

彼らの姿を確認した小猫は、この状況を創り出したであろうラウルに冷たい視線を投げ掛ける。

絶対零度の視線を向けられたラウルは細眉を蹙めた。

「当然です。後で覚悟しておいてください」

「……遠慮しておこう。貴方の拳は体格から考えられないほど重いのでな」

「……決定事項です」

容赦ない小猫の決断にラウルは呻く。

思わず口を滑らせてしまった故に、この場での問答は諦めたのだった。

「イツセー、こちらを向いてくれないか？」

「なんだよ——」

ラウルは振り向いた一誠の頬に手を添える。

驚きの表情を浮かべる彼に顔を寄せると、熱い吐息を漏らした。そして、片手で前髪を掻き分け、額にやんわりと花唇を落とす。

「——大羽の祝福を」

ゆつくりと離した薄い唇は、一節の神秘を紡ぐ。

それは、一定の位以上の魔術師のみが許される秘術。

庇護者の口付けを以って施されるは、恵みの魔術であった。

ラウルはこれから激戦を繰り広げる悪魔の少年に祝福を与えたのであった。

「——っ!? ラ、ラウル!?!」

「……は私に任せてもらおう。貴方はあの墮天使を追え。自身の手で過去の因縁を断ち切つて来るといいだろう」

驚きの声を上げる一誠を余所に、ラウルは真剣な表情で告げる。

自身はここに残り後方の憂いを断とうと。

一誠は自らの手で決着をつけにいつて構わないと。

見えない鎖に囚われる幼馴染の背中を押した。

「行け、イツセー。私は貴方が雪辱を果たさることを信じている」

「……ああ、夕麻ちゃんを……いや、レイナーレをぶちのめしてくるぜ」

淀みない声援を受けた一誠は、納得せざる得なかった。日本に住んでいたけど、ラウルは欧米人。

向こうで育ったのだから、過剰なスキンシップも仕方がないのかと。

独りでに納得した一誠はラウルの声援に応えると、通路の奥へ消えていった。

「さて、こちらの決着をつけることにしようかな」

ラウルは一誠を見送ると、神父たちに向き合った。

「動くなよ、佑斗！ 子猫！」

魔術を以ってラウルは重力に引かれることなく、軽やかに浮かび上がる。

「っ！ アイツを殺れ！ 何かする前に葬り去れ!!」

予備動作なしに浮遊の魔術を使ったラウルを危惧する神父たち。

彼らはフリードに耳にタコができる程、ラウルのことを聞かされたものだ。

加えて、古参者であった神父を事もなく祭壇で打ち取っていたのを目撃している。

危機感を強めた神父たちは、次に術を紡がせまいと一斉に銃口を向けた。

「ラウルくんっ!?!」

神父たちはラウルに向けて何度も引き金を引いた。

展開されるのは百を優に超える祓魔弾。

躲す隙もない弾幕に、佑斗が悲鳴じみた警告を送る。

「……他愛ないな」

されど、悠然と佇む銀髪の魔術師は眉一つ動かさない。目標の手前で祓魔弾は消失する。

ラウルの展開する無色の魔道障壁によって、侵入を阻まれたのだった。

必殺の弾幕が気なしに防がれた神父たちは啞然とする。

そんな彼らにラウルは無慈悲な薄氷の瞳を向け、敵対者たちに片手を翳した。

「――迸れ、『雷光』」

翳す片腕から光が溢れ出し白銀の方陣を構成した。

沸き上がる魔力は、織られた術式を奔り方陣を介して、現世に雷として顕現する。

現世に顕れた雷を囲む六つの円陣。

新たに構成した魔方阵にて雷を再構築する。

付加に圧縮、濃縮による純化――。

複数の過程を得て、雷に熱量が急激に高まる。

大気を焼く灼熱を以って、次なる階位へと押し上げた。

昇華された雷は、眩い閃光となり視界を焼く。

補助の魔方阵を起動させると、大気を震わす轟音に乗せ、練り上げた灼光を解き放つ。

それは古来より伝わる裁きの一撃。

天より放たれた光獣は、縦横無尽に駆け回り雷撃を纏いて神父たちに襲いかかった。荒れ狂う雷光は触れた者を次々と昇天させた。

百八の魔方陣を以って為される天の裁きは、造反者たちの存在を許さなかったのだ。

「目を開けて構わないぞ、悪い夢は覚めたからな」

傍に降り立ったラウルは、アーシアに瞼を開くように促す。

瞼を上げたアーシアの視界に映るのは、佑斗と子猫を残して誰もいなくなった祭儀場。

先の喧噪が嘘のように静まり返っていた。

それは麗人の放った魔術の異常性を浮き彫りにする。

消え去った彼らを肉付けしていた血肉。

神父服や光剣などの儀式礼装。

果ては彼らが漂わせていた匂いまで。

刹那の一撃で現世にいた痕跡まで焼き尽くしたのだ。

それでいて、石畳や調度品には焼け跡一つもない。

銀髪の魔術師は天にも届く雷光を織り為し、恐ろしく繊細緻密な操作で魔術を繰り出したことを意味するのだった。

「ラウルくん……いまのは……」

魔剣を床に刺して身体を支える佑斗。

何度も瞬きを繰り返して視力の回復を図る彼はラウルに問い掛ける。
今の魔術は何だったのかと。

されど、麗人の異常さを問うことは叶わなかった。

白い影が迫りラウルを襲ったのだ。

「女装先輩……目が焼けたらどうするつもりだったんですかっ！」

「待て待て、目を閉じた瞬間に『動くな』と指示したはずだぞ」

「分かるわけありませんっ！」

獰猛な金の瞳は怒りを顕わにする。

戦車の剛腕から放たれる必殺の一撃を皮きりに、絶え間なく襲い掛かる。

上肢より為されるは風切る重撃。

芯まで穿つ憤怒の拳を見舞われては、感覚が渾沌することは免れない。

しなやかな下肢は、鋭い鞭撻と為りて意識を刈り取らんとする。

身体の柔軟性を以って為される獅子の連撃は、ラウルに後退を余儀なくさせる。

しかし、小猫の怒りはラウルを捕らえることはなかった。

怒りに任せた小猫の攻撃は、鋭いが単調なために読みやすい。

小猫が右脚を撓らせた瞬間に、身を低くして潜り込む。

蛇蝎の如く地を這い繰り出された健脚を躲すと、ラウルは軸足を捕った。軸足を足られた結果、小猫は支えを失い体勢を崩す。

宙に浮いた少女の肩口に、膝裏に腕を回して優しく抱きかかえた。

「つと、暴れないでもらえると助かるかな」

その際に振り上がった右脚からの踵落としを肩口にもらうことになったラウル。

骨のつがい目が外れても、可笑しくはない一撃。

肩口に見舞われてなお、平然と微笑みを讃える麗人を小猫は睨んだ。

「……放してください、変態二号」

「酷い謂われようだ、可愛い後輩に氣遣って抱きかかえているのに。それに、まだイツ

セーは戦っているんだぞ。そろそろ矛先を収めてくれ」

「ん……卑怯な先輩です」

小猫は口元を一文字に結んだ。

ラウルの言うことは理にかなっている。

地下の神父を掃討したが、まだ戦いは終わっていない。

逃げた墮天使を一誠が追っているのだ。

赤龍帝の籠手を宿しているとは言え、新人悪魔の任せる仕事ではない。

彼のことを思えば早急に援護に向かうべきであった。

ただ、この悪戯好きの麗人を咎めなしで許すことなどできない。

熟考の末、おとなしく身を預けることで小猫は怒りの矛先を収めた。

「(こそこそ隠れていないで、出てきたらどうだ?)」

両腕に残る確かな重さを確認したラウルは、一誠の去つていつた祭儀場の入口に言葉を投げかけた。

暫くして、言葉に釣られるように紅髪の姫と黒髪の巫女が姿を現す。

「あなたには予知能力でもあるの?」

姿を現した紅髪の姫ことリアスは、自分たちの居場所が気づかれていたことに眉を顰めながらも、ラウルの懐に探りを入れてみる。

リアスにとって、彼の能力は底が知れない。

抜きん出た戦闘能力も大概だが、あの情報収集能力は計り知れないと危惧する。

数刻前に目を通した書類もそうだ。

報告書は収集した情報を処理して考察まで添えてある。

また、血判状は墮天使幹部の名前が並ぶ。

あれだけの多種多様な文書を揃えることは並大抵なことではない。

リアスたちに渡した書類を墮天使に接触してから、僅か数日で集めたというのが驚きだ。

それこそ、未来予知のような隔絶した能力を所持してもおかしくはない。

「どうやったらず知などの結論に、辿り着くのか聞きたいものだ。そんな便利なものがあるなら、むぎむぎこの娘を攫われる様な失態を仕出かすわけがあるまい」

「……そうね」

予知系神器所持の疑いはラウル本人によってバツサリと切り捨てられた。分かっていったならば、失態はあり得ないと。

確かに未来予知ができれば、アーシアが攫われることはなかったであろう。

リアスは納得する一方で、一つの確信を得た。

麗人が保有する繋がりには墮天使にもあるのだ。

墮天使との繋がりには幹部級、あるいは提督本人かもしれないなかった。

頼りがいのある味方でありながら、敵に回る可能性も否定できないことを確と胸に刻み付けた。

「それにしても……随分と酷薄な主様だ。眷属と協力者にだけ戦わせて、自身は高みの見物とはな」

「……その協力者は連絡なしに、勝手な行動ばかりが目立つのは気のせいかしら？」

銀と紅の視線がぶつかる。

ラウルは近くで傍観していたことを指摘し、リアスは契約内容になかったとは言え、

連絡なしに動いたラウルを揶揄した。

お互い思うところがあつたために、毒舌の応酬は続くことなく幕を閉じた。

「まあ、いいわ。ラウル……さつき使つた力の説明をしてちょうだい」

「……………」

ラウルは目を閉じてリアスの求める問いにどう対処するか思考する。

契約内容に必要な情報の開示と言う項目があつた以上、答えないという選択肢はありえない。

どのようにして躲そうかと考えている途中で、彼女の背後にいる朱乃の様子を見て断念した。

「人とは、より高みを志す者。届かぬ栄光を貪欲に追い求めるのが、性だと思ふのだが？」

ラウルは不敵な笑みを浮かべて答えた。

彼が選んだのは、抽象的な表現を以つての回答であつた。

「もつてまわつた言い回しね。はぐらかさないで教えてほしいわね」

「それが我々というものだよ。この性は業の深き一族に生まれた以上、変えようがないのでな」

「……分かつたわ。あなたの信頼が得られるまで、私は待つことにするわ」

リアスは米神辺りを抑えて納得を示した。

ラウルが答えようとしな以上、追及してもまったく意味がない。

そのことをここ最近でようやくわかつてきたのだ。

ただし、ラウルの物言いに納得しない者も存在した。

「……ラウル君とは一夜ほど借り切って、話をしてみたいものですわね」

いつもの穏やかな雰囲気置いてきた朱乃が前に進み出る。

言葉とは裏腹に彼女は常人なら吞まれ兼ねない剣呑な空気を纏う。

憎悪を宿した董色の瞳はラウルを捉えて離さない。

「熱烈なアピールは歓迎だが、まずはその嫌忌を仕舞ってもらいたい。彼の者と私は関

係ないのだからな」

雷を迸らせ一歩一歩歩み寄る彼女に、ラウルは動じることはない。

逆に一歩進み出て苦笑を浮かべるのだった。

「……はあ。ラウル君には、ほとほと手を焼かされそうですわ」

「む？ 何か可笑しいことをしてしまつたか？」

「胸に手を当ててよく考えてみてください」

「……全く心当たりがないかな」

態度を変えぬ彼に朱乃は毒気を抜かれることになる。

深く息を吐くと、いつもの彼女に戻ったのであった。

「一時的とはいえ神器を抜かれたのに、なんでその娘は平然としているのかしら？」
話が一区切り着いたところで、リアスは彼の傍に寄っていた元聖女に視線を向ける。
彼女は墮天使の計略に掛かり神器を抜かれたはず。

ラウルが取り戻したとしても、魂と繋がる神器を抜かれて平然としているのは、少なからず違和感を覚えたのだ。

首を傾げるリアスに得意顔を向けて、ラウルはその謎を説き明かした。

「なに、私の本職は魔術師でな、お粗末な式を少しばかり弄らせてもらったのだよ」
大規模な儀式術式への介入。

不敵に笑う麗人はその偉業を当然と言わんばかりに行ったのであった。

* * *

月影に照らされた聖堂に響く足音。

悪魔の少年は左腕に赤き龍を携え、地下より顔を現した。

「どこに行きやがった……本当に逃げ出したのか？ ——っ!？」

少年が視線を巡らせても、追ってきた墮天使の姿は見当たらない。

尻尾を巻いて逃げたしたかと結論に辿り着くが、即座にその思考を否定する。
あの性根悪の墮天使のこと。

手柄を一つでも持ち帰るために、息を殺しているの違いなかった。
例によって、慎重に探し回る少年の背中へ怖気を感じるようになる。

「完全に不意を突いたはずよ！ それなのに、生意気にも躲すなんてっ!？」

「誰が引つ掛かるかよ！ お前の考えは見え見えなんだよ！」

上空から突き刺さる二条の光を回避する一誠。

見上げた視線の先には、墮天使レイナーレの驚愕する顔が見て取れた。

「あの時に始末しておくべきだったわ。それこそ、転生も叶わないぐらいにぐちゃぐちゃにね」

「レイナーレ……お前はっ!」

『Boost!!』

左腕の籠手より響く六度目の機械音。

力の増した一誠の姿に、レイナーレの表情が歪む。

「そうよ、その『神器』！ ありえないのよ。その神器は持ち主の力を倍にする
トウワイズ・クリティカル『龍の手』の**手**の**はず**よ。……なのに、一時的とはいえ、私の力を超えるだなんて……あ

りえないわ。龍の手の亜種にしても異常よ」

「異常とか、正常とか、そんなのどうでもいいんだよ！俺の心を弄んで、アーシアやラウルを酷い目に遭わせようとしたお前を許さねえ!!」

一誠は腕を振って怒りを顕わにする。

この際、左腕の神器が普通でないなど知ったことではなかった。人を騙して心を弄び、己の悲願の為に他人の人生を踏み躪る。

傍若無人に振る舞う嘗ての恋人の所業が許せなかったのだ。

「……上の方々があなたの神器を危険視した理由がよく分かるわ。その神器は存在してはならないものよ」

怒れる少年を見下してレイナーレは冷酷に告げる。

左腕の神器は存在してはならない。

世界の、そして、己のためにも一誠には消えてもらおうと。

レイナーレは無情な判断を下して、光の槍を構えた。

「あなたといい、あのラウルとかいう小娘といい、予想もできないような異常者ばかり……いいわ、私の汚点を減らすために、あなたにはもう一度死んでもらいましょう」

「上等だ！俺の想いに応えろ、神器!!」

『Boost!!』

一誠は赤龍帝の籠手を構えて、襲い掛かる魔の手を打ち払う。

初撃を防いだと同時に沸き上がる力。

これで追い駆けていた間も合わせて七度目の倍加。

本来なら限界を迎えていても不思議ではなかったが、一誠にはその予感が全くと言っていいほどなかった。

それどころか、身体が酷く軽く感じられた。

加えて、奥底から何か別の力が膨れ上がる。

倍加することによる存在は非常に鮮明になり、一誠の身体の中を荒れ狂っていた。

「どうやら、倍加にはそれ相応の時間が掛かるようね」

一誠が時を稼いでいることに気付いたレイナーレは攻勢を強める。

魔方陣より光の槍を複数射出して追い立てた。

「っ！ プロモーション『騎士』ッ！」

『Boost!!』

幾条もの光の裁き。

降り注ぐ天敵の塊を前に一誠は昇格を決した。

手に入れた騎士の速さで、レイナーレの張った弾幕を身軽に掻い潜る。

「！『兵士』とは厄介ね。これ以上、時間稼ぎをされるわけにはいかないわ」

いとも容易く攻撃を掻い潜られたレイナーレは、驚きの余りに手を止めてしまう。

昇格によって膨れ上がった魔力。

中級クラスのを放つ一誠に危機感を抱いたのだ。

その昇格を行った一誠も内心は驚きをあげていた。

フリードとの戦いで昇格を為した時には、これ程の軽快さを得ることは叶わなかった。

一誠は足裏に描かれた方陣には気付くことなく、軽やかな足取りで地を駆ける。

『Boost!!』

「また力が増した!? いい加減死に晒しなさい!!」

攻撃を再開したレイナーレの言葉に、ふと一誠はあることを思い出した。

左手の神器の効果は十秒ごとに力を増す能力であったはずだ。

それが今はどうだろうか。

赤龍帝の籠手で行われる倍加の間隔が明らかに短い。

神器に目を向けると、様変わりした姿が映った。

翠玉の表面に浮かぶ六羽の紋章。

広がる翼は以前に渡された金属板の紋章を思い起こす。

「いい加減につー!」

魔方阵をさらに描き手数を増やす墮天使。

自身では制御しきれず、むやみに聖堂を破壊していく。

しかし、焦りを浮かべたレイナーレの攻撃が届くことはなかった。

『Boost!!』

「誰がそんな願いを聞いてやるかよ。ぶっ飛ぶのはてめえだ！ レイナーレ!!」

『Explosion!!』

十度目の倍加を成し得た一誠。

神器に溜まっていた力を解放して、敵対者の正面に立ち脅し文句を告げた。

「この肌に伝わる魔力の波……魔の波動は上級クラスの悪魔に匹敵するなんて……」

大気を震わす魔力に、レイナーレは顔を歪めて恐れ戦く。

最早、一誠の力は中堅クラスの上級悪魔並み。

下級と中級を間を彷徨う墮天使では手の出しようがなかった。

「オオオオオオオオオツツ!!」

雄叫びを上げ、愚直にまで真っ直ぐにレイナーレに迫る。

騎士の健脚と足裏の方陣によって、流星と化した彼を止める術はない。

「これでっ!!」

夕麻に味わされた無念を、過去との決別を込めて、一誠は固くひたすら固く拳を握った。

「最悪、道連れにしてもっー！」

レイナーレは決死の覚悟をする。

殺しそびれ、悪魔への転生を許した少年を表へ出してはいけない。

敬愛する方々のためにも、相討ち覚悟で討ち取って見せる。

愛を求めるあさましい墮天使は翼を羽ばたかせ特攻を仕掛ける。

右手に創り出した尖った槍頭は胸間を狙う。

左に構える光槍は右腕の肩口を鋭く刺突する。

決別と悲願の交錯は、差し込んだ銀の光が明暗を分けた。

「——っ?! 銀色の方陣!!? こんな時までっ!!」

レイナーレが振るう両手の悲願は、銀色の障壁に阻まれ砕け散った。

そして、残るは決別の拳のみ。

悪魔の少年は、赤龍帝の力と麗人の祝福を乗せて拳を振るった。

「終わりだああああっつ!!!」

舞い散る黒き羽根。

決意の闘争に敗れた墮天使は、破砕音を立てて石壁を突き破った。

「はあはあ………やっつてやっつたぜ! ……ラウル………アーシア………」

左腕の籠手を天に向け、大切な友人たちに勝利を掲げる。

彼らに戦いを制したことを報告すると、一誠は身体を投げ出した。度重なる昇格や倍加によって、すでに体力の限界が来ていたのだ。

「……お疲れ様。惚れ惚れするほどかっこよかったぞ」

「ラウル……」

膝から崩れる一誠を優しく受け止める銀影。

栄光を掴み取った勝者に、月の女神は優しく微笑んだ。

十五話 四翼の介入

「まったく……よくやったよ、貴方は」

両手に抱いた少年の軀体を確かめ安堵の息を漏らす。

威勢よく送り出したラウルとて、この幼馴染のことが気掛かりだったのだ。

相手は中級に届く墮天使。

諸事情により、墮天使はあの大战以前から生きていた可能性も捨てきれない。

交戦した際に戦い方が稚拙であったことから、新生した墮天使である可能性が濃厚で

あったが。

どちらにしろ、先日悪魔へと転生した、元一般人の彼には過分な相手であった。

例え、赤龍的ブリス・テッド・ギアの籠手などと言う神滅具ロンギヌスを宿していようとものだ。

ラウルは微笑みを讃え、宿敵の打倒と言う苦難を乗り越え小さな寝息を立てる彼の前

髪をそつと掻き分けた。

「……おっほい」

髪を掻き分けていた少年の口先から漏れた寝言。

不意に伸ばされた彼の手が空を切る。

奇しくもそれは、麗人の胸前を通り過ぎたのだった。

「む……私では不満らしいな」

無意識の内に行われた一誠の行動に、軽く頬を膨らました。

人が感傷に浸っている時に、その仕打ちはないではないかと。

一方で、彼の行動を仕方なくも思えた。

英雄色を好むもの。

龍帝の気を宿す彼には、まさしくその素質があると言えよう。

魔力もなく、魔術も使えず、身体能力も低い。

歴代最低と言われても可笑しくはない彼であつても、その普遍の原理は変わらない。

おそらく、彼の宿願でもあるハーレムを築くのも時間の問題であつた。

故に、ラウルはその様子を見守る。

友として、幼馴染として、一誠の成長を目に焼き付けようとする。

麗人は見た目が女性でも、それ以上になることはないのだ。

龍帝の気を宿し、どんな時でも不埒な想像を忘れない幼馴染が、一体どのような変貌

を遂げるか、ラウルとしてはある種楽しみでもあつた。

「交代だアーシア、今日一番の功労者を休ませてやつてくれ」

「は、はい！」

ラウルは、好色な少年の宿願に一番近いであろう少女へ声を掛ける。

「……体格的に考えて貴方では無理だろう」

駆け寄ってきたアーシアは、身体を支えるラウルの反対側に付き、寝息を立てる少年の腕を引いた。

しかし、か弱き少女では、脱力した人一人を支えることは適わない。

体勢を崩した彼女に手を回したラウルは目を細め苦笑を浮かべる。

「はう！ す、すいません……」

「いや、謝らなくて大丈夫だ。私の言い方が悪かったからな」

そのままアーシアの身を優しく起こす。

アーシアが自力で地に立つと、両腕を一誠に回し身体を抱き抱えた。

一誠を抱き抱えたラウルは、辛うじて原形を留めていた長椅子に近づき、彼を横たえる。

「後はこう、優しく頭を撫でてやるんだ。表情が和らいだらろ」

アーシアを長椅子に座らせて、彼女の太腿上に一誠の頭を据える。

突然のことに驚いたアーシアではあったが、ラウルが一誠の頭を撫で始めると微笑ましい姿に顔を綻ばせる。

「はい……可愛らしい寝顔を浮かべるイツセイさん。うふふ……なんだか夢みたいで

す。イツセイさんに出会って、ラウルさんに助けていただいて、ルチアとお友達になって……ここ数日で一生分の幸せを使い切ってしまった気分です」

「そうか……」

夢の中にいると言わんばかりの少女に、ラウルは目を細めた。

「だが、夢にしてしまつてはダメだぞ。貴方の幸せはこれからも続いていくのだからな」

「……はい」

教会の檻から、墮天使の楔から、彼女は解き放たれたのだ。

心行くままに幸せを満喫してもらいたいと、ラウルは幸せを願う。

しかし、幸せを願われたアーシアはどこか浮かない顔をしていた。

「どうした、アーシア？」

「いえ……その……不安になつてしまふのです。主から見放された私が、本当に幸せになつていいのかどうか」

戒律や信徒たちの願望によって、縛られてきた彼女は、戸惑いを隠せなかった。

信仰深かった故に、教会から異端視されたことが、心の奥底にしこりとして、残つてしまつたのであつた。

「確かに、貴方の信じた神は残酷な運命をお与えになつた。ただ、貴方をお見捨てになつたわけではないのではないか？」

「……………え？」

アーシアの戸惑いを聞いたラウルは、包み隠さずに持論を口にする。

神に見捨てられたのではなく、教会に見捨てられたのだと。

「聖女の座にいる限り、貴方の願いは叶わなかった。故に、願いを聞き賜った神は、追放と言う形で外へと連れ出したのではないかな？」

「そ、それは……………」

「すまない。何分、宗派が違うものでな。強い言い方になってしまった」

ラウルの信仰するプロテスタント教派に於いては、聖人聖女は存在しない。

モーゼ十戒の一つ、偶像崇拜の禁止に相当するからだ。

カトリック教派の聖女を祀り上げるといふ行為に、冷ややかになってしまっても仕方なかった。

故に彼は聖書の神が願いを叶える為に、アーシアを聖女の座から降ろしたのだと、強い反発を口にしてしまったのだった。

「……………まあ、私が言いたかったのはだ。折角、自由を手に入れたのだからな、少しは肩の意からを抜いても構わないだろ、と言いたかったのだ」

「じ、自由……………」

「今まで聖女として模範になるように、厳しい戒律を守ってきたのだ。肩を張って生き

てきた分も、羽を伸ばしてみても如何かな？」

戒律に縛られずことなく、自らの意思の赴くまま生を謳歌する。

赤子の頃から、カトリックの洗礼を受けてきた彼女にとつて、ラウルの言い分は斬新であつた。

「最初は心細いだろうが、皆が支えてくれるはずだ」

「皆さんが、ですか？」

「皆と泣いて笑い苦楽を共にしたその先で、新たなる生き方を見つけるのも一興だろうよ」

「ルチアや……イツセイさんと……」

アーシアの瞳が大きく揺れた。

揺れる碧玉に映るのは将来への希望と不安。

友となつた者との心地よい日々。

望んだ日々に浸ることで、主たる神への祈りを忘れてしまう恐れ。

アーシアは胸の内は感情の狭間で揺ぐ。

「なに、信仰を忘れずに感謝や祈りを捧げていけば、神はいつでも貴女を見て下さる」

「……そのようなことだけで、主は見守つて下さるのですか？」

「私は敬虔な信徒ではないのでな。感謝や祈りを捧げようと、戒律を厳守するようなことはないのだよ」

狭間で揺れる少女の様子を見たラウルは自身の首元を擦った。

施された迷彩が解け、鎖に繋がれた数珠が首回りに架かる。

胸元の鎖を手繰り寄せると十字架が顕わになる。

それは本来、彼の宗派では使用しない祈りの用具。

薔薇の花輪ロザリオンと呼ばれる念具であった。

「少し……考えてみます」

形に囚われない信者の在り方。

その姿を目の当たりにしたアーシアは小さく、されど強い決意の籠った言葉を口にす
る。

顔を上げた彼女の真剣な表情に、ラウルは静かに頷いた。

「それでは、イツセーを頼んだぞ」

「お任せください！」

迷いのなくなつた少女に一誠を任せると、悪魔の下へと歩みを進めた。

「ねえ……」

待ち構えていたのは鋭い眼光。

仇を見つけたと言わんばかりの険しい顔をしてリアスは慎重に口を開く。

「ラウルは好ましくない雰囲気を感じて口を開いた彼女へ、返事がてら冗談を仄めかす。」

「なんだ？ 可愛い下僕を取られた、とても思っているのか？」

「あなたはほんと……」

舌根の乾かぬうちに、毒を吐き続けるラウルの言動にリアスは溜息を吐く。

飄々とする麗人の態度に、呆れたと言わんばかりであった。

「取り敢えずその十字架を仕舞ってちょうだい」

「……ああ、すまなかった。悪魔には毒なのだったな」

リアスに指摘されて、胸元のロザリオに迷彩を掛け直すラウル。

悪魔の彼女達に目に付かないように、胸間に仕舞うのだった。

「そう言えば小猫はどこに行った？ 姿が見えないのだが……」

十字架を納めたラウルは、物足りなさを感じて辺りを見回した。

実害のある失態を晒した時。

いつもなら、手痛い仕打ちをもらうところなのだ。

しかし、今回は拳による殴打も、肘打ちもありはしない。

視線を巡らせても、腕力に物言わせる白髪の少女の姿が、見当たらなかった。

「小猫なら、墮天使の回収に行かせたわ」

「一人で……か？」

ラウルは軽率な判断に眉根を寄せた。

敵地である以上、最低二人一組で行動し、万が一に備えるべきであった。

「……私の下僕を嘗めないで。瀕死の墮天使に後れを取ることなんてないわ」

自らの下僕を馬鹿にされたと、勘違いをして怒気を発するリアスに、ラウルは首を振って応えた。

「決して侮っているわけではないのだが……」

近辺で活動している墮天使が、始末した個体も合わせてあの四体だけとは限らないかった。

事前情報はあくまで目安に過ぎない。

現地指揮官として、想定外の事態に警戒心を抱いてもらいたい、と言うのがラウルの心情であった。

「用心のためだ。少し様子を——っ!？」

この場での問答は時間の浪費と感じたラウルは行動に出る。

周囲に巡らせた目を通して、状況の把握に努める。

されど、共有した視界から映るのは一寸先も見通せぬ闇。

小猫の姿は確認できず、視界が開けることはない。

異常事態を把握したラウルは、虚空より魔剣を抜き駆け出した。

「ちよつと!?!」

石畳を割らんとばかりの勢いで地を蹴り舞い踊る麗人。

リアスの制止を振り切った彼は、ステンドグラスを散らして、小猫の下へと急いだのであった。

* * *

「飛ばし過ぎです……兵藤先輩」

打ち捨てられた教会の外壁。

小猫は崩れた石壁を見て僻々していた。

リアスの命令で、小猫はその石壁を破った墮天使の回収にきたのだが、肝心の墮天使は見つからない。

墮天使を飛ばした一誠に悪態をついて、他にやりようがなかったのかと罵っても仕方ないことであつた。

「っ!?!」

墮天使を探しに林を歩く中、突如として背中に奔った悪寒に、その場から弾かれる様にして飛び退いた。

小猫が飛び退くとすれ違いざまに、光の槍が地を穿つ。

悪魔の天敵であるそれは、殺意を微塵も感じさせずに、小猫を葬り去ろうとしたのだ。「勘の宜しいお嬢さんですね」

「墮天使……?」

無慈悲な裁きを下そうとした投擲主の男。

振り向いた小猫の視線の先でシルクハットが躍る。

「私が何者かと案ずることよりも、ご自身の心配をしたほうが宜しいかと」

長身瘦躯の男は黒一色で統一されたタキシードを身に纏う。

すらりと伸びた腕先は白い手袋に覆われ、腰下ほどの長さの杖が地を突く。

顔の全面を覆う仮面は、教会内に残る麗人の姿を思い起こさせた。

「正に籠の中の鳥……失礼、猫又でしたね」

気付かぬ間に辺りへ立ち込めた霧が彼らを覆い隠す。

霧を散布したと思われる墮天使の勿体ぶるような言い草も耳に障った。

小猫はラウルの関係者ではないかと疑い始めて、詮無きこととして思考を取り止めた。

「どうするつもり……」

必要ならば、この場を生き延びてから問い質せばいい。

小猫は脚に力を入れ、墮天使を見据えた。

「本来なら目的を達した以上、留まる理由もないのですが……」

警戒心を剥き出しにする小猫に、能面を張り付けた墮天使は四枚の翼を広げて応える。

「少々、困った事態に発展してしまいましたのでね」

伝わる威圧感が肌を焼き、小猫の小さな躯体を押し潰さないとばかりに圧力が高まる。

その存在感は一誠の打ち倒したレイナーレと比べ物にならない。

上級悪魔と呼ばれる彼女の主をも軽く凌駕していた。

高圧的な墮天使はシルクハットを深く被り直すと、額に汗の浮かべる小猫へ無情な協力を要求する。

「平和的に解決させて頂く次第に御座います。世俗に伝わる『目撃者はいなかった』状況を作り出すだけです。ご協力宜しくお願い致します」

慇懃無礼な態度の墮天使。

暗に葬ると告げた彼は杖を振り、戦いの幕開けを告げた。

振った杖の先より光の槍が放たれる。

展開した四重の魔方陣からも光の弾幕が広がった。

予め察知していた小猫は制服を切り裂かれながらも墮天使に迫る。

弾幕を構成する墮天使は格上の相手。

背中を見せたところで逃げ切れはしない。

故に小猫が望んだのは、様子見であろう初手を躲しての反撃であった。

「……だれがつー！」

間合いに入った小猫は、気合とともに華奢な下肢より地を揺らす震脚を放つ。

震脚より伝わるは、戦車の腕力を以って放たれる一撃必殺の拳。

あの麗人ですら、一撃で沈んだこともある折り紙つきの拳であった。

しかし、決死の拳は空を切る。

墮天使は悠々と羽ばたいて、小猫の覚悟を躲して見せたのだ。

「弱い者を甚振るのは趣味で御座いませんで、これにて決着を付けさせて頂きます」

降り立った墮天使は手にする杖を一回しすると、地を叩き幕を降ろしを告げる。

背後に展開される巨大な魔方陣。

放たれる魔の波動は大気を震わせ、紡がれた魔術は悪魔の天敵である神の威光を模倣する。

織り成された天の灯は、空を覆う奔流となり、地を焼き払う。

光の奔流は、圧倒的な光景に足を竦ませた少女を呑み込まんと迫った。

「曲技——『蒼穹分かつ片翼の鋏』」

夜空に響く鈴の音。

この場において最も頼りになるであろう声とともに、大空を斬り裂く鎌鼬が飛翔する。

闘ぎ合うは魔剣の魔術と神の威光。

飛翔したのは、風の起源が込められた魔剣によつて、織り成された大気の刃。

焼き尽くさんと勢いづくのは、魔術によつて強化された過去の残滓。

強大な力のぶつかり合いに空間が軋みを上げ、大地が罅割れる。

「これは……致し方ありません」

劣勢と見た墮天使は退いた。

墮天使の慧眼は正しく、彼が寸でまっていた場所は風の刃によつて、深々と切り裂かれることになる。

一点特化の刃と飽和する光の奔流では、凌ぎを削るうえでの優劣は明らかであった。

「無事か、小猫？」

小猫の下に降り立ったラウルは、迫る光の残滓を障壁を張つて防ぐ。

背後で怯える少女の心配をしつつも、次なる攻撃を危惧して顔を背けることはない。

「タイムリングが良過ぎです……ラウル先輩」

そんな、頼もしいラウルの背中に小猫は身を預けてしまう。

安堵のあまり緊張の糸が切れていた。

覚束ない足腰では立っていられず、本能のままラウルに寄り掛かったのだ。

ラウルもラウルで、小猫の行動に驚きはしたものの、拒むことなく受け入れたのだ。
た。

「先輩、あの墮天使は？」

「残念ながら……逃げられてしまったようだ」

光が納まった後に残ったのは、霧も晴れた静かなる夜。

曇天の空へ闇色に染まりし矢羽が降り注ぐ。

彼らの獲物を奪い去った四翼二対の墮天使は、矢羽とともに闇夜へ溶けたのであった

十六話 聖女の祝福

「はうわー！ すいません、部長さん……」

居城の主に頭を下げる金髪の少女。

墮天使の魔の手より助けられたアーシアは、身体を強張らさせた恐縮な面持ちで、主の顔を窺うのだった。

「大丈夫よ、アーシア。きっと、神側シの人間スから悪魔に転生した反動なのだからね。ゆっくり、慣れていきましょ」

「……………は、い」

再び訪れる可能性のある未来に、恐れを抱くアーシアを紅髪の主は優しく迎え入れる。

アーシアが恐れを抱く原因は彼女の神器にあった。

あの決戦の夜を境に、新たな道へと踏み出したアーシアを待っていたのは、底の見えない絶望であった。

癒しの奇跡を宿した『聖女の微笑』は、一度たりとも微笑むことがない。

その能力を買われて、リアスたちの下に身を寄せたアーシアとしては、由々しき事態

であった。

事態の打開への糸口を見つげるために、信仰深かった元聖女は、全ての父へと罪を告白する。

「ああ、主よ。賜った奇跡を使えなくなった罪深き私をお許し——あう！」

しかし、アーシアの懺悔は届くことはなかった。

悪魔に転生してしまったアーシアに返ってくるのは、頭を殴られたような鈍痛だけなのであった。

「やはり、悪魔に転生してしまったことを主はお怒りになられているのでしょうか……？」

アーシアは瞳を虚ろに彷徨させた。

教会に、信じた神に否定され、賜った奇跡も施すことができない。

降りかかる悪夢を前に、アーシアは歩んできた道のりが霞んで見えていた。

それでも、口八丁に騙された彼女が、その元凶を恨むことがないのは、仇敵ですら癒してしまう心優しき元聖女ゆえだろうか。

「……頑張ろうぜ、アーシア。なにも知らずに悪魔になった俺でも、使えるようになったんだ。皆を癒すために力を使おうとするアーシアの心に、神器も絶対応えてくれるからな！」

先の見えない闇の中でも光は差し込む。

アーシアを絶望の底から引き上げる力強い声援。

声を掛ける一誠はアーシアに希望が戻るまで、何度でも手を伸ばすのだった。

「イツセーさん……もう少しだけ頑張ってみます！」

「その意気だ！」

「はい！」

希望の手を伸ばされ、アーシアの瞳には再び柔らかな光が宿る。

光を取り戻した瞳で一誠を見据えて応えるアーシアの声音は、奮い立とうとする彼女の心境をよく映していた。

ただ、この光景はここ数日で幾度も繰り返されており、根本的な解決に至る前にアーシアの心が折れてしまうのも時間の問題であった。

「困ったわね。ホント肝心な時に彼はいいし……」

「学園の方にも、家庭の事情で数日ほど休むと、連絡があつたそうですわ」

米神や頬に手を当てて、日に日に悪化するアーシアの様態に、二大お姉様は困った顔を見せる。

アーシアの様態が回復する可能性は二つ。

もう一度神器を発現するか、はたまた神器の発現を諦めて別の道を歩むか。

後者はリアスたちや当人のアーシアとて選択したくはない。

回復能力を宿した僧侶を野放しするには惜しく、アーシアの心に禍根を残すことにもなりかねない。

前者になれば、もはや未知の領域であった。

元々、神器は神が創り出した奇跡の結晶。

眷属に取り込んでいる者がいるとはいえ、本来は相反する装具であるのだ。

悪魔には、手の負えない代物でも仕方がなかった。

儀式に介入したラウルならば、何か手を打てるかもしれないが、その彼はここ数日、学園にも部室にも来ておらず、沈黙を保ったままであったのだ。

アーシアの神器をどうにかしようとするほど、思考の渦に呑み込まれていく。行き詰った彼女たちは、姿をくらました麗人と最後に言葉を交わしたあの夜の続きのことを思い出すことにした。

* * *

「部長、帰りました」

「っ!?! 小猫、その恰好はっ!?!」

乱入してきた墮天使に、逃走を許してしまったラウルたち。

手ぶらで戻ることを余儀なくされた彼らを出迎えたのは驚愕の声であった。

上着は肩口から胸前まで切り裂かれ、大きく破かれたスカートからは小股が晒される。

リアスの視界に映る小猫の制服は、暗がりでも乱れていることが分かる程だ。

ラウルが着ていた騎士団服の上着を羽織っているが、サイズが合うことなく膝丈まで包まれている状態であった。

留め具は留まっておらず、正面に立てば未熟な少女の素肌が晒されていた。

小猫の惨状を見たリアスの瞳は紅に染まり、突き刺す視線がラウルを咎める。

「墮天使の増援だ。レイナーレと言ったか、あの墮天使も回収されたようだぞ」

見咎められたラウルは、肩を竦めて誤解を解き始めた。

小猫に乱暴を働いたのは、突如として現れた墮天使であった。

危険に晒したことは認めるが、不埒な真似をした覚えはなかった。

「——っ!? ごめんなさい、小猫。私の判断ミスだわ」

「大丈夫です、ラウル先輩が助けに来てくれましたから」

ラウルから、墮天使に襲われていたことを聞いたりアスは、切羽詰まった様子で小猫を抱き寄せた。

潤んだ瞳で小猫の無事を確かめた後で、小さな彼女の身体を確かめるように強く抱きしめる。

抱きしめられた小猫は目を細めると、ラウルに視線を向けるのだった。

「まあ、誰も手傷を負うことがなかったのだ、気負う必要などないだろ。それでも、思うところがあるなら、次へと活かせばいいさ」

小猫の視線を受けたラウルは、気落ちするリアスに助言を送る。

今回の反省点を洗い出し、次に反映させる方が建設的であった。

難しいかも知れないが、万事に備えて柔軟な思考を育むのが、若き王の務めだと告げる。

ラウルの言葉を確りと受け止めたりアスは、穏やかな顔を小猫の恩人に向けた。

「……そうね。小猫を助けてくれてありがとう。おかげで大事に下僕を失わずに済んだわ」

月明かりに彩られる紅の華。

不意打ちじみた破顔に胸の鼓動が高鳴る。

なまじ美人なだけあって、普段見せない顔を晒す一輪の花に目を奪われてしまった。

「礼を言われるほどのことでもないだろうに。同じ部活の仲間……こんな可愛い娘を守るの、当然だと思っただがな」

されど、顔を赤らめるのは仮面の麗人。

内心は揺られながらも表情に出すことはない。

素っ気ない言葉を紡ぎながら動揺を隠す。

周りを見ることも忘れずに、小猫の僅かな表情の変化を捉え、不敵な笑みを浮かべるのだった。

ただ、淡蒼の瞳は揺らぎ、右頬に差す朱の色は隠しきれないが。

「……先輩はよくそんな惜しげもない言葉を口にできますね」

「私は思ったことを口にしていただけだ」

「余計に質が悪いです……」

笑みを向けられた小猫も、気持ちの揺らぎを伝播されたのか、顔を赤らめてしまう。

ラウルと言葉を交わせば交わすほど、熱が増していく。

堪え切れない熱に、小猫は思わず顔を背けてしまうほどであった。

「うふふ、小猫ちゃんの姿を見た時には、正直言わせて頂いて、ラウル君に襲い掛かられたのでは、と邪推してしまいましたわ」

「ステンドグラスを破った勢いで襲い掛かるなど、どこの野獣だ。冗談も程々にしてもらいたい」

ラウルはからかわれているのが分かる故に、目を細めて朱乃に抗議する。

ステンドグラスを破ったのは小猫が危険に陥っているのを察知したためであり、外で時間を食う羽目になったのは墮天使と戦闘していたためだと。

駆け付けた際には、すでに小猫は衣服を破かれていたのだったと。

「小猫を襲った墮天使は、あなたが始末したと言うことでもいいのよね？」

リアスの問いにラウルは首を振った。

「まさか。それこそ聞き捨てならない冗談だ。流星の私でも、あの墮天使を無傷で仕留めるなど至難の業だぞ。ましてや、相手は逃げ腰であったからな。手傷の一つも負わせることができなかったよ」

相手は格上とは言わないが、条件次第では同格にまでなる墮天使。

今回のように守るべき者がいて、人目を避けることができない状況では、多少厳しいものがあつた。

それでも、周囲の被害を考えずに、時間さえあれば結果は違った、とラウルは肩を竦めるのだった。

「……また、私をからかっているわけではないわよね？　小猫を襲った墮天使は、そんな危険な輩だったってどういうの？」

「その筋では有名な奴だな。私も何度か顔を合わせたことがある」

ラウルの答えにリアスは顔を顰めることになる。

グレモリー眷属を圧倒したラウルでも、苦戦を強いられるような相手が潜んでいたのだ。

それも、この業界で名の売れている墮天使だと言う。

ラウルの計り知れない実力に驚くことながら、無策で小猫を送り出してしまったことを改めて後悔するのだった。

「調べてみれば、尾つぽの先くらいは見えるのではないか？」

「尾つぽの先つて……ほとんど見えてないじゃない！ 絶対、調べるよりも、あなたに聞いたほうが早いわよね？」

ラウルは、おそらく勘違いしているだろうリアスの考えを正すことはなかった。

逆に、冗談を混ぜお茶を濁していく。

「残念だが……私にも色々と制約があつて、話すわけにはいかないのだ」

煩わしい事態になり兼ねないために、リアスが勘違いしてくれたままの方が、ラウルとしては都合良かったのだ。

「あなたと結んだ契約に基づいて、情報の提供を求めても無理かしら？」

「悪いがな。それにあの契約は、教会を根城にする墮天使を排除するまでだったはずだが？」

「そ、そうだったわね……」

意気揚々として、ラウルから情報を聞き出そうとしたリアスは、思わぬ反撃に遭いて呻き声を上げることになる。

結んだ契約を持ち出したつもりが、返し刀で契約の期間と突きつけられたのだ。

契約という行為に重きを置く悪魔としては、致命的な失態であった。

「分かったわ。小猫……この件はあなたに任せるわ。できるだけ情報を搾り取ってちょうだい」

「了解です、部長」

契約が切れた以上、ラウルが意図せずに情報を与えることはない。

リアスは直接情報を聞き取ることを大人しく諦め、最近ラウルと距離を縮めつつある小猫にその任を託した。

「ラウル先輩……覚悟はいいですか？」

小さな躯体から沸き上がる謎の覇気。

主に任を託された小猫は、威勢よく麗人に宣戦布告する。

「……お手柔らかに頼みたいかな」

鋭く光る金色の瞳にラウルは苦笑いを隠しきれなかったのだった。

「ところで、アーシア。貴方はいつの間に悪魔へと転生したのかな？」

ラウルの視線は目の前の少女から、気配の様変わりしたシスター服の少女に向けられ

る。

教会を出る前は一般人の域を出ていなかった少女の気配が、戻ってみると人外の気配へと入れ替わっていたのだ。

高まった魔力の波長から、同一人物であることを確認したラウルは、そのカラクリを見抜いていたが、敢えて少女に問い質すのであったのだ。

「皆さんといたくて……部長さんに転生させて頂きましたー」

「そうか……」

意を決して口を開いたアーシアの言葉に、目を閉じて静かに頷いた。

悪魔に転生した元聖女が歩むのは、茨の道になることだろう。

数百年前より冥界で流行し始めたレイティングゲーム。

増しては、この不安定な時代に、友となった赤龍帝が近くにいるのだ。

心優しきアーシアが戦いに巻き込まれることは免れない。

回復系の神器しか持たない彼女が、自身の無力に嘆く日が来ることは間違えない。

義妹の友であり、盟友の友でもある彼女に、余り傷付いてほしくないラウルは、素敵な贈り物を考えるのであった。

ラウルの懸念を余所に、アーシアは自身の願いを込めて捲くし立てる。

「これで、イツセイさんやルチアとも……もちろん、ラウルさんとも何百年でも、何千年

でもずっとご一緒できます！」

アーシアの言葉に、ラウルは二重の意味で驚かされることになった。

一つは少女の描く未来図に含まれていたこと。

ラウルとしては、アーシアに対して特別、何かをした覚えはなかった。

一度目は一誠が困っていたからであり、二度目はルチアの願いであったからだ。

結果として、手助けになったのかもしれないが、純粹な意味で彼女に手を貸したことはない。

そんな自身をアーシアは気に掛けるのだ。

彼女の描く未来が、ラウルに訪れることがないと分かっているとしても嬉しくはあった。

そして、もう一つは――。

「いや、アーシア。貴方は過大な勘違いをしている」

「な、なにを間違ってしまったのでしょうか？」

「やんわりと優しい笑みを浮かべてアーシアの間違えを指摘する。」

「ルチアはともかく、私は悪魔のように長生きをできはしない」

「え……何処かお体が悪いんですか？」

今のラウルでは、年百年も何千年も生きることができるとは思わなかった。

「そうではない。私が単に人間というだけだ」

ラウルは魔術師ではあるが、??未だ人外になったつもりなどなかったのだ。

「ふえええええええええええええ!!?!?」

限界まで見開かれた碧玉の瞳!。

男の娘であったことに続き、再び突き付けられた真実に、少女の顔が驚愕に彩られる。少女の腹の奥から沸き上がった驚嘆は、静かな夜空に木霊するのであった。

* * *

悪魔に転生した元聖女に衝撃を与えたラウルは、用事が出来たことを伝えて帰っていったのであった。

転移の光に吞まれる中、何か口にしたようだが、リアスたちには伝わることはなかった。

「現れてください! 聖女の微笑!」

ラウルが姿を消した夜以降、似たような日々が続いていた。

アーシアが何度も神器の発現に挑戦し、失敗すれば皆で宥めに掛かる。

一誠やアーシアを歓迎するパーティーも開かれる筈であったが、アーシアの神器に不具合が起こったために、無期限延期となってしまっていた。

「ううう……やっぱり駄目でした」

「……もう一回だ！ もう一回挑戦してみようぜ！」

グレモリー眷属は一度、一誠の先導でラウル邸を訪れたが、奥の別邸に転移することはできなかったのだった。

ラウル邸の中に入るだけでも、張られた結界を破るのに数時間掛かる始末。

その上、転移の台座がなくなっており、ラウルの姿を見ることがすら叶わなかったのだ。

「ラウル先輩が原因のような気がします……」

「かもしれないね……彼は墮天使の行った儀式に割り込んだ上に、『聖女の微笑』を手にかけていたからね」

そのラウルが来なくなってから、侘しくなった御茶請けの前に、小猫と佑斗はお茶を呑む。

彼女たちが話題に挙げるのも、ラウルとアーシアの神器の関連性。

次第に疑心が広がる部室へ慎重しいノックが響いた。

「失礼する」

噂をすれば影が差すとはこのことだろうか。

中からの返事を待つことなく入ってきたのは、皆が待ち望んでいたラウル自身であった。

「どういう状況かな、これは？」

「アーシア先輩の神器が使えなくなりました……」

薄目を開けて辺りを見渡すラウルは、涙目のアーシアとそれを宥める一誠を見つけた。

疑問符を浮かべるラウルに、小猫が端的に状況の説明をする。

「ん？ 当然だろ？」

小猫の説明にラウルは更なる疑問符を浮かべた。

アーシアの神器が使えなくなったのは、当然の帰結であったのだ。

この状況を作り出したラウルからすれば、どうしてそこまで困っているのか理解できなかつた。

「ラウル！ やっぱり何か知っているんだな！ アーシアが困っているんだ、早く教え

てやってくれ……頼む」

「なにが当然なのか、きつちり説明してちょうだい」

「あらあら。五日間も部活に顔を出さないと思ったら……そういうことでしたか」

「女装先輩、悪ふざけは程々にしておいてください……」

「食えないね、キミは。僕のことといい、アーシアさんのことといい、キミの掌で踊らさ
れている気がして仕方がないよ」

飄々然としたラウルに皆の視線が集まった。

一誠はアーシアが神器を使えるよう懇願する。

リアスは鋭い目つきで、ラウルの口から洩れた言葉を言及し、小猫は白い目を向ける。朱乃と佑斗は視線に温度差があるものの、概ね困った娘を見るような心境であった。

「取り敢えずだ……詰め寄らないで大丈夫だ。ちゃんと調整してきたからな」

針の席となったラウルは、詰め寄ってくる一誠を手で制する。

ここに来て舞台の仕掛けを忘れたと、知ることになったラウルは、機転を利かせてアーシアへと歩みを進めた。

「アーシア、悪魔に転生した貴方にささやかな贈り物だ。受け取ってはもらえないだろうか？」

歩み寄ったラウルが、スカートのポケットから拳大ほどの匣を取り出した。

ポケットから取り出したそれを片膝を着き、両手を添えてアーシアに向け差し出す。

そして、二つ折りの匣にできた割れ目部分を細指でなぞらえると、匣が開きラウルが用意した贈り物が姿を現す。

「(、)これは……!」

二つ一組の指環。

本来はアーシアに細指に収まっている筈の物であった。

何故、それをラウルが持っているのか。

あの夜より数日の苦悩は何だったのか。

瞳を彷徨わせるアーシアは、目の前のエンゲージリングとラウルの顔を何度も何度も見直してしまう。

『トワイライト・ヒリング聖女の微笑』……かつて、そう呼ばれていた神器だ』

淡い光を放つ指環は、主への帰還を待ち侘びるが如く点滅を繰り返した。

神器に呼ばれてなおも煮え切らないアーシア。

彼女の姿を見たラウルは匣を納め、アーシアに小さく断りを入れる。

アーシアの雪肌の手を取ると、ゆっくりと指環を嵌めていくのであった。

「……かつてですって?」

ラウルは立ち上がり、神器の帰還に涙するアーシアを一誠に任せる。

一誠に一言二言投げ掛けたラウルは、殺気立つリアスへと向き合うのだった。

「ああ、少しばかり私が手を掛けたのでな。最早、『聖女の微笑』とは言えまい」

紅へと染まったリアスの瞳を真っ向から受け、ラウルは誇らしく語った。

聖女の微笑を改造したのだと。

予想の斜め上を行くラウルの言葉に、リアスは呆気に取られた。

「まずは悪魔に転生したことによって、引き起こされうる事象に対しての対策だな」

ラウルは指を立てて説明を始める。

最初に紹介するのは、転生において発生する障害への対策であった。

アーシアは神の信望者から悪魔へと転生したのだ。

当然、神器は信仰心を糧に動いていた部分があり、悪魔となった今では信仰を捨ててなくとも、疑心暗鬼によって回復力の低下が予想された。

その穴を埋めるために、システムとの繋がりを弱め、術者本人の意思力による神器の活性化を高めることで、回復量を補おうとしたのだ。

もちろん、この処置にはデメリットも存在する。

アーシアが治癒しようと思わなければ、神器の威力が半減する。

また、神器の発現が亜種へと進む可能性も強くなり、バランス・ブレイク 禁手に至る恐れも出てくる

のであった。

ある種、仇敵でも癒す意思のあるアーシアだからこそ、施した処置と言えよう。

「今回のように、儀式によって神器を引き抜かれないようにも術式を編んでおいた」

ラウルが手を施した神器を狙う輩も当然として現れる。

彼女の近くにいる内は、身内の友として守るつもりだが、万が一に備えてラウルは手を打った。

神器を肉体と魂に繋げる術式を施すことで、並大抵のことでは引き抜けないようにし

たのだ。

副次効果として、神器の成長を促すためにまた一步、禁手に近づくのであった。

「ついでに、追加機能も付けておいたからな。これからグレモリー眷属として戦っているためにも、回復能力だけでは心細いだろう。特別、攻撃を主眼に置いたような機能は付けてないから安心するといい」

「え〜と……あ、ありがとうございませう？」

そして、回復能力だけでは不安だからと、ラウルは老婆心を働かせてしまったのだ。後方支援しかできない少女の為に魔力譲渡を。

皆の無事を祈る心優しい少女の為に、遠隔障壁機能を。

容量に空きがあった聖女の微笑へ、余計な機能を取り付けてしまったのだ。

一考として、ラウルが魔術を教えることも考えたのだが、それでは彼自身の整合性を損なってしまう。

彼の扱う魔術は門外不出の物も多くあり、無償で教えるわけにはいかない。

自ら手解きをするとなれば、適正価格を払うか、後継者として育てることにするかのか。二択ぐらいしかなかった。

アーシアには、正気を失うような大金も用意できるはずもなく、かといって弟子として取るような異常な才能もなかったのだ。

とんでもない裏事情のためにアーシアの神器は魔改造を受けてしまったのであった。「神器と術式が定着し始めた頃に、改めて説明をするつもりだからな。いまは心配しなくても大丈夫だ」

魂への定着が終了次第、完成すると振り向いたラウルは微笑みを讃えた。

「わ、分かりました」

神器を魔改造されたことをアーシアは一つも追及することはなかった。

逆にラウルを気遣うようにして、心配そうな顔を浮かべる。

麗人の顔を彩る薄化粧。

細められた眼も決して開くことなく、ラウルの美貌はどこか陰りを見せていたのだ。

「神器に手を加えるなんて……アーシアに何かあったら許さないわよ」

しかし、正気に戻った彼女の主は戸惑うことはない。

ラウルの手によって改造を受けたのは、彼女の下僕の下僕の神器。

情の深いグレモリー子女としても、看過できない所業であった。

故にリアスは鋭い視線で、ラウルを戒めようと睨み付けた。

「……我々の技術力を侮ってもらっては困るな」

薄目を開けるラウルは、妖力の伴った刃の如き眼光を返した。

「日々、人の技術は進化を遂げるもの。その一生が短い故に、その身が脆弱故に……新

たなるものを発想し、足りぬものを補いて、一時の間に発展を続けていくのだ。我ら魔術師は、中世の時代よりその練磨を重ねてきたからな。疑われるなど、遺憾にたえないのだよ」

アーシアの神器に用いたのは、かの大戦後より続く結社によって生み出された叡智の結晶。

先人たちが育て上げてきた希望の種でもある。

事情を知らないとはいえ、それを蔑ろにされて気持ちのいいものではなかった。

「……アーシアのことは心配しなくていいってこと？」

「端的に言えばな。彼女の神器の安全性はこのラウル・G・ヤハタが保障しよう」

ない胸を張って応えるラウル。

疲労のせいか、はたまた興奮のせいか、ミドルネームまで名乗っていることに気が付くことはなかった。

もつとも、この場においてその名の意を知る者はいないのだが。

「それよりも問題は、新たなる名称だな。いつまでも『聖女の微笑』では、格好がつくまい」

嫌忌を納めたラウルは話題を変える。

一般的な聖女の微笑より掛け離れたアーシアの神器の名称だ。

術を施した者として、これだけは決めておきたかったのだ。

「二応トワイライト・ブレスینگ『聖女の祝福』という仮名称を付けておいたのだが……まあ、名称は好きにするといふ」

好きにするといふと、いいとアーシアに言いながら、彼の背からは後光が差し、満身の笑みを浮かべる姿はご愛嬌としか言いようがなかった。

きつと、瞼が開いていれば瞳も爛々と輝いていたことであろう。

「『聖女の祝福』……とてもいい名前だと思います」

「そうか……気に入ってもらえて何よりだ」

自身の相棒に、新たな名前を与えられて、感銘を受ける元聖女。

両手を握るアーシアの姿を見て、ラウルは一層のこと笑みを深くした。

「名称も決まったからな、私は帰ることにしよう」

ここ数日の苦勞が報われたラウルは、上機嫌で帰宅の準備を始める。

指先に宿る銀の魔力。

魔方陣を形成するラウルは、ふと自身に向けられる視線に気付いた。

視線の主は白髪の小柄な少女であった。

寂しげな金の瞳に見詰められて、ラウルは心を揺さぶられる。

「そうだ……小猫、この五日分の茶菓子だ。遅れてしまつて悪いな」

小猫との約束を思い出したラウルは、虚空より銘菓を取り出す。

もちろん、約束が頭から完全に抜けていたので手作りの物などない。

「許しません。罰として十日間の期間延長です」

「……分かった。それで手を打とう」

口を一文字に閉じて沙汰を下す小猫。

静かな怒りを少女の前に、ラウルは従順として妥協案へ同意した。

「それでは、また明日に——」

「待つてくれないかな？」

再び魔方陣を展開したラウルの背中に衝撃が奔った。

「佑斗よ、いくら私が女性に見えるのとて、後ろから抱きつくことはあるまいに」

「こうでもしないとラウル君は、逃げてしまいそうだからね」

ラウルの帰還を留めたのは、今まで大人しくお茶を飲んでいた佑斗。

胸に回された金髪の貴公子の細腕は、がちりと固められているために一部の隙もない。
い。

逃げられないように拘束されたラウルは、困った顔をして佑斗の腕に指を滑らした。

「はぐらかさないで答えてほしい……キミは、ルチアという女性のことを知っているのかな？」

佑斗にしては珍しい低く切羽詰まった声音が響く。

痛いほど拘束を強める両腕が、彼の真剣さを物語っていた。

「……………うちの魔道ゴーレムを一つ残らず壊すようなお転婆娘ならば……………な？」

ラウルは逡巡の末に口を開いた。

佑斗を彼女と引合すのは、まだ時期が来ていないと考えていたのだ。

その考えが佑斗の激情を止める理由になるはずもなく、ラウルは止む追えずに教えることになった。

「それは……………なんて反応するべきなのかな？　生きていたことを喜ぶべきか、相変わらぬの行動力に頭を悩ませるべきか……………」

ルチアの生存を伝えられた佑斗も、彼女の行動力に頭を悩ませることになる。

あの絶望的状况から生き延びたのも本当だと思ってしまうほど。

ラウルの語る惨状も、彼女ならばとある種の納得を抱いてしまう。

しかし、それならば何故、会いに来てくれなかったのかと、佑斗の内でわだかまりができるのも確かだった。

何にしろ、佑斗はルチアの生存を喜ぶのだった。

「あつ……………」

あつさりど解かれた両腕。

喜びに浸っていた佑斗は、両腕に伝わる感覚の喪失に小さく声を漏らした。

「詳しいことは本人に聞くといい。私では答え辛いこともあるからな」

佑斗の拘束を抜け出したラウルは、柔らかな表情をして向か合う。

指を立て唇に添えると、詳しいことはルチア本人に聞くように仕向けたのだった。

「まだ、帰らないでちょうだい。私も聞きたいことがあるの」

「長くなるようなら、また後日にしてもらえると助かるのだが」

転移の魔方陣を準備する彼にまたしても邪魔が入る。

紅髪の姫が引き留めたのだ。

再三引き留められたラウルは仏頂面を見せた。

「ちようど明後日が休日か……その時にでも招くでしょう」

深く息を吐き出すと、機会の延期を求めた。

連日の疲れが色濃く出始めていたのだ。

「それで構わないかな、部長？」

「構わないわ。一度、あなたの家にも訪問してみたかったところだから」

「了解だ。使い切りの魔方陣だが、これで家に直接転移できる」

ラウルは魔方陣を描いて、一枚の紙を召喚するとリアスに手渡した。

受け取った紙へ、リアスは興味を抱いて注意深く見澄ます。

六翼三対の靈鳥が描かれた紋章を中心に、表裏とも隙間なくアルファベットやルーン文字が埋め尽くす。

魔力の宿ったそれを破くことで、一度だけラウルの張った結界を素通りして転移できるというものであった。

興味を移したリアスを尻目に、ラウルは今度こそ帰還の魔方阵を描き魔力を流した。

「歓迎の準備をして待っていていよう。佑斗もこの機に彼女と話をするといいだろうよ」

微笑みを讃える女装の麗人は、転移の光へと姿を消す。

こうして、情の悪魔たちと銀の魔導師が初めて手を取り合った事件は、一幕の終焉を迎えたのだった。

エピソード

「これはこれは、ラウル卿ではありませんか」

閉ざされた暗室の中。

光溢れる魔方陣より壮年の男性が現れる。

タキシードを身に纏い、シルクハットを被りて頭を覆い隠す風貌。

立体映像として現れた紳士風の男は、銀髪の麗人を前にして深々と頭を下げた。

「先日、私どもが用意させて頂いた情報は、ご期待に添えましたかな？」

「……ああ、大変役に立ったな」

「それはそれは。骨を折った甲斐が御座いまして、至極恐悦に御座います」

白々しい笑顔を浮かべる男に、ラウルは鋭い視線を投げ掛ける。

低姿勢ながら、尊大な態度を感じさせる言葉に、目くじらを立てたのではなかった。

初めて見合わせたその日から、男の厚かましい態度は変わることがないのだから。

「されど、二度目はどうかご容赦を。我らが提督殿に、あなた様との繋がりを嗅ぎ付けられることになりかねませんので」

男はラウルに忠告を送る。

リアスを納得させるために、ラウルが依頼した血判状。

顧客が末端の墮天使に被害を被ったとして、男は発行させたのだ。

そう、何度も使える手ではなかった。

二度目になれば、必ず墮天使提督は疑いに掛かる。

そのような事態に陥れば、ラウルは気嫌っているあの総督と顔を合わす羽目になると。

「して、本日はどのような用件に御座いますか？」

忠告を送った男は、笑顔を貼り付けたまま、通信を繋げたラウルに問う。

「先日の一件……いや、なんでもない。頼んでおいた情報封鎖はどうなった？」

教会に訪れた件について口を開いたラウルは、顔を振ってその考えを封じ込める。

目の前に映る食えぬ男は、決して答えることはないだろう。

男の行動は思惑ゆえか、依頼ゆえか。

どちらにしる問いたところで、徒労に終わる事は火を見るよりも明らかであった。

「万全を期しております。万が一にも、こちら側から洩れることは御座いません」

加えて、ラウルは別の依頼を任せていたために、強くは出れなかった。

男に依頼したのは、赤龍帝に関する情報の工作。

出自や住所などの個人情報はその当然のこと、リアスの眷属が駒八つにて転生したことな

どの周辺情報までの偽装工作まで頼んである。

それが功を奏して、墮天使側では今代の赤龍帝の死が広まっている。

工作が上手くいっている以上、探りを入れて男の機嫌を損ねるわけにはいかなかったのだ。

「けれど、あのお嬢様が隠し通しますか？　悪魔とは絵に描いたが如き高慢な輩。あなた様のお気持ちも汲むことなく、見せびらかせてしまうでしょう」

ラウルもリアスから情報が漏れることを危惧していた。

あの高飛車なお嬢様が、折角手に入れた眷属の赤龍帝を自慢しないわけがない。

適正年齢の関係で、レイティングゲームにこそ出場することはないが、情報の拡散は免れないだろう。

しかし、彼女の兄が魔王であることに、一縷の望みも残っていた。

良識がある人物ならば、事の重大性を知る故に、ある程度は留めてくれるのではないかと。

「貴方から伝わらないだけでも、随分とマシなものだ」

「左様に御座いますか。褒め言葉として受け取っておきましょう」

例え、魔王が情報を留めても、笑みを張り付けたこの男が広めては意味がない。

男は知る人ぞ知る情報屋。

諜報の腕はどの勢力をも、舌を巻かせるほどであった。

「それになされても、あれだけの大金を投げ打つとは……流石、我らが六天様ですね」
口端を釣り上げる男の言葉にラウルは眉を曇らせた。

「……よせ、その言葉は私ではなくロ德里ク辺りに投げ掛けるべきではないか？」

「ご謙遜を。私としては、眼が眩むほどの秘宝を御生みになられる、あなた様が羨ましい限りに御座います」

ラウルは所謂、次世代を担う魔術師。

富も栄光も結社最大派閥を率いる導師には届かない。

しかし、男の言う通り油断ならないのも確かだ。

僅か十六で組織の一角を担い、創生する真贋の剣は伝説に劣ることもない。

鬼才という言葉は彼の為にあると囁かれるほどであった。

「ただ……ロ德里ク卿に千金をちらつかされてしまつては、口が滑るやもしれませんね」
笑みを納めて真顔に戻つた男は手札をちらつかせる。

未だ財力の余裕のあることを知っているために容赦することはない。

血肉の一滴まで啜ろうとする姿は、まさに商人の鏡であった。

「……一ヶ月だ。せめてその間は持たせてくれ」

脅迫じみた交渉を仕掛けられたラウルは苦渋の決断を下す。

競合相手は稀代の資産家。

幾ら金銭を積もうとも、決して上回ることはできない。

それならば、ラウルも男も利を得れる妥協点を見つけれなかつたのであつた。

「随分と弱気の発言に御座いますね。……宜しいでしょう、私とあなた様のお仲に御座います。今後とも仲良くして頂くことを前提に、可能な限り持たせることに致しましう」

「ああ、頼んだ」

「承知致しました」

弱みを握られているの等しいラウルは、男の不穏な物言いに口を出すことはなかつた。

「僭越ながら、このリーク・ハワード。あなた様の宿望が叶わむことを……我らが神にお祈りさせて頂きます」

ラウルは黙して男の行動に目を瞑つた

墮天使である男が十字を切るのは滑稽としか言いようがない。

ただ、願うのがラウルの宿願の成就なのであるのだから、笑うに笑えない冗談であつた。

「それでは、またのご利用を心よりお待ちしております」

深い笑みを浮かべて綺麗に礼を取ったリークは、光で構成された現身を消して去ったのであった。

「イツセー……私は………」

光が消えた暗闇の静寂で、ラウルを深く息を吐いた。

これから訪れるのは過酷な未来。

混沌の渦が世を乱し、赤と白の運命が立ち塞がろうとも――。

銀翼の魔導師は決意を新たに歩みは出すのだった。

番外編 突撃！ 不可侵のラウル邸（上）

晴れやかな蒼天の空。

東から日が高く昇る頃、閑静な高級住宅街に間延びした電子音が響き渡る。

「オカルト研究部の皆様、お待ちしておりました。朝早くからご足労頂きまして、真にありがとうございます。どうぞ、家屋の中へとお入りください」

恭しく一礼をする女性。

深々と頭を垂れる彼女の頭髪は固く結われて銀の光沢を放っていた。

木目色の門扉を開けた女性は、肅々とリアスたちを出迎えたのであった。

「えくと、お邪魔させてもらうわね……メイドさん？」

「はうわ！ 本物のメイドさんです」

場違いな黒地のエプロンドレスを身に付けた姿に、リアスとアーシアは呆気に取られる。

ラウルに会いに自宅を訪れた先で、似た背格好の使用人に出迎えられるとは、露程にも思わなかったのだ。

「ま、まさか！ ラウルくんのお姉様でいらっしやるのでしょうか!？」

メイドの予想外の登場に興奮を隠せないのは、性欲の権現とも謳われる一誠であった。

鼻息を荒くした一誠は、メイドの両手を無造作に掴んで問い掛ける。

本来なら、この家の家主の幼馴染である彼が、一番に気付くべきことがあったのだが、初対面の相手の手を握ると言う大胆な一誠の行動に、メイドは目を見開いた。

驚きはしたものの、瞬きをしたメイドの眼は温かいものに成り変わる。

一誠の不躰な行動に気を悪くすることもなく、静かに微笑みを讃えるのだった。

「あらあら。ラウル君たら、メイド姿でお出迎えですか。うふふ」

「女装先輩……今度はメイド服のコスプレですか?」

一誠よりその事実気付いたのは朱乃と小猫。

朱乃は愉快地光景を目にしたとばかりに、和やかな笑みを浮かべる。

小猫は白い目をして、メイド服を身に付けたラウルの性癖を非難するのであった。

「相も変わらざるの毒の吐きようだな、小猫。なに、よく考えてみたら、うちにメイドの一人もいかなかったという話だ。魔道ゴーレムで出迎えるのも味気ないのでな、こうして自ら代役を買って出たところだよ」

ほんのりとルージュの引かれた口先から伝えられる皮肉交じりの言葉。

正体を見抜かれたラウルは口調を戻し、悪戯が成功したとばかりに笑むのだった。

「クソおとおおおっ!! やっぱり、ラウルの女装かよ! あんなことや、こんなことをと……銀髪メイドさんに一瞬夢見た、俺の想いを返せよおとおお!!」

非情な現実に一誠は打ちひしがれる。

両手両足を地に付けて嘆く彼であつたが、その有り余る妄想を口にしたために、小猫の颯躑を買うのだった。

「不埒な妄想は禁止です……イツセイ先輩」

小猫にまで毒を吐かれて元気を失つた一誠。

その姿を見たラウルは彼の下へ歩み寄る。

一誠の下へ歩み寄つたラウルは、踝まで届くロングスカートをたくし上げると、膝を曲げて顔を覗き込む。

「久しぶりに髪を結い上げてみたのだが……どうだろうか?」

ほっそりと顎のラインを描く端正な輪郭。

不安に揺れ動く薄氷の蒼瞳。

様子を窺うような中性な声に惹かれて一誠が顔を上げると、そこには幻想的な花が咲いた。

思わず息を呑む一誠の鼻先をくすぐるのは、肩口から流された銀色の尾髪。

腰にまで届く長髪を三束に分けて編まれた銀髪は堅く結われていた。

硬質な雰囲気を纏いながら、その尾髪より漂う甘い花の香り。

危険だと分かっているも踏み入れてしまいそうな妖しい雰囲気がラウルを包む。

その妖し気なラウルの魅力を三つ編みのブリッジヘアを彩る青い薔薇が、一層のこと惹き立てていた。

「……憎いぐらい似合ってるぜ」

「そうか……褒め言葉と受け取っておこう」

一誠の褒め言葉に、ラウルは頬を仄かに赤く染めて、はにかむのだった。

「さて、積もる話もあるだろうが、まずは奥に移動しようではないか」

静かに立ち上がったラウルは、一度咳払いをするとリアスたちの方を向く。

そして、来客の悪魔たちに言葉を投げ掛けると、軽やかな足取りでラウルは家の奥へと誘うのであった。

* * *

「お嬢様、インド洋の涙と謳われたスリランカ産のダーズリンに御座います。生命の息吹を感じさせる春摘^{ファーストフレッシュ}みの香りをお楽しみください」

深紅に彩られた華やかな薔薇の庭園。

静かに紅茶を注いだラウルは、此度のお茶会で使われた茶葉の紹介をする。

「ねえ、ラウル。その口調は止めてくれないかしら。首の辺りがこそばゆいんだけど」

「あらあら、部長。メイド姿のラウル君もなかなか新鮮ですわよ」

「ラウル先輩……妙に手馴れています」

ラウルの手際は洗練されたもの。

一つ一つの動きに迷いがなく、不快に思わないように丁寧な持て成しをして回る。

メイド服姿を見慣れていないゲレモリー眷属の面々からしてみれば、違和感を感じて仕方がない者ではあったが。

「ふふ、部長が言うなら仕方あるまい。残念だが、いつもの口調に戻させてもらうぞ」

戸惑う彼女たちの様子に、ラウルは口に手を当てて笑みを零すのだった。

「それでお茶の味はどうかかな？」

両手で抱えていたティーポットを置いたラウルは、振る舞った紅茶に口を付けるように促す。

一昨夜から準備していたラウルとしては、是非ともその評価が気になるところであった。

「これで美人なメイドさんが淹れてくれたなら、百点満点だぜ」

「もう、イツセイさん！ こんな時まで不埒な妄想を……。あ、紅茶は美味しいですよ、

ラウルさん!」

「メイド服のラウルくんが淹れてくれた紅茶も……なかなか乙な物ですわ」

色鮮やかな紅茶を啜り、思い思いに感想を口にする一誠たち。

不埒な妄想をする一誠をアーシアが窘める一幕もあつたが、紅茶の評価は概ね良好であつた。

「ほんのりと優しさを感じます……先輩みたいに」

静かに紅茶の味を楽しむ小猫は、紛いなりにも紅茶の隠し味に辿り着く。

香り高く独特の味わいのあるダーズリンに包み隠された口当たりの良い甘さ。

それは、人知れず世話を焼くラウルのような甘さだと小猫は評価する。

風に掻き消されてしまいそうな小声を拾ったラウルは、小猫に向けて微笑みを浮かべる。

小さな呟きを聞かれたことを悟った小猫は、ティーカップの水面に映る紅の如く顔を染めて俯いてしまうのだった。

残るはリアスと佑斗の二人の評価。

しかし、佑斗はラウルの門邸に訪れた時から上の空であり、ラウルは紅茶の香りを楽しむリアスの反応を待つのであつた。

「ん、これはリンデンの香りかしら?」

リアスは紅茶を一啜りすると、小猫が勘付いた紅茶の甘みを言い当てた。
「おっ！ 正解だ。やはりお嬢様は舌が肥えているな」

「……あなたがお嬢様言わないでちょうだい」

ダーズリンに混入させたハーブの正体を見抜いたリアスを褒め称える。

申し訳ない程度に入れていたので、気付かれないと思っていた故に驚いたラウルは惜しげもない賞賛を送るのだった。

ただ、褒められたリアスはお嬢様と呼ばれたのが気に食わなかったようだった。

「春摘みのダーズリンは青臭いのでな、リンデンの花で優しく包んでみたのだが……日本では緑茶を飲むのだから、余計なお節介だったかも知れんな」

「そうね……これはこれでありかも知れないけど、私はストレートの方が好きかもしれないわ」

紅茶を口に付けた面々を見てラウルは苦笑をする。

春摘みの茶葉が青臭いのは、発酵の度合いが軽いこともある。

発酵を止めた日本茶を普段から口にする機会のある彼女たちには、そこまで重大なことではなかったようだった。

「承知致しました。すぐさまお嬢様のご要望にお応え致します」

「止めて！ グレイフィア——うちのメイドと被るから！」

「ふふふ、照れる部長も可愛いものだ」

「もう! 早く準備なさい!」

ラウルは顔を染めたりアスを尻目に、ストレートティーを入れる準備を始める。

手始めに虚空より温めた陶磁器のティーポットと取り出した。

「あら、ラウル君ポットを二つも出してどうするの?」

朱乃の声に茶器から茶葉を取り出したラウルは手を止めた。

「二つは部長の要望通りストレートで。もう一つは、レモングラスでも入れようかと思つてな。貴方たちが緑茶のような風味でもいいと分かつただろ。だから、風味の強いダージリンと相性のいいレモングラスを加えて、淹れようかと思つたのだよ」

ラウルは作業するテーブルの上に置かれた茶器の中の一つを手取る。

茶器の蓋を開けると清涼な酸味が広がる。

乾燥した緑の小葉から漂うのはレモンに似た香り高い酸味であった。

「そうですか……そちらのポットの紅茶はどうなさるのですか?」

新しく取り出したティーポットの使い道の分かつた朱乃の視線は、先ほどまでラウルが手にしていたリンデンの花入りのポットに向く。

新たに振る舞う紅茶の味を楽しむにしながらも、爽やかな香りの中に感じる柔らかな甘さの紅茶を捨てると言うなら、勿体なく感じるのであった。

「私が責任を持つて啜るさ。なに、リンデンの甘みは私好みでな。残り物の処理をしようとしたわけではないぞ」

ラウルは宙に陣を描いてお湯を注いで茶葉を蒸らす工程に入る。

手持ち無沙汰になったラウルは、傍らのティーカップにリンデン入りのダーズリンを淹れる。

紅茶を淹れた後、甘い香りが漂う小瓶を手に取る。

小瓶の中身はリンデンの花から取られたとされる蜂蜜であった。

とろりとした蜜を一杯掬い紅茶の中に落とすと、持ち替えたティースプーンで静かにかき混ぜるのであった。

「それにリンデンは、英名でライムと言つてな。ほら、私と名前が似通つているだろ。そのせいかもしれないが、好きな薬草の一種なのだよ」

「発想がおやじ臭いですよ、先輩」

ラウルとライム。

自身と名前が似ているだろ、とラウルはおどけて見せる。

他愛ない物言いは俯いていた小猫の琴線に触れることになる。

「私もそのポットのをください……あと、それも」

物怖じしない態度を取り戻した小猫。

ラウルが入れた蜂蜜を目聡く見つけて要求するのだった。

「なかなか様になってますし……リアス、メイドとして雇ってみては？」

小猫の要望に応えて紅茶を淹れる銀髪の使用人。

その様子を見た朱乃が雇用してみても、とリアスに話を持ちかけた。

「……………嫌よ、手玉に取られる未来しか思い浮かばないもの」

「そのような殿方を手玉に取ってこそその楽しみもあるのですわよ？」

「……………考えておくわ。メイドではなく執事としてね」

リアスは雇った時の想像をして渋い顔をすることになる。

雇うことができたのなら、比較的優秀な部類に属するのは間違えない。

彼の能力は使用人としてだけではなく、眷属にも欲しいと言うのがリアスの本音であつた。

しかし、問題なのは掴みどころのない風のような人格。

人を食つたような物言いをするラウルの態度は、あまり褒められたものではない。

その上、リアスたちを試している縁が時より垣間見えるのだ。

おまけに悪戯風のように、悪巧みをしてきつと吹き抜けていくのだから、手に負えたものではなかった。

逡巡の末、きちんとした男装をするならと、思い付く最大限の皮肉を返したのだった。

「お嬢様方は興味惹かれるお話をなさっていらつしゃいますね」

小猫に紅茶を振る舞つたラウルは、興味を掻き立てられる話の匂いを嗅ぎ付けて、リアスたちの下へと参上する。

「ラウル、次言つたらお尻叩き千回ね」

「それはまた恐ろしいことに御座います。仕置きされぬよう気を付けると致しましてしよう」

ラウルにお嬢様扱いされることが気に食わないリアスは、飄々とした態度を取り続けるメイドに忠告を送る。

右手に宿る紅色の魔力が危険だと察知したラウルは、一礼して大人しく引き下がるのだった。

引き下がつたラウルは辺りを見渡す。

アーシアにこと細かく世話を焼かれる一誠。

苺のソースを生地に入れたショートブレッドを口にする小猫。

軽く睨みつけるリアルと主を宥める朱乃の姿が目映る。

和気藹々とする薔薇の庭園で、温度差のある三者の空気にラウルは目を光らせる。

芝生の上へ不自然に伸びた薄影。

薔薇の垣根から覗く黒毛の尾っぽ。

そして、椅子に腰を掛けたままの佑斗が異色の雰囲気を放っていた。

「それでは、お嬢……部長、失礼させてもらおうぞ」

危うく口を滑らせ掛けつつ、リアスたちにもう一度礼をしてその場を後にする。

重い腰を上げたラウルは、手身近にいる問題の人物の下へと向かうのであった。

「ゆくと! お茶にも手を付けないで、なに辛気臭い顔をしているのだ?」

「ら、ラウルくん?!」

件に人物に忍び寄ると、ラウルは背後から抱き付く。

突然、頭を抱かれることになった佑斗は驚きの声を上げるのだった。

「この場にはいない彼女のことを気にしているのかな?」

「——っ! ラウルくんには、なんでもお見通しなんだね……」

ラウルは佑斗の吐き出した言葉に首を振る。

「そんなことはないさ。佑斗が分かり易いだけだよ」

震える佑斗の手を包むようにして、ラウルはそっと手を重ねた。

「ははは……思ったより緊張してるの、かな? 久しぶりに顔を合わせるだけだったい

うの……」

手の震えをラウルに指摘された佑斗は自嘲の笑みを浮かべる。

あの日以来、会うことのできなかつた同士に遭うだけで、なにを怖気付いているのか

と。

「ねえ、ラウルくん。聞いてくれるかな？」

ラウルの温かみを背に感じた佑斗は、震える手を握りしめて独白を始める。

「僕はあの日からずっと考えていたんだ。なんで僕だけ助かったんだらうって。あの日のことは夢だったんじゃないかって。本当は僕が辛くなつて逃げただけで、あんなことなんてなくて……みんな元気にしているんじゃないかってね」

佑斗が語るのは人生を狂わされたあの日のこと。

教会で行われた計画の被害者である佑斗やルチア。

そして、計画に無関係ではなかったラウルにとつても、運命の転機となった夜のことであつた。

「でも、もう一度あの場所を訪れた時に現実を知つたよ……みんないなくなつてしまつたんだって！」

「佑斗……」

言葉の端々に後悔を籠めて悲惨な過去を語る佑斗。

彼の主であるリアスは宥める手段を模索するが、掛ける言葉は見付かることはない。悲劇の騎士の名を呼んだ彼女の眩きは空に消えることとなる。

「それでも……それでも！　心のどこかで、誰か生き残っているんじゃないかと思つて

しまつていたんだ」

生き残りは佑斗のみ。

突き付けられた事実が佑斗の心を蝕む続ける。

「僕を拾つてくれた部長に恩返しする合間にも、誰か生き残っていないか探して回つていたんだよ……」

事実を認められることのできない佑斗は探し続けた。

眷属として与えられた僅かな給金を手に、施設で育つた同士が生き残っていないか、処分を免れた者がいないかと探し求めた。

「何年も経つて、諦めかけていたんだ。生き残りなんて僕だけだつて」

されど、時の流れは残酷であつた。

佑斗が求めた情報は遙か過去の物となり、容易に辿ることはできない。

時間が経てば経つほど手掛かりは遠退き焦りばかりが積もつていく。

積りに積もつた焦燥感、やがて罪悪に蝕まれた心を磨り減らす。

磨り減つた心は救いを求めて、諦めという境地に至ることとなる。

生き残りが自身だけだと悟つた佑斗はなお一層のこと、同士の中でただ一人生き残つてしまった罪悪感に蝕まれることとなつた。

「諦めかけていたのに、こんな近くに居ただなんて……酷い話だよ」

灯台下暗しとはこのことだろうか。

同じ学園に通う学友が、彼の同志と生活していようなど誰も予想できはしない。できるとすれば、ラウルのことを本当に知る人たちぐらいのものであった。

乾いた笑いを漏らす佑斗は、抑えられていない片手の拳をゆつくりと解いた。

「正直、憤りはしたよ。なんでラウル君は隠してたんだって。どうして、ルチ姉は僕に連絡の一つもくれなかったんだって！ でも——」

解いた手で佑斗はもう片方の手を抑えるラウルの細腕を握り直す。

折らんとばかりに手首へ加えられた指圧に、ラウルは端正な眉を寄せた。

苦痛を感じたもののラウルは佑斗の行動を咎めることはできなかつた。

加えられるのは佑斗の正当な怒り。

雪肌を爪を立てないのは佑斗の優しさかと、ラウルは可笑しなことを考えながら、抱きかかえる彼の頭を優しく撫で返すのだった。

「それ以上に、生きててくれて本当に嬉しかった。報われる気がしたんだ」
優しく撫で返されたこともあってだろうか。

怒りに任せて握っていた手首の拘束を緩める佑斗。

影の差していた顔付きは晴れやかなものに成り変わる。

惚けたような笑みを見せるその顔には、生き別れになった同士と再開できることに對

しての喜びに満ち溢れていた。

「会って色々言いたいことも沢山あるけど……再開して一番言いたいのは……ルチ姉に——」

「彼女は来ないぞ」

「——えっ?」

ラウルは佑斗の言葉を容赦なく遮った。

佑斗が紡ごうとした言葉。

それは関係者であるラウルではなく、佑斗の想う少女に向けられるべき言葉であるのだから。

「ルチアが今日、姿を現すことはない。所用で出かけているからな」

「で、でも、ラウルくんが……」

同時に与えられた事実が佑斗を揺り動かす。

長年抱えてきた切願が叶うとして、期待と不安に揺られながら訪れたのだ。

再開が先延ばしにされたことに動揺しても無理はない。

「悪いな。約束したのは、彼女ではなく私であったからな」

「じゃあ……ルチ姉は……」

掠れた佑斗の問いにラウルは黙して首肯する。

佑斗の望むルチアと合う願いは叶うことはない。

「ルチアもまた準備が必要なのだ。心の準備とかな」

機を急いだのはラウルの独断であった。

当人のルチアに相談の一つたりともすることなく決めてしまったもの。

佑斗が訪れることを伝えられたルチアは、混乱を極めて萎隠れしてしまう。

独り善がりの判断でことを進めたラウルの失策であった。

無自覚な行動で佑斗を傷付ける結果となってしまうのだ。

佑斗を望まない形で傷付けてしまったラウルは、浅ましい私の願いをどうか聞き届けてほしいと、貴方との約束を破って済まなかったと、直向な想いを込めて佑斗を優しく抱きしめた。

「総じて、女性の身支度とは時間の掛かるものだ。待つのも、男の甲斐性ではないのか？」

「分かるよ……分かるけど——」

「納得がいかないか？」

「……うん」

内心をおくびにも出さないラウルの態度であったが、抱擁に込められた温かな想いはじんわりと佑斗の荒んだ心を和らげる。

温かな抱擁を受けて感化された佑斗は、ラウルの腕の中でしおらしい姿を見せる。

「そうだな……」

ラウルは佑斗に向けていた視線を上げる。

向かう先は不自然な薄影を為す虚ろな空間。

生暖かい視線を浴びた虚空に揺らぎが広がるのであった。

「女性の心は……秋の空とも言うからな。気が変わるのを待つしかあるまい」

「うん……」

ラウルの視線は虚空から薔薇の垣根を辿り、菓子を頬張る手を止めた白髪の少女を一度目に留めた後、再び佑斗の下へ戻るのであった。

「案外、ふとしたきっかけで姿を現すかもしれないぞ」

それは誰に向けられた言葉か。

意地の悪い笑みを浮かべるラウルの助言は、薔薇の庭園にしみじみと響いたのだった。

* * *

辺り一帯に広がる白き大輪の咲き誇る茨の道。

佑斗の一件で哀愁が漂う茶会はお開きになった後、オカルト研究部の面々は広大な庭を練り歩いていった。

落ち込んだ気分を入れ替えようと、ホストであるラウルは庭園の案内を買って出たのであった。

「それにしても立派な庭園ね。これだけの広さをあなたとルチアさん……で、よかったかしら？ 二人で維持しているのだから驚きだわ」

リアスは白薔薇の柱頭を細指で突きながらラウルに問い掛ける。

「魔術による環境管理と手足となる魔道ゴーレムのお陰だな」

詮索とも受け取れるリアスにの問いにラウルは素直に答えた。

これ程広大な園庭を支えられるのは魔術の恩恵であると。

「それでも手間が掛かることには変わりないが、こうして心休める憩いの一時が過ぎせるなら安いものだ」

棘の垣根を慎重に掻き分けるラウル。

変色した枝を切り落とす彼は、駐留する手勢を仄めかすことはなかった。

「学園にもこんな場所が一つは欲しいものですわ」

「それはいい考えかも知れないな。オカルト研究部で維持管理していくなら、生徒会も認めるだろう」

朱乃の言葉に相槌を打ち、片手間で切り落とした枝を亜空間に投げ捨てる。

薔薇は気高く美しいかもしれないが、日々の管理が重要な植物である。

小さくとも園庭を造るのならば、それなりの根気強さが必要であるとラウルは論じた。

「場所はどうするつもりよ」

「無駄に広がっている雑木林があると思うが? もしくは、旧校舎を改装するのもあり

かも知れないな」

「あなたね……」

ラウルは場所の有効活用を説くが、リアスは鋭い視線を返して難色を示した。

旧校舎はグレモリー眷属が拠点として利用しているのだ。

裏稼業の現場に一般生徒を近づけるのは勧められたことではない。

分かっている突拍子もない提案をするメイド服の麗人に、リアスは憤りを隠せなかった。

「うら若き少年少女たちが、あのような花の一つもない所に籠っているのは、如何なものだろうか? いくら日の当たる所へ晒されるわけにはいかないとしても、もう少しは華やかさを持つべきではないのかな? その紅色の御髪のように……な?」

「……余計なお世話よ」

垣根に向いたままであつたラウルは、視界に映つた八重咲きの一輪に手を伸ばす。指先に魔力を宿らせると丁寧な枝を摘んでいく。

振り向いたラウルは白薔薇を片手に微笑むのであつた。

「部屋に寄る時は、花でも持ち寄ることにしよう。生花よりも造花の方がいいのかな？
アーシアはどう思う？」

手折つた薔薇をラウルは、マイクロホンの如くアーシアに向けて質問を投げ掛ける。

「わ、私ですか？　そうですね……生花の方が私は……でも、生け花つてお花を切つてしまふのですよね？」

「株分けや植え替えなら問題ないだろう。鉢植えで育てることのできる種類を用意しておこう」

ラウルの手で摘み取られた薔薇を見て心を痛めた様子のアーシア。

万物に分け隔てなく慈しむ姿は正に聖女と言えよう。

そんな世間知らずの心優しき元聖女の姿に、ラウルは自然と苦笑いを漏らすのであつた。

「なあ、ラウル……」

「なんだ、イツセー？　藪から棒に？」

「あの建物、見覚えがあるのは気のせいか？」

前置きを置いて話し掛ける一誠の視線を追うと、そこには一軒の建物が存在していた。

「……気のせいではあるまい。イツセーもアーシアも世話になったのだからな」
『っ!』

しぶしぶと口を開いたラウルが告げた真実に、リアスたちは示し合わせたかのように息を呑む。

遂、先日に墮天使と死闘を繰り広げた教会がそこにあると言うのだ。

信じられないものを見るような視線がラウルに集まるのも、仕方がないことであつた。

「あの教会は……」

反応が顕著であつた一誠は震える身体を抑えて教会を見据える。

厳粛な佇まいを見せる白亜の聖堂。

華やかな園庭に隠された影がそこに存在した。

険しい顔をして教会を見据える一誠の視界を銀色の流れ髪が遮る。

「先日、貴方たちが対峙した墮天使——レイナーレが居城としていた教会で間違えないぞ」

因縁の教会を背にして尾髪を解いた銀髪の麗人は不敵に笑むのだった。

番外編 突撃！ 不可侵のラウル邸（下）

「やれやれ……そんな顔をしては、折角の美人が台無しだぞ」

悪意に満ちた眼差しを向けられたラウルは肩を竦めて応じる。

教会を背にしたラウルは、睨みを利かせる悪魔たちの主へ、最大限の皮肉を送るのであった。

「……ラウル、説明なさい」

「承知致しました、お嬢様」

不用意なラウルに発言に一段と棘を鋭くしたりアスは、敷地内に教会が存在することへ対する弁明を求める。

深く一礼を返したラウルへ向けられる視線に、更なる嫌悪感が乗ることとなったのは言うまでもなかった。

「建築は今から一年と一月前。ちょうど、私がこちらに越してきたときに御座います」

頭を上げたラウルは教会建築の成り行きを語り始める。

「当時、近辺に教会がなかった故に、佇まいを模して新築した次第です」

幼少期にラウルが通っていたこの町の教会はすでもぬけの殻となっていた。

人の手が入らず雨風に当たり続けた結果、廃墟になってしまっていたと。

故に新たな教会が必要となり、かつての面影を思い起こしながら建てるに至ったと説明する。

「ちよつと、待ちなさい。教会を建てる必要性はないでしょう!」

「こう見えても神の信望者として通っているものでな。安息日の礼拝は欠かせないのだよ」

細眉を寄せて瞞み付くりアスに、ラウルは胸元から十字架を取り出して微笑みを浮かべる。

熱心でこそないがラウルは教徒であったのだ。

ラウルの弁明に露程も納得のいかないリアスは、赤黒い魔力を右手に集めて教会に目掛けて掲げる。

「……消し飛ばしていいかしら?」

「壊さなくてもらえるか? あんな所でも、私の大切な思い出の場所なんだ」

滅びの魔力を宿したリアスの手を取る細腕。

霧が晴れるが如く姿を消したラウルは、暴拳に出ようとするリアスの背後に回り、手を重ねることによって不当な行動を押し留める。

押し留めると同時に、彼女の耳元で囁き掛けるようにして情へ訴え掛けるのであつ

た。

「覚えてないか、イツセー？ 貴方もこの教会で賛美歌を歌っていたのだぞ」

「お、俺がッ!？」

リアスの肩の力が抜けたことを確認したラウルは、幼き頃の記憶を共感する一誠へと問いかけた。

問い掛けられた悪魔の少年であつたが、片鱗すら覚えていなかった彼は目を白黒させて驚きを頭わにする。

「今は寂れてしまっていたが、もう一人の幼馴染と——覚えているか？ 紫藤イリナという少女のことを」

大袈裟な反応を見せる幼馴染の様子に苦笑するラウル。

忘れ去られた過去の記憶に薄氷の瞳は静かに愁いを湛えるのであつた。

「わかり、覚えてねえや。男の子ならいたような気もしないでもないけどな」

「……あながち間違えではあるまい。彼女は貴方と同様にお転婆な少女であつたからな」

瞼を閉じたラウルは、一誠の口にした記憶の断片に頷いてみせた。

ラウルたちのもう一人の幼馴染。

紫藤イリナという少女は、一誠と共にヒーローごっこを興じるような活発な少女で

あったと。

「えっ? ええええええええっ?!?!」

緑溢れる閑静な庭園に一誠の驚嘆が木霊する。

「彼女も可哀想なものだ。十数年もの間、勘違いされたままなのだからな」

ラウルは残響を響かせる幼馴染の声を耳にして深く息を吐いた。

思えば再会を果たした一年程前までは、ラウルも女の子と勘違いされていたのだった。

幼い頃より振る舞いを徹底されていたこともあり、一誠に非があるわけではなかったのだが。

「イ、イリナが女の子……男の子じゃなくて女の子……一緒に遊んでいたあの子は女の子だったのか。てっきり、女の子はラウルだけかと思っていたんだけどな」

「私は男だぞ。こんな姿をしているがな」

「お、おう……」

衝撃の事実を知って気の動転する一誠。

そんな彼の目の前で、ラウルはロングスカートを大きく翻して自身の容態見せ付ける。

華麗なターンを決めた麗人は、人差し指を唇に付けて妖艶な笑みで魅せるのであつ

た。

「覚えていないようだが、彼女に誘われて私たちは毎週日曜日には、教会に足を運んでいったんだぞ。その甲斐あつてか、私は染められてしまったのだがな」

「そんな記憶もあるような無いような……」

幼き日を語るラウルは胸前の十字架を指で弾いた。

視界の隅で踊る十字架が一誠の記憶を刺激する。

「まあ、聞いてみれば思い出すだろ。耳にタコができるまで聞かされていたのだからな」
「なに言っているのよ、あなたは……」

黙してラウルの思い出話を聞いていたリアスは呆れたと言わんばかりの視線を投げ掛ける。

責めるような言動を受けたラウルは、半眼のリアスへ意味深な笑みを返す。

そして、笑みを消して佇まいを直した銀髪の麗人は、深く息を吸い込み喉を震わした。

♪ ————— ♪

「な、なにを歌っているのよっ!? 止めなさいっ!」

口腔が奏でるは鈴の音。

澄み渡る空に響き渡る美声は世界に名を馳せし神の愛を謳う。

リアスは紡がれる聖なる調べを耳にして、背筋へ奔る悪寒から身を守ろうと両腕で細

身を抱きしめる。

「これは聖歌……なのになんで……」

「先輩の歌……嫌な歌な筈なのに、温かく感じます」

されど、ラウルの咽喉が奏でるは神聖なき旋律。

唱歌に乗せられるべき称讃はなく、天より与えられる恩恵もありはしない。

慈しみなき無情な調べゆえに、ラウルは人情を込めて調律する。

揺られる草花のざわめき。

庭園に響く歌声に呼応する小鳥の囀り。

風に運ばれる美麗な声音は、自然の織り成す音色と調和を成して重奏を響かせる。

元は讚美歌である筈の重奏は、仇敵である悪魔ですら聞き惚れてしまうほどであった。

「っ!? あうっ!?」

悪魔に転生した元聖女も美しき調べに惹かれて、知らず知らずの内に口を動かしていた。

教派を越えて謳われる神の愛。

教会を追放された彼女はその言葉の尊さを噛み締める。

——主の愛が与えられるのなら、私はどうして追放されたのでしょうか。
——私の祈りが足りなかつたせいでしょうか。

——それとも、私の願いを聞き届けて下さつたゆえに、追放なされたのでしょうか。
——壮大な半生を過ごしてきたアーシアの疑問が尽きることはなかつた。

悪魔として転生した彼女に、神がその答えを教えることは一生ないであろう。

そんな迷いを持つてしまつたせいだろうか、感慨を込めて歌うアーシアを突如として
奔るような鈍痛が襲うのであつた。

「ころころ、アーシアは歌つてはいけないぞ。悪魔なのだからな」

「うううう……聴くことはできるのに、歌うことができないなんて……」

ラウルは歌うのを止めて少し遅めの注意を促す。

注意を促すのだったが、涙を堪える彼女の姿が不憫でならなかつた。

「あらあら、どのような手品をお見せになつたのですか？」

涙目のアーシアを見守るラウルに向かつて、苦笑を隠し切れていない朱乃が歩みを進める。

悪魔に害のない讚美歌。

在り得てはならない現象を生み出した所業の正体を朱乃は皆を代表して問い質したのであつた。

「アンチデバイス——対解呪魔術の応用でな。声に特殊な魔力を乗せて、恩恵を与えられないように加工しているのだ。なかなかの高等技術だから、滅多にお目に掛かれるものではないぞ」

手の内を隠すことなく堂々と口にしたラウルの言動に、質問をした朱乃も成り行きを見守っていたリアスたちも二重の意味で驚かされていた。

数週間前まではあれほど言葉を濁していたにも関わらず、隠すことなく率直に答えたこと。

そして、ラウルの行った所業が明らかに人離れしていることであつた。

不敵な笑んだ麗人は後れを取る悪魔たちの姿を尻目に、黒地のスカートを翻して目的地に歩みを進めた。

「さて、中に入ろうではないか」

ラウルは一度振り返り茫然とするリアスたちの声を掛ける。

返事を待つこともなく教会の大扉に手を掛けた。

正面へ佇む祭壇。

左右に整然と並ぶ長椅子。

天窓より陽光を取り込む煌びやかなステンドグラス。

扉の奥には微かに面影の残る聖堂が広がっていた。

「……ラウル、私たちは悪魔なの。教会の中に入れるわけ——」

「あるのだな、これが。言葉だけでは信用にならないだろうが……ちようど、行動で示してくれる者もいるようだしな」

「ふえ？」

「あ、アーシア!?!」

ふらふらと覚束ない足取りで教会の中に入ってしまったアーシア。

その姿を見て目くじらを立てていたリアスは驚きを隠せなかった。

「それに、悪魔独特の仇敵に対する違和感もない筈だぞ？」

「確かに……教会で感じたあの悪寒が一つもないぜ」

元聖女とは言え悪魔へ転生した彼女が違和感なく教会へ侵入できたのには理由があった。

「基本、私が管理しているのでな。外見は教会でもその実、普通の建築物と大差ないので」

「趣味が悪いですよ、先輩」

ラウル邸にある教会は既存の教会を模倣して造られただけのこと。

当然のことながら、司祭や天使などの手を借りたわけではない。

洗礼や祝福を受けた教会ではなく、教会を模して造られた擬似的な礼拝堂に過ぎな

かったのだ。

そんな半端なラウルの行動を小猫は冴え渡る毒舌で切り捨てるのだった。

「ラウル君、教会の管理を任されているということは、キミは神父なのかな? ……だとしたら、僕はキミのことを……なんて想えばいいの……かな?」

「教徒ではあるが、聖職者に鞍替えするつもりなどないぞ。あくまで、私は魔術師であるからな」

佑斗の揺らぐ瞳をしつかりと見据えたラウルは憂う必要はないと答える。

ラウルの本職は魔術師。

幾ら信徒であろうとも、しち面倒くさい神職に就こうなどは考えもしなかったのだ。

「あなたはオカルト研究部の一員なのよ。その事実をどう受け止めているのかしら?」

教会を建築したことと言い、ラウルの言い分に納得がいかないリアスは追及の手を緩めない。

無理やり所属させた部活動を盾に取り、悪魔に協力を申し出ながら神の信徒であることへの非難を始めた。

「善も悪も成し得る中庸な存在。人間味溢れる在りようを認めてほしいところだ」

理不尽な物言いに不敵な笑みを返した麗人は、霞掛かった常套句を述べるのであつ

た。

「あなたねえ……」

「ふふふ、飄々とした態度を取る殿方に自身の考えを押し付けても無駄ですわよ、リアス。風を捕らえるのは隙間を埋めてから……ラウルくんを懲らしめようと言うのなら、外堀を埋めてからではなさらないと」

「聞き捨てならない言葉が聞こえたのは、気のせいだろうか？」

憤りを越えて呆れ顔を見せるリアスへ、愉快そうに微笑む朱乃が忠告の言葉を送る。

目の前で行われた迷惑極まりない会話にラウルは細眉を顰めたのであった。

「あらあら、ラウルくんにはお仕置きのほうが宜しかったでしょうか？」

「……確かに。後輩に対して思わせぶりの態度を取る、朱乃先輩へ仕置きすることにしよう」

「それなら、私はラウル先輩を懲らしめます」

雷を奔らした指先に舌尖を這わせる朱乃。

足首丈のスカートをはためかしたラウルは、扇情的な姿を見せる黒髪の悪魔を対峙する。

白い目をしてラウルを睨み付けていた小猫も一触即発の空気の当てられて動き始めた。

「ねえ、イツセーくん。僕たちも参加した方がいいのかな?」

「前の時に失敗しているからな、油断せずに行こうぜ」

『Boost!!』

グレモリー眷属の男衆は、ラウルに迫る彼女達に同調して包囲網を広げた。

「やれやれ……ここが私の拠点であるのを忘れてないか、貴方たちは?」

嬉々と自身を追い詰めようとする面子を見てラウルは首を振った。

意気込みは買っていたが、何分周りが見えていない。

そのことを知らしめるべくラウルは魔術を使って軽やかに後退する。

「っ!? ラウルを止めるわよ! 私の可愛い下僕たち!」

「——遅いぞ」

聖堂を埋め尽くす幾何学文字。

ラウルが手を着いた床面を起点として、聖堂内部に魔術を展開した。

「なっ!? 滅びの魔力が……!?!」

「あらあら、雷の力もですわ」

「駒の特性まで……キミはいったい何を?」

襲い掛かろうとした悪魔たちは異能を失い、無力化されたことで混乱の最中に突き落とされる。

「解呪魔術デイスベルをこの空間に発動させているのだよ」

「……そんな使い方は聞いたことがないわよ。デイスベルは相手の魔法が発動後に用いるものでしょう」

「ラウルくんの使う術式は独特なものが多いですわね……一度、手取り足取りと、御教授を頂きたいものですわ」

「生憎これは機密事項だからな、簡単には教えることはできないぞ」

指を立てた悪戯娘は片目を瞑って微笑む。

ゆったりと立ち上がったラウルは、聞き耳を立てるリアスたちに茶目つ気溢れる態度で説明を始めた。

聖堂に展開した魔術は異能殺しの術。

解呪魔術を幾多も展開することで、対応する能力を打ち消すといった単純でありながら効果的な術式であった。

この術式はラウルの所属する結社が千年もの時を重ねた叡智の結晶の一つ。数多もの偉業を解析してきた先人たちの遺産だった。

異能殺しの術の前では、天使も悪魔も人間でさえ貴賤はありはしない。

一方で、基点となる複数の陣と非常に高度な術式を編む必要性があるために、実戦で使い難いのが欠点であった。

展開した術式を雄弁に物語るラウルに龍帝の影が忍び寄る。

『Boost!!』

「へへへ……捕まえたぜ、ラウル!」

「くっ! 貴方に捕まってしまおうとは……不覚ッ!」

突撃してきた人影を抱き留めてしまった故に、細腰に腕を回されて遭えなく捕まってしまう。

放さないとばかりに拘束をする一誠のしたり顔を見せ付けられて、ラウルは悔しさを顕わにするのだった。

「……普通に受け止めたのは気のせいですか、ラウル先輩」

「それは言わない約束だ、小猫よ。あそこで避けてしまつては、イツセーが怪我をしてしまうだろう」

ラウルの背後にあるのは、魔術によって強度を上げられた祭壇があったのだ。

猪武者の如く愚直な突進を行った一誠を躲したのなら、少なからず怪我を負うことになつてしまつたであろう。

隠そうとした事実を指摘されて困り顔のラウルは、自身に抱き着いている一誠の頭を優しく撫でることで、お互いの心の平穏を保とうと図るのだった

「まあ、イツセーのことは置いてだ……この教会を使ってみる気はないか、アーシ

ア？」

「ラウルさん……お気持ちは嬉しいのですけど、私は悪魔ですよ？」

「アーシアの言う通りよ、ラウル。この娘はもう悪魔なの、余計な気遣いは不要よ」

借りてきた猫のようにおとなしくなった一誠の頭を軽く叩くと、アーシアに教会での祈りを勧める。

悪魔へ転生したとはいえ、彼女には欠かせないものだ、判断してのことであつた。

「貴方にとつて毎日の典礼は、生来続けてきた習慣のはずだ。簡単に治るものではない」

「それは……」

祈りの時間はアーシアにとって、生活の大部分を占める習慣となつていた。

教会を追放されて尚も、神への祈りを忘れることのなかつた彼女だ。

悪魔となつて日々の祈りを捧げることが出来なくなつてしまふ心を痛めていたのは周知のことであつた。

「聖書のお気に入りの一節でも、歌い慣れた聖歌でもいい。試しに神へ祈りを捧げてみないか？」

「なにを言っているのよ！ これ以上、アーシアを傷付けるなら許さないわよ」

「そうだぞ、ラウル！ アーシアは祈りが届かなくなつて、心悲しそうにしてたんだ。ラ

ウルがいつもみたいに人の心を弄ぼうっていうなら、俺は許さないからな!」

「イツセーさん……部長さん……」

真摯な態度でアーシアを誘うラウルであったが、その想いは届くことはなかった。

庇わんとばかりに彼らの間に割り込む紅の御髪。

敵しい顔をしたリアスと顔を上げた一誠が口々にラウルの軽率な行動を咎めるのだった。

「……私はアーシアに訊ねていたのだがな」

自身をよく知るはずの幼馴染にまで非難をされたラウルは、口を一字に結んで渋い顔をする。

「どうやら、私は信用が無いようだ」

「ラウルさん……私は……」

ラウルの見せる人情と拭うことのできない恐怖。

肩を竦めて嘆く様子を目の当たりにしたアーシアは、自身の抱える不安ゆえに踏み出すことのできない心の葛藤に揺られていた。

「無理に結論を焦る必要もないぞ。安息日の礼拝……貴方にとっては典礼か。儀式に間に合うようにと、思っただけのことだからな」

そんな想いの狭間で揺られる優しき聖女にラウルは手を差し伸べた。

教会での祈りを提案したのはアーシアを心配してのこと。

彼女の足元の危うさを感じての節介だった。

当然のことながら、彼女の気持ちを優先することなので遠慮をする必要もない。

悩み抜いた末に提案を蹴るのなら一向に構わなかったのだ。

むしろ、急いでて事を仕損じるような事態に陥れば本末転倒であった。

「内装は一応変えてある。アーシアもあんなことがあった所では使い辛いだろう」

「わ、私なんかのために……ラウルさんの思い出の場所を……」

アーシアは向けられた温かな手に目を潤ませる。

葛藤する心内を恥じて、同時に身を粉にして働きかけるラウルの姿に感極まっていた。

「大丈夫だ。かつての姿は変わることなく、私の胸の中に仕舞ってあるのだから……な」

ラウルは胸に手を当て、憂いを帯びた瞳を迷える元聖女に向ける。

「気休め程度にしかならないが、心寂しくなった時にでも使ってくれば構わないよ」

詭弁だと知りながら優しく語りかける彼の姿は正に道化そのもの。

神秘を探り真実を知ってしまった魔術師は、笑顔の仮面を張り付けまま微笑むのであった。

* * *

赤薔薇の庭園で紅茶を啜るメイド服の麗人。

教会でのひと騒動の後、リアスたちはラウルの振る舞ったランチを喫して帰路へと就いた。

彼女たちを見送ったラウルは、板に付いた使用人の姿で後片づけに奔走する。

魔導ゴーレムも動員して小一時間で清掃を終えた彼は、優雅にアフタヌーンティーを楽しんでいたのであった。

「いつまで隠れているつもりだ?」

受け皿たるソーサーが、陶磁器の衝突を受けて静かな音を立てる。

指の先で掴むティーカップを置いたラウルは、原因である悪魔たちが帰っても姿を一切に見せることのない少女へ問い掛ける。

「だ、だって、しょうがないじゃない! どんな顔をして合えばいいのよ!」

虚空より偽装の術を解いて姿を現した少女。

蒼銀の尾髪を揺らすルチアは踏み出すことのできない一線を訴える。

「普通に合えば良いだろ。普段の物怖じない振る舞いで」

「だから、会えるわけがないって言っているでしょ!」

吐き捨てるような物言いに、ルチアの凜とした面持ちが悲痛に歪む。

内に秘めるわだかまりをどうして理解してくれないのか。

五年もの間、放置していてどんな顔をして会えと言うのか。

ルチアは心の底より沸き上がる理不尽な想いをラウルにぶつけた。

「難なら私をだしに使えばいい。会うなど厳命されていた、とでもいえばいいではないか」

「そんなことできないよ!? ラウを悪者扱いするなんて! これは、わたしの問題なんだよ!」

ラウルは迷える少女の姿を見て息を吐いた。

割り切れないのなら、自身の存在を免罪符にして踏み出してしまえばいい。

しかし、踏み台にされる本人が提案するもルチアは限らない拒否を示した。

それが佑斗と再開する足掛かりへなるにも関わらずだ。

自らの良心に苛まれて迷える姿は、先程まで会話をしていた元聖女の困り顔を沸騰させる。

二の舞を踊るルチアが眩しく想えて、ラウルは小さく微笑を漏らした。

「私が機会を作ろう。顔が合わせれるまで、何度でも付き合つてやるさ」

「! ほ、ほんと?」

「ただし、今日みたいな機会を作るだけだな。そこから先は貴方自身が決めることだ」
本当の意味で踏み出さないといけないのはルチア自身。

手を引かれて歩みを進めてしまったのでは、彼らの関係に禍根が残ってしまうだろう。

故にラウルに許されたのは迷える少女の背中を優しく押し出すことであった。

「ありがとっ! ラウ、大好き!!」

尾髪を揺らしてラウルに抱き着く少女。

不器用な優しさを受け取ったルチアは幼子のように喜びを顕わにする。

子犬の尾のように盛大に揺られる尾髪が何よりの証拠であった。

先程まで纏っていた陰鬱な空気も微塵も感じられない。

熱い抱擁を受けるラウルも屈託ない笑みに惹かれて、大人しくルチアの腕に抱かれるのだった。

ルチアはしっかりと愛情を示すとラウルの身体に回した両腕を解いた。

ラウルから離れるた彼女は軽やかな足取りで対面の席に着いた。

「それにしても、ユウは格好よくなっていったな。『男子三日会わざれば括目してみよ』って諺があるけど、何年も見てなかったら、こんなに変わるなんて……ね」

勢いよく席に着いたルチアは肩の荷が下りたのか、得意になって話を始めた。

語り始めたのは五年もの間、顔を見ることが叶わなかった弟分のこと。

あの日を境に悪魔の下へ去ってしまった佑斗は、憂いを帯びて尚も際立つ容姿をしていた。

愛らしい姿をしていた彼が男前に変わるとは、感慨ものだと思ふのであった。話の最後に語尾を強めたルチアは正面に座って紅茶を嗜む麗人に流し目を送る。

意味深な視線に気付いたラウルは片眉を吊り上げた。

「なにが言いたい？」

「ラウは変わらないな〜って」

「毎日会っているからではないのか？」

ルチアに問われたラウルは、他愛ごとと鼻であしらうように応える。

抑揚のない彼の声音には表に出ることのない嫌悪感が僅かながらに混じっていた。

「つれないことばかり言っていると靡いちゃうかもよ？」

いつにもなく無愛想な態度を取るラウルへ、ルチアは悪戯に再び流し目を送って煽るのだった。

「そういつたことばかり口にしてるから、神父に尻軽女などと揶揄されるのではないか？」

一度、目を瞑りラウルは深く息をする。

ほんの一週間前にアーシアを巡り墮天使たちと争いが勃発していた頃。

墮天使の部下であるはぐれ神父の一人にルチアは中傷を受けることになる。

中傷を受けたことに少しながら傷付いたであろう彼女から、戦いが終わった後も幾度となく愚痴を聞かされていたのだ。

幾度も愚痴に付き合い、時には彼女の傷付いた心を慰め、時にはやさぐれる感情を宥めてきたラウルであったが、改めて見直すとその原因は大胆に肌を露出する活発的な格好ではなく、流されやすい言動にあるのではないかと説いた。

軽々しく言葉にした憎まれ口は少女の琴線に触れてしまう。

「うわゝ、嫉妬? ねえ、もしかして妬いたの? 嫉妬って醜いつて聞いたけど本当だね。妬むあまりに人が気にしていることを言うなんて……最低だよ、ラウ」

目の色を変えたルチアは捲くし立てるように非難を始める。

ラウルよりも顔立ちが男前である佑斗への羨望。

その彼にルチアの興味が向くことへの愠気。

ラウルの抱く感情は佑斗への嫉妬であると決めつけて罵る。

そして、妬みの感情に任せて人を貶めるなど信じれないと、自身のことを棚に上げて言い切った。

「私は止めるつもりなどないぞ。好きに靡けばいいではないか」

冷え切った視線に射抜かれるラウルは首を振って、感情に走る少女の言い分を否定する。

嫉妬など一切なく、ルチアが靡きたいなら靡いたところで一向に構わなかった。

「今度は何？　自分は何人も女の子を囲っているの、一人ぐらい抜けても問題ありませんって？　ほんと、最低だね。ラウがそんな人だとは思っていなかったよ。第一、人を傷物にしといてそれはないと思うんだけど」

投げやりな態度は燃え盛る少女の感情に油を注ぐ結果となる。

縛られることなく奔放に羽を伸ばして構わないと言ったのであったが、言葉を受け取るルチアが正しい意味で聞き届けるとは限らない。

曲解にて激情に駆られたルチアは不貞を続ける事実を盾にして、感情の赴くままラウルを責め立てる。

「そう、だな……」

大きく脈打つ心の臓。

目を伏せたラウルは酷く締め付ける胸を押さえて、途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

少女の私怨の籠った罵倒以上に、ラウルが拭うことの出来ない負い目が胸を焦がしていた。

白銀の世界に佇む森奥の教会を鮮血に染めたあの日。

また一つまた一つと命の灯が消えていく中で、冥府の入口を彷徨う彼女の手を掴んだのは紛れもないエゴであった。

機転が利けばより多くの命が救えたことであろう。

少しでも早く決断を下していれば、多くの命が失われることはなかっただろう。

彼女の病的にまで青白く変化した肌膚、首筋に残る治療の痕がその凄惨な過去を忘れさせることはない。

非力な自身の失態が生み出した悲劇ゆえに、生き残りである少女の言葉の意を深く噛み締める。

「ちよつと待って! そう言う意味じゃないから! ラウには色々感謝——つて聞いている!」

「ああ、聞いているぞ」

ラウルは視線を戻して、誤解を解こうとなんとか取り繕うルチアの姿を納める。身に心に生涯消えることのない傷跡を負った被害者^{ルチア}。

日々の営みにおいて明るく振る舞いあの日の片影すら見せることはない少女は、間接的とはいえ計画の一端を担っていたラウルを恨んでいてもおかしくはない。

恨まれても仕方ない過ちをラウルは犯してしまっていたのであった。

そして、彼の犯した過ちは数知れない。

あの日の愚行も、ルチアに課した業も、背負う罪過の一つに過ぎない。

幾多も過ちを積み重ねてラウルは一人前の魔術師としての体勢を築いたのだ。

ラウルの過ちによって損害を被った者。

手段を選ばない遣り口が気に食わない者。

片手で数えることの出来る名家の生まれや類稀なる才能をやつかむ者など、ラウルに恨みを抱くものは少なくない。

しかし、ルチアはそんな人々から距離を置きラウルの傍に身を寄せたのであった。

無邪気な彼女の行動は足掻き苦しむラウルにとってある種の救いであり、同時に少女の存在は無くしてはならない枷となっていた。

「私としてはどうして貴方が、貴方たちが——いや……何でもないな」

言葉の続きを紡ぐことなくラウルは静かに首を振った。

心の奥底に潜む闇を光のある場所へ出すべきではない。

増してや自身を慕って随う彼女の耳へ届かせるものではなかった。

「言いかけて止めるのは無し！　いいからお姉さんに吐き出しなさい！」

不穏な空気を感じ椅子を蹴り身を乗り出すルチアの姿を認めて、ラウルは薄唇を開いた。

「貴方たちは同性愛の気があるのかと思ってな」

「……………へ?」

普段と変わらない憎らしい不敵な笑みを浮かべる麗人。

口端を吊り上げたラウルは突拍子もない皮肉を言ってみせた。

「私のところに来るのは……つまり、そういうことだろ?」

腰帯まで流れる銀糸。

西洋人形のような端正な顔立ち。

白雪の如き柔和に、折れてしまいそうなほど細く、それでいて肉付きの良い肢体。

女性に見間違われる容姿に惹かれてルチアが傍に居るのではないかとラウルは仄めかした。

「そ、そんな訳ないでしょ! どうやったたらそんな結論に辿り着くのよ!!」

「辿り着くもなにも、今までの行動を省みれば……そう思えただけだか?」

煽りに煽られ自身の想いを馬鹿にされたルチアは目尻に涙を溜める。

ラウルが冗談を仄めかしていることが分かっているにもかかわらずにはいられなかったのだ。

「もう! ラウなんか知らない!」

怒りを顕わにしたルチアは席を蹴ってラウルに背を向ける。

感情の爆発に任せて足早に去っていく少女を見送ると、ラウルは胸の奥に溜まってい

たものを吐き出した。

「そう、なんでもないさ……」

紅の水鏡で揺れるラウルの姿は、風に吹かれる花一華のように儚く映ろうのであった。

季節編 ラウルクローズ～聖夜の下陰で暗躍する者～

「偉大なる主 イエス・キリストの御名によって 御前に御奉げ致します——アーメン」

色鮮やかな電飾の灯りに彩られた大広間にて、血塗られた十字架を前に跪き一人影が祈りを織る。

「さてさて、今年もこの季節がやってきたわけだが」

十字を切ることで祈りを終えたラウルは、傍らに置いた帽子を手に取り立ち上がる。立ち上がった彼が振り向き様に声を掛けるのは、世界に名を轟かせた聖書の神の降誕を祝うために集った少女たちであった。

銀髪の麗人と似通った容姿をする女性は、暖炉の前で広げた文書に目を通していた。文書に目を通す彼女の正面では、蒼銀と白髪の少女たちが並べられた馳走を競うように貪り合う。

食卓で白熱する彼女たちとは対照的に紅茶を啜り優雅に談笑をするのは、黒髪紫目の少女と金髪の少女であった。

語り合う少女の傍らには嘗て聖女と崇められ、魔女として火罪に処された金髪の女性が静かに座っており、愁い顔を浮かべて深く息を吐いていた。

また、ソファアーを一つずつ占有し、龍尾を揺らして腕を組む龍王様や肌蹴た着物を身に纏い麗人を誘う猫又も居たが、人外が集まるラウル邸では見慣れた光景であった。

気促に寛ぐ少女たちの姿を確認したラウルは、銀糸によつて編み込まれた結い髪を隠すように帽子を被り直すのだった。

「赤のナイトキャップ、赤白の法衣。そして、白長の立派な御鬚——」

ラウルが祈りを捧げ終えたことに気付いたルチアは、勢いよく席を立つと蒼銀の尾髪を揺らして出迎えた。

人懐こい笑みを振り撒く彼女は、瞳に映る麗人の容姿を述べてゆく。

腹部にまで伸びた特徴的な顎髭。

麗人の細身を覆い隠すのはゆつたりとした赤地のローブ。

足を包む黒塗りのブーツは夢を運ぶ象徴とも言えた。

その姿は正しく——。

「まさに奇蹟者の再来って感じだね！」

——とある守護聖人を元として、伝説にまで成り上げた老人の風貌であった。

「相も変わらず、その恰好は似合っていますね！」

「ラウって細身だし、無駄に鬚なんて付けているからね——って、そこ！ 身も蓋もないことは言わない！」

しかしながら、老人の姿を真似るラウルの格好は少女たちの不評を買っていた。伝説の老人とは異なりその肉付きは無駄がなくほっそりとしたもの。

加えて端正な顔立ちをする彼が伸ばした白鬚によつて、何とも言えない違和感を醸し出すのが実情だ。

衣装を揃えて念入りに装おうとも似合わない——女装が似合う男の娘がゆえの悲しき性であった。

「にやはは、マリにやはラウるんに手厳しいのよね——」

「まあ、ラウル君とマリナ君の仲だからね。下手に可愛がつていたりしたら天変地異ものだよ」

包み隠さないマリナの物言いに対して、曖昧な笑いを上げる黒歌に同意するのは黒髪紫目の少女。

男性口調で毒を吐く彼女は、紫水晶の瞳で普段と変わらぬ光景を静かに称えていた。

「うーん……水を差すように悪いけど、おねえさんはちよつと微妙な気分だったりするのよね」

ラウルの仮装を話題として盛り上がる会場に陰気を含む声が響く。

愁い顔を隠すことのない金髪の女性が胸内に溜まる鬱憤を吐き出したのだ。

「気にするなどは口を避けても言えないが、そこまで深刻に考えることではないと思うぞ、ジャンヌ」

彼女の生い立ちを知るラウルはひどく優しく語り掛けた。

「私の産まれ故郷である彼の国では、宗教的な意味合いはなく、ただの催しの一つとして親しまれていたぞ。クリスマスだからと言って聖書の神の降誕を無理に祝う必要もない。季節の節目の行事として楽しむのも——一興、なのではないか？」

ラウルもまた過去に打たれた楔に苦しむ一人であったのだ。

似通った悩みを持つ彼はジャンヌの苦しみが手に取るように理解できた。

人知れず涙を呑んだこともある。

身を焦がす憤怒に焼かれたこともある。

背負わされた運命を呪ったこともあった。

それでも業魔の麗人は割り切ってみせた。

幻夢の見せる過去は幾ら抗おうと過去でしかなく、自身が踏みしめるのは現在という名の大地。

過去から現在までが大樹のように連なろうとも、無限の可能性を秘める未来を断ち切るには惜しいと。

己を苛む故人の記憶に囚われるのではなく、目の前にある催しごとを楽しむように勧めるのだった。

「……そうね。せっかくのお祭りなのだから楽しまなくちゃ損よね」

伏せていた目を開けたジャンヌはラウルの言葉にゆつくりと頷いた。

業因を宿した魂に縛られることを良しとする筈もなく。

強き意思を宿す瞳には陰りがあるうとも、確かな展望を映すのだった。

「ねえ、ラウル……おねえさんにとびつきりの思い出をちようだい」

優しき言葉に絆されたジャンヌは濡れた瞳をラウルへと向ける。

「もちろんだ。降誕祭を気嫌っていた貴方でも、忘れられない一日として見せよう。た

だ、貴方一人だけに付きっ切りとはいかないが——っ!？」

ない胸を張り、威風堂々とした態度でジャンヌの希望に応えて見せると誓いを立てる

ラウルであったが、突如として彼の胸間に飛び込んできた白い影が誓約の言葉を遮る。

「おっひげ♪ おっひげ♪ ふわふわ!」

「ミュ、ミュリエル……急に飛び付いてこないでくれ」

ラウルの胸間に飛び込んできた白い影の正体は、ルチアと伴に馳走を勢いよく口に運んでいた白髪の少女。

ミュリエルと呼ばれた少女は長く伸びた白鬚に心を奪われている様子であった。

「むー、ラウラウのおひげがいけないんだもん！ アイムはおひげのゆうわくに負けちゃっただけだもん！」

「それは……困ったな」

少女の身体を抱くラウルは呻き声を上げた。

白長の御鬚にご執心のミュリエルは言い聞かせたところで離れはしないだろう。

第一に、幼児思考を抜け切れていないミュリエルには理屈が通じないのだ。

如何な正論をぶつけようとも拒絶の一言で断ち切られることは想像に難くない。

呻き声を上げながらも、彼女の汚れた手を何処からともなく取り出した御絞りで拭いている麗人の様子は、不測の事態に慣れていることが窺えた。

困り顔を見せるラウルは、助けを求めようとジャンヌに視線を投げ掛けるが返ってくるのは苦笑ばかり。

他の顔ぶれに視線を向けても同様の反応が返ってくるだけであった。

「やれやれ、世話が焼ける」

ラウルの困り顔を見たティアマトは、ソファアから重い腰を上げた。

向かう先は無邪気に戯れる少女の背後。

主に仇を為す不屈き者へと魔の手を伸ばした。

「こやつ!？」

「頭がお花畑な猫擬きはこっちにこい」

「それって、わたしのことではないでしょうねー」

ミュリエルの首筋を鷲掴みにしてティアマツトは力づくでラウルから引き離すことに成功する。

その際、口から零れた言葉が黒歌の琴線へ引つ掛かることとなるのだが。

「さてな……いくぞ、ミュリエル」

「あーっ!? 待つて! アイムのおひげええええええ!!?」

黒歌を一瞥したティアマツトは、ミュリエルを連れてソファアールへと帰ってゆく。引き摺られるミュリエルは抵抗を示すが、叫び声が虚しく響くだけであった。

「厳密に言うならば、あなたの鬚ではなくラウルの付け髭に当たります」

無邪気な少女の起こした騒動去った大広間に新たな声音が加わる。

「……いつの間に現れたのかな、オラトルのお嬢さん?」

細長い特徴的な作りの耳翼。

無駄の少ない理想的な体躯に、人の目を惹く整った容貌。

抜けるほどの白い肌は壊れ物を想い起こさせる儂さを宿している。

精巧で儂い人形のような小柄な身を鮮やかな翡翠色のローブに包んだ令嬢が広間の入口に佇んでいたのだった。

「これは御無体なことを。私が午後十時——今から丁度五分ほど前でしようか。屋敷の玄関ホールに留まっていたことはご存じの筈です。趣味の悪いとしか言いようのない常駐型の魔装具にて監視していたでしょう?」

来客を出迎えることもなく、知り得て尚も知らぬ振りをする。

異形の小妖精は麗人の許されざる所業に涙を浮かべる。

「それに……昨日は夜が深まるまで語り合いましたのに………酷い人」

震える声で在らぬことを口にして泣き伏せるあえかなに映ろう少女。

ラウルは自身に集まる少女たちの視線に顔を顰めた。

少女の言い分は利に適ってはいるが、重要な部分が底抜けとなっていたのだ。

まるで誤解を誘発しようとする意志が汲み取れるほどには。

警備のために配置した魔装具を趣味が悪いと言う実、彼女が振る舞う舌技の方が趣味の悪いことは間違えなかった。

「H O H O H O! 人間きの悪いことを言わないでもらえるかな。貴方が魔方陣を介して一方的に語りかけてきたのだから?」

貶めようとする鳶色髪の少女が濁らせた空気を払拭するべく、高笑いを上げたラウルは真実を告げた。

夜が深まるまで語り合っていたことは間違えないが、それは与り知らぬ所。

半日近くも論議を交わすことになろうとは露程も思わなかったのだ。

敢えて付け加えるとすれば、講論ではなかったかと思うのがラウルの偽らざる本音であつた。

「先に私に乞いてきたのはあなたではありませんでしたか？ 今年の降誕祭は如何して盛り上げようか、と。律儀にもあなたの問いに答えて——」

「——ツグミ、皆まで言わないでもらいたい。折角のサプライズが台無しになつてしまふだろ」

片目を閉じたラウルは無粋なツグミの言葉を遮つた。

いま口にされたのでは面白味が半減してしまふ。

密談の内容は明日の楽しみにするようにと、唇に指を添えるのであつた。

「これは失敬。迂闊にも口を滑らせてしまふところでした。以後、気を付けるつもりではあります。人間忘れ易いもの。また粗相を仕出かした時には、教えてもらえると助かります」

自身の起こした不始末にツグミは非礼を詫びて締め括る。

謝罪の言葉に彼女なりの誠意が込められているのはご愛嬌か。

「メリー・クリスマス、ツグミ君。冴え渡る舌振りはいつ見ても衰えることはないのだね」

ティーカップを片手に場景を眺めていた少女は、反省の色も見えないツグミの皮肉を褒め称える。

「それほどでもありませんよ、メアリー。私は経験の足りぬ未熟者。未だ偉大なる父母には及びません。しかしながら、誰しも称賛を受ければ心が動くことは必須。例え世辞であろうとも、その気持ちに揺らぎはありません。故に感謝の意を込めて一つ言葉を送らせて頂きます。Merry Christmas, 『陽気な大帝殿』^{メアリー・シャーレメイン}」

「これはまた一本取られたかな。本当に舌を巻きたくなるほどの物言いだよ」

ツグミに挨拶を返された少女は軽く舌を出してお茶目に苦笑を浮かべるのであった。

「あれ？　メイの名前の綴りって確かMaryだったはずだよね？」

「大方、英名のメアリーと陽気さや祭り気分を謳うメリーを掛け合わせての言葉遊びだろう」

「ああ、なるほど……」

そんな彼女たちの挨拶を目にしてルチアが抱いた疑問にラウルは答えを示した。

慎ましやかに振る舞う少女の本名メアリー・シャーレメイン。

聖書の神の降誕を祝う言葉メリー・クリスマス。

この二つの言葉を合わせて陽気な大帝と揶揄したのでらうと。

的を射ているラウルの言葉にルチアは手を打つのだった。

「最もお祭り気分なのはお兄ちゃんなのでしようけど……」

聖人の衣装を纏い、率先して祭りを盛り上げる銀髪の麗人。

普段から装っている異性の恰好を取ることもない徹底ぶりなのだ。

晩から続く宴が一先ずの終わりを迎えれば本格的に動き出すことになる。

酔狂と言われようとも過言ではない兄分へ、ルフエイは温かな眼差しを送るのだった。

「なにを分かりきったことを言っている、ルフエイ。やるならば楽しむのが信条の私だぞ。こういう時にこそ、徹底した役回りを演じなければ損だろ？」

「ノリノリだね、ラウル」

迷いが残れば半端な結果が目につくのはこの世の道理だ。

半端で終われば、当然の如く面白味も欠けてしまう。

ならばこそ、祭りの時ぐらいは恥じらいを捨て、心行く儘この一時を謳歌してみせる。

確固たる意思を胸に宿したラウルは心くすぐる視線に満身の笑みで応えた。

「役を演じるのは構いませんが、おふぎけが過ぎないように」

「おっと、釘を差してしまっただか。貴方の言う通りほどほどにはするつもりではあるよ」

そして、ラウルが暴走した時の歯止め役はマリナの役目であった。

マリナ自身、羞恥心を捨てることができず、騒ぎ立てることを好き好まない質ゆえに、

時折タガを外してみせる彼を止める役を買って出るのだ。

「ほどほどに、ではなく真心を込めてやり遂げなさい」

この役回りは何時何時であつても変わらない訳だが。

「わたしもお兄ちゃんのかっこいい姿を見ていたいです」

「……善処はしよう。遊び心を忘れてしまえば、ただの作業になり兼ねないからな」

ルフエイにまで言い寄られたラウルはあつさり根負けしてしまう。

最後の抵抗とばかりに尤もらしい言い回しを口にするが、結局は自身を擁護する言い訳に過ぎなかった。

「マリナ君の叱咤によって揺らいだ心をルフエイ君が煽り立てる。ラウル君を落とすには理想的な陣形のようなだね」

「要は飴と鞭だね。ラウが完全に躓けられてる」

「ああ……嘆かわしい。天を冠する高名な魔術師が犬畜生の如く調教されているとは。所謂、騎士に成り下がった彼は魔女に惑わされる運命にあるのでしょうか？」

口々に騒ぎ立てる彼女たちの声が耳に付いたラウルは軽く咳払いをしてルフエイの方へ向き直る。

「ともあれだ……私も演技に力を入れながら、祭りを興じるつもりであるからな。貴方も存分に楽しんでいってくれ」

「はい、今夜も楽しみにお待ちしていますね」

どこか不器用でありながら誠実に応じる兄分の姿にルフエイは顔をほころばした。

「む？ プレゼントを届けるのはサンタであって、私ではないぞ」

されど、無垢な微笑みを向けられたラウルは言葉の意味に気付き細眉を顰めることとなる。

善良な小童たちに恵投をもたらずのは伝説の所業。

約まる所、老人を演じているだけの麗人には他人事であったのだ。

「あはは……」

平然を装う白々しい態度にルフエイは口元を押さえて乾いた笑いを浮かべる。

子どもの夢を壊さないようにとの配慮なのだろうが、幼子から成長し真実を知った彼女からすれば、余計な気を回すラウルの行いはもはや節介の領域に達していた。

「そう言えばプレゼントを届けてくれるのはサンタさんでした」

例え節介であろうともルフエイは素直に受け入れた。

澄まし顔を作って見せるいじらしい麗人の優しさなのだから。

「でも、サンタさんじゃなくて……お、お兄ちゃんが届けてくれた方が、わたしは嬉しいかもです」

「……………考えておこう。必要ならば、彼らとの接触も視野に入れて、な？」

大人顔負けの胸内を秘し隠し、ルフエイは持ち前のあどけなさを前面に押し出す。柔肌を赤らめ潤んだ瞳で見上げる魔女っ娘。

幼さの抜け切れない少女の醸し出す妖花に、不敵な態度を崩さない麗人も心を大きく揺り動かされるのだった。

「糠に釘とは貴男の為にあるような言葉ですね、ラウル」

「……随分と棘のある言葉だな」

「わたしの言葉の意は会得できているでしょうに。仮に分からないようであれば論議するだけ時間の無駄です」

盛大にため息を吐いたマリナは、容易く少女の香りに惑わされるラウルに冷や水を浴びせ掛ける。

何分、この年若き盟主は不用意な発言することが多いのだ。

現に魔女っ娘の口車に乗せられて結社の禁忌に触れようとしている。

紳士なのは一向に構わないが、麗人の羽翼となる彼女にとっては頭の痛い問題であった。

「それはさて置き、下手に誤魔化し続けるのは貴男の為にもこの娘の為にもなりませんよ」

バツの悪そうな顔を浮かべる彼らを見比べマリナは淡々とした声音で論じた。

薄々勘付きながらも意図的に埒外へと追いやる消極的な関係は仕舞にするべきだと。ルフェイも成長したのだからそろそろ頃合いではないかと問い掛ける。

「貴方の懸念ももつとものだ。だが、もう少しぐらいは夢を見続けても大丈夫だろうよ」
鋭い瞳を正面から受け止めたラウルは静かに頷いた。

彼女が並べるのは正論の中の正論。

マリナの意向に従えば倫理的には間違えは起きないだろう。

しかしながら、ラウルは厚かましい好意を受け取ることはできない。

抱かれた夢現を繋ぎ、紡がれし光明を守護する先槍ゆえに。

己に課せられた——自身が課した使命が安易な道を歩ませないのだ。

建前以上に今日という祭りの日に相応しくないとこの本音もあれど、少女の夢を守るラウルの意思には変わりなかった。

「それに私たちが生きるこの世界は、不可思議に満ち溢れた奇々怪々な世界に変わりない。信じていれば奇跡の一つや二つ起きてても不思議ではないだろう？」

魑魅魍魎が跋扈する世界では常識など覆されるもの。

十字を背負う神子は聖槍の洗礼により救いの神となり、侵略戦争の折に隻腕となりし神王は義手を得て暴君を追放するも、不始末によつて起こされた叛乱が原因で命を落とすこととなる。

不変の原理はなく己の概念に囚われれば、足元から崩される世界だ。

中には伝説を真似ることで夢を振り撒く酔狂な輩が一人や二人くらい存在しても可笑しくはなかった。

「——確かにお兄ちゃんの言う通りかもしれないですね」

悪戯に笑んだルフエイは同意を示す。

道化の踊るさまを温かな眼差しで見つめ、奇跡を起こすのを面白おかしく待ち望む。妹分たる彼女も悪戯娘の影響を大いに受けていることが窺えた。

「そうそう、『信じる者は救われる』って、今も昔も世界中で言われているもんね！」
それは義妹として保護されたルチアとて同じことであつた。

本質は違えど麗人の行動を尊重することで場を盛り上げる。

道化と化して踊る事すら厭わない大胆さすらその身に宿していた。

もつとも快活な彼女の場合、先天的に通じるものを持つていたのかもしれない。

「奇跡が起きるのではなく、何処かの誰かが真似事をやってのけるだけです」
「もう！ マリーは本当に無粋だよね！」

「無粋か、無粋でないかは兎も角、マリナの言っていることは真実。付け加えるならば、その文言は古今東西にて扱われる宗教勧誘の殺し文句です。事、三大勢力内の概念で言われるならば、今は亡き聖書の神を信じよと。主を信じるが故に救われていることに気

付かされる。また躰を失った魂が天上へ昇り詰め、生涯に行つた悪徳を許されるが故に救われる、と言つたことを謳つていたのでしよう」

義兄の真似をした迂闊な発言は当然の如く反感を買うことになる。

道化足り得ぬ者が軽々しく真似事をするべきではなかったのだつた。

「ううううつ……助けて、ラウ！ マリーもツグも寄つて集つてわたしをいじめろっつ
！」

手酷い仕打ちに打ちのめされたルチアは両手で顔を覆い、助けを求めてラウルの胸に飛び込む。

「まあ、ジャンヌにも言つたことだが、堅苦しいのは無しにしよう。折角の祭りだ……前夜祭たるクリスマス・イブはそろそろ終わりを迎えてしまふが、降誕祭自体はまだ終えていない。少しばかりツグミに明かされてしまつたが、私の方でも取つて置ききの企画を用意したある。今日はゆっくりと休み、明日は思う存分楽しもうではないか」

優しく受け止めたラウルは蒼銀の髪を手櫛で丁寧に梳いて慰める。

暫くして胸間に顔を埋める少女が落ち着いたのを見計らうと、温かな眼差しを向ける者たちへ傲を飛ばした。

「本腰を入れて参加するのは初めてだから、明日が楽しみなね」

「そうねえ、ラウるんもやる気だし、いい日になるんじゃないのかにや？ まあ……私と

しては今夜のお楽しみがあつた方が嬉しいだけどねえー」

ラウルの言葉にジャンヌは明日を迎えるのが待ち遠しいと身体を震わせる。

興味はあれど秘めた過去ゆえに蛇蝎の如く嫌厭してきたのだ。

半生の間、無駄に過ごしてきた反動が出て仕方がないことであつた。

「取つて置ききの企画ですか……羽目を外さなければいいのですが……」

「まあ、大丈夫ではないかい？　ボク達の盟主殿は最後はきつちりと締めるタイプだからね」

「初志貫徹——とはいきませんね。最後こそ確りしてはいますが、成り行きで巻き込まれる上に、周りの影響を受け易いのが彼の本質ですから。もつとも、今回に限つて言えば、彼自身が企画しているので問題はないでしょう」

一方、ラウルの言葉に不安を抱く者もいた。

享樂的な彼は普段から遊びに対して底なし沼のように余念がない。

今日という日に合わせて纏つている服装がその象徴とも言えよう。

女装好きで知られる彼が司教服を纏い男装しているのだ。

そんな麗人が満身の笑みを浮かべる様子に懸念を抱くのも当然であつた。

疑心に駆られて目を光らせるマリナであつたが、明日まで諦観するという結論に留まるのだつた。

「それでは、お休みなさいませ、皆様。お兄ちゃんはお仕事頑張ってください、ね」
ルフェイの挨拶が締め括り、前夜祭とされた今宵の集会は穏やかな空気のまま解散となる。

魔女っ娘は魔方陣で私室に戻り、小妖精は割り当てられた客室へと転移する。
ジャンヌ、メアリーの騎士組は綺麗な一札をして退室する。

ラウルの胸で泣いていたルチアは羞恥の余りに足音を残し彼方へと走り去った。
大広間に残ったのは半数の五人。

騒ぎ立てた反動か、ミュリエルは毛布に包まりソファで船を漕いでいた。
暖炉の前にいるマリナはこの場の始末をするために残っている。

紙束を手にする彼女の片手が妖猫を捉えているのは御愛嬌であった。

「さてと……末娘の激励を受けたのだ、道化の真似事をするお兄ちゃんは役目を果たすとするかな。道中よろしく頼むぞ、ティア」

「ふん、私も暇ではないのだ、さっさと支度をしろ」

宴会の始末を任せられた彼女たちに敬礼を飛ばすと、大袋を担ぎラウルたちは大広間を後にする。

こうして、赤を基調とした法衣を身に付けた麗人は使い魔を伴い、聖夜を迎えた街に繰り出すのであった。



星瞬く寒空に響き渡る鈴の音。

騎龍に跨り空駆ける麗人が自前の美声で祝いの旋律を奏でる。

「ストップだ、ティア。どうやら、あれが次のお宅のようだぞ」

検索用の魔術を手元に展開したラウルは、龍鱗を叩き自身が騎乗する彼女へ合図を送る。

合図を受けたティアマットは上体を起こし緩やかな減速へと移行する。

半円を描き下降する彼らは、やがて一件の民家へと辿り着く。

煤けたレンガ造りの外壁に、屋根から飛び出した煙突。

郊外に建てられたごく一般的な一軒家であった。

しかしながら、この変哲もない古民家がラウルの目的の地だった。

「用事は早く済ませてこい。寒空の下、一人で待たされるこちらの身にもなってほしいものだ」

龍王姿の彼女は背より飛び降りたラウルへ愚痴めいた声援を送る。

八幡ラウルの内に宿す業が風変りな行動原理となつてゐることも分かる。

守護者として背負う責任感が彼を突き動かせてゐることも理解できる。

理解できるが彼女が不満を抱くこととは別問題なのだ。

口に出しても仕方ないことだが、待たせられるティアマットとしては、この時間は苦痛に変わりなかつた。

「そうだ……ティア、目を瞑つてくれないかな?」

愚痴をこぼすティアマットの様子を見てラウルは予定を繰り上げた。

元々、我が儘に付き合つてくれたお礼として用意したものだ。

雰囲気も何も無いが、彼女の憂いを晴らすことができるのならば訳なかつた。

「何故、貴様の言うことを聞かなければならない。何をする心算かは知らないが目を瞑る必要などないだろう」

「別に取つて喰おうという訳ではない。それとも私が信用できないのか?」

「む……」

澁々ながらも瞼を閉じるティアマットの姿を確認したラウルは、背負う大きな袋から絹糸の編み物を取り出した。

袋一杯に詰まつた編地の防寒具は彼の手に余る代物。

全長は明らかにラウルの身長を超え、ティアマットの体軀にまで迫るものとなつてい

る。

取り出したその長物を彼女の首回りに壊れ物を扱うような優しい手付きで巻いてゆく。

「もう目を開けてもらっても大丈夫だ」

か細い白指で作り出した大きな結び目を横にずらし、その出来にラウルは頷いた。

自画自賛にはなるが、人前に出しても恥ずかしくはないものとなっていたのだ。

手塩を掛けたこともあり喜びも一段と深いもの。

後は受け取り手のである彼女の反応を見るだけだった。

「ラウル……これは？」

鎌首をもたげたティアマットは自身に巻かれたマフラーを手取る。

染め上げた上質な絹糸を惜しげもなく使い、何故か横糸まで入れて織り上げた奇抜な

編物だ。

手作りが丸分かりの構造をしている割には緻密に編み上げられている。

加えて、絹糸一本一本から強力な魔の波動を感じ取れた。

一般的な魔法使いや魔術師が束になった所では届かないほどの術が施されているこ

とは明白であった。

不敵に笑む麗人からの予想すらできない贈り物にティアマットは目を見開いた。

「月影に輝く艶やかな龍鱗を彩る紫色の一点花——気高く、寛大な愛情を持つ貴方だからこそ、よく似合っている」

「なっ——!?!」

「それでは往つてくる。寒いことには変わりないだろうが、結界を張つておいたので暫しの間、辛抱してほしい」

背後で騒ぎ立てるティアマットの声を追い風にしてラウルは夜の空を駆ける。

瞳の先にあるのは古民家の二階部分。

伝説の老人に夢を描く幼子が眠る寝室だ。

「お邪魔させてもらうぞ。名も知らない家主さん」

魔術を使い瞬く間に窓を抜けたラウルは室内へと侵入を果たした。

侵入した室内を見渡すと目的の人物は間もなく見つかることとなる。

両脇を両親と思われる男女に挟まれて仲睦まじく夢を結んでいたのだ。

「それでは、貴方の願いを覗かせてもらうよ、お嬢さん」

微笑ましい筈の光景に複雑な顔を浮かべたラウルは、目を瞑り静かに一息吐くと役目を果たすべく動き始める。

親子の寝台に片膝を下ろし虚空に指を奔らせる。

手早く織り上げた魔方陣を幼き娘子の額に向け起動する。

幾ばくもなく輝くを失った六羽の魔方陣を消したラウルは次なる術を紡ぎだす。

「boot——『造星工房』ジエネシス・ステラシオン」

寝室を埋め尽くす数多の星々。

靈氣の奔流に引かれた水霧が室内を満たす。

奇蹟の模倣者が造り上げた異空間——それは溢れ出すほどの神秘を内包した銀環の工房であった。

自前の工房を展開した彼は魔力を源として少女の夢を織り成す。

それはあらゆるモノの起源となった創世の御業。

生を産み出し、在を与える。

人類の願望にして禁忌を三対六翼を展開するラウルは成し得る。

そして、星々の輝きが治まった一室へ新たに生み出されたのは一つの無機物。

ラウルの両手に収まる精鍛な作りをした可愛らしい創造物であった。

「出来は上々……と言ったところか」

御業を為した麗人は備え付けの靴下の傍へ西洋人形を静かに立て掛ける。

「Merry Christmas. 世界の御宝たる愛しき貴方に大羽の祝福が在らんことを」

幸福の祈りを込めて、幼き娘子の額に祝福を落とした魔術師は早々に部屋から立ち去

る。

翼を羽ばたかせる飛禽が事跡を残すことがないように。

奇蹟者の現身たる麗人は、人知れず幼子の願いを叶え、一片の銀羽を贈り届けるのであった。

* * *

明けの明星が聖夜の空を彩る頃――

天高くそびえる楼閣を象徴とした城郭の一室へ魔道の輝きが広がる。

光を放つのは六羽の紋章を基調とした魔方陣から現れたのは赤地の法衣に身を包む麗人であった。

容易に少女の私室へと忍び込んだラウルは小さく口を開いた。

「此処まで頑丈な結界を張っているとは意地悪が過ぎるのではないか、ルフエイ?」

あどけない少女の寝顔を前にして微笑を讃える麗人の顔には怒りはなく、小洒落た悪戯を成した魔女っ娘への慈愛が満ちていた。

「取り敢えずはメリー・クリスマスと言わせてもらおう」

ルフエイの眠る寝具へと腰を掛けたラウルは小さく祝いの言葉を送る。

「眠っている最中に悪いが貴方の願いを聞かせてもらおうぞ」

断りを入れたラウルは少女の額に向けて指を奔らせる。

虚空に描くは読み取りの魔術を込めた方陣。

脳髓を侵す魔道の秘術が織り成される。

「……貴方は本当に要らない気遣いばかりするな」

魔術によってルフェイの望みを盗み見たラウルは静かに息を吐く。

静かな寝息を立てる少女が見せたのは、彼自身も諦めた懐かしき光景。

久しく目に出ることが出来なくなった古き良き情景であった。

「任せろ、貴方の願いはこの八幡ラウルが聞き届けて見せよう」

少女の願いは、また麗人の願い故に。

真摯な眼差しを向けるラウルは決意の言葉を口にする。

「だから……私が叶えて見せるから……ルフェイは気兼ねなく心を休めてくれ」

未だ夢の世界を漂う少女の頬へ誓いの口付けを落としたラウルは静かに私室を後にする。

足早に廊下を渡るラウルは通信用の魔方陣を展開した。

繋げる先は自身が盟友と定めたもう一人の相手。

残酷と揶揄されるほど興味のないことには無情理な心柄ではあるが、彼の周りも含め

て非常に頼りになる者の多い友人であった。

「——ミリーか？ 早朝からにすまないが、至急アーサーへと繋いでもらえないだろうか？」

健気な少女の見せた憧憬を再現するべく、奇跡の担い手は奔走を始めたのだった。

戦闘校舎のセブンスミスト

プロローグ

静かに深まる小夜のこと。

飽和する紫光が深海の青と為りて仄かに包む。

華やかな香に満ちた一室で、黒光に照らす出された細い影が身じろきを繰り返していた。

まるで神が手ずから創ったような無駄のない輪郭。

天蓋に隠された柔らかな寝台に銀の絹糸が扇情に広がる。

浅く吐息を繰り返すその姿は、安らぎの時を過ごす女神のようであった。

月の女神こと、濡れ羽色のランジェリーに身を包む女装の麗人は、思考の海から脱してゆつくりと瞼を開いた。

「グレイファイア・ルキフグス……か。随分と大物が出てきたようだ」

ラウルは夕焼けに染められた銀髪を思い出して目を細める。

亡き魔王ルシファアの血を継ぐ、分家ルキフグス家の遺児。

最強の女性悪魔とも言われ、『クイーン・オブ・デイバウア銀髪の殲滅女王』の異名で恐れられるほどの実力者だ。

最近は鳴りを潜めているらしいが、かつては冥界の内戦に於いて、御神輿に祀り上げられたこともある。

四大魔王の直系である、旧魔王たちを退けての選出だけにその非凡さが窺える。

「お家騒動だろうな。巻き込まれなければいいが……」

そして、彼女はリアスの兄にして現魔王のサーゼクス・ルシファーの妻でもあったのだ。

魔王の妻という重役に就いている彼女が、用もなく人界に上がり従妹の様子を見にきたなどということはない。

おそらく、グレモリー家が抱えている継承者の問題。

長寿の悪魔たちがなにを騒いでいるのかと、ラウルにとって眉唾ものであるが、純潔に拘る上級悪魔たちにはそうもいかない事情があるのだろう。

身近で起こる騒動に一抹の不安を抱くのであった。

「誰だ、こんな時間に？」

自室に僅かな揺らぎを感じたラウルは身体を起こす。

肌に伝わる魔の波動。

視線の先で魔方阵が浮かび上がり、深い青色に包まれていた部屋に銀の光が満ちた。

光の満ちる中、ラウルは術式を織る。

眼球を覆うように展開されたのは銀の魔方陣。

視界を保護と同時に結界を抜けてきた転移の術式の解析に入る。

見覚えのある術式に首を捻ることになる。

解析が進むにつれて険しくなる彼の顔は、最悪の結果に剣呑さを帯びることになる。

「何をしに来た、グレモリー？」

解析を終えたラウルは、結界を抜けてきた紅の悪魔に鋭い視線を投げ掛けた。

「——っ!? 部長と呼んでくれないの？」

突き放すようなラウルの態度に、陰を落とす悪魔の少女。

転移してきたのは、渦中の最中にいると思われたリアス・グレモリー、その人であった。

「いいわ、今は許したあげる」

口を一文字に結ぶと、リアスは憑いた陰を振り払う。

決意を宿した瞳で見据える彼女は、いつもの気丈な振る舞いを取り戻した。

「許すもなにも、貴方は不法侵入なの——」

「ラウル——」

哀情と不安に揺れる碧。

悲哀の決意を宿した瞳がラウルに言葉を紡がせない。

いつにも増して強引な彼女の振る舞いに、ラウルの脳髄は警鐘を鳴らした。

「——私を抱きなさい」

鮮血色の髪を掻き上げた紅の姫は、碧玉を潤ませて迫りくる。

寝室へ押し入った痴女に、ラウルは頬を引き攣らせることになる。

「私の処女をもらってちょうだい、至急頼むわ」

紅糸の紡ぎし運命は、銀の麗人を継承者問題へと巻き込むのであった。

一話 襲撃の黒

「ただいま」

柔らかな日差しを取り込む家屋に響いた優しい鈴の音。

開いた扉の隙間から、吹き抜ける清涼な風が銀糸を浚う。

陽光に輝く銀髪を抑えるラウルは、家屋を守る者たちに帰宅を告げたのだった。

「ふむ。外出中では……ないな？」

されど、帰宅したラウルを迎える者の姿は見えなかった。

皮靴を脱いで揃えると、備え付けのシューズボックスを開く。

視線を奔らせ靴の有無を確認すると、手に持つ革靴を納めた。

「だとすれば、奥の屋敷か。来訪の予定はなかったが……あの娘辺りが挑みにも来たか」

主従の繋がりを辿ったラウルは、黒歌の居場所を割り出す。

平日に表の住居でもあるこの別邸に居らず、裏に当たる奥の別邸にいることから、来客の存在を思い浮かべる。

心当たりがあるとすれば、同じ結社の仲間たちぐらい。

特に、ラウルが盟友と呼ぶ、騎士の妹辺りが来ているのではないかと割り出した。指先で描く銀の方陣。

奥の別邸へと転移するために用意した術で、ラウルは転移する。

「にゃー！ おかえりにゃー。いま、ラウるんを迎えに行くところだったのよー」

「ただいま、黒歌。ルチアも貴方も奥に引っ込んでいるということは、誰か訪れたとの認識で構わないか？」

見開かれた金の瞳。

転移した先でラウルが出くわしたのは黒歌であった。

唐突として出くわすことになったが、どちらも驚いた雰囲気はない。

ラウルは繋がりによって黒歌の位置を確認しており、また黒歌も浮き上がる魔方陣から、ラウルが転移してきたことを予測できたのであった。

すり寄ってくる黒歌の髪を掬って口付けをして、ラウルは来客の有無を尋ねる。

「だーれだ？」

可愛らしい音色を奏でるアルト調。

後頭部に柔らかなものを押し付けられた感覚とともに、ラウルの視界は暗闇に染まる。

「……ティアアで間違えないかな？」

視界を隠されたラウルは、覆い隠す掌の甲から背後にいる女性の腕に指を滑らせる。指に伝わる感触は、布地の感触であり、女性が素手を保護していることが分かる。

滑らせた指が女性の肘辺りまで到達すると、ラウルは正体を言い当てた。

『天魔の業龍』ティアマツト。

龍種でも一目置かれる五大龍王の最強格と呼ばれるドラゴンである。

ラウルたちと交流のある彼女は、ティアアの愛称で親しまれていた。

「む、つまらん。相変わらず張り合いがないな」

苦もなく言い当てられたティアマツトは、不満を口にする。

その不満を顕わにした言葉とは裏腹に、頬は弛みラウルに言い当てられた喜びを顔に出していた。

「ティアアの匂いは独特だからな。こう、胸が温かくなるような、日輪の抱擁を受けているような、優しい香りがするからな」

気の強さを表すかのように吊り上がった目尻。

鋭い光を放つ蛇の瞳は黄金に輝く。

くびれは折れてしまいそうなほど引き締まり、黒布のワンピースに隠された豊満な女性の象徴は、見る者全てに母性を感じさせる。

そんな風貌と真逆の愛らしさを醸し出すティアマツトの振る舞いに、ラウルは嗜虐の

炎を灯らせた。

「——っ!? このっ——女装マニアの変態めっ!」

「変態とは酷い言いようだ。私は褒めたと言うのに」

惜しげもないラウルの言葉に、顔を赤らめ手を上げるティアマツトであったが、逆襲の拳が届くことはない。

飄々と躲す麗人の前では、龍王の腕力を以ってしても、捉えることは敵わないのだ
「ぬけぬけと……いったいどの口で言うのだ」

力を振るうことの敵わないティアマツトは毒づいた。

黄金の瞳で、不敵に笑うラウルを恨みがましく睨み付けるのであった。

そんな愛らしい龍王様の振る舞いに、ラウルは小さく笑声を漏らした。

「ようこそ、ティア。歓迎するぞ」

「十分に持て成せ。それと、来たのは私だけではないぞ」

鼻であしらうティアマツトは、両手で歓迎の意を伝えるラウルから顔を背ける。

ラウルが彼女の視線を移した先を追うと、悠然と歩み寄ってくる影が一つ。

ティアマツトとお揃いのワンピースを纏う、齢十一、十二に見える少女。

同色の黒髪を流す小柄な少女は、際限なく溢れ出す龍気さえなければ、姉妹と捉えられてもおかしくはなかった。

龍氣の溢れ出す少女は、可愛らしい足音が付きそうなほどの覚束ない足取りで、ラウルに歩み寄る。

「……オーフィス、貴方まで来たのか」

「来ては、ダメだった？」

「誰もいけないとは言つてないだろ。龍種の中でも上位の貴方たちが、自主的に訪れたことを驚いているだけだ」

ラウルは少女の頭を一撫ですると、向けられるつぶらな瞳を覗き込んだ。

瞳の奥に広がるは深淵の闇。

果てしなく広がる闇は、穢れなく世界を映し出す。

揺らぐ水面のように、果ての見えない海原のように、淡々と少女は漠然的な世界を見詰める。

真の意味で全てが無価値でありながら、その全てを呑み込まんと。

それは瞳を覗き込むラウルとして例外ではなかった。

無垢な瞳は儂い薄氷を割り、虚無の闇へと引きづり込まんとするのだ。

深淵の闇を秘めた瞳は、あどけない姿を見せる少女が、無限の体現者であることを否応なしに知らしめるのであった。

「私は契約者であるお前の様子を見にきただけだ。決して、寂しくなったわけじゃない

ぞ。決して」

オフィスの瞳を覗き込んでいたラウルに、ティアマットは用件を伝えた。

最近、呼び出すこともないのはどういうことかと。

一月前の事件に始まり、その後もオカルト研究部に足繁く通い、ルチアの訓練でできた破損物の後始末に奔走し、家系を支えるための商品の納品と自身の研究を両立させる。

猫の手を借りたくなるような毎日を送っていたラウルは、黒歌と同じように契約を結んだティアマットの存在を忘れてしまっていたのだった。

自身の非を認めたラウルは、顔を赤らめるティアマットの詫びを入れる。

「それはすまなかった。お詫びに肩でも揉むことにするよ」

「ふむ。許してやらんこともない」

喜びに満たされた顔を見せる龍王。

ラウルはティアマットの反応を見て微笑みを浮かべるのであった。

「我、ラウルと共に、グレートレッド、倒す」

和やかな雰囲気踏み砕くように、『無限の龍神』ウロボロス・ドラゴン オフィスは、ラウルに両手を差し

伸べた。

静寂を手に入れるように、かの夢幻を共に打倒するように。

世界最強たるオーフィスと対を為す、『アボカリユプス・ドラゴン真なる赤龍神帝』を次元の狭間から追放するた
めに、力を貸すのだと。

「……気が早すぎるぞで」

そんなオーフィスの行動をラウルは糾弾した。

以前、興味本位で約束をしてしまったラウルが悪いのだが、ラウルとてオーフィスと
対を為すような大物と戦うには、準備が整っていないのが現状であった。

「我、ラウル、見つけて、二年待った。我、待ったから、ラウル、早く応える」

「未だ二年だ。それに、今の私では夢幻には届くまい。ここまで、生まれ持った才能と先
人の培った叡智だけで、私は成り上がってきたようなものだからな。オーフィスも青い
果実では美味しくないだろ？」

故に、ラウルはオーフィスを諭しに掛かった。

魔術結社という樹の下で産まれたラウルは一粒の種。

代々受け継いできた才覚を宿した種は、先人の培った叡智と名を持つ肥やしの中で育
てられる。

芽を生やし、すくすくと育った種は、やがて果実の生る樹木へと成長する。

されど、初めて実った果実は不出来なもの。

形もさることながら、味や色合いも物足りないものができる。

過程を一年、二年と年月を重ねる内に、樹木も学習していく。

年月を重ねた先に一掴みの結晶を生すのだ。

種より幾年の時を重ねて生じたその果実も、熟さねば美味しくはならない。

青い果実のまま采られたのでは、実は固く甘味も薄くなってしまう。

樹も実も熟してこそ、美味しくなるのだと、自身を果実に例えてオーフィスの心を揺さぶる。

「分かった。ラウル、強くなるの、待つ」

「いい娘だ」

「ん……」

聞き分けのいい娘に褒美を上げるが如く、ラウルはオーフィスの頭を撫でる。

頭を撫でられて気持ちよさそうに目を細める龍神の姿は、到底世界最強の存在だとは想像も付かない光景であった。

「あつ、おかえりラウ。丁度、焼き上がったところだから、みんなもお茶にしよ」

微笑ましい光景を作り出す彼らの下に漂ってきたのは、芳ばしく甘い焼き菓子香り。

漂ってきた方向に持を向けると、半開きの扉の間から顔を出したルチアが、厚手の手袋を身に付けて手招きをしているのだった。

* * *

「ルチアの作った、菓子、美味」

「こら、待てオーフィス。それは私のだぞ」

「強い者、全てを得る。これ、龍種の掟」

「ぐぬぬぬ」

アメリカ式のふつくらとしたマフィンを取り合う龍王と龍神。

大食いな二龍が来ているということで、多めに作つてあるそれは十分な数が用意されている筈であつた。

事実、彼女たちの目の前には数十の焼き菓子が彩られていた。

それなのに、手を伸ばす労力を惜しみ、争う彼女たちの姿が滑稽に思えてラウルは苦笑いを浮かべるのだった。

「ティア、これをあげるから機嫌を直せ。オーフィスも意地悪をしない」

「お、お前が手を付けたものなど……も、もらつてやらんでもないぞ」

一方的に搾取されるティアマットが可哀想に思えてきたラウルは、手元のブルーんクッキーを細指に挟んで差し出した。

目の前に差し出される好意に対して、ティアマツトは視線を彷徨させた。

右に、左に、忙しく動く視線がやがて定まると、意を決したようにゆつくりと小さく口を開いたのであった。

「ラウル、甘い。ちゃんとした序列、必要」

ラウルから差し出されたクツキーを口に含み、ほくほくした顔を見せるティアマツトを見て、オーフィスは表情を強張らせる。

小さな怒りの矛先は、龍種の掟を乱したラウルに向くのであった。

「必要かもしれないが、今はお茶時だ。小難しいことは、なきにしようではないか。然もないと、ルチアの淹れてくれた紅茶が不味くなるからな」

虚無なる瞳を向ける龍神に、ラウルはティーカップを掲げる。

茶会の時は、何時如何なる場所でも、優雅にお茶を楽しむ。

完全に英国色に染まっているラウルであった。

「それにヒエラルヒーなど、得てして作るものではない。共に過ごしていくうちに、気付かぬままにできるのが、最善だと思ふぞ」

——自然に。

それはオーフィスの意見を一蹴したラウルが目指す共生の在り方であった。

同じ序列を作るにも、本人が認め合つて作ればいい。

ラウルは誰かに強制されたのではなく、自発的に行動するのが望ましいと考えていた。

理想論と言われればその通りであったが、ラウルの言動の結果が実ったのが現状であった。

かつて暴君と名を馳せた龍王と世俗に興味を示さなかつた龍神が、同じ卓で茶会を開く。

思えばつんけんしていたティアマットも、無表情であつたオーフィスも、随分と可愛くなつたものだど、ラウルは笑みを零したのだつた。

「ラウル、言うこと、我、難しい。だけど、お茶、不味くなる、嫌。だから、我、ラウルに従う」

「そーだよね。ラウの言うことは小難しいよね」

ラウルの言い分に一応の納得を示したオーフィスは、大人しく両手のマフィンを口にする。

両頬をリスの如く膨らませ始めたオーフィスに、追従したルチアはポケットよりハンカチを取り出す。

ルチアは取り出したハンカチで、食べかすを散らかしたオーフィスの頬を拭うのだつた。

「まあ、それがいいところなんだけどね。あまり考えずに剣振れるし」

「そうだな。お前のお蔭で私も自由に翼を広げられるのだ」

ルチアは片目を瞑ってお茶目に目配せをし、ティアマツトは同意するように首を縦に振る。

余りに人任せな彼女たちの態度に、ラウルは深く息を吐いた。

「……少しは私の負担を減らしてほしいものだ」

「しようがないにや。この二人に期待しても無駄だと思ふのよねー」

彼女たちの自由奔放な行いの皺寄せが来るのは、いつもラウルのところ。

ゴーレムを壊すこと然り、剣を折ること然り、何処かの勢力へ喧嘩を売ること然り。

ラウルは修復や偽装工作に奔走することになるのだ。

改めて思い返すと、ここ一ヶ月の間、何処にも喧嘩を売ろうとしないティアマツトの行動が、異常に思えてくるほど。

そんなラウルの苦勞の一端を担う黒歌は、脳筋に言っても無駄であると、鈴をころころと転がして音を響かせるのであった。

「おい、雌猫。いまのはどういう意味だ？」

「黒にやんでも、ちよつと見逃せられないかな？」

「にやにや！ ルチにやんもティアも、そんな怖い顔しないでほしいのよねー」

ルチアとティアマツトは身体を乗り出して、黒歌に問い質す。
丁度、席の位置的にも、黒歌は囲まれてしまう。

逃げ出そうにも逃げ出せない状況に、主であるラウルに視線で助けを求めた。

「喧嘩ダメ。お茶、不味くなる」

突如として膨れ上がった力が辻風となり吹き付ける。

声を上げることも許さず放たれた龍気は、少女たちを吹き飛ばす。

茶会の時に、無粋な真似を見咎めた無限の体現者が、喧嘩の仲裁の為に割って入ったのであった。

「これでまた一つ賢くなったな。偉いぞ、オーフィス」

「ラウル、我、また強くなった？」

首肯したラウルは、誇らしげに胸を張る少女を見詰めた。

人を疑うことを知らない無垢な龍神。

彼女がこのままでは、いつの日にか騙されてしまうだろう。

もし、騙され利用されるような事態になってしまえば、世界最強たる彼女が世界に与える影響は計り知れない。

ラウルはそのような時が訪れてしまった場合を考え、少しでも善悪の区別が付くようになればと、強引な手段で喧嘩の仲裁に入ったオーフィスを怒ることはなかった。

「オーちゃん、さっきのはダメだよ。私の頭が割れちゃうじやう」

「全く、手加減をしてほしいものだ」

「ま、巻き添えにや……。巻き添えでオフィスの攻撃をもらうなんて……。勘弁してほしいにや」

口々に非難の言葉を口走り、壁際で這い蹲る少女たち。

喧嘩仲裁の為に吹き飛ばされたルチアたちは、頭や腰を押さえているが概ね無事であつた。

* * *

「そう言えば、オフィス。貴方が祀り上げられている組織はどうなつた？」

茶会の後片づけをルチアと黒歌に任せたらウルは、虚無の瞳を覗きオフィスに問う。

オフィスが祀り上げられている組織の動向を。

カオス・ブリゲード
禍の団などというオフィスが首領を務める組織。

オフィスがラウルの下をたびたび訪れる理由の一つがその組織への勧誘であつた。

ラウルの知り合いも多くが参加しているらしいが、どうもきな臭い組織である。

一度、リークに依頼を出したものの断られ、独自に調べてみるとなかなか面白いことになっていったのだった。

幾多もの思惑が絡み合い、禍という名に相応しく、実に混沌としていたのであった。禍因溢れる彼の組織はいずれ世界に災いを齎すであろう。

それは、おそらく目の前の少女の意思に関係なく。

体の良い旗印とされた彼女には、何一つ知らされることはない。

一部の暴走だとしても、オーフィスの意思だとして罪を被せられてしまうのだ。

そのような事態に陥らないためにも、ラウルは幾つか手を打っている。

組織に入り込んでいる知り合いとの連絡を密にする。

自身の部下を組織の内部に潜り込ませるようなこともしていた。

また、首領たるオーフィスの心に色々と働き掛け、周りの存在を意識させる。

勧誘に訪れたついでに、意識して視た組織内部の様子を報告させるのも、その一環であった。

しかし、組織の動向を尋ねたラウルの問いに、オーフィスは小首を傾げて見せる。

「言い方が悪かったな。グレートレッドを墜とすのに、協力をしてくれる奴らの動向はどうなっているのだ？」

白を切るオーフィスの行動に、思い当たる節があったラウルはいま一度問い直す。

「蠅の王、悪魔、集める。槍の主、人間、率いる。魔法使い、魔術師に近づく。騎士、たくさん。槍の主とは、違う道、歩む。鴉、協力してくれた。だから、ラウルも、こつちに来る」

オーフィスから齎された抽象的な言葉をラウルは頭の中で整理する。

現在、判明している派閥のほとんどが、すでに動き出していた。

どの程度動きを活性化させているかは、オーフィスからだけの情報では憶測できなかったが。

具体的な憶測こそできないものの、近い将来で世界を巻き込んだ戦になるだろうと、ラウルは予測するのであった。

「彼らまで、動き出したか……。ならば、私は要らなくないか？」

そして、オーフィスから齎された情報の中で、聞き逃せないことが幾つかあった。

騎士たちが多く参加しているとのこと。

元々、『円卓の黒騎士』は傭兵組織であることから、金銭で雇われたことも想像できる。それでも、今の時期から雇ったのでは、時期尚早ではないかと言わざる負えなかった。人員の確保はできるが、対価として莫大な資産が必要となる。

そんな大逸れたことができる人物に、一人だけ心当たりがあったラウルは、警戒心を強めたのであった。

また、鴉が協力を申し出たと聞き捨てならない報告も上がった。

鴉とは一般的に墮天使を指す差別用語ではあるが、ラウルたち一族を指す隠語ともなっている。

前者ならあの墮天使総督が黙ってはいないだろう。

オフィスの物言いからして、後者である可能性の方が高いが、それはそれで問題であつたのだつた。

なにせよ彼らが参戦したのであれば、新参者たるラウルが禍の団に参加する必要性が見えてこなかつた。

「ダメ。両翼揃えば、鴉、強くなる。そしたら、グレイトレッド、墜とせる」

「かも知れないだけだ。確かに、私たちは夢幻と相性はいいが……」

ラウルは禍の団に自身が不要ではないかと問うが、勧誘を続けるオフィスは首を振つた。

彼女の宿願を遂げるためにはラウルの力が必要であると。

「どちらにしろ、参加するわけにはいかなからな。こちらでもやることがあるのでな」
ラウルとて禍の団に興味がないわけではなかつた。

オフィスの主張するグレートレッドを墜とすことも、力ある人外の者たちに戦いを仕掛けるのも、若さゆえか心くすぐられるものがあつたのだ。

ただし、目の前の課題として、赤龍帝の幼馴染を鍛えることがある。

遠い昔の約束のためにも、自身の我が儘を聞いてくれた者たちのためにも、それだけは成し遂げるつもりであった。

オーフィスの誘いに、ラウルは残念そうに肩を竦めたのだった。

「ラウル、やる事、ドライグの事？」

ラウルが断りを入れた理由。

それはオーフィスによって暴露されることになる。

奇しくも、オーフィスが暴露したのは、赤龍帝嫌いで有名なティアマトの前であった。

「ほう」

地の底まで響く様な怒気の震え。

オーフィスの暴露によってラウルは、沈黙を保っていた龍帝の怒りを買うことになる。

「ひゃっ!？」

蠢くは漆黒の蛇蝎。

ティアマトの背後から伸びたそれは制服内部に忍び込みとぐるを巻いた。

不覚にも腰部に伝わる龍鱗の感触に、ラウルは少女のような悲鳴を上げてしまうの

だった。

「私を放つておいて、アイツに現を抜かすとはな。どうやら、私の契約者としての自覚を持たせてやらないといけないようだ」

いとも簡単にラウルを捕らえることに成功したティアマットは、放置された一ヶ月の恨みと先程オーフィスに良いようにあしらわれた八つ当たりをラウルの首筋に腕を回して始める。

「く、首と腰が絞まっているのだが……放すつもりはないのか、ティアア？」

ティアアマットを怒らせてしまったラウルは、背後から首を絞められることになる。

ラウルは首筋に回る腕を叩いて不当な暴力に抗議する。

抗議するも首筋や腰部に掛かる圧力は増すばかり。

特に腰部に至っては、骨盤が悲鳴を上げるほどであった。

「……ティアア、そろそろ、勘弁……して、くれないか？ ……これ以上は、落ちて、しま……」

顔を真っ赤に染めて、息も絶え絶えな様子の子のラウルは、最後の抵抗とばかりに両腕に力を込めた。

されど、ラウルの首を絞めるのは、五大龍王最強の女帝。

人並みの腕力しか持たないラウルでは、氣道を確保することすら叶わなかった。

「……や……テイ、ア?」

「放してもいいが——」

首裏に舌先を這わせて、ラウルの抵抗が弱々しくなったことを確認したティアマットは、首筋を固めていた腕を弛める。

ティアマットに解放されて、やっとのことで氣道を確保できたラウルは、身体の隅々にまで行き渡らそうと、目一杯空気を吸い込んだ。

そんな無防備なラウルを突如として浮遊感が襲う。

腰部でとぐろを巻く龍尾。

浮遊感とともに近づく天井。

鈍くなった思考で、なんとか事態を把握したラウルは、衝撃緩和の術式を編み、地向けて障壁を作り出す。

「——っ!?!」

身体を突き抜ける衝撃。

魔術と障壁の二重の緩和剤でも、殺し切れなかった衝撃がラウルを苛む。

背中から叩きつけられたラウルは、肺に溜めた空気を吐かされることになった。

「——心移りしやすい男の娘を懲らしめてからだ」

力なく床に伏すラウルに伸し掛かるティアマット。

極上の得物を前に、金色の蛇の瞳を猛々しく輝かした龍王は、暴君であった頃の一面を見せ付ける。

「子でも作れば、お前の気持ちは私たちに向くのかな？」

「……冗談ならやめてくれ。私が後で痛い目を見てしまう」

背中に強い衝撃を受けたラウルは、自身を押し倒した龍王に涙目で訴える。

小娘のような態度を取ってしまったことで、ティアマトの感情を煽ってしまったていることをラウルは知らない。

木目板の上へ広がった銀髪が、得体の知らない色香を引き出してしまったために、一層のこと彼女を魅了していた。

「我も、興味、ある。ラウルと我の子、絶対、強い」

「……………青い果実を箸り取ろうとしないでほしいところだ。第一、オーフィス、貴方は子を生すことが可能なのか？」

頬を挟むように添えられた小さな掌。

ラウルの出す色香に引き寄せられたのか、無垢な龍神まで動き始めてしまった。

「問題ない。オリヴィアの姿、真似た。故に、我、子、作れる」

「そ、そうか……」

「だから、我、ラウル、襲う」

オーフィスが子を産むという事実には、ラウルは強い衝撃を受けることになる。それも知り合いの姿を真似ているとも言う。

似せているのではと勘付いていたラウルであったが、本人の口から伝えられた真実に動揺を隠せない。

龍神の告白によつて、ラウルは混乱してしまい茫然とした姿を晒してしまった。

そんな軽い放心状態に陥ってしまったラウルに龍の手が伸びる。

「~~~~っ!? ティ、ティア……できれば、場所を移したいのだが」

抵抗すら示さないラウルのリボンやボタンを筆り取っていくティアマット。

ラウルが意識を取り戻した時には、すでにブラウスのファスナーは降ろされ、馬乗りする龍王によつて身包みを剥がされかけていた。

「ほう。いつもなら所構わず誘いを掛けて来るのに、いざという時が来ればこの体たらくか……全く嘆かわしいばかりだ、このへたれ女装マニアめっ!」

「ラウル、綺麗。雄、生まれた、間違い」

「……ありがとう、オーフィス。褒め言葉だと受け取っておくよ。だが、私にも心の準備というものがな——」

オーフィスの何とも言えない褒め言葉に、ラウルは礼を返す。

礼を返した後、ティアマットに視線を向けて、酷い言われように抗議するが、その言

葉は最後まで紡がれることはなかった。

強引に塞がれる唇。

見合わせる蛇の瞳は嫉妬の炎を燃やす。

肩口を奔る激痛がティアマトの抱く感情を証明していた。

龍種の腕力でラウルを押さえ込むティアマトの姿を見たオーフィスも負けじと動き始めた。

押し潰さんとばかりに迫りくる彼女たちに、為されるがままのラウルは、転移の術で空に逃げることも念頭に置いておくのだった。

「さあ、ラウルよ。覚悟を……誰だ、こんなときにつ!？」

一室に満ちる黄金の光。

龍王と龍神に弄ばれるラウルの下へ光芒が差し込んだのだ。

「やりました、マリナ姉様。ついにお兄ちゃんの張った結界を潜り抜けました」

ラウルたちの視線が集まるその先で、二人の女性が姿を現す。

片や淡い蒼を基調としたとんがり帽子にマントを身に付ける少女。

お伽噺に登場する魔女っ娘のような恰好の少女は、年相応の無邪気な笑みを浮かべる。

片や漆黒のローブを身に纏い眼鏡を押さえる女性。

腰の辺りまで濡れ羽色の髪を流して、眼鏡の奥で黒赤い瞳を不吉に輝かせる。

何処かラウルに似た風貌の女性は、無機質な雰囲気纏っていたのであった。

「上出来です。やはり、結界系の魔術は、貴女の方が一日の長上回っていますね」

「えへへ。ありがとうございます。今後も、ラウルお兄ちゃんやマリナ姉様に追いつけるよう頑張つて……」

マリナと呼ばれた黒髪の女性は、抑揚のない声でラウルが張つた結界を抜けた偉業を称える。

褒められたことをあどけない笑顔で喜ぶ魔女っ娘。

喜びを顕わにした少女は今後の抱負を述べるが、衝撃の光景が視界に映り込み、驚愕のあまり碧眼を丸くする。

ふわりとカールを描いた金髪が、少女の驚きに合わせて浮かび上がったのだった。

「どうしましたか、ルフエイ……?」

表情の固まった少女の行動を不審に思ったマリナは、その視線の先を追う。

追つた先で繰り広げられる光景に、眼鏡の奥で輝く赤目の鋭さが増すことになる。

「や、やあ、マリナにルフエイ。こんな格好で悪いが、よく来てくれたと言っておこう。

それと……結界抜きおめでどう、ルフエイ。貴方の成長が間近で見れて、私は嬉しく思うよ。きつと、アーサーも喜んでくれることだろう」

龍神たちに押し倒された格好で、笑顔を見せる麗人。
彼の口より紡がれた歓迎と祝福の言葉は、何処か虚しく響き渡ったのであった。

二話 平穩な日常

頭に響く鈍痛に端正な眉を顰める女装の生徒。

ラウルは仮眠をとる事しか許されず学園に通う羽目になっていた。

原因は昨夜遅くから、聴取の名の下で行われた尋問。

自宅にて起こった珍事の過程を右腕の拘束を受けた状態で説明することとなる。

頭部に奔る危険信号と向けられた絶対零度の視線によって、ラウルの精根は尽きてしまったのであった。

そんな体調の優れない状態であっても、道行く生徒たちに笑顔で挨拶を送る姿は、お姉様と呼ばれる所以の一つか。

健気な姿を見せるラウルの前で、金髪の錦糸が意気盛んに舞い踊るのだった。

「朝から盛んだな、イツセーとアーシアは。公衆の面前で見詰め合うとは……やるようになったものだ」

腰まで伸ばした長髪を陽光に輝かせる少女の正体はアーシア・アルジェント。

元はヴァチカンにて聖女として祭り上げられていた彼女であったが、持ち前の優しさを遺憾なく発揮してしまったために、教会を追放された過去を持つ。

そして、一か月前の事件にて、彼女は墮天使の計略に嵌まることになる。

ラウルも関わることになった事件は、主犯格こそ逃がしてしまつたものも、少女の隣にいる兵藤一誠たちの活躍により幕を閉じたのであつた。

大金星を挙げた一誠に助け出されたアーシアは、悪魔の囁きに導かれ人外へと転生することを選んだ。

同じ悪魔と生り、友たちと新たなる生を謳歌するために。

皺一つない真新しい制服に身を包んだアーシアは、身も心も新たに歩み出したのだつた。

凶らずとも、教会にとつて最大の皮肉を囁ますこととなつた少女は、通う学び舎の校門前で茶髪の少年の顔を覗き込んでいた。

アーシアが顔を覗き込んでいるのは、彼女にとつて恩人でもあり、ラウルにとつては数少ない幼馴染の一誠であつた。

先の事件で勇猛な姿を見せた一誠であつたが、彼は近辺に悪名を轟かす変態三人組の一人でもあつた。

当然、美少女であるアーシアと一緒に登校しているだけでも響盛を買う状況にある。

登校する様子を見た生徒たちが密合のを尻目に、彼らは大胆な行動を取つていた。

一誠は白昼堂々、美少女と顔を突きあわせていたのだ。

ざわめきの広がる校門前で、ラウルは足を止めてお互いを見合わせる少年少女を視界に収める。

その光景に悪戯心が疼いてしまったラウルは、皮肉を口に出して無垢な少女たちをか
らかい始めたのであった。

「ら、ラウルさん!?　ち、違うんです!　これは、イツセーさんの様子を見てただけで!」
「ほう、盛んなのはアーシアの方だったのか。貴方も随分と世俗に染まってきたようだ」
「だ、だから、違うんですってば!」

口端を釣り上げて二人だけの世界に入り込んできたラウルに、アーシアは顔を真っ赤
に染めて狼狽える。

必死に否定するも、ラウルの悪戯心に油を注ぐばかり。

視線を彷徨わせるアーシアの様子に、ラウルは笑みを深めるのであった。

「ふふふ、分かっているよ、アーシア。大方、イツセーが嫌らしい顔を見せていたのだろ
う」

「もう!　ラウルさんたら!　ルチアに言い付けてあげます!」

ラウルは涙目で縋り付くアーシアを流石に可愛そうに思い、冗談であったことを素直
に伝えた。

からかわれたと知ったアーシアは羞恥を怒りに変え、非道な行いに抗議する。

されど、少女が見せるは小動物の威嚇でしかない。

身体の奥底から込み上げてくるものがあつたラウルは、膨らんだアーシアの頬に手を当て捕食者の笑みを浮かべた。

「それにしても、可愛いなアーシアは。思わず食べちゃいたくなる」

「はうわっ！ た、食べられちゃうのですか？」

「——っ!? ラウルッ!!!」

顔を蒼くして狼狽えるアーシアから、ラウルはさつと身を引いた。

入れ違いで二人の間に割り込んでくる人影。

鋭い視線を向ける一誠がそこにいたのであつた。

「い、イツセー……さん？」

アーシアの視界に映るのは頼もしい少年の背中。

かつて、自身を救おうとしたその背中に安堵を覚えるものだった。

その一方で、どうして一誠が怒りを浮かべているのか理解できていない彼女は、動揺をさらに大きくするのであつた。

「（こらこら、イツセー。アーシアが怖がつているではないか）」

「アーシアに手を出してみろ、いくら幼馴染のお前だつて許さないぜ……」

険悪な顔つきを見せる一誠に、ラウルは苦笑いを返す。

「冗談に決まっている。私が花を手折るよりも、愛でるような性分であることは知っているだろう?」

「……ラウルはモテるから信用にならねえよ」

怒れる一誠を前にして、ラウルはおどけて見せた。

少女たちの魅力を引き出すことがあっても、手を出すことはないだろうと。

そんなラウルの態度に一誠は顔を顰めるのだった。

「それに、子羊に手を出そうものなら、私が食べられ兼ねないからな」

「な、なに言ってるんだよ、ラウルはっ?」

アーシアに手を出そうとすれば、手痛いしっぺ返しをもらうことになる。

襲われてしまうだろうと、両手を上げて首を振るラウルに一誠は喰い掛かった。

「アーシアみたいな無垢な娘が傍にいれば、流石のイツサーでも毎晩のお勤めに支障が出ていることだろう。そして、抑えきれなくなった性欲が、私に牙を——」

「んな訳あるかっ!! なに馬鹿なことを抜かしてやがる、この女装娘っ!!」

一誠はあらんことを口走るラウルを黙らせようと拳を振った。

しかし、怒りの込められた拳は、予備動作なしに身を引いたラウルに躲されることになる。

「どうやら、子羊を育てる狼が本性を現したようだ」

「待ちやがれっ！ ラウルッ!!」

片眼を閉じて舌先を見せたラウルはスカートを翻して走り始める。

激情に駆られた一誠もラウルの後を追い、彼らは理解の追いついていない少女を置き去りにするのであった。

「はわわ、おいていかれちゃいました」

ラウルたちに置き去りにされたアーシアは、先程の騒ぎもあり好奇の視線を集めてしまっていた。

彼女の白馬の王子様もラウルを追って戻ってくる気配はない。

好奇の目に晒されて居心地悪そうに身を縮込ませる少女に、救いの手が差し伸べられた。

「ごきげんよう、アーシア。今日もあの子たちは元気なようね」

「うふふ、朝一番から精力が満ち溢れているようで」

アーシアに手を差し伸べたのは、紅髪の姫と黒髪のお姉様であった。

心の拠り所を見つけたアーシアは、満身の笑みを浮かべて彼女たちに会釈を返す。

「お、おはようございます、部長さん、朱乃さん」

入れ替わりに現れることとなった三大お姉様の影に、色めき立つ校門前。

それはいつもと変わらぬ朝の風景であった。

穏やかな一日の始まりでもあり、波乱に満ちた二週間の幕開けの日でもあった。

* * *

「くそっ、どこに行きやがった」

校門にて黄色い声が上がっている頃。

靡く銀色の後ろ髪を追ってきた一誠は、ラウルの姿を見失ってしまったのだった。

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ」

苛立つ一誠の元に届くのは、古き日を思い起こさせる掛け声。

姿を一度くられましたラウルが、手拍子を鳴らしながら一誠の前に姿を現す。

「逃げんな、ラウル。そんなもって、一発殴らせやがれ！」

「逃げるのは当たり前だろ。いつも言っている通り、私は至って普通だからな。男に襲われて喜ぶようなことはないのだよ」

「……一回、その口を閉じさせた方が良さそうだな」

ラウルはいきり立つ怒りの炎に油を注ぎ続ける。

煽りの煽られた一誠は、我慢の限界を迎えて本能の赴くままに力を振るい始める。

「ブーステッド・ギアッ!!!」

『Boost!!』

赤龍帝の籠手。

一誠の左手を覆うそれは、かつて世界を震撼させた二転龍の片割れが宿る神殺しの神器。

十三種の神滅具と呼ばれる神器の一種であり、持ち主の力を十秒毎に倍加させる効果を持つ。

一か月前、彼が墮天使に殺された原因でもあり、その危険性は証明されている。

その後、リアス・グレモリーによって、悪魔へと転生を遂げた一誠はアジア同様、悪魔としての生を謳歌しているのだが――。

「ちよつと待て、イツセー！……ここは――」

「誰が待つかよ!!」

ラウルの制止を振り切つて殴り掛かる一誠。

握られた拳は愚直にまで真つ直ぐにラウルへと向けられる。

まるで、彼の性格を指し示すかのように。

「仕方あるまいか……」

ラウルは宙に一つの魔方陣を描くと静かな闘気を纏い、赤き龍帝の主と対峙する。

静のラウルと動の一誠。

威勢よく殴り掛かった一誠の拳は届くことはなかった。

一誠の拳を見切ったラウルは、半身になり淀みのない動きで躲したのだ。

そして、ラウルは空を切った一誠の伸びきった腕を取る。

残った右腕で胸倉を掴み、前に出した右脚で一誠の支えを払う。

「うおっ!？」

一誠を襲う浮遊感。

投げられたことに理解の及ばない彼は、受け身を取ろうともせずに驚きの声を上げてしまう。

「つと、男一人分を支えるのは大変だな……」

「は、放しやがれ! 一発殴らないと気がすまねえんだ!」

受け身を取る気配すらないことを重々承知のラウルは、宙舞う一誠から一度手を放して、脇の内へと腕を差し替えた。

無茶をしたこともあり、衝撃はラウルへと押し掛かる。

華奢な身体でなんとか一誠を支え抜いたラウルは、小さかった幼馴染がよくここまで育ったものだ、場違いなことをしみじみと思うのであった。

「落ち着け、イッサー。落ち着いて、神器を仕舞うんだ。早くしないと、誰かの目に付いてしまう」

「あつ！ ああ……」

感傷に浸るラウルであったが、腕の中で暴れ始めた一誠がそれを許さない。

ラウルは激情に駆られて周りの見えなくなつた幼馴染を宥めに掛かった。

本来なら人を襲おうとしたことを宥めるべきなのだが、ラウル自身が誘いを掛けたこともありその素行の悪さを指摘することはなかつた。

それよりも一誠の左腕を覆うものが問題であつた。

神器とは、世界に異なるもの。

表の社会では認知されておらず、不特定多数の人々が通う学園で晒すことになるのは、少々拙いものがあつた。

仮に見つかったことが分かれば、記憶操作を掛ければ問題なかつた。

しかし、この光景を見たにも係わらず、記憶操作を掛けることのできなかつた者が現れれば、不徳の事態に陥つてしまう。

最悪、学園全体に記憶操作を掛ければ問題ないのだが、ラウルとしてもあまり取りたい手ではなかつた。

取り返しの付かない最悪の状況に陥らないためにも、ラウルは迂闊に神器を晒した一誠を宥めるのであつた。

「一人前の悪魔を目指すなら、表と裏の区別を付けてくれよ。イツセーも平穏な日々を

壊したくはないだろ？」

「わりい……ついカツとなっちまって」

「私にも責任の一端があるからな。今回のことは部長たちには、内緒にしておくよ」

穩便に事を納めたラウルは、人差し指を立てて目配せを送るのであった。

「それと校舎の中では、上履きに履き替えるものだぞ」

「そ、そうだったな……って、うちの学校に上履きなんてねえよ!!」

「真に残念ながらな。美しき日本の文化が蔑ろにされているようで、遺憾に堪えないよ」
心残りだと肩を竦めるラウルの様子が、どこかツボに嵌まった一誠は笑い声を上げる。

釣られる様にしてラウルも小さく笑声を漏らす。

手慣れた冗談を仄めかして、漂おうとしていたきまりが悪い空気をラウルは見事に払拭したのであった。

「ラウルは変わらないな。そういう、日本かぶれな所とか」

「……それは酷くないか。仮にも、私には日本人の血が半分通っているのだがな」

ラウルは心外だとおどけて見せる。

彼は戸籍上日本人と英国人のハーフとなっている。

裏に係わる魔術師のため、文字通りの血筋とはいかなかったが。

おどけて見せるラウルであったが、自身の血脈を思い浮かべ、ふと切なそうな表情を浮かべる。

「なあ、イツセー……私は——」

絞り出されるようにして、問い掛けられたラウルの声は、突如として響いた陽気な掛け声に掻き消されることになる。

「よう、いい雰囲気のお二人さん方。朝からやつてるな」

「おかげでいいものを撮らしてもらったからな……まいどあり」

「元浜に松田！　って、なに撮ってたんだよ！　ラウルも早く放せ！」

声とともに意気揚々と現れたのは、変態三人組の残り二人。

元浜は薄気味悪い笑いを浮かべ、不気味に眼鏡を光らせる。

松田は手にした一眼レフカメラを掲げて、ニンマリと満ち足りた笑みを浮かべる。

抱きかかえられている光景を撮られたと思い当たった一誠は、拘束するラウルの腕を振り解かんと暴れるのだった。

「カメラを寄越せよ松田！　データを根こそぎ消し去ってやる!!」

「残念だが、イツセーよ。折角、面白いネタを手に入れたのだからな、有効に使わしてもらうぜ」

ラウルの拘束を逃れた一誠は、カメラを手にする松田へと飛び掛かる。

しかし、相手はセクハラパラッチこと松田である。

無駄とも言える身体能力を遺憾なく発揮して、悪魔である筈の一誠から逃れ回る。

「おはよう、元浜。……貴方たちは、先ほどの光景を見てしまったのか？」

「おう……お姉様がイツセーに熱き抱擁をしている光景をきっちりな」

「そうか……」

再び鬼と化した一誠が松田を追う光景を尻目に、ラウルは元浜に確認を取る。

ラウルが気にしているのは、彼らが神器を見たか否か。

一誠が神器を展開した直後に、辺り一帯に幻術を振り撒いたが、完璧な隠蔽ができたとは限らなかったのだ。

ラウルの危惧など知るよしもない元浜は、ラウルたちの関係を幼馴染以上の物ではないかと冷やかす。

冷やかされたラウルであったが冷静に対処すると、目を閉じて現状を確認する。

元浜たちが見ていたのは、隠蔽を施す前か後か。

前ならば、興奮もせずにならぬ抱きかかえていた様子しか口にしないのはなぜか。

確認を終えたラウルは、無色の魔方陣を展開していま一度確かめる。

「忘れる。からかわれるのは趣味ではないからな」

「ぐおおお。お姉様の愛の鞭が痛い……」

記憶読みの魔術の乗せられた拳が元浜の脳天を捕らえる。

所謂、拳骨を見舞われた元浜は、皮肉を口にして地面をのた打ち回るのであった。

元浜より記憶を読み取ったラウルは、情報を精査し始める。

案の定、卑猥な記憶の数々であったが、無視して調査を進める。

膨大な記憶の数々に、色々な意味で頭の痛くなつたラウルであったが、数日間の記憶に目を通した限りでは、危惧した記憶は存在しなかつた。

安堵の息を漏らしたラウルは、読み取った記憶を破棄して、松田の下へと向かう。

「松田よ、これは没収だ。写真を撮るなら、被写体となる者に許可を得て取るべきだからな」

「うおうっ！ カメラを返すんだ、ラウル！ それがないと、今月のやりくりが心細くなってしまう！」

音もなく忍び寄ったラウルは松田からカメラを取り上げる。

名目上は肖像権の侵害。

慣れた手つきでカメラから、記憶媒体を取り出すのであった。

「はあ……。撮るなどは言わないが、自重を持つように」

「流石、我らが学園を代表するお姉様！ 物分りの良さは学年一位だぜ！」

カメラを返した途端、記憶媒体を取り出されたことに、気付く由もない松田は調子を取り戻す。

返したのは早計であつたかと、ラウルは頭痛が酷くなる思いであつた。

「待った！ 待った！ 表情そのままで、こっちに視線を！」

陰鬱な表情を見せるラウルに対して、松田は好機が巡ってきたとばかりに一眼レフカメラを向けた。

ラウルが底冷えするような冷めた視線を向けているとも気付かず。

「憂いに満ちたラウルの表情。これは売れ……め、メモリー切れっ!? さつき入れ替えたばかりなのに!？」

「メモリーはこちらで処理させてもらおう。断片データを復元されても適わないからな」

袖の下に隠していたメモリーカードを取り出したラウルは、その存在を松田に見せ付けるのであつた。

「そ、それはねえぜ! そのデータを複製すれば幾らになると——ツ!？」

「学友を売ろうと考えるな、エロ坊主」

この期に及んで記憶媒体の返却を求め続ける級友の不義に、健脚を振り上げてラウルは裁きを下す。

無慈悲に振り下ろされる断罪の足斧。

革靴の踵が松田の脳天にめり込み、嫌な音が辺りに響き渡るのであった。

「その馬鹿を置いていくぞ。のうのうとしてしまつては、遅刻してしまうからな」
両手を打ち払つたラウルは、残る彼らに声を掛けて壁に預けた鞆を拾いに歩みを進める。

流石の変態たちも目の前で繰り広げられた惨状に、只々首を縦に振るのであった。
「覚えてろよ、ラウル！ この恨み、絶対晴らしてやるからな!!」

奇跡的な復活を遂げた松田の恨み言に、ラウルはどこか嫌な予感を感じるのであった。

* * *

そして、午前の放課を終えた昼休み。

ラウルの頭に過つた悪い予感は当たることになる。

「ラウル君、いったいこれはどういうこと?!」

快音と共に机に叩きつけられる一枚の写真。

優雅にランチタイムを楽しもうとしていたラウルの下へ、淡い桜色の髪を短く切り揃

えた少女、片瀬を筆頭に女子生徒たちが押し寄せていたのであった。

「この写真……どこで手に入れたのかな？」

弁当の包みを開こうとしていたラウルは手を止めた。

陽光によってグラデーションを奏でる銀髪。

風に乗せられて靡く長髪はさらりと広がり、首筋の隠された素肌を晒し出す。

流動的な被写体と浮かび上がるスカートの様子から跳躍後の一コマと思われた。

目の前に叩きつけられたのは、明らかな盗撮風の写真である。

盗撮を認めていないと公言しているラウルは、真剣な表情で写真の出所を探る。

「あのエロ坊主が……じゃなくて！……この首裏のキスマークは何なのかな？」

ラウルが視線を巡らせれば、嫌らしい笑みを浮かべた松田の姿が目につく。

片瀬が口を滑らせたことにより犯人は確定する。

どの様にして吊し上げると、考えを巡らしたいラウルであったが、目の前に集まった女子たちがそれを許さない。

彼女たちが興奮している原因は、写真に写った首筋の朱の痕跡。

一般的にキスマークと呼ばれる口付けの痕にあったのだ。

「お姉様に彼女が!!? お相手は誰なの!!?」

「きつと、お相手は木場君よ！……最近、毎日一緒に下校している姿が多数目撃されて

いるわ！」

「遂にラウルくんが、木場君と禁断の関係に?！」

「いえ、私は小猫ちゃんを押します。ここまですつきりと映っているのなら、口紅の可能性が高いかと。ならば、最低でもお相手は女性。着実にポイントを稼いでいた彼女が妥当かと」

「で、でも、木場くんとの関係がありえないことはないよね。くつきり痕が残るぐらい、吸い付いたのかもしれないし……」

「やっぱり、ここは木場くん和小猫ちゃんを交えた禁断の関係でしょ! 甘いマスクの裏側に隠れた残忍性。大丈夫よ、ラウルくん。それも愛の形なのだから……」

「それを言うなら、リアスお姉様と朱乃お姉様との三角関係もあり得るわね」

「もしかしたら、リアスお姉様たちと密会を!」

「「きやあああああああ!!!」」

根拠のない自論を持ち出して騒ぎ立てる少女たち。

黄色の花が咲き誇る教室の空気を無視して、ラウルは容赦なく楔を打ち込む。

「合成写真ではないのか? 心当たりはないのだが」

写真の光景を真つ向から否定したのだ。

ラウルのことを妬んだ松田の嫌がらせでないかと。

事実、ここ最近に首裏へ口付けをされた覚えなど一つもなかった。

「うそっ！ これって合成写真なの!？」

「こんなものを作って、お姉様を陥れようとするだなんて!？」

「松田の野郎！ マジ許せない!！」

女子生徒たちの反応は二手に分かれた。

一つは合成写真を手掛けたと思われる松田に対する嫌疑を抱く者。

「じゃ、じゃあさ、ラウルくん。首の裏側を見せてもらってもいいかな?」

もう一つは、片瀬を中心とする真偽を確かめようとする者たちであった。

「どうぞ、気の済むまで見てもらって構わないよ」

片瀬の申し出を快く聞き入れたラウルは後ろ髪を搔き上げる。

搔き上げた長髪から漂う芳香。

甘酸っぱい柑橘の香りに女子生徒たちは息を呑む。

「ちよつとだけお邪魔して——」

後ろに回った片瀬は意を決して確認を始める。

搔き上げてなお、流れる銀髪に隠された秘所へと手を伸ばした。

「ストップ！ 片瀬さん、そこでストップなんだよ!！」

秘密を暴こうとする片瀬を制する声。

女子生徒の集団より歩み出た小柄な少女が、居ても立つてもいられずに制止を掛けたのであった。

「いいところになんで邪魔に入るのよ、鏡花！ 片瀬さんだけじゃなくて、それを眺める私たちにも役得な筈でしょ！」

「まさか、鏡花さん。あなた……」

「前にラウルくんに口説かれていたことがあつたわよね。あの時の申し出を受けちゃつたの!？」

「こちら、『ラウルくん^Rに夢見る少女^S連合』・『お姉様^Rを見守る少女会^S』会員No.008。二年B組にて、協定違反者が出た模様。対象者は『爛れた乙女^T』会員No.001・早乙女鏡花会長。罪状は『禁則事項第十二条・彼の者へ淫らに迫ることを禁ず』に違反した可能性があり。会長、指示を仰ぎます」

片瀬を止めた鏡花の行動は大きな波紋を生んだ。

何故、鏡花は今になって止めに入ったのだろうか。

ラウルにキスマークを付けたのは彼女ではないかと。

鏡花の行動を深読みした女子生徒たちは、過去の出来事まで掘り返して騒ぎ立てる。

中には駒王学園に設立された非合法組織に連絡を取り、鏡花の不義を暴こうとする輩が現れるほどであった。

「いや、違うからね！ そんな関係になれたら嬉しいけど……。それよりも、片瀬さん！ 合法的に香しいお姉様の匂いを嗅ぐ機会は、平等的に分けるべきだと思ふのよ!!」

頬に朱の差した鏡花は、周りの空気に流されまいと声を上げる。

同時に片瀬だけが良い思いをすることへ異議を申し立てるのであった。

「た、確かに！ 鏡花の言うことも一理あるわね！」

「片瀬さんだけお姉様の香りを堪能するのはずるいわ！」

「見直したよ、鏡花。そんな大事なことに気付くなんて。流石は我ら『爛れた乙女』の會長殿だね」

「訂正いたします！ 早乙女會長は無実を証明したうえで、級友の片瀬氏の不義を暴いた模様。平等性を期すための妙案を上げ、聖戦を行う様子です。會長！ 私はこれから、お姉様の香りを楽しむ機会を掛けての聖戦に挑んで参ります！」

手のひらを返したように、鏡花の提案へ乗った女子生徒たちは盛り上がりを見せる。

「鏡花、その権利とやらは、なにで決着をつけるつもりかな？」

お祭りムードの高まる教室でラウルは苦笑を隠せなかった。

取って減るものではないが、彼女たちにしてみれば特別なことなのだろう。

そのことを経験から分かっているラウルは、無粋なことなどせず、うら若い少女たちの意欲を煽り立てるのであった。

「此処は公平に——じゃんけんよ!!」

鏡花は握り拳を上げて宣言する。

ラウルの秘所を探る権利は、古今東西に伝わる決闘方法で争うのだと。

三話 夕闇の旧校舎

暮れの空で夕日の傾く頃――。

部活動を終えたオカルト研究部の面々は、部長副部長である彼女たちを除き、和氣藹々と会話を交わしてそれぞれの自宅へと足を向けていた。

「今日の昼間の騒ぎはすごかったね。人の波が廊下を埋め尽くしていたよ」

「あれが日本女子……精力的な方々を多かったです」

「……いつものことながら、彼女たちの活気は凄まじいの一言に尽きるな」

帰路へ着く彼らが交わす今日一番の話題は昼食時の騒動。

今朝の一件より松田が水面下で行っていた悪巧みが暴発した形だった。

午前の放課を終えると勢い良く立ち上がった少女たち。

昼食時にも関わらず全生徒の半数以上が噂の真偽を確かめようと押し寄せたと言う。最終的には生徒会が悪魔の力を使ってまでも強制介入するほどであった。

「キスマーク一つで大騒ぎなんて……イケメンは羨ましいぜ」

鼻抓み者の一誠を尻目に持て囃されるラウル。

理不尽な現実を僻んだ一誠は、学園を揺るがすこととなった騒動の中核を担った人物

に、恨みがましい視線をぶつけた。

「イツセーも悪くない顔立ちだと思うぞ。日々の素行を直せば、見る目も変わってくるのではないか？」

「うっせえ。ラウルこそ、エロいことをしない……ことはしないな。なんで、同じ変態なのにラウルだけモテんだよ！　ちくしょう！」

ラウルは幼馴染の恨みがましい嫉妬の感情を正面から受け止める。

好く言えば肝が据わっている、悪く言えば愚鈍な一誠の性格。

少女たちが嫌がると知ってなお、隠すことなく嫌がらせを続ける所業に問題があるのではないか。

湧きあがる情念を抑える術を覚え余裕を持つことができれば、周りの目も変わってくとラウルは説くのだった。

「それで、どうだったのかな？　僕もそれなりにには気になるところだよ」

一誠を説き伏せたラウルへ耳にタコができるほど聞かれたであろう問いを佑斗は投げ掛ける。

笑みこそ作ってはいるが、麗人を射る眼光は鋭く彼の真剣さが窺えた。

「まあ、結論から言えば付いていたのだがな」

「軽蔑します……女装変態」

首筋へマーキングするが如く付けられた紅。

確りと付けられたそれはブラウスの襟口を汚すほどであった。

犯人の当ては付いているラウルだったが、こんな粋な真似をするのは誰だと困ったように肩を竦める。

そもそも、首筋の紅ぐらいのものならラウルの実力を持つてすれば隠し通せた筈であった。

認識障害に幻術など覆い隠してしまう術や浄化の術を用いて紅を落としてしまうこともできたのだ。

騒ぎになることなく隠し通せたにも関わらず、ラウルは術を行使することはなかった。

ラウルにとって首筋の紅は愛情という名の絆の証であるのだから。

自身が大切に想う人が付けた故に、消すわけにはいかないとの信条からだった。

妙に殊勝な体裁を取り繕うラウルを小猫は半眼で咎めるのであった。

「女装変態とは……小猫は遠慮というものを知らないな。それにキスマークはどうしようもなかったのだぞ。大方、身体を休めている間にでも付けられたのだろう。流石の私でも、気付きようがないな」

容赦ない小猫の毒舌にラウルは表情を歪めた。

女装は正装であり、首筋の紅は知らぬ内に付けられた汚点。

それを指摘して変態と罵られるのは、些か心を抉られるものがあつたのだ。

「嘘です。先輩なら寝ている間でも、人を手玉に取るくらいできる筈です」

「小猫、貴方はなにを期待しているのだ？ 私は悪魔でもなければ、天使でもないのだぞ」

容赦ない言葉に心を抉られたラウルは大人気なく逆襲に出る。

過剰な期待を寄せる少女に微笑む麗人は、質の悪い意趣返しをしてみせたのであつた。

「キスマークを付けたのは、やっぱリルチ姉？」

「分からない。昨夜は色々と客人が押し寄せてきたのでな。特定などできない」

事実、龍王や龍神が押し寄せてきて一騒動あつたのだが、佑斗は知る由もなかった。

「あれ、ラウル？ 教室では、親戚の娘に付けられたって言つてなかつたか？」

「言葉の綾でそう言つたまでのことだ。別に証拠があるわけではない」

一誠に事の整合性を指摘されたラウルはしらっと嘘を吐いていたと認めた。

教室で述べたのは詭弁に過ぎないかつた。

裏世界の奥底まで関わっている以上、表の世界である学園では言つてはならないことも存在する。

故にラウルは言葉を濁すために、一人の少女に仮初の配役を与え、罪を着せたのであった。

もつとも、今回の真実をリアスたちのような根本的に冥界に染まってしまうている悪魔へも、伝えてはならないのだった。

「ラウルくんって意外と薄情なところがあるよね」

何時になくラウルを責め立てる佑斗は抑揚のない声で不実を糾弾する。

佑斗が責め立てるのは詭弁を並べる様子を咎めてか、ラウルの内情を察してか、それとも佑斗の抱える感情が先走った結果か。

その答えは彼自身にしか分からなかった。

「心外だな。確かに、グレモリー眷属に比べれば情が薄く見えてしまいかもしれない。それでも、彼女たちには私なりの情念を抱いているつもりではあるぞ」

小猫に続き、一誠、佑斗にまで自身の間違えを指摘されてなお、ラウルはその姿勢を崩すことはなかった。

大胆不敵に笑みを浮かべお茶目に振る舞って見せる男の娘。

指を立てて口を窄めるラウルは、佑斗の糾弾をやんわりと否定する。

情に厚いグレモリー眷属に比べれば足りないものがあるだろうが、人並み以上にラウルは情を抱いているのであった。

「彼女たちつて……いったいキミは何人の女の子を囲っているのかな？」

疑念を一つを躲したラウルであったが、佑斗の追及の手が緩まることはない。

愛情を注いでいるのが一人ではないと迂闊な発言したラウルを厳しい視線で言及するのであった。

手厳しい言及を受けたラウルは静かに瞳を閉じた。

思いを巡らすのは自身の交流関係。

親しい者で言えば、マリナにルチア、ルフェイ。

使い魔には黒歌やティアマツト。

現代のオーフィスも雌性を為しているので、女性と数えてもいいかもしれない。

もう少し範囲を広げれば話は変わってくるが、ラウルの周りには見事に女性ばかりであった。

「……………囲っているつもりはなかったのだが……周りにしてみるとそう見えるかもしれないな」

「マジかよ！ くそっ！ イケメン、滅びやがれ！」

瞑想を終えたラウルは躊躇いがちに口を開いた。

ラウルの現状は外から見てみれば女性を囲っていると見られても可笑しくはない。

実質は彼女たちが自主的に集まってくるために、囲っていると言うよりも囲われてい

ると言つた方が正しい。

ゆえにラウルは彼らへ、特に一誠に対して、ハーレムを形成しているのではないと弁解する。

しかし、危惧していた通りにラウルは要らぬの恨みを買つてしまふのだつた。

「言われてるぞ、佑斗よ」

「この場合、ラウルくんだと思つるのは僕の気のせいかな？」

冗談を言つてみるが全く相手にされない。

鋭い眼をして微塵も笑うことのない佑斗に流されるのであつた。

退路を断たれつつあるラウルは深く息を吐き出すと、意を決して一誠の方へ向き直る。

「イツセー……………」

しつとりとした唇から漏れる熱を帯びた吐息。

黄昏の空でラウルは静かに彼の名を紡いだ。

「私をそんな恨みがましい目で見ないでくれ。そんな目で見られたら、思わずきゅ——」

「言わせねえよ!! つうか、そんな顔して言うなよ! まじで困るからな!!」

胸前で固く握られた両手。

端正な輪郭を描く玉肌は夕焼けに染まる。

そして、彼を象徴する腰の辺りまで伸びる銀髪は夕日に照らされて一層のこと輝きを増していた。

艶麗な幼馴染が潤んだ瞳で懇願する姿に、一誠の動悸が激しくなったのは彼だけの秘密であった。

「変態です……変態しかいけません」

男たちの演じる三文芝居を目の当たりにした小猫は肩を抱いて身を震わす。

「その中に僕も含まれているなんてことはないよね」

「……触らないでください、うつります」

「こ、小猫ちゃん………」

小猫の嫌気は蚊帳の外にいた佑斗にまで及んだ。

愛嬢のように思っている少女から汚物を見るが如き視線を向けられ、佑斗は堪らず膝を屈する。

「よしよし、妹のように慕ってした女の子に拒絶されて辛かったろう。私の胸で十分に泣くといい」

「ラウルくん……キミってひとは本当に……」

膝から崩れ落ちる佑斗を受け止めたラウルは、心に負った傷を癒すようにさらさらと流れる金髪を優しく撫でる。

胸の痛みを涙に変え伴に背負っていかうではないかと。

辛辣な侮言によつて激しい喪失感に襲われる佑斗を同情するようにして宥めるのだった。

「冗談です……佑斗先輩。冗談ですから元に戻つて、ラウル先輩から離れてください」
態度を改めることのない麗人の様子を見て、小猫は口を一文字に結んだ。

「まさか、小猫ちゃんまでラウルの毒牙に——つつつ!？」

「イツセーさんっ!？」

赤い空に舞い上がる茶髪の少年。

馬鹿なことを口走つた一誠は苛立ちを爆発させた白き猛獣の一撃に沈むのだった。

「勘違いしないで下さい。また、変な噂が広まると困るだけです」

アーシアの悲鳴を尻目に地へ伏せた一誠を踏みつける小猫。

慥然とした面持ちで小猫はラウルたちへ注意を促すのであった。

「ははは……小猫ちゃんの言う通りだね」

愚者の末路を見せ付けられた佑斗は愛想笑いを小猫に向けると、跳ね起きるようにしてラウルの胸元を離れるのであった。

「今回は気持ちだけ受け取つておくよ。ありがとう、ラウルくん」

礼を述べる佑斗の胸に小さな罪悪感が生れる。

小猫の暴力を恐れて、親身な態度を取ったラウルを突き放してしまった事実には真面目な騎士は胸を痛めるのであった。

「残念だが仕方あるまい。佑斗よ、泣きたい時にはいつでも、私の胸で良ければを使つてくれて構わないぞ」

「うん。その時はお願いするよ」

それなのに跳ね除けるようにして突き放されたラウルは苦笑いを浮かべるだけ。

感極まった佑斗は少女たちを虜にする魔性の微笑みをラウルに向けるのであった。

小猫の視線が一段と厳しくなったのは言うまでもなかったが。

「さて……大丈夫か、イツセー？」

「ラウルには、これが大丈夫そうに見えるのかよ……」

小猫の怒りを買った為に、地へ伏せることになった一誠。

戦車の腕力と脚力をその身で知った哀れな兵士は、絶賛アーシアの治療に掛かっているところであった。

「それもそうだな」

ぐったりと身を横たえた一誠の主張に頷いたラウルは白魚のような細指を宙に踊らした。

「挫かれし者よ 我が宿木に泊まりて 汝が翼を休めよ」

紡がれるは神秘を内包した旋律。

幾多もの魔方陣が彼らを囲い、発せられた癒しの光が一誠たちを包み込む。

「おおおおお。大分楽になつてきたぜ」

「まあ、アーシア程うまくはいかないのだがな。足しにはなるだろう」

術を掛けられた一誠は声を上げて容態が落ち着いたことを頭わにする。

治療目的で一誠に掛けられるアーシアの神器とラウルの魔術。

一誠を癒そうとする意図は同じであれども、その効果は似て非なるものであった。

前者の手段は魔力を癒しのオーラに変換して治療を施す外科的なもの。

欠損部位を破損部分を癒しのオーラで作り返し再生する。

聖女の微笑と呼ばれていた神器に相応しい能力であった。

対して、設置型のラウルの魔術は寝台をようなもの。

術の対象となった者に安らぎを与え、患者本人の細胞を活性化させて再生を促す。

主だった効果は鎮静に疲労回復、治療能力の補助にあり、自然の摂理に逆らわない治療方法であった。

療方法であった。

彼ら、奇跡の担い手たちは医者も青くなるほどの速度で一誠を癒していく。

神器と魔術が生む相乗効果ゆえに。

それは、嘗てアーシアの神器に手を加えたラウルだからこそ行える効果的な治療でも

あつた。

「ラウルくんもアーシアさんもだけど、もう少し人目を気にした方がいいんじゃないのかな?」

「ふえ? 何か粗相をしでかしてしまつたのでしょうか?」

「佑斗先輩がそれを言いますか……」

一誠が快調を顕わにする中、治療のために置いていかれた佑斗が、縦横で裏の世界の力を振る舞う彼らの様子を見兼ねて注意を促す。

「此処は一応学校だよ。人氣が少ないと言つても、誰が見ているか分かつたものではないんだよ」

旧校舎から校門へ続く道と言うこともあり人の目は少ない。

少ないがゆえに、一度目に付いてしまえば記憶へ残つてしまふだろうと、佑斗は危惧するのであつた。

「はわわ!?! ど、どうしましょう!?!」

佑斗の指摘を受けて治療を行つていた元聖女は取り乱す。

悪魔に転生してまで手に入れた日常。

その望んだ日々が脆くも崩れてしまうのではないか。

振る舞つた力によって、迫害を受けた過去のアーシアは、迫る影に身を縮こまら

した。

「取り敢えず、落ち着いたらどうだ？ 佑斗もアーシアを困らせるようなことを言っ
はダメだぞ」

伴に治療を行っていたラウルは冷静に狼狽えるアーシアへと助言を送る。

取り乱しては時間を無為に過ごしてしまう。

対策を練るためにも落ち着いて状況を捉えてはどうかと、優しく語りかけた。

一方で、佑斗には立てた指を振るって、健気な少女を辛かったことを可愛らしく咎め
るのであった。

「アーシア、人目に関しては問題ない。私と佑斗で手を打っておいたからな、安心して治
療を続けても構わないぞ」

治療を行っていたラウルが落ち着いていられるのは理由があった。

アーシアが治療を始めた頃に佑斗が張った結果。

加えて、一誠が空に舞い上がった時には既に一手を打っていたのだった。

隠し通すのは古代魔術師たるラウルの常套手段であり、万が一にも表の世界に露見す
ることはなかった。

「はう、佑斗さんも人が悪いです」

「ごめんね、アーシアさん。これは先輩として言っておかないといけなかなって思っ

たから、つい意地悪しちゃった」

佑斗は舌先を出してお茶目に謝罪する。

この辺り、ラウル邸に住む蒼銀の自宅警備員の影が見え隠れするのであった。

「でも、ラウルくんはいつの間にも策を施したのかな？ 僕はまったく気付かなかつたよ」

「さてな……秘密だと言っておこうか。教えてもいいが、ただでは面白くないからな」

佑斗は悪魔へ転生してから身に付けた結界を張っていたのだが、ラウルにはその兆候もなかった。

結界を張る素振りも術を施した痕跡はどこにもない。

親しい人物とは言え、ラウルが行動を起こす兆候が捉えられないのは、グレモリーの騎士として致命的であった。

不敵に笑う麗人は佑斗が頭を悩ます様子を面白がって教えることはない。

「ただでなかつたら教えてくれるんですか、先輩？」

「んー。いや、教えはしないさ。丁度いい機会でもあるからな」

小猫に乞われたラウルは、少し迷っていたがその姿勢を崩すことはなかった。

四人の悪魔たちを見回して、いい頃合いだと判断して笑みを深くする。

「悪魔とはいえ眷属である貴方たちは、多彩な術を使うような者が身近にいないのではないか？ 居たとしても朱乃ぐらいのものだろ？」

グレモリー眷属にはウイザードタイプのテクニシャンが居ないと思われた。肉体派である前線三人は論外。

最近、転生したアーシアは未だ知識する身に付けていない状態。

主であるリアスに至っては公園での一戦を見る限り、滅びの魔力を前面に押し出したパワータイプであった。

斯く言う、朱乃も色々混ざっているようだが、雷を操るところした見ていないために、判断しかねるといふものであった。

眷属全員が力押しな分、旧校舎の奥へ封印されているであろう眷属には期待しているのだが。

そんな状況もあり、リアスたちにはその手の指導者が欠けているのではないか。

リアスの兄のルシファー眷属に頼れば話は別だが、魔王という役柄上、兄妹という間柄であっても気軽に会える人物ではないと、ラウルは判断してのことであった。

『イッセー兵士』・『ホウ騎士』・『小編戦車』——前線で戦う貴方たちは、『シヤク視』・『シヤク聴』・『シヤク嗅』・『シヤク味』・『シヤク触』の五感はもちろんのこと、僅かな変化を捉えて判断する勘を養うことが必要になってくるだろう。冥界ではレーティングゲームなどという、小洒落た催しもあるようだしな」故にラウルは自身の行動から、微妙な兆候を読み取るように促す。

戦士にならなければならない彼らに、戦いで必要になる五感と第六感たる危機察知能

力を身に付けるように。

最初は難しいかもしれないが、読み取れるようになれば今後に生きてくると。

冥界ではレーティングゲームと呼ばれる、上級悪魔同士の社交界も存在するのだ。

それ以上に赤龍帝の一誠がいるグレモリー眷属は、戦いの渦から逃れることは叶わないのだから。

「レーティングゲーム？　なんだよそれ？」

皮肉気に笑うラウルの言葉に一誠は首を傾げた。

「集めた眷属同士を戦わせる模擬演習——極小規模の戦争をスポーツ感覚で行うゼロサムゲームのことだ」

チエスを元としたレーティングゲームの意義は、元々先の大戦で数を減らした悪魔たちが、力を落とさなないように行い始めた模擬演習。

それが一世紀、一世紀と時代を重ね、同時に悪魔たちも世代を重ねた結果、今の形に収まっているのではないかというのが、ラウルの推測であった。

今の形に収まり上級悪魔が競い合うようになった以上、政治的にも利用されるため、レーティングゲームがゼロサムゲームというのもあながち間違えではなかった。

「部長が眷属を集めているのはもしかして……」

「間違えないだろう。自身のステータスの為に、レーティングゲームに参加する為に眷

属を集めているのだろうか。まあ、それは理由の一部に過ぎないのかもしれないがな」
詳しいことはリアス本人でなければ分からないと、ラウルは苦笑を浮かべた。

「レーティングゲーム自体、悪趣味極まりないが、有効な交渉手段であることには変わりない。見世物としても冥界で流行しているようだしな」

政治的な思惑がなければ、見世物とした発達を遂げたレーティングゲームは、間違えなくプラスサムゲームとなっていたであろう。

惜しいことをすると、ラウルは口にも出さないが、己の見解を暗に仄めかすのであった。

「なににせよ、貴方が深く考える必要はないと思うぞ。そこは主である部長の役目であるからな。今は力を付けて部長の力になり、彼女に頼られるようになるのが目標ではないか?」

ともあれ、今は考えさせる時ではない。

考える必要があるのはリアスであり、彼女の眷属である一誠は来るべき日に向けて力を付ける。

一刻も早く、赤龍帝としての力を十全に振るえる用に鍛えるべきであった。

しかし、急いで事を仕損じては如何な思いも無為に終わってしまう。

そのことが身に染みているラウルは、一誠に捉えやすい目標を提示する。

目指すべき場所を示せば、純粋な幼馴染は愚直にまでその場所に向かい突き進むであろう。

女性関係ならば尚更に。

「考えるのはイツセーが上級悪魔に昇進し、眷属を持つようになってからでも遅くはないはずだ。先達者たる部長もいることだから、彼女に相談して伴に頭を悩ますようになるのも一興だろうよ」

「そうだな……ラウルの言う通りだな。まずは、部長のお乳様に辿り着くことから！」

「……ラウル先輩は言動が変態ですが、イツセー先輩は性根が変態です」

予想通りの一誠と小猫の反応に苦笑を浮かべるラウルは、ふと力の流れを感じてその源泉へと視線を向けた。

巧妙に隠されてはいるが、明らかに場違いな悪魔の気配。

最低でも最上級悪魔クラスであり、ここまで力を持った悪魔は先の大戦のこともあるため数が絞られる。

恐らくは上級悪魔であるリアスを尋ねたものであろうが、窓越しに見える彼女の様子からは不穏なものを感じるのであった。

「ん？ どうしたのかな、ラウルくん？ 部屋の方に目を向けて」

訝しげに視線を向ける佑斗に気付いたラウルは思わず舌を巻いた。

助言を真摯に聞き入れ行動に反映させる。

反映させるのだが、実際には口で言うほど簡単ではない。

皮肉交じりで言われたのなら尚更のこと。

反感を覚えるのではなく、素直に行動へ移せる者がどれだけいようか。

ラウルは佑斗の隠された素質を心の中で褒め称える。

ただ、今し方佑斗に注視されるのは都合が悪かった。

行動を注視するように促したのは自身だが、今はその素直さが忌々しくあつたのだ。

一拍の逡巡の末に、ラウルは少しばかりの険の入った声で応じた。

「言わせるな……少しばかり、花摘みにいってくるだけだ」

佑斗へ片目を瞑って目配せを送ったラウルは、異変に気付かない彼ら、そして得体の知れぬ者に気取られることのないよう留意して足を速めるのであつた。

* * *

時を同じくして、ラウルの瞳に映った紅髪の持ち主は、沈みゆく夕陽の輝きを背にして一体の悪魔を鋭く睨み付けていた。

「あなたが直々に冥界から上がってくるなんて……なんの用かしら、グレイフィア」

両側に垂れ下がる結われた銀髪。

身に纏う紺と白を基調としたメイド服は皺一つなく整っている。

一誠の求めた本物の銀髪メイドにして、ルシファー眷属の女王グレイフィア・ルキフグスが静かに瞳を据えていた。

「先日、お伝えした件への回答を頂きに参りました」

グレイフィアは朱の引かれた唇を肅々と開いた。

「その件についての返事はしたつもりよ」

「一応の返事は頂きましたが、しかし……」

「当初の話では、私が人間界の大学を出るまで猶予があつたはずなのよ。上級悪魔ともあろう者が、取り付けた約束を自身から反故するつもりかしら、あなたたちは」

婚約者と結ばれる気などさらさらなく、次期当主としての責任は自身で背負う。

リアスは瞳を紅に染め、本気であることをグレイフィアに伝えた。

「それに私が次期当主である以上、婿の相手ぐらい自分で決めるわ」

「……お嬢様、あのような答えでは誰も納得できるはずがありません。興味の惹かれる殿方が現れたからと言って、旦那様方が決めた婚約を破棄しろなどと——」

グレイフィアの忠言の最中に鳴り響いた足音。

部屋に反響する不可解な音に、グレモリー家のメイドは視線を奔らせて警戒する。

「……？ 気のせいですか……話の腰を折ってしまい申し訳ありません、お嬢様」

グレイフィアが警戒をする中、音の響いた直後からリアスは頭を悩ますこととなる。十中八九、侵入者は大胆不敵な行動を取る彼ではないかと。

そんな彼女の様子を見て、侵入したのが彼女の手の者と悟ったグレイフィアは警戒を解いた。

「ちようど良いわ、この話はもう終わりにしましょう」

「お嬢様……」

「不毛な会話をこれ以上続けるつもりはないわ。帰ってちようだい、グレイフィア」
グレイフィアに言葉を紡がせることなく、リアスは決然たる口調で言い放った。

「今日のところはこれで帰らせて頂きますが、後日また伺わせて頂きますので」

このまま話し合おうとも、結論が出ることがないと悟ったグレイフィアは、綺麗に一礼すると魔方陣を展開し部屋を後にする。

転移の光が収まり、グレイフィアが姿を消した部屋に一陣の風が吹き抜けた。

「あなたにも可愛いところがあるのね、ふふっ」

吹き抜けた夕風に流される紅髪。

窓枠に寄り掛かるリアスは、眷属の輪へ戻っていく麗人の姿を見付けて笑みを零すのであった。

四話 赤薔薇の夜露

「お父様も、お兄様も、勝手に過ぎます！　いつも、いつも！　やることに茶々を入れてっ！　どこまで私の生き方をいじくれば気が済むのですかっ!!」

紅の魔方陣より映し出される制服の少女。

情の厚き悪魔の主は鮮血色の長髪を振り回して、身の内に溜めこんだ憤りを顕わにしていた。

「リアス……此度の縁談は冥界にとつて非常に有意義な物なのだよ。純潔悪魔同士が結ばれるとなれば、それだけでも冥界の希望となるのだ。上級悪魔として、グレモリー家次期当主として、その責務を果たしてくれまいか？」

「何度乞われたところで、私はライザーと結婚するつもりなどありません！」
対するは顎髭を生やした悪魔の男性。

襟の広いスーツを着こなす男性の姿からは貫録が滲み出ていた。

静かに愁いを湛える瞳は娘の我が儘を聞いて尚、揺らぐことはなかった。

「これは決定事項なのだ。今更、破談に追い込むなど、先方に申し訳が——」
「分ならずやッ!!　お父様のおたんこなす!!!」

淡い紫色を取り込む室内にリアスの怒号が響き渡る。

罵りを一頻り伝えた通信用の魔方陣は、紅の輝きを失い喧噪が嘘であったように沈黙する。

「リアスの言うことも分からないでもない。親として我が子の意見を尊重してやりたくもある。だが、私たちには猶予があるとは思えないのだよ」

儘ならぬ事態に男性は空を仰いだ。

元72柱の上級悪魔としての責務。

節介と言われようとも親として注ぎ続けてきた並々ならぬ情愛。

狭間で揺れた心は冥界の憂うべき状況に、情を責務で塗り潰して縁談を取り付けたのだ。

冥界を明るく照らす希望になるようにと願いを込め。

「それをリアスに求めるのも、酷というものなのだろうか……」

幾ら我が儘を言い散らそうとも可愛い我が子のことだ。

より良き相手と結ばれて幸せになってももらいたい。

塗り潰した筈の情愛が沸き上がる様に男性は長い息を吐き出した。

「すまないが、後は君に任せてもいいかい、グレイフィア？」

「お任せくださいませ、旦那さま」

メイドに事を一任した男性は、掲げたグラスを通して外の風景を展望する。舗装された道路に剪定された街路樹。

現世に真似て作られた街並みは彼の築き上げてきた苦勞の結晶であった。

しかし、劇的な発展を遂げてもなおも、地平線はどこまでも続き未だ果ての見えることはない。

冥界にそびえる居城の主は紫色の空に雲行きの怪しい悪魔の未来を映し出すのだつた。

* * *

夕食の残り香が漂うダイニングルーム。

備え付けのソファアールやカーペットの上で少女たちが思い思いに寛ぐ中、椅子へ座るラウルは布巾を片手に黙々と作業を続けていた。

「どうしたのですか？　浮かない顔など見せて」

正面に居座るマリナの抑揚のない声が聞こえて、機械的に硝子の容器を磨き上げていたラウルはその手を止めた。

「少しな……学園で世話になっている人が、婚約話で揉めていてな……」

盆の上にグラスを並べたラウルは静かに瞼を閉じた。

思い起こすのは黄昏色の旧校舎。

銀髪の悪魔と向き合う紅髪の少女の姿は、毅然としながらもどこか危ういものを感じ得た。

恐らくは両親に取り付けられたであろう縁談を発端としたもの。

私の強い彼女にとって好かぬ者と添い遂げるのは我慢にならない。

我慢にならないが既に外堀を埋められており、打つ手がないと言ったところだろう。

追いつめられたその儂い後ろ姿に自身の抱える情勢を省みることとなったのだ。

ゆつくりと見開かれた淡蒼の瞳は濡れ羽髪の少女の姿を映して微かに揺れる。

「そうですか。また要らないことを考えていたのですね……馬鹿ですね、貴男は」

所なさ気の様子を窺うラウルを目の当たりにしたマリナは容赦なく冷罵を浴びせかける。

軽く押し上げられた眼鏡の奥で赫々とした瞳は呆れに彩られていた。

「馬鹿とは酷い言われようだ。こちらは真剣に思い悩んでいると言うのに」

罵られたラウルは片目を瞑ると口元を歪ませて嘲笑を浮かべた。

懸念を抱くラウルの姿は真剣そのもの。

彼女たちの将来にも関わってくるゆえに心を千々と乱すのだった。

だが、同時にラウルが抱く懸念は余計な節介でもあった。

何者でもない彼女が既に納得しているのだから最早思い悩む余地はない。

余地がないと分かつて尚も思い悩むのは、ラウルの抱く不安の表れだったのかもしれない。

そんな愚かだと知ってなお割り切ることの出来ない滑稽な己をラウルは嘲け笑うのであった。

「馬鹿だね」

「救いようがないにや」

「ふん……意気地なしめっ！」

「お兄ちゃんのものなところは、嫌いではないですけど直してほしいです」

自嘲の笑みを浮かべるラウルに更なる迫り打ちが掛かる。

寛いでいた少女たちもいつの間にか話に乗っていた。

ルチアと黒歌はマリナの意見に同調し、ティアマツトは小馬鹿にして鼻先で笑う。最年少のルフエイも控えめにラウルの言動を論ずるのであった。

「分かった、私が間違っていたよ……この話は終わりにしよう」

目の前の少女たちに満場一致で責め立てられたラウルは自身の過ちを認める。

思い悩むラウル自身も詮無きことと割り切っているゆえに決断は早い。

むしろ、思い悩むこと自体が無粋な所業であつたのだ。

曖昧な笑みを作り両手を上げたラウルは、片手に持つ布巾を揺らして降参の意を示すのだった。

「愛しき貴方たちに夢幻の加護が在らんことを——アーメン」

心の底から願うと付け加えたラウルは盆を持ち席を立つ。

悪戯猫の悲鳴に背を押され部屋を後にした彼は、グラスを片付けるべく足早に歩を進めるのであつた。

* * *

主寝室へと戻つたラウルは黒地のワンピースを掛け、深い蒼の硝子に包まれたランプを灯す。

熱に当てられて漂い始める花の香り。

精密に織られた絹布の天蓋を抜けたラウルは寝台の上へ身を投げる。

寝台に内蔵されたスプリングはやんわりと衝撃を吸収し、真新しいシートに大きな皺を作つた。

ラウルは布地の雪原の上で転がるようにして身を返すと天上に向けて指先を軽く振

る。

指を振るうのを合図に消えていく蛍光の明かり。

煌々とした灯りを失った主寝室は部屋の片隅に置かれたランプの光が暗然と照らすのみ。

暗幕の下りた一室は静寂に包まれる。

月明かりも入らない深窓の暗がりですラウルが蠢く。

ラウルが蠢いてから暫くすると、藍色の光が暗闇に包まれた主寝室に広がる。

慎ましい胸板を隠すように肩口から掛けられたキャミソール。

下腹部を覆うゆつたりとしたシルクのスカート。

身を包むランジェリーからは寝具であるシーツよりも白くほっそりとした四肢が覗く。

深い青に薄らと照らし出される麗人の姿態は夜光を浴びて一層のこと美しく輝くのであった。

「部長があんな風に想っているとはな……」

深々と柑橘の芳香を吸い込んだラウルが思いを巡らせるのは、リアスの不意打ち染みた告白。

余りにも不意打ち染みていたために、地表から部室のある部屋へと舞い上がったラウ

ルが着地の際、窓枠を踏み外して革靴を鳴らす失態を演じてしまうほどであった。

本人の口から聴いた訳ではないが、それ故に信憑性は高くなる。

もつとも、盗み聞きをしていた以上、リアスの口から語られた方が確実だったのだが。

あの時は銀髪の悪魔がいた手前、身を隠して状況を把握することに躍起となっていたが、今になって告白を思い出したラウルは人知れずはにかんだ。

初心な少女の如く赤面してのた打ち回るような醜態は晒しはしないが、昏く照らされる室内で赤みを帯びているのが見て取れるぐらいは顔を上気させていた。

告白を受けたことや口説かれたことの数知れない麗人であっても、好意を伝えられれば嬉しくある。

相手が美人であれば尚更、紅髪の姫ならば不意を打たれたこともあり、ラウルの受ける感銘はより深いものであった。

悪魔であることを鼻で掛けた彼女であるが、その尊大な態度がまた可愛らしい。

飛び立てぬ雛鳥が必死に囀るように、リアスもまた悪魔の産まれを、自身の兄の威光を笠に着て自身の尊厳を必死に守ろうと声を上げる。

健気な彼女の姿が愉快であり——そして愛らしい。

愉快的彼女と交遊を結ぶ関係になれば、気苦労は絶えないだろうが、心地の良い日々が待っているだろう。

今も彼女たちとの心地よい日々が続いているが、恐らくはそれ以上の日々を——

「いや……在り得ないな。大方、体の良い風除けに使われたに過ぎないか」

甘い結論に至ろうとして、すぐさまその考えを切り捨てた。

頭を振って思考を入れ替えたラウルは冷静に状況を把握する。

リアスの抱えるのは望まぬ縁談だ。

彼女が上級悪魔——つまりは貴族階級であることから、この縁談は幼い頃より組まれていたに違いない。

血を絶やさぬために彼女の両親が取り計らったことなのであろう。

三大勢力の一角を担っていた頃の栄華は今や昔。

悪魔の勢力は衰退に次ぐ衰退を強いられ多勢力との戦争は不可だとされるほど。

中でも悪魔の中核を担っていた72柱も半数以上が断絶したとされているであった。

情の悪魔と言えど、上級悪魔としての教養を受けた彼女が悪魔界の事情が分からない筈がない。

婚約相手であるフェニックス家は代々、秘薬たるフェニックスの涙の製造で財を成してきた一族だ。

レーティングゲームが冥界で盛んに行われるようになってからは、その不死性を売り

にして頭角を現してきたとも言われている。

今や公爵家のグレモリー家と比べても遜色はないだろう。

血統で見ても純血種である以上に、バアルの力を受け継いだリアスと不死性のフェニックスの間にできる令息は決して侮ることはできない。

彼女らの両親が望む通り冥界の希望となるのは間違えないだろう。

しかし、悪魔であることを誇らしく語る彼女が頑なに拒否を示すのか。

フェニックスの第三子——ライザーは女性に嫌われる性格なのだろうか。

ラウルの疑問は尽きることがない。

如何な理由があれば頑なに拒み続けるリアスが、風除けとしてラウルの存在を使つたことは先の会話より感じ取れた。

グレモリー眷属を一蹴できる出生不明の魔術師。

ラウル程使い勝手のいい者はいないだろう。

本家と決別するような事態に陥ればラウルの力を頼ればいい。

この地に思い入れがあり、大切に想う幼馴染や義妹の友人が彼女の眷属にいるのだから、ラウルも応じざる負えない。

頼もしい助つ人を得たりアスは婚約の撤回を求めて本家と対峙するだろう。

いざとなれば、自身の眷属ではないラウルに責任を全て押し付けて切り捨てればよい

のだから。

幾ら眷属の幼馴染と言えども、悪魔ならば不要と判断したその時に斬り捨ててもおかしくはない。

情に厚い彼女がその判断を下せるかは、些か疑問ではあったが。

案外、策謀を巡らすことなくリアスが本心で言っているのではないかと邪推したラウルは苦笑を浮かべた。

紅髪の姫の抱く淡い想いか、風除けのための体の良い代役か。

どちらにしろ、悪いように思われていないことに気を良くするのであった。

「それにしても、あのメイドは……やはり……」

取り敢えずの結論に出たリアスの告白を頭の隅に追いやったラウルは、彼女が我を通すことで被るであろう厄災に対して頭を働かせる。

部室に現れた一体の女悪魔。

リアスを説得するために送られてきたであろう銀髪の女性は、兄である魔王の尖兵として文句の付けようがない。

強大でありながら微弱なほどしか伝えない魔の波動。

身のこなしもメイドの域を逸脱しており、一流の戦士であることを感じ取らせた。

グレモリー家切つての完全無欠の銀髪メイドを筆頭にして、ルシファー眷属は化け物

揃いと言われている。

最強の女王——グレイフィア・ルキフグス。

ルシファアの座に居座る実力不明の魔王——サーゼクス・ルシファア。

そして、彼に付き従う実力者ぞろいの眷属たち。

ラウルの力を以ってしても、いずれの相手も難敵であることには違いない。

もし、ぶつかることがあればただでは済まないだろう。

今も足元が定かでないラウルとしては、できることなら避けて通りたい相手であった。

しかし、ラウルの希望は瞬く間に碎かれることとなる。

僅かな空間の揺らぎと共に魔方陣が展開される。

術式の解析を終えたラウルは自身の失態を知ることとなる。

皮肉にもそれは以前にリアスへと渡した結果を抜ける転送陣。

アーシアへ神器を返したあの日に渡した一枚の紙切れへ描かれていたものであった。

ラウルが顔を顰める中、暗室に満ちる銀の光は件の姫君を呼び込むのだった。

「なにをしにきたのだ、グレモリー？」

「——っ!?! 部長とは呼んでくれないの?」

リアスが気を落とした様子を見せても、ラウルは姿勢を変えることはない。

彼女の襲来は厄災の幕開けに違いなかつたのだ。

ラウルは半眼で迷惑極まりない姫君を射竦める。

「いいわ、今は許したあげる」

射竦められてなお毅然とした態度で胸を張るリアスを目の当たりにして、頭が痛くなつたラウルは深く息を吐き出した。

「許すもなにも、貴方は不法侵入者なの——」

「ラウル、私を抱きなさい——」

言葉を遮つてリアスが示した意思にラウルは頬を引き攣らせる。

婚前状態の令嬢が繋がりを求めて迫ってきているのだ。

潤んだ碧玉を正面から見据えたラウルは、言い間違えたのではないかと目で訴え掛ける。

「——私の処女をもらつてちようだい、至急頼むわ」

再度紡がれた正気を疑うような言葉がラウルの脳髓を揺らす。

最早、言い間違えでも聞き間違えでもない。

紅髪の少女が同衾を望み押し入つたと、他ならぬ本人の口から教えられたのだから。

「そこで待つていなさい。直ぐに支度を済ませるから」

ラウルに寝台の上で待機するよう指示したリアスは、彼女の象徴たる紅色の長髪を搔

き上げると、自身の纏う制服に手を掛ける。

ボタンを次々と外し制服を脱ぎ捨てる少女。

天蓋の内ではリアスが脱衣する姿を見詰めていたラウルは口を結ぶ。

「無粋な真似はそこまでにしてもらおうか」

「きゃっ!?!」

意を決したラウルは胸前のリボンの手を掛けていた少女の腕を引く。

予期せぬ力に引かれたリアスは小さな悲鳴を上げる。

重力に引かれ絹布の天蓋を抜けた発育の良い肢体の持ち主は、ラウルの慎ましい胸板に倒れ込んだ。

「随分と可愛らしい声を出すのだな、貴方は」

「な、なにをするのよ! 吃驚するじゃない!!」

ラウルは身を起こそうとするリアスの肩にそつと手を回して押し留める。

動きを制限されたリアスが顔を上げて鋭い目で抗議するが、当の本人は微笑み返すのみ。

微笑む麗人は身を固くする少女の紅髪を梳き解すように優しく撫でる。

肩の力が抜けていくのを確認すると、リアスの身体を抱き寄せたままゆつくりと身を寝台へ沈めた。

「吃驚したのは私の方だぞ。休もうとしたところに押し入られたのだからな」

寝台へ横になったラウルは、身を縮込ませる姫君を丁重に扱い伸ばした片腕の上へ移す。

為されるがままのリアスはバツが悪いのか顔を俯かせるのみ。

普段は尊大に振る舞う姫君のいじらしい態度に心を疼かせた。

「それに抱けというならば、少しは男心を学ぶべきではないか？」

膝を立て身体を跨ぐように覆い被さったラウル。

皮肉とも冗談とも取れる言葉を口にする彼は、飾り彩られた紅色の造形美に手を伸ばした。

「ちよっ……んんっ……ラウル、自分で脱ぐから……んっ！ や、止めなさい！」

白魚のような細指の先より啄むように奏でる繊細な愛撫。

弄られることで生じる衣服と肌膚との衣擦れは、本来覆い隠す筈の敏感な部位を刺激することになる。

肌身を奔るこそばゆさにリアスは耐えられなくなり声を上げた。

部屋に響く叱声に、スカートの留め具へ手を掛けていたラウルはその動きを止めた。

「部長……いや、リアスで構わないかな？ 抱けと言うのは、男女の情事という認識で間

違えないか？」

「あ、当たり前でしょっ!! ふざけたことばかり言っていると消し飛ばすわよー!」
無粋だと思いがながら再度確認を行ったラウルは、紅に染まる瞳を見て本気であると知る。

「許せ。反応が余りに可愛かったのな。思い違いをしたのかと、要らぬ心配をしてみたってのだ」

「も、もう!! よくそんなに次々と恥ずかし気もなく言葉を掛けれるわね……」

ラウルは掬った紅髪に唇を落とす。

口付けに込められるのは愛らしい姿を見せる令嬢に抱き始めた思慕の情。

悪びれもせず愛情を伝える麗人の言動に、細腕で抱かれる紅の姫君は身悶える羽目となる。

「ねえ、ラウル。なんだか手馴れている感じだけど、もしかして経験があるの?」

「今は私と貴方……二人なのだから気にすることは無い。それに手慣れているのは、女物の服が多いから構造をよく知っているだけだよ」

語調を和らげたラウルは苦笑いを浮かべる。

押し寄せてきた割には余計な気を抱くものだ。

もつとも、余計な気を存分に回してもらいたいと言うのが、偽らざる本音であったのだが。

「本当かしら？」

言葉を濁す態度を不審に思ったりリアスは悪戯っぽい目をしてもう一度問い質す。

「分かるだろ？ 私もまた貴方に惹かれて高鳴っているのが」

すると、ラウルは取った彼女の手を己の胸元に宛がう。

大きく脈打つ心臓。

隆起を繰り返す胸部がラウルの心内を物語っていた。

「ええ。緊張しているのは私だけじゃなかったのね」

「触れれば手傷を負うと知り得てなお、求めてしまう美しき一輪花。薔薇の如き気高さを宿した貴方に魅せられているのだよ」

「そう……言われて悪い気はしないわね」

少々気取った物言いは素直になれないラウルの癖だと判断して、はにかむリアスは褒められたことに気を好くする。

上機嫌で笑みを見せるリアスの判断はあながち間違えではない。

女性を装う見目麗しい美貌の貴人。

一介の学生でありながら、偽ることに長けたラウルが、本性を剥き出しにすることは少ない。

神秘を秘匿する魔術師ゆえの業か。

積み重ねた十六年の年月の結晶か。

四半期にも満たない僅かな月日では、仮面の奥に潜む素顔を見出すには役不足であつた。

繊細な心の機微を知る術もないリアスは熱に浮かされたようにラウルを見詰める。上目遣いで淡蒼の瞳を捉え頬を染めた悪魔の少女は色めいた言葉を紡いだ。

「……きて………ラウル」

愛情に濡れた碧眼。

紅の長髪は扇情的に広がり艶やかに麗人を誘い、豊満な肢体を隠すことなく迎えるように両手を差し出す。

淫らに墮落の道に引き摺り込む嬌態は正に悪魔の所業であつた。

されど、据え膳を前にしたラウルが食指を動かすことはなかつた。

「……興が失せた。やはり、蕾の開いていない薔薇を摘むなどするべきではないな」
冷めた吐息を胸内から吐き出す麗人。

身を起こして自身に誘いを掛ける悪魔から離れるラウルは失望の色を顔に顕わにする。顔を振ったラウルは呆気にとられるリアスを背にして天蓋の外を目指した。

「っ!? 待ちなさい! 私にここまでさせて、恥を掻かすつもりなの!」
リアスが唾然としたのは一瞬の内。

正氣に戻ったリアスは、去り行くラウルの腕を取ると不躰な行動を糾弾する。

「恥を掻くもなにも、断りもなく押し寄せてきた挙句、抱けと身体を晒す貴方に羞恥などあるのだろうか?」

「あるわよ! 確かに連絡の一つも入れずに押し寄せたのは悪いと思つたわ。だけど、私には時間がないのよ!!」

失望に彩られた瞳に冷視されるリアスは堰を切つたように感情を吐き出した。

両親によつて取り付けられた望まぬ縁談。

相手は婚約者であるリアスを見ることはなく、後ろ盾たるグレモリー家を見据えるだけの男。

良き相手と結ばれ幸せを夢見る少女としては認めがたい縁談であった。

しかし、グレモリー家の次期当主としての責務に縛られるリアスには打つ手がない。打つ手はないが両親の取り付けた縁談は認めがたい。

責務と理想の狭間で苦しみ喘いだ末に、苦肉の策としてラウルの下へ押し寄せたのだつた。

理不尽な現実によつて逃げ道を塞がれたリアスは揺れる瞳で必死に訴え掛ける。

「自身の都合ばかりを押し付ける貴方の在り方は如何な物なのかな？」

リアスの激情に煽られて尚もラウルの態度は変わることはない。

理不尽に喘ぐ様子に同情を寄せたくもある。

哀れな姿に手を差し伸べたくすらある。

だが、同時にリアスの行動には相手に対する配慮の片鱗すら見えなかったのだ。

リアスの所業は正しく婚約者の行いと変わることはない。

自身に齎される益のみに執着し、行為を迫る相手を省みることにはなかったのだ。

独り善がりな言動は褒められるものではなかった。

切羽詰まった状況に視界が狭まるのは仕方がないことだが、情の悪魔として人情を語

るのならば最低限の礼節は重んじてもらいたいところであった。

「それに——」

蛍光の明かりに煌々と照らし出される暗室。

主寝室の入り口では非常事態を知らせる赤灯火が点灯する。

「時間切れだ」

両手を広げたラウルは口端を吊り上げ皮肉気に笑んだ。

それは夢が潰えたことを意味していた。

正面から結界を破ってきた縁者にリアスは連れ戻されることになるだろう。

その先にあるのはフェニックス家との婚礼。

両家の繁栄のために望まぬ婚姻を強いられるのは目に見えていた。

胸の内を巡る後悔の念にリアスの目尻が熱くなる。

「——あ」

涙を堪える少女の頭に乘せられた纖手。

小さな掌に込められた温かさにリアスは声を漏らした。

「安心しろ。貴方には日々、厄介になっているのだ。こんなことをせずとも、力を貸せと言うならリアスの期待に応えられるよう、始祖より連なりし我が名に懸けて心置きなく力を振るって見せるさ」

「え……えくと……その……あ、ありがとう……」

しおらしい少女の姿を目の当たりにしたラウルは考えを改め、自身の行いを恥じた。

悪魔の公爵家に名を連ねる次期当主だとしても、彼女は花や蝶よと育てられた齡18の小娘でしかないのだ。

聡明な見解を求めするために打った芝居は、結果的に少女の心を傷つけたのみ。

彼女とその眷属の将来を憂う余り、急いで過剰な期待を寄せたのは過ちであった。

か弱き少女を無為に傷付けたことへの贖罪を含めて、ラウルは力を貸してみせる固く決意する。

「大変！　大変だよ、ラウ！　曲者、曲者が結界内に侵入してきたん、だ、けど……」
激しい音を立て開け放たれた扉から姿を現す少女。

上履きを盛大に鳴らして屋敷の主へ侵入者の存在を伝えにきたルチアの言葉は、想定外の事態に次第に尻すぼみになってしまふ。

「ラウがまた女の子を連れ込んでるうううつつつ!!??」

半裸の男女が同衾する光景に紅玉を零れんばかりにルチアは目を見開く。
屋敷を揺らす少女の悲鳴が迎撃の狼煙上げとなるのであった。

五話 夜霧の侵入者

森の奥に響いた甲高い清音。

硝子の割れる音は激しい業火に呑まれた結界が崩壊したことを指し示していた。

「感覚を狂わす幻術に、練度の高い結界……この地に腕の立つ術者が巢食つているとは

……」

地表へ深々と刺さった儀礼剣を一瞥したグレイフィアは、想定外の事態に眉を寄せ
る。

当主の命を受けてグレモリー家の令嬢たるリアスの後を追った。

魔力の残り香を追って辿り着いたのは、リアスに管理を任せた土地の一角に広がる山
林であつた。

一年と半年前に物好きが買い占めたただけの変哲もない土地だったはずだ。

それが足を踏み入れた結果はどうだろうか。

一帯を覆い隠すよう巧妙に巡らされた霧と幻術の認識阻害の結界。

霧と幻術の結界を抜けた先では、柔らかな土壌が隆起し、肥大化した木の根が足を掬
う。

葉の茂った枝が月明かりを遮る山林は、樹海へ迷い込んだと錯覚させるほどの悪路が続いていた。

「お嬢様が仰るつていた魔術師なのでしょいか……」

不自然に広がる樹海は職務を全うするグレイフィアに牙を剥いた。

奥に進めば進むほど地面はぬかるみ、土壌は足を止めんと地中に引きずり込もうとする。

纏った魔力を諸共することなく。

沼と言っても差支えない柔らかな土壌に吞まれたグレイフィアの衣服は、泥に塗れ大きな染みを作ることとなる。

「八幡ラウル……彼は報告に違わぬ人物のようですが、もう一度周辺を洗い直してみる必要がありますね」

服を再構成することで泥汚れを落としたグレイフィアは、森の奥で待ち受けるラウルへの評価を改める。

当初、ラウルの評価はリアスからの報告も含めて、極めて優秀な魔術師だと思われるていた。

四大元素に於いて風を司る気流や火を司る雷の魔術。

音に聞こえた剣士の弟子たる騎士を圧倒した剣術。

一報では神器や悪魔の駒に対する造詣もあるとのこと。

実力を隠していることも含めれば、上級悪魔以上の魔術師と判断されていた。

判断されていたのだが、身を以つて彼の魔術に触れたグレイフィアは首を捻らざる負えない。

この地に巢食う魔術師は優秀過ぎるのではないかと。

それこそ————悪魔である彼女たちの目へ留まっ……ても可笑しくはないぐら……いは。

大規模な魔術や多彩な技能を取得しているとの報告から一代で築かれたものではない。

加えて、人様の管理地に大規模な移転を軽々しく行つたことから、それなりの財力があることが伺える。

財を成すのにはいずれかの形での社会との接触が不可欠であり、若さから判断するに有名な組織、またはその氏族に在ると思われていたのだ。

しかし、ラウルの影が作り出した事実は小説よりも奇である。

確認のため魔術協会へ問い合わせたところ、八幡ラウルという名の魔法使いや魔術師は過去にも現在にも在籍していなかった。

もちろん破門された記録すらなかった。

魔術教会への非接触と若くして大成を遂げた魔術。

彼の魔術師の背後には巨大な陰謀が潜んでいるようにならなかつた。

尻尾を掴むことすら叶わない彼の者であつたが、グレイフィアにも理解できたことがあつた。

古典的でありながら実用的な精神攻撃を始め、奥にいけば奥にいくほど試練のように築かれた細工の数々。

八幡ラウルという魔術師は些か趣味の悪い人物としか言いようがなかつた。

「リアス……」

グレイフィアはそんな魔術師の下へ転がり込んでしまつた義妹の身を案じる。

婚姻前に得体の知れない人物を頼つた令嬢の純潔を。

それ以上に義姉として、暴挙に出るまで追い込まれてしまつたリアスの心身を。

魔道の巢窟に踏み入れた銀髪の使用人は、行き先の暗い道を前にして瞳を揺るがせるのであつた。

* * *

「状況はどうなつてゐる?」

天井から吊るされたシャンデリアが彩る大広間。

突如現れた紅髪の少女も含め、六人の少女たちが結界を抜けてきた侵入者の対策を練るために円卓を囲んでいた。

入り口を正面に見据える奥の席に座るのは女装の麗人。

黒一色の騎士団服に身を包んだラウルが、状況把握に努めていたマリナへ現状を訊ねた。

「はい、侵入者と思わしき人影を第二層区にて監視用ゴーレムが確認。第一層区を容易に抜けてきたことから、相当の手練れと推測できます。第二層区の結界が破壊されるのも時間の問題かと」

指先で眼鏡の縁を押し上げたマリナは、監視ゴーレムの映像を元に解析した情報を伝える。

単騎で突入を敢行した侵入者。

迷いなく屋敷のある方向を目指していることから、武術にも魔術にも長けていることが予想できた。

猛者であると予想された侵入者は、既に幻術で構成された第一層区を抜け、第二層区に張られた結界の破壊を試みているのであった。

「黒……黒子は結界外の哨戒に就け。侵入者が一人とは限らないから慎重に……な」

「まあ、それが順当よねー」

マリナの解析した情報を元に即席の作戦を立てたラウルは各自に指示を飛ばす。悪魔の令嬢が傍に居る以上、表に出すことの出来ない悪戯猫には視界の外で働くよう指示を出す。

彼女の得意とする仙術を用いた隠密行動。

隠密行動を前提とした指示に、黒子と呼ばれた女性は何処からともなく言承を伝えた。

「ルフエイは最終防衛ラインを構築。ティアはその警護に当たれ。屋敷の防衛は貴方たちに任せるぞ」

「承りました。屋敷はわたしが守りますね」

鏢広のとんがり帽子に、花柄の描かれた外衣。

あどけない顔を見せる魔女っ娘は丁寧な口調で、屋敷の防衛という重責を背負うのであった。

「納得できんな。折角の獲物なのだ、私に譲ってもらおう」

しかし、業を司る龍王はラウルの立てた作戦に首を振ることはなかった。

元は闘争本能を満たすために好き勝手振る舞っていたティアマットであったが、とある一件よりその振る舞いは鳴りを潜めることとなる。

今でこそ氣力を取り戻して多勢力への手出しをしているが、全盛期のそれには届かない。

尻拭いをラウルがやっていることもあり、手間取らせるのを悪く思う半面、退屈な時に氣を引く手段として用いるくらいのもの。

時偶に行われる戦闘訓練に参加して、燦る闘争心を焚き付けるしかなかった。

そんなときに舞い込んできた千載一遇の機会。

本能を疼かせる彼女にとってこれ以上の好機を逃す術はなかったのだ。

「貴方が出ては辺りが荒れてしまうだろ。ルフエイと伴に庭先で待機をしてくれないか？」

「むむむ。まるで私が暴君のようではないか……」

「そう不貞腐るな。後で私が相手をしてやるさ」

ラウルは唸り声を上げるティアマットに苦笑を隠せない。

真摯に頼み込めば不満を口にしながらも、卒なく応じて見せるのだ。

無愛想でありながらどこか憎めない龍王様。

愛嬌たっぷりのティアマットの要望に、ラウルは形を変えて応えると口約束をする。

「いいだろう……だがな、ラウル。今日は寝れると思うなよ」

「……程々にな。日中休めれる貴方と違って、私は学生なのだ。そこを考えてもらいた

いものだ」

「ふんっ！ 知ったことか。足腰立たぬように痛めつけてやろう。精々、足掻くといい」
「それは楽しみだ。侵入者の迎撃がてら、身体を温めておくようにしよう」

笑みを深めて闘争心を視線に乗せる魔術師と龍王。

似た者同士、共感するところがある主従であった。

彼らが火花を散らしている間も状況は刻々と変化していく。

「第二層区の結界の破壊を確認、再構成までの時間は後180秒。また、結界を破壊した侵入者は第三層区を快走中です」

「第三層区は何もないからな。直に抜けられるだろう」

報告を受けたラウルは難敵から視線を外して宙を向く。

ラウルは細指で宙に弧を描くと第三層区に仕掛けた細工を起動する。

「グレイファイアッ!」

宙を開いて現れた数十にも上る映像。

遠近の間隔を置いた映像は当然のこと、空高くから見下ろす鳥瞰図、低視線から見上げる虫瞰図や地中から動きを捉える土竜図など、多種多様な映像が全方位から抜け目なく対象を映し出す。

そして、数多の視線によって監視するように投影される被写体はリアスの良く知る人

物。

屋敷の方角へ向けられた凜々しい銀の瞳。

両肩に垂れるおさげが風に靡き、足首丈のスカートは颯爽と駆ける彼女の五体に引かれてはためく。

何処かの赤龍帝が食い付きそうな銀髪のメイドであった。

「なんだ、貴方のところのメイドさんか？」

「え、ええ。あなたも知っているでしょ？」

「さてな？ 私も初めて見るからな。噂程度は知っているつもりだがな」

リアスの問いにラウルは白を切る。

大禍時に見付けたメイドの姿は、盗み見ゆえに見なかつたこととした。

胡散臭いものを見るようなりアスの視線を遮るようにラウルは手を打つ。

茶番は終わりだと空気を入れ替えたラウルは最終的な命令を下す。

「状況は以上の通りだ。第五層区にて私とマリナで迎撃。振り切られた時のため、第七層区に戦闘用ゴーレムを配置する。目標は捕縛、最悪の場合は殺害も厭わない」

「ちよつと!?!」

ラウルの下した非常な命令に、黙して会議の動向を探っていたリアスは堪らず声を上げた。

「何かご不満か、グレモリー嬢？」

「不満に決まっているでしょ！ グレイフィアは家のメイドなのよ、傷付けないでちょうだい」

「私たちからすれば、無作法な侵入者にしか過ぎない。人様の家に土足で上がり込んだ者に、咎めなしとはいかないだろ」

「それでもよ！ あなたたちに討たせるわけにはいかないわ！」
声を荒げるリアスは最強の女王であるグレイフィアを討てるのだろうか疑問を抱く。

魔王ルシファー眷属の女王グレイフィア・ルキフグス。

彼女は嘗て、冥界最強の女性悪魔の座を争った片割れである。

もう一人の女性悪魔は魔王の役職についていることから推測できるように、グレモリー家のメイドの実力は魔王級と言われている。

一方で、ラウルたちにはそれを可能とする力があるのではないかと不安に駆られる。

グレモリー眷属を剣技のみで一蹴した自称魔術師を筆頭に、円卓に座る彼女たちは猛者が揃っているのではないかと思われたのだ。

黒髪金眼の母性豊かな身体つきをした女性。

ラウルと軽い口論を交わした彼女は間違えなく戦闘狂の類いである。

裏の世界で闘いを好む者は総じて実力者であることが多い。

生き延びるために己を鍛えたにも関わらず、闘いを重ねる内に命のやり取りを行うことへの快楽を見出してしまふからだ。

もちろん例外も存在するが、陣頭指揮を執るラウルを見詰めるティアアマットもまた、それに属する香りを漂わせていた。

そんな熱い視線を一身で受けるラウルの傍らへ座り補佐に回る黒ローブ姿の女性。

双子と見紛うほど顔立ちの良く似た彼女も実力者であると思われた。

突如として降りかかった災難に、揺らぐことすらなく赫々と鋭い光を放つ瞳がその証だ。

彼女もラウルと伴に迎撃に出ることから間違えはないだろう。

大人しく席に着いて会議に参加する少女の姿も忘れてはならない。

幼なさが抜け切らない少女が、魔術師を筆頭とする集団の中で魔女の姿を装い、平然と会議に参加している。

一人前と扱われていることから非凡な才能の持ち主であることが窺えた。

唯一剣を携える蒼銀の少女は護衛と思われ、同時にラウル以上の剣術使いだと明言されていた。

姿を見せない黒子と呼ばれた女性も含めれば十分な戦力になる可能性が高かったの

だ。

「ならば、貴方が説得を試みてみるか？」

「……そうね。私を追ってきたのだろうし、私が話を付けるわよ」

不敵な笑みを浮かべる麗人は荒ぶるリアスへ代替案を提示する。

自身が起こした問題は自身で解決してみるかと。

下唇に指を付けたリアスは悪くない案だと快く了承するのだった。

「ルチア、彼女の警護に就け」

「はいはい。ほんと、ラウルは素直じゃないよね」

方針が決まったラウルは残っていたルチアへ役を振った。

応じたルチアは展開が読めていたと言わんばかりに苦笑を浮かべる。

遠回りをしてまで相手の意を汲もうとする行動は、勘の良い少女に見抜かれていたの

だった。

おもむろに席を立ったルチアは、護衛に付くこととなったリアスへ挨拶をする。

護衛対象と挨拶を交わすのは不思議なことではないが、会議の流れで立ち振る舞う彼

女の行動は性格がよく出ていた。

「初めまして、リアスさん。いつもユウ……今は佑斗だったかな？ 弟分が世話になっ

ています」

につこりと人懐っこい笑みを浮かべる少女。

手を差し出すルチアが紡ぎ出した言葉の羅列にリアスは呆氣に取られた。

ルチアの言葉を信じるとするなら、彼女はリアスの眷属の姉分となる。

思いがけない出会いに口を半開きにするリアスは言葉を失ったのだった。

それは成り行きを見守っていたラウルでも変わりはしなかった。

ルチアの胸内で燻っていた不安の種。

佑斗との再会の機会が用意されても躊躇してしまふほど大きな楔となっていた。

戸惑っていたにも関わらず、迷いなく公然の秘密を口へ出した彼女の行動に度胆を抜かれたのであった。

しかし、ラウルの驚きも刹那の内に消え失せることとなる。

驚愕に固まったリアスを置き去りにして、当人のルチアはお茶目に瞑った片目を向ける。

寝めてとばかりに目配せを送る少女の尾髪を振る姿に、ラウルはどこか安堵を覚えるのだった。

「弟分……っ!? まさか、佑斗が言っていたお姉さんって——」

「ルチアで間違えない。姉と言っても血の繋がりはなく、出会ったのもあの……施設のようだしな」

静かな大広間に息を呑む音が響いた。

リアスの騎士もあの忌まわしい教会の施設の出身であるのだ。

被害者と思われる少女が、ラウルが語った真実は素直に受け止めるには重い話であった。

「感傷に浸るのは後ほどに。貴男は自身のやるべきことを忘れないようにしてください」

「んんっ！ マリナの言う通りだな。詳しい話は目下に迫る脅威を取り除いてからにしよう」

居た堪れなくなった空気を切り裂く叱声。

マリナの鋭い眼差しを受けたラウルは咳払いをして気持ち切り替える。

気を取り直すと皆を奮い立たせるように檄を飛ばした。

「敵はグレイフィア・ルキフグス。彼のルキフグスの生き残りにして、冥界屈指の実力者だ。各自、心して当たれ！」

『Yes, sir』

——異口同音。

無事を願うラウルの檄に少女たちの心は統一された。

目指すは最強の女性悪魔の捕縛。

円卓に集った少女たちは屋敷の防衛を第一に役目を全うするべく動き始めた。

「さあ、我が工房に立ち入った愚かな悪魔を盛大に出迎えようではないか」

結界を破った無作法な侵入者に不敵な笑みを送る麗人。

不可侵のラウル邸にて真夜中の迎撃戦が幕を開ける。

* * *

暗然とした山林に響き渡る轟音。

薙ぎ倒された樹木が悲鳴を上げ、閃光と伴に破裂音が散発的に上がる。

不条理に破壊されいく自然が戦いの激しさを物語っていた。

「……下手を打ちましたかっ!」

木々の合間を駆け抜けるグレイフィアの顔には焦りが浮かぶ。

地を這いずる漆黒の影が執拗に追い駆けてくるのだ。

半刻近くにも及ぶ逃走劇に、義妹の安否を気遣うグレイフィアは苛立ちを募らせていた。

「いい加減にっ!!」

感情に呼応して膨れ上がる魔の波動。

大気を震わす魔力は描かれた魔法陣より形を為す。

「グレイファイアは振り返りざまに地面へ魔力を放出する。

着弾した魔力は激しい轟音を立てて土壌を巻き上げた。

木の葉が、堆積した粘土や流砂が衝撃に煽られて舞い上がった。

当然、挟り取られた地表は重力に引かれ地に降り注ぐ。

個々が小さくあれども、膨大な体積を成して雨霰の如く降り掛かるそれは馬鹿にできない。

抜け間なく降り注ぐ土砂は執念深い追跡者たちを呑み込んだ。

されど、自然の猛威を以ってしても、その者たちの勢いを削ぐことは叶わない。

銀髪のメイドを付け狙うのは千を超える妖蛇の群れ。

魔力を喰らい数を増やした蛇たちは降り注ぐ土砂を意とすることもなく、極上の霊肉を喰らんと一心不乱に襲い掛かる。

「全く……趣味が悪い」

巻き上げた土砂を囿にして樹の幹の裏へと身を隠したグレイファイアは、用意されていた罠の悪辣さに声を尖らせた。

発端は意識を誘導されたグレイファイアの初歩的な失敗にある。

次々と襲い掛かる姑息な罠に精神を擦り減らしていた彼女の前へ姿を現した地雷。

人界に於いてクレイモアと呼ばれる形状の地雷からは、暗がり輝きを放つワイヤーが伸びていた。

足首の高さに張られたワイヤーであつたが、罨を張るのが魔術師ということを考慮すれば起動方法は異なってくる。

僅かな魔力が宿っていることから、何かしらを感じして作動するとグレイフィアは考えた。

今までの罨を鑑みるに、吐き出される鉄球にも呪術の一つでも込められているだろう。

ここまで推測できたのだから迂回すればいいものをグレイフィアが選んだのは破壊の一択。

好き放題罨を張り巡らす魔術師への怨嗟を込めて、あからさまに仕掛けられた偽造爆弾へと、安易に魔力を向けてしまう。

グレイフィアの手を離れた魔力は本命の罨を作動させてしまったのだ。

「本当に厄介な御方です……」

眉を顰めて非難を口にするグレイフィアは、目下で這いずり回る妖蛇に視線を向ける。

忌まわしい妖蛇は暗闇に潜んでいた漆黒の靄から生まれることが分かっていた。

漆黒の靄は魔力もしくは魔法生成物を糧として肥大化し、分裂することで妖蛇の数を増やすのだ。

魔の力を主軸に置く彼女たち悪魔には正に天敵と言えよう。

世界の拮抗を崩しかねない術を組んだ魔術師に興味の湧くグレイファイアであったが、今は沸き上がる好奇心を抑える。

「お嬢様を迎えに上がった暁には、少しばかり締め上げるとしましょう」

冥界の安泰のためにも、危険度の高い人物を放置するわけにもいかない。

堪りに堪った鬱憤を晴らすついでに従属関係を築いておく。

このお家騒動が終わってから結ばせるであろう契約においても有利になるはずだ。

リアスと一定以上の信頼関係を築いている魔術師を一度は吊るすと、グレイファイアは心に深く刻みつけるのであった。

「あの厄介な魔術を撒くことができたようで僥倖です。同じ轍を踏まないように気を付けませんと——ッ!？」

去っていく妖蛇の背を木陰で見送ったグレイファイアは小さく息を吐いた。

歴戦の勇士とはいえども悪魔である以上、魔力とは切っても離せない関係にあったのだ。

限定的ではあったが己の半身を封印せざる負えない状況には緊張を抱いていた。

魔力を喰らう妖蛇も去り、辺りには漆黒の靄も見えない。

制限の外されたグレイフィアの胸には安心という言葉がすつと落ちた。

しかし、その気の緩みが魔道の巣窟では致命的であった。

背後より伝わるのは聖なる波動。

グレイフィアは咄嗟に行動を起こそうとするが、視界の端に映る剣先が反撃を許さない。

最強の女性悪魔とまで称された女王の背後を容易に取った剣の担い手は静かに口を開いた。

「ここまでにしてもらおうか、侵入者殿？」

銀髪の悪魔の首筋へ聖剣を添えた麗人。

薄氷の瞳に剣呑な光を宿らせたラウルは、凜とした声音で投降を促すのだった。

六話 造星の迎撃戦（上）（下）

「降伏の意を示すならば両手を頭上に、ゆっくりと膝を地面に付けてもらおうか」

銀髪の悪魔の首筋に聖剣を添えたラウルは静かに降伏を勧めた。

背後を取っている以上、抵抗は無意味に終わるだろう。

状況が不利であると察したグレイフィアは緩やかに膝を折るのだった。

しかし、使用人である彼女が他人に従ったのは束の間。

両手を上げたグレイフィアは肘に魔力を込めると、首筋に添えられた聖剣を打つ。

刀身を打ち上げられた聖剣は添えられていただけであり、当然の如く首筋から遠ざかってしまう。

柄を握り直し斬り掛けようとするが、歴戦の勇士の前にその行動は遅すぎた。

首筋の添えていた聖剣は浮かされ、グレイフィアを拘束するものではなく反撃は必至であつた。

腰を落とした体勢から悪魔の筋力を以つて放たれる鋭い回し蹴り。

濃密な魔力を纏う蹴撃を前に、ラウルは受けることなく後退するのであつた。

「随分と手荒な返事だ。姫君が粗相を仕出かすのは、貴方を習つてのことではないのか

な?」

距離を取ったラウルは銀髪の使用人の行動を嘲る。

真夜中に断りもなく押し寄せてくるのは、不躰な行動を見習ったゆえではないかと。優勢を失ったことへの落胆を微塵も見せることなく、不敵な笑みを浮かべるのであった。

「そんな怖い顔をしないでほしいものだ。咲き誇る草花には香気が、宙には満天の星々を。美人には笑い顔と相場は決まっているだろう? 愛想の無さそうな顔付きをしている貴方でも、笑みを見せれば印象が変わってくるのではないか?」

口説き文句を並べるラウルは遊ぶ片手を優雅に振るう。

漏れ出した深い霧に包まれる山林。

麗人の声音に合わせて辺りの光景は歪み作り変えられる。

水気の満ちた湿地は枯葉の積み重なった柔らかな土壌へ。

根を幹を肥大化させた樹木は、月並みのものへと生え変わる。

暗然とした樹海であった山地には星々の光が差し込み、辺りを仄かに照らし出すのだった。

様変わりした風景にグレイフィアの警戒の色は一層と濃いものとなる。

「……貴方たちの姫君は丁重に扱っているので安心して構わない」

頑なに口を閉ざし続けるメイドの姿に肩を竦めた。

彼女の情感を刺激するために、聖剣を突き付け、不躡な態度を嘲り、神秘の一端を晒してみせた。

それにも関わらずグレイフィアと言葉の一つをも交わすことが叶わない。

芳しい反応を得られないことに焦れたラウルは、大人しく彼女の求めているであろう話題に切り替えるのだった。

「その言葉に偽りはありませんか？」

「さて、どうだろうな？ 仮にも敵対している者の言葉を鵜呑みにするのは如何な物かな、侵入者殿？」

グレイフィアが言葉を発したことにラウルは笑みを深めた。

「……あなたのような魔導師は厄介極まりない」

「妥当な評価だ。まさか、そこまで見切られるとは思わなかったがな」

目を細めたラウルは素直に感心の言葉を口にする。

神秘を覆い隠すことへ特化した魔術結社の術者相手に正体を見切った眼力を褒め称えたのだ。

何百年と人の身では至れぬ年月を重ねてきた女王の実力は伊達ではなかった。

不敵に笑む麗人は思わぬ収穫に心を踊らしていた。

「もつとも、その評価が虚であるか、真であるか……その身を以って味合うがいい」
手にする聖剣を打ち鳴らしたラウルは無音で地を蹴る。

足先に込めた力からしなやかな足腰を以って躯体を打ち出す。

力を伝えられた地面からは砂埃一つ経つことなく僅かな窪みが残るのみ。

ただ地を蹴り駆け出すことでさえ、洗練された一芸がそこにはあった。

されど、彼の芸は地を無音で蹴る事ではない。

静かな初動から生み出されるは烈風の如き飛翔。

無音の加速により空を裂き迫るラウルは魔術を以ってして地を滑る。

あらゆる物理法則を無視した超加速に並みの戦士では残像すら捉えることも敵わな
い。

音を超えて地を滑るように接近したラウルは容赦なく聖剣を振るった。

「速いッ!? これは魔導師の実力ではッ!?!」

一足で間合いに入り込んできたラウルを魔力で覆った手刀でグレイフィアは対処す
る。

弾丸の如き猛突を見せる麗人を見失うことはなかったが、自身を苦しめた漆黒の妖蛇
の存在が頭を過り、魔力での迎撃を躊躇していた。

目前に迫った脅威は躊躇を許すこともないため、手刀での迎撃を余儀なくさせられる

のであった

片や音の速度を乗せて聖なる波動を放つ長剣を下段から鋭く突き上げる。

片や身体を半身にして魔力を纏う手刀で迎え撃つ。

星明りに照らされる山林の奥地で聖と魔の波動がぶつかり合う。

余波で土壌は舞い散り、衝撃に煽られざわめく樹木が戦いの熾烈さを顕わにする。

閃光の交錯の果てで、聖剣を振るつたラウルは駆け抜け、受け流したグレイフィアの細腕からは血が滲み出していた。

「生憎、私は騎士でもあるのだよ」

最強の女王に手傷を負わせた魔道騎士の猛攻は一度に留まらない。

標的の背後で音速を維持したまま、魔術の対象を地から空を滑るように切り替える。

切り替えると同時に頭を中心として空を滑るようにして半宙返りを成し得る。

空に足を付き地面へ頭を向けた形でグレイフィアの背後を取ったことになる。

足捌きによる移動は刹那に行われ、未だ敵対する悪魔の体勢の整わない。

次なる攻撃に移っていることに気付かない銀髪の悪魔に対し、反転した世界で聖剣を振り下ろした。

「浅いか……っ！」

星空を舞う銀糸。

音の剣戟はまたしても空を切ることとなる。

直前で危機を察知したグレイフィアが身を投げ出して回避したこともあり、二撃目は頭上のカチューシャを切り捨てるに留まったのだ。

二度も剣戟を躲されたラウルは、趣向を変え上空から踊り掛かる。

自身の体重に加え、音速を維持する機動力を以つての一閃。

片膝を付く最強の女王へ、星の楔を乗せて聖剣を振り下ろした。

衝突する聖剣と魔力障壁。

咄嗟に張ったグレイフィアの障壁が、一太刀に込められた膨大な力を前に軋みを上げる。

片手で展開した障壁で必死に耐える彼女の足元を中心として放射状に地表が割れ、衝撃波が木々を薙ぎ倒す。

「どうした、グレイフィア・ルクィブス？ 嘗て、魔王ルシファーと伴にあつたルクィブス家の遺児はその程度か？」

罅割れた障壁へ聖なるオーラを強めた長剣を押し込む麗人。

魔力の補助を受けた臂力によって支えられる聖剣は、じわりじわりと障壁へその刀身を沈めてゆく。

「っ!? あなたは人の感情を逆撫でするのが好きなようですね」

障壁を解除したグレイフィアは振り下ろされた聖剣を紙一重で回避すると、ラウルの溝内を狙い蹴撃を放つ。

鋭い蹴撃に込められるは傍若無人な物言い、不祥の過去へ踏み入れたことに対する憤り。

侵してはならぬ領域に踏み入れた麗人への怒りが満ち溢れていた。

しかし、身を焦がす憤慨を以つてしても、大胆不敵な麗人に届くことはない。

蹴撃に対してラウルは左脚を軸とし、右脚を引いて半身となる。

半身になると同時に腕を引き戻し起こした刀身で蹴撃を受け流す。

怒りに任せて蹴撃を放ったグレイフィアは、剣の腹を滑らされ空足を踏むこととなる。

「ハッー」

涼しい顔で怒りの一撃を凌いだラウルは反撃に打って出る。

剣を構える右腕そのまま、左脚を上げて強く踏み出した。

地を穿つほどの強烈な震脚。

強靱な脚力に後押しされたラウルは魔力を乗せ疾雷の如き掌底を放った。

「——っ!!」

グレイフィアは胸間を貫く打突に苦悶の表情を浮かべる。

咄嗟に身体を後方に流すことを成功させたのは、最強の女王であることへの矜持ゆえか。

威力を軽減させたグレイフィアは、地面を離れ突き飛ばされゆく身体を強引に捻った。

関節の伸縮を以つて為される踵落とし。

右腕の防御を超えた一撃が強制的に意識を刈り取らんと頸部へ放たれる。

「惜しかったな。私に慢心の一つでもあれば、間違えなく今の一撃をもらっていたらうなっ！」

苦し紛れの蹴撃を察知したラウルは残心を取ることなく身を屈める。

頭上を通り過ぎるのを合図として、腰だめに聖剣を構え地を蹴った。

「それこそ慢心ではないのですかっ！」

追撃の体勢を取ったラウルを待ち受けるのは、苦痛に表情を歪める殲滅女王。

呼吸も儘ならない身体を引きずって魔方陣を展開する。

光彩放つルキフグスの紋章。

溢れ出す魔力は津波の如く怒濤の勢いで攻め寄せる。

「光よ、集いて闇を切り裂く刃と為せ」

ラウルは聖剣の刀身へ左手を鞘のように添える。

神秘に満ちた刀室は聖劍の力を引き出していた。

地を滑る麗人は更なる飛翔を以って肉薄する。

迷いない踏込みに合わせて、聖劍は左手を覆う靈気によって撃ち出される。

魔力の大波を前に威勢良く聖劍を引き抜いた。

閃ぎ合う聖と魔の波動。

魔力によつて練られた銀色の奔流は麗人を呑み込まんと迫る。

全てを切り裂かんとする聖劍は、神秘の後押しを受けその身の鋭刃を一層のこと輝かせる。

聖なる輝きを宿して——一閃。

振るう刃に切り裂かれた魔力は為す術なく霧散する。

間髪入れることなく振るう足刀。

魔を振り払った麗人は柔らかな身体を撓らせ神速の一撃を見舞う。

音速で放たれる蹴撃は命を刈り取るには十分な威力を宿していた。

命一つ散らすには十分な蹴撃であつたが、敢え無く防がれることとなる。

両腕を交差させた防御の体勢を前に必殺の一撃は形を無くしたのだ。

グレイフィアは衝撃を上手く受け流し、ラウルから距離を置くのであつた。

「漸く戦う気になつたか。魔力すら放つ素振りがなかつたのだな。正直、期待外れかと

思ったよ」

「あのような悪辣な畏を巡らせてぬけぬけと……どの口で物言うのですか」

「よく言われるのでな、気にもならない。取り敢えずはお生憎さま、とでも言っておこうか」

息詰まるような連撃を繰り返しても、ラウルは呼吸を乱すことなどない。

不敵な笑みを張り付けて嘲笑うのみ。

埃一つ付くことのない騎士団服が彼の余裕を顕わにしていた。

一方のグレイフィアは胸を打たれて息を乱し、汗が玉となり額に浮かぶ。

身に纏うメイド服の裾も聖剣によって引き裂かれて、すらりと伸びた美脚が垣間見える。

特に掌底によって穿たれた胸間からは、陶磁器のような白肌が月明かりに晒されていた。

「さて、戦闘再開といこう。先手はどうぞ、レディーファーストだ」

不遜な物言いに促されたグレイフィアは顔に鉄仮面を張り付けたまま接近した。

ラウルを中心に円を描くように接近し、魔力を散弾のようにばら撒き牽制を行う。

接近戦を得意とする剣士に近づくことは、間合いに近づくことと同義であり愚行に他ならない。

先の一合でラウルが凄腕の剣士であることは容易に想像が付いた。

理解していても、悪手を取らざる負えない理由がグレイフィアには存在した。

彼は剣士であると同時に魔導師であるのだ。

今は表立って使用する素振りを見せないが、戦いが長引けば未知の魔法や魔術を併用するだろう。

不意を突かれることはそのまま死に直結する。

得体の知れない魔道騎士を警戒する彼女が選んだのは中距離戦闘であった。

歴戦の勘に基づいて近づき過ぎず離れ過ぎず、聖剣と魔道の双方を警戒するのだつた。

「堅いがゆえに面白味もない。穴だらけの戦術だけにまだ可愛げがあると言えるかな」

ラウルは踊るが如き軽やかな歩調で魔力の散弾を躲し続ける。

思い起こすは同じく堅実的な戦法を好む黒髪の女性。

鋭い瞳を赫やかせる彼女は、訓練であっても容赦の欠片も見られない。

徹底して敷く抜け目のない包囲網は一種の芸術であった。

それに比べればグレイフィアの取る戦法は稚拙としか言う他なかった。

「だがな、ルキフグスよ。その程度の手でどうにかなると思っているのか？ ならば、私を侮り過ぎだ」

故にラウルは侮蔑の視線をぶつける。

歴戦の勇士の、嘗てルキフグスの遺児として旧魔王派に担ぎ上げられたグレイファイアの実力はこの程度かと。

嘆息を漏らす麗人は興味を失ったとばかりに仕留めに掛かる。

「それはあなたもではありませんか、八幡ラウルっ！」

しかしながら、グレイファイアは大規模な内戦を経験したこともある歴戦の勇士。

視線の先で影を失ったラウルを目で追うことは諦め、感覚を研ぎ澄まして気配を探る。

星の明かりが降り注ぐ山林に吹き抜ける風の音。

虫の音すらも響かないこの地で聞こえるのは、風に揺られる木々のざわめきのみであった。

気配もが消えたことを確認するとすぐさま対抗の術を編みだす。

手早に銀色の魔方陣を織り、魔力を練り上げる。

地面へ手を付いたグレイファイアは、変幻自在に動き回るラウルに対して術を発動させる。

「位相をずらして空間ごと私を打ち上げたか……こんな強引な手で位置を把握されるとはな」

術者の背後を取っていたラウルは、全方位に向けられた魔力の包囲網に引っ掛かることとなる。

展開された魔力によって浮遊感が襲い掛かる。

宙高く放り投げられた彼は嬉々とした表情を浮かべていた。

殺気を浴びたグレイフィアが晒した本当の実力。

本気でないにしろ、それが引き出せた実力であることには変わらない。

やはり、堅物は粘り強く煽ってみるものだと笑みを深めるのであった。

「——墜ちなさいっ!!」

気持ちを押ませるラウルは膨れ上がる魔の波動を察知する。

発源の中心で魔力を練り上げるのは銀髪の悪魔。

宙を踊る麗人に対して、星空を覆い隠すほどの爆撃が放たれる。

「流石は『殲滅女王』！一振りでは無礼かな」

ラウルは空を滑ることで大空を焼く魔力から逃れる。

口端を吊り上げて賞賛を述べた彼は、虚空より二振りの刀剣を新たに引き出す。

鞘に収められた細身の長剣と肉厚の長剣。

片方の聖剣は鞘に反りがあることから、刀もしくは片刃の長剣であることが想像が付く。

既に手にする鋭利な長剣と合わせて、右手と両腰の三カ所へ聖剣を携えるのであった。

「凌いで見せろよッ!!」

右手に携える長剣より聖なる光が満ち溢れ、左腰の鞘からは収まりきらないほどの霊気が漏れだす。

一度、戦闘域を離れるように大きく迂回したラウルは音速での滑空を為した。

滑空から魔術により更なる加速を受け、両手に携えた聖剣で再びグレイフィアへ肉薄する。

「くっ……」

音速を超えて右下段から迫る突き上げ。

左腰の鞘から射出された新たなる聖剣を逆手で抜き放つ斬り上げ。

刀剣の回転を利用し順手に持ち変える変則的な横薙ぎ。

肩口に担いだ聖剣による風を裂く強烈な一撃。

一瞬間に振るわれる熾烈な連撃にグレイフィアは堪らず地を蹴り後退する。

「それで引いたつもりか?」

されど、双手に聖剣を携えた騎士は獲物を逃がすことはない。

淡蒼の瞳は獐猛な色を宿し、獲物を捕らえんと追い縋る。

「調子に乗らないでくださいっ！」

追い立てられるグレイフィアは両手を突き出し魔方阵を展開する。方陣から発せられる魔力は空へ放ったものと同等の威力であった。

迸る閃光が目を焼き、耳を劈く轟音が大気を揺らす。

至近距離にて放たれた圧倒的な暴力は避けることすら許さない。

「光よ、我が身を覆う盾と為れ」

押し寄せる魔力を前に足を止めたラウルは、長剣の腹を向けて守りの体勢に入る。聖剣を前に押し出し紡ぐは守護の術。

刀身を中心として半球状に広がる光の膜は聖なる波動を以って魔除けの術となる。

ラウルは光の盾で自身を覆い隠すことなく、敢えて術を反転して展開する。

半球状の聖盾と地上を蹂躪する魔力の激突。

仕手の意思を宿した波動は雌雄を決するべく闘ぎ合う。

相克する聖と魔の威光は辺りの衝撃を振り撒いて打ち消し合った。

一方で帆のように広がった光の膜は、その相殺の余波を揚力として受けることとなる。

護り手の身体は後ろへ——そして、高く舞い上がる。

奇抜な手法で安全域に脱した彼は魔力の供給を止めるのであった。

「ほう、結界諸共薙ぎ払う気か」

空を踏み宙へ留まったラウルは、土煙の中で再び膨れ上がる魔の波動に目を細めた。視界の外で際限なく高まり続ける魔力。

最強の名を争ったに相応しい能才をグレイフィアは顕わにした。

殲滅女王が練り上げる過剰な魔力からは、展開する結界を破壊する意図が容易に見て取れた。

「残念だが貴方の思惑に乗るわけにはいかないな」

結界を力技で破られることは芳しくなかった。

展開している戦闘フィールドを壊されれば、素地たる山林が剥き出しになる。

今のような過激な戦闘を続けた後では、荒れ地となってしまうだろう。

また、結界が破壊されることよって生じる魔力の逆流も忘れてはならない。

好敵手を前に無様な姿を晒すことは、敗北に繋がる醜態に他ならなかった。

術式破壊の反動を防げるとしても、戦後の手間も考えればこの地に留めて置かなければならない。

防ぐにしろ、打ち消すにしろ、目の前で振るわれる暴力に対策を講じることは必須であつたのだ。

故にラウルは左手に携える刀刃を鞘へと静かに納めた。

「我が手に栄光を——」

そして、天に掲げるは光纏う聖なる剣。

強大な魔を祓わんと両手で確固たる意思を宿してと柄を握る。
迫りくる魔力の奔流を見据え解放の一節を紡いだ。

紡がれるは刀剣に刻まれし真名——

不敗を謳い光り輝く剣。

あまねく人々の希望を集きその貌を為す。

炬火の輝きを以って、大いなる魔を焼き祓う。

——勝利を齎す御剣へ封じた神秘を曝け出す。

氷刃は辺りを眩ます輝きを放ち、練り上げた膨大な魔力は掲げた一振りの聖剣に集約する。

「——光り輝け『光クレイヴ・ソリツシユの剣』」

白光に染まる世界。

闇夜を裂く閃光はあらゆる魔を焼き尽くす。

うねりを打ち雪崩込む魔力然り、暗影へ伏していた魔術然り。

太陽の化身と呼ばれる一振りは贗作の刀剣であろうとも、身に宿す威光を劣らすことはない。

眩い炬火の輝きが鎮まり、光華に包まれた聖剣が真の姿を現す。

魔術の楔より解き放たれた御剣は神々しく光り輝く。

言霊によつて黙示された神秘からは天を貫く光が立ち昇る。

それは嘗て欧州に馳せた神話の一節——伝承として語らわれた御剣の現身であった。

銀髪を靡かせる麗人は、天高く昇る光の奔流を刃と変え、衰退した魔力の波動に向け聖剣を払う。

「押し切れないか……ならば、もう一太刀振るわせて頂こう」

拮抗する聖魔にラウルは目を細めた。

聖剣より射出した光刃を以つてしても、魔を討ち祓うには至らない。

秘剣が強大であろうとも、続けざまに押し寄せる怒濤の魔力を打ち破るには事欠いた。

不足している一手を補うべく、ラウルは腰に携える鞆に手を掛けた。

その銘もまた——グレイヴ・ソリッシュ光の刀。

光輝く双手の聖剣は等しい銘を受けた業物。

形状は違えど、打ち手は変わらず、込められた神秘もまた同様の刀剣であった。真名を解放した同工異曲の聖剣を携えラウルは飛刃の光芒を追う。

「疾っ——！」

鯉口から噴き出した靈気が暁露と為りて刃を濡らす。

鞘から抜き放たれ外気に曝される白刃は、神秘の雫を纏いて煌々と灼熱の輝きを宿した。

莊嚴の輝きを放つ刃を神速の居合抜きを以つて、聖と魔の臨界へと重ねる。

境界を滑る刃は拮抗する魔を易々と斬り裂いてゆく。

閃光に焼かれ、光刃に撃ち碎かれ、白刃に断ち切られた魔力の奔流は結束を失い霧散した。

魔を討ち破り好敵手の下へ突き進む巨大な光の刃を隠れ蓑にする麗人。

振るった勢いのまま刀を虚空へと仕舞った彼は、左手に携えていた長剣を投擲する。死を齎す灼熱の槍の如く。

投擲された聖剣は稲妻と為りて先陣を駆ける光刃に続く。

両手の聖剣を放り投げ、空手となったラウルは右腰に携えていた最後の聖剣を引き抜く。

鞘から姿を現すは陽光放つ武骨な長剣。

剣先を除き肉厚な刀身からは刃を廃し、剣としては特殊な構造をしている。

重厚な造りをする持ち手に加えて、確かな重量を有したそれは剣の形をした鈍器とも言える。

必要に応じて魔力による刃を構成できることから、造形の深さを感じさせる一振りであつた。

鞘から抜かれることで重量の増した長剣を両手で支えるラウルは宙で身を翻す。

慣性に引かれる身体は、軸足を起点にして回転する。

身体全体を使った斬り付けは重らかな風切り音を伴う一撃となる。

空を滑り光刃の影から肉薄を図るラウルは豪剣を十全に振るつた。

光焰迸る戦場で銀影の繰り出す三段構えの剣戟が女王の首級を挙げんと殺到する。

「荒れ狂う魔力の中を突き破るとは……正気なのですか？」

三度の激突——。

魔を焼き尽くす光刃は軽やかな身の熟しを前に避けられる。

投擲された聖剣は魔力を纏う手刀に往なされ、敢え無く地表を貫くのであつた。

そして、残されたのは本命の斬撃のみ。

暗林に響き渡つた鈍い金音がその結果を物語る。

豪剣による渾身の一撃は魔力障壁を打ち砕くに留まったのだった。

「それはお互い様だろ？ 高々、ナイフ如きに受け止められるのだから洒落にならない。贋作の一振りとは言えども、下手な聖剣を上回る代物だぞ。刀剣の打ち手としては、涙ものの光景に他ならないな」

ラウルの剣を防いだのは美麗な装飾の施された短剣であった。

取り手に家紋が刻んである短剣は芸術品とも言える刀剣であった。

さぞかし、名の付いた一振りであったのだろう。

それも今や昔、豪剣を受け止めた結果、大きな罅が入り刀身は折れ曲がってしまった。いた。

短剣の破損状況を見たグレイフィアの表情が険しいのは致し方がないことだった。

ただ、場違いな芸術品に渾身の一振りを受け止められたラウルとしては認め難い光景であった。

時間を費やし己の手腕で打ち上げた真贋の一振り。

敢えて両手の聖剣を捨てることで、デットウエイトと為りかねない豪剣を選び振るつたのだ。

飾り物のような短剣に防がれたのでは割が合わなかった。

想定外の事態に面喰らう彼であったが、身体は平然として次の手に打って出る。

臂力と劍の重量に物言わせて、展開した光の刃を強引に押し込んでゆく。

同時に脚を差し入れ、腕を取ることで逃げられないように拘束した。

「聖劍を受け止めたのは見事だったが、光刃を避けたのは間違えであったな、光を避ける者」

「なに、をつ!?!」

鏢ぜり合うラウルが瞳を向けるのは闇を裂く光芒。

魔を滅する光の刃は躲されて尚も、獵犬の如く追いついていたのだ。

迂曲の末に背後を取った獵犬は、確実に獲物を捕らえんと無数の刃へ分散して牙を剥く。

背後から迫る脅威にグレイフィアも勘付いたが逃げることでできなかった。

絡みつく蛇の束縛が退くことを許さない。

腕を脚を組まれて動くことの出来ない哀れな悪魔を鋭い光が裁きを下す。

「さくらばだ、最強の女王。油断大敵であったな」

毒たる光を浴びて体勢を崩したグレイフィアへ痛烈な膝蹴りを見舞う。

鋭く突き出された膝口は鳩尾を射抜き、華奢な身体を突き放す。

嗚咽を漏らす悪魔へ向けて、蹴り上げた足を振り下ろし鋭い踏み込みと為したラウル

は、煌々と神々しい輝きを放つ豪劍を掲げた。

色の抜けた眼差しは不条理な終焉を告げる。

音に聞こえた悪魔を滅さんと銀閃は孤を描き、慈悲無きが一撃が下された。

「やられる訳には……いきませんっ！」

振り下ろされる凶刃を前にしてグレイフィアの戦意は衰えることはなかった。

光に侵され儘為らない身体を動かし、闘志を燃やす瞳が映す先へと手を翳す。

虚空に浮かぶ魔方阵から奔る一筋の光芒。

横合いから放たれる銀の魔力が振り下ろされる豪剣を捉えた。

「っ!？」

魔弾に剣の腹を打たれ、斬撃は脚を浅く斬り裂くことに留まる。

必殺の一撃を躲されたラウルの顔は驚愕と焦燥に彩られた。

振り下ろした豪剣は引き戻すことが叶わず、剣を振るつた躯体も自重に引かれ満足に

動くことはできない。

死に体を晒すラウルの身体へ血に濡れた腕が差し込まれる。

「お嬢様の……リアスの我が儘に此処まで手を尽くしてくれる人材を失うのは余りにも

口惜しい———どうか、負けを認めてください」

己の不甲斐なさを噛み締め、最悪の展開を覚悟したラウルに掛けられたのは、余りにも優しい声音であった。

降伏を強要するのではなく、追い詰めた敵を討ち果たすでもない。凌ぎを削った戦場には不釣り合いな言葉だった。

されど、その言葉は彼女の本心からくるものであった。

紅の姫の恣意を押し通すために振るった力を今後とも役立ててほしい。

行く行くは未熟な姫君を支える一人となってもらいたいと。

打算はあるだろうが、凜とした面持ちの中で揺れる瞳が全てを物語っている。

女悪魔の甘さに触れたラウルは、胸内に溜まった毒気を静かに吐き出した。

「リアスのために……か……」

柔らかな表情を浮かべたラウルの身体は霧が晴れるが如く亡失する。

「姿が消えた？ やはり、彼は……」

断りもなく姿を暗ました麗人の影を見て、グレイフィアは眉を寄せた。

下肢を滴る鮮血は間違えなく直前に負った切創から溢れるもの。

彼の振り下ろした聖剣によって創られた傷痕であった。

ならば、何時の間に幻術の虚影と入れ替わったのだろうか。

確実に判ることは、未だ泥沼で喘ぐような戦いは終わりを迎えていないということであつた。

あつた。

気を張り巡らせて奇襲を警戒する彼女の背後から乾いた音が鳴り響く。

「まさかまさか、あそこから引つ繰り返されるとは露程も思わなかつたぞ。窮鼠猫を噛む——いや、窮羊鴉を落とすと言ったところかな」

己の存在を主張にするが如く軽やかに手を打つ麗人は、不敵な笑みを浮かべて堂々と姿を現した。

「今まで戦っていたのは分体……とでも言うのでしょうか？」

「過剰な期待に応えれず残念だが、途中までは私自身と剣を交えていたのだよ。復ドツベルゲンガ体

を用意するのも構わないが、あれは手間が掛かる。その上、私の一分たりとも力が出せないのだから、手に負えたものではないな」

方陣を展開したラウルは自らの虚構を作り出す。

月明かりに照らされて艶やかな輝きを宿すのは、腰まで伸ばされた銀色の御髪。

知性的な容貌でありながら、挑発的な表情を浮かべる姿は正に彼の現身。

色めかしい肢体を黒地の騎士服で包んだ鏡映しの幻影を築いたのであった。

「故に幻術を行使させてもらったのだよ」

『手間を掛け造り出した復体に比べれば応用力は劣るが、片手間で展開が可能なこともあり汎用性が高い』

「後は術者の力量次第でどうともなるからな」

片目を瞑り指を立てるラウルに、形作られた影は宛然たる声音で後に続いた。

曰く、一合の会間に織り成した幻影と入れ替わったのだと。

曰く、グレイフィアが競り勝つことができたのは、麗人の織り成した虚構であつたと。瓜二つの彼らは一糸乱れることなく真実を紡いでゆく。

貪欲に栄冠を勝ち得るため行動を起こした悪魔を欺いたのは、単なる幻術に過ぎなかつたのだ。

「途中までと仰いましたが、貴方に手傷を負わされたのは確か。術を行使する暇などなかつたはずです」

惑わされていたと知らされたグレイフィアは魔性の美貌に深い皺を作り上げる。

「幻術程度と侮られるのは遺憾だな」

『真なる幻とは偽り無きもの。その性質は個々が抱いた感応でしか測れはしない』

「相対的な価値で測られても困るぞ。矛を交えているのは、私たち自身なのだからな」

鋼鉄の瞳に射止められたラウルは首を振って見せた。

幻術とはその名の通り、他者を惑わせる術である。

仕手の意図が伝わってしまつては意味を成さない。

例え、魔を司るものが相手であろう効力が衰えてはいけない。

単なる幻だからこそ、扱いは難しく生み起こされる泡沫の事象は奥深いのであつた。

そして、折り重なつた虚実は曲解の果てに真実として成り立つこととなる。

極致に辿り着いた者によって紡がれる虚は世界すらも欺いて見せるのだ。

見識を超えて織り成された仮初の剣が、浮き世の因果を断ち切ることすら起こりうるのであった。

「まあ、彼のルキフグスと魔道を競える機会など片手で数えくらいのもものだろ？ こちらの都合上、剣術が主体になってしまったが、私としては満足だ。初見で正確に対処するような敵と戦えたのだ、非常に有意義であったよ」

秘術によつて現し世に舞い降りた真影は泡雪の如く溶けて消えゆく。

会心の笑みを浮かべたラウルが手を振る。己の影を構築していた幻術を解いたのだった。

「長々と無駄話をしていた所為で、終焉の足音が近づいてきたようだ。そろそろ終幕といこう」
ファイナル

腰に差した二振りの聖剣を鞘から抜き、臨戦体制へと移行する。

「聞いてもいないようなことを次々と口に出していたのは、このためですか……」

「見縊らないでもらいたい。この聖剣の打ち手は私だぞ。ならば、一振りでも千の刃を生みだすことなど造作もあるまい」

臨戦態勢に入った魔導師を見咎めるグレイフィアの瞳に映るのは眩まんほどの造形の数々。

無数の魔方陣が夜空を蹂躪し、聖なる光を宿した星々は禍々しい煌めきを放つ。

「さあ、踊り狂え！ 光彩奏でる金剛の狂想曲で!!」
アダマント・ラフンディ

鬨の声によって動き出す戦場。

夜天より降り注ぐ星雨が満身創痍の悪魔へと殺到する。

「数が多い……このままでは——」

「捕らわれてしまうか？ 当然であろう。魔導師の工房を断りもなく侵犯したのだ、端から結果など見えていただろう」

逃げ惑うグレイフィアを追い詰めるのは光の暴威だけではなかった。

荒れ狂う魔力を引き寄せ吸収する漆黒の靄。

グレイフィアが放った魔力が妖蛇へと生み変えられ、逃げるために行った行為が彼女の首を絞めてゆく。

そして、攻勢を強めたラウルも、最強の女王が破れる瞬間をただ指を咥えて待つてはいない。

真名を解放した聖剣を双手に携えての音速移動。

眩い光の中を音速で空を滑る姿は、まるで転移を繰り返しているかのように思えるだろう。

擬似転移を繰り返す彼は狂ったようであり、その実洗礼された優美な剣を振るう。

愚かな鼠を追い立てるように絶え間なく光刃を放ち、時に鋭く踏み込み首級を付け狙う。

「——ッ!!」

身に奔る苦痛にグレイフィアは顔を歪ませた。

白肌に刻まれた血線から光という名の毒が入り込み、徐々に体の動きは鈍くなる。

迎撃のために魔力を放つものなら、妖蛇を生みだす靄が立ち塞がる。

無数の光と闇が織り成す奇想の調べは確実に逃げ場を奪っていった。

「しかしだ。私も随分と楽しませて頂いた。此処は一つ貴方の奮闘を称えて御礼を送ろう——受け取れ」

眩い光に当てられ蠢く影法師から放たれる鎖状の黒金。

ニヒルに笑んだ麗人が興宴を盛り上げた演者へ更なる追い打ちを繰り出す。

「鎖ッ!? あなたはまだこんなものをつ!」

グレイフィアは影より延びる鎖によって引かれる身体を咄嗟の判断で捻り体勢を直す、脚に絡みついた呪縛によって膝を深く折る。

ラウルが繰り出した黒鎖に込められていたのは、負荷を倍加する白魔の毒。

捕らわれた罪人は星の楔に縛られ、満足に力を振るうことすら叶わない。

足掻けば足掻くほどに力を失い、やがては死に至る。

大軍勢を苦しめた凍土の将星の如き凶悪な魔装具であった。

「当然だ。聖剣も幻術も魔装具も、力の一つでしかないのだから、な！」

うねりを打つ黒鎖は一本、また一本と次々と悪魔の姿態を彩り堅牢な枷となる。

星明りを背にする狩人は不恰好に逃げ回る獲物の足をも殺しに掛かっていた。

「お嬢様を連れ戻す……それまでは……っ！」

銀髪の悪魔が抱く不屈の意志を反映する魔の波動。

対するグレイフィアも魔力を解放して、麗人の束縛から逃れようとした。

「……残念ながら、それは悪手だな」

烈風に浚われる銀髪を抑えるラウルは、冷めた眼を爆心地へ向けていた。

溢れんほどの魔力を下に起こった爆発は鎖を千切るが、凶悪な魔装具の前では徒労に

終わる。

毀れた円環は瞬く間に再生し新たな連環を築く。

却つて数を増やした黒鎖がグレイフィアを雁字搦めに縛りあげた。

「私が扱うものが一筋縄なわけがあるまい。精々、重科の海で足掻き苦しみ続けるとい

い」

最強の女王へ手向けた魔装具は破壊を前提として成り立っているもの。

数多ある選択肢の中から麗人が選び抜いた拘束具なのだ。

標的とされた彼女が魔道の呪縛から逃れる術などありはしなかった。

「つ……………くつ……………つ……………アアアアッ!!」

連環という名の蜘蛛の糸に囚われ負の連鎖に陥る姿は滑稽極まりない。

必死にもがき苦しむ様子にかつての威勢はなく哀れみすら誘う。

「……………せめてもの情けだ——安らかに眠れ」

自身の掌で踊るグレイフィアへの手向けとばかりに止めの一撃を見舞う。

差し向けられたのは霊肉を貪らんと地を這い犇めき合う妖蛇の一団。

我先にと欲望のまま群がる姿は身の毛をよだたせる。

世紀末を思い起こさせる蛇の行軍はおぞましいの一言に尽きた。

「サーゼクス……………旦那さま……………申し訳、ありません——」

最強の女王も凄まじい勢いで押し寄せる墨黒の大波に一溜りもなかった。

妖蛇の築く人型の蜷局。

威光を背負った悪魔の姿は群がる蛇身の影に埋没してゆくのであった。

「呆気ないものだ。殲滅女王と言えども、退魔霊装の前では形無しか……………」

期待を裏切る面白味のない幕切れにラウルは深く息を吐く。

「相変わらず、御先祖様の創った魔装具は恐ろしいの一言に尽きるな—————そう

は思わないか、マリナ？」

横たわる大樹に腰を下ろした彼は同意を求めるかのように背後に広がる暗闇へ言葉を投げ掛けた。

【黄金の息吹よ、栄光の道標と為れ】

薄らとした唇から紡がれた魔の旋律。

木の葉を巻き上げ、金色の旋風が一带に吹き荒れる。

吹き抜けた黄金の風はグレイフィアを取り巻く妖蛇たちを蹴散らす。

「全く貴男は困った人です。彼女とは交渉をするのではなかったのですか？」

魔術を紡いだ抑揚のない冷徹な声音が耳を打つ。

暗がりでは赫々と光を放つ赤目は、不用意な麗人の行動を見咎めるのであった。

七話 宵の煌き

「む……うむ。少しばかり興が過ぎたか……」

春先の肌寒い冷気が纏わり付く園庭の一角。

満開に花開く青薔薇の花冠を前に銀髪の麗人は力無く頭をもたげた。

昨夜の騒動から一夜明けて、日課のために訪れた薔薇の園は様変わりしていた。

あちらこちらで蕾は顔を出し、鮮やかに彩られた垣根が彼を出迎える。

しかしながら、好き放題に咲き誇る花々は庭園の主を満足させることはない。

「全く……この様ではルチアのことを悪くは言えないな」

庭園に起こった異変の原因は言わずと知れた昨夜の戦い。

殲滅女王に龍王様と大物たち二人に加えて、腹心である名家の魔術師まで。

強敵を相手取った三連戦が原因で間違えないだろう。

異空間に強固な結界を展開して、被害を押し留めようとしたラウルであったが力及ば

ず。

戦いの爪痕は地脈に少なくない影響を与えたのであった。

蚊帳の外であったはずの庭園の草花も地脈に生じた微弱な揺らぎを捉えてしまう。

この地を流れる霊脈からほどよい刺激を受け取った蕾は急激な開花を迎える。
結果として、不恰大な大輪が咲き乱れたという訳だ。

「私もまだまだだということかな。目先の益に心奪われ、周囲の警戒を怠ってしまふとは、な？」

両手でそつと花形の崩れた一輪を摘み取るラウルは、気配を殺して背後に立つ人物へ背中越しに声を掛ける。

「貴方もそう思わないか——
グレイファイア・ルキフグス
麗しき魔王夫人？」

差し込む朝日が精悍な輪郭を映し出し、結び髪は硬質の輝きを放つ。

庭園の手入れに励むラウルの背後へ悠然と佇んでいたのは、死闘の末に討ち果たした筈の女王であつた。

* * *

時は昨夜の一戦まで遡る。

最強の女王を打ち倒した銀髪の麗人。

先の戦いの被害を受けた樹の幹に腰を据えるラウルは、後を追ってきたマリナと向き合っていた。

「交渉もなにも、こゝう熱り立てられては出来まい。茹で上がった頭を冷やす必要があったのでな。一度、果ててもらった次第だよ」

赫々とした瞳で見下ろす参謀の厳しい言及に、ラウルは落胆した様子で肩を竦める。背後を取り交渉の場を設けようとした彼の手を振り払ったのは間違えなくグレイフィアの意思によるもの。

許可もなく私有地を荒らした不屈き者に対して、降伏勧告があつただけでも真面な対応であつた筈だ。

「そうですか……」

事の詳細を伝えたが芳しい反応が得られることはない。

迎撃に出た際の対応が彼女の眼鏡に適っていなかったであろう。

厳しく、ひたすら厳しいマリナの裁定にラウルは苦笑を漏らした。

「異論は多々あるだろうが、私の選んだ最善の策には違いな——っ!」

——空が落ちる。

言葉数の少ないマリナの様子を不審に思い顔を上げた先。

宙を仰いだラウルの視界を埋め尽くしたのは黄金の輝きであつた。

砂状の黄金を惜しげもなく用いて日輪の威光を宿した不滅の権現が渦巻く。

頬を引き攣らせ、息を呑む彼を厳格な裁定者は静観することはない。

逃げる間もなく腰を掛ける倒木諸共、大気を劈く金色の奔流が呑み込んだ。

「言いたいことはそれだけですか？」

光が収まり再び静けさを取り戻した山林に響く声音。

煮え滾らんほどの憤りを孕む寒声が大気を震わせた。

「待て！ 一仕事を終えた私に、この扱いはあんまりではないか!」

黄金の鉄槌の直撃を受けて蹲る麗人は、侵入者を撃退した功労者への手打ちに声を上げた。

「敵対していたとは言え、手酷く甚振った上に婦女子の衣服を奪い去る……挙句の果てには無防備な姿を視辱するような烙印者には当然の報いです!!」

軽蔑の眼差しを向けるマリナは抗議の声を容赦なく断ち切る。

過程がどうであれ侵入者の迎撃へ向かったラウルの目の前には、一糸纏うことなき女王の姿態が横たわっているのだ。

一人の女性として、下劣な仕打ちを誇る悪漢へ掛ける情けなどありはしなかった。

「バ、誤解もいいところだ！ 私とて無意味に非道の行いをしたかったわけではない!」
髪を靡かせその場を飛び退いたラウルは、追撃として放たれた金色の風鞭を躲す。

徳義に背いたと自覚のある彼とて、弁解の余地もなく無抵抗のまま屈する訳にはいかなかった。

「ええい、この薄らトンカチが！ 武器も魔力も衣服さえも剥ぎ取り、徹底して抗うの手段を奪うのが戦場での常套だろ！」

言葉では埒が明かないと判断したラウルは実力行使に出た。

方陣もなく紡がれる不可視の魔術。

即興で織り成した風を操り、吹き荒れる黄金の風を迎撃する。

「それでも節度というものは存在します。貴男はその判断が甘い」

マリナの袖口から零れ落ちる砂金を浚い黄金の風は密度を増す。

逆巻く金色の旋風は彼女の胸内に灯る静かな怒りを具現しているかのようにであった。

「この分からずらめっ！ だから、遊び心も分からない堅物と揶揄されるのだ」

「大人しく平伏しなさい。ラウルの癖に生意気です」

「……話し合おうか。どうやら、貴方の偏見を正す必要がありそうだ」

空の覇権を巡る魔の風と黄金の息吹。

荒々しく波打つ気流は光華を喰らわんと獰猛な唸りを上げる。

眩ますほどの光彩を放つ大気は、砂金を核として造形を築く。

逆風を余ることなく呑み込み、お互いの領域を侵食し合い、両者の手繰る濃密な猛威

は劈くほどの風音を刻み鎬を削る。

「あくまでも私の行動を認めないと言うのだな？」

「ええ。今日こそは貴男の常識違いな行動に釘を刺させて頂きます」
「そうか……………ならばっ！」

停滞する戦況を崩すべくラウルは打って出る。

周囲の空気を制御して莫大な風量を持つ乱気流を練り上げる。

理不尽に虐げられた鬱憤が込められた風撃は、圧縮によつて生じた爆炎を伴い放たれる。

「私の激情を受け取れ、マリナツ!!」

炎熱が吹き荒れ、暗林を紅蓮に染める中。

大地を削る不可視の烈風が金色の城を突き崩し、結束を失つた砂金が闇夜を彩つた。

「その程度の想いでは私に届きませんよ」

城を崩されようとも黄金は不滅——。

使い手が念じることで周囲の大気を取り込み、再び息吹を上げる。

再構成された金色の風は、術者の剣となり盾としていつまでも輝き続ける。

「身持ちが堅いな。魔王^{ルキフツス}夫人の方がまだ可愛げがあつたぞ?」

「まさか。私に可憐さを求めるのですか、貴男は?」

争いの発端となつた悪魔の女性を引き合いに出しての最大の皮肉。

その返答として向けられた嘲りにラウルは顔を顰めた。

「……気の迷いだ。愛嬌の一つも振り撒けない貴方に期待すべきではなかったな」

嘆息を漏らす彼の周りに降り積もった砂金が静かに蠢く。

大地を這う砂金は壤土を糧にして草花の造形を築き上げる。

砂金を核として次々と息吹を受けてゆく若芽。

天然の土壌を養分とする黄金の侵食は凄まじく。

瞬く間に暗林の一面は蕾を付けた造花に埋め尽くされた。

そして、芽吹いた蕾は仕手の意図を汲み取るが如く峻烈な色付きを見せる。

蕾は花開き、大地の結晶たる花卉は鋭利な切り刃となる。

矢継ぎ早に大輪を咲かす造花は数え切れることは叶わない。

鋭利な花卉を広げて茨の檻を形成し、金色の刃が毒を吐いた麗人へと牙を剥いた。

「許せ、今のは失言だった」

咲き乱れる日輪の造花に、ラウルは気流を操り風の衣を纏うことで対処する。

周囲を巡る気体を取り込み外部へ、自らの支配する領域を押し広げることで、迫りく

る黄金の脅威を難なく防いで見せた。

「謝罪の言葉は結構です。貴男に土の味を知って頂ければ満足ですので」

「それは断らせてもらおうか……私は負けることが許されないのでな！」

散っては築き、築いては打ち壊される黄金の煌めき。

星空の下で織り成される魔術の協演は、罵り合いこそなければ見惚れるほどに幻想的であつた。

* * *

「あはは……ラウとマリーがやり合つてる」

先行した魔術師に追いついた少女たちは舞い散る黄金の華に目を奪われる。

されど、彼らが争つてゐるとは夢にも思うことはなく。

蒼銀の御髪を垂れる少女は乾いた笑い声を上げ、目を見開く悪魔の令嬢は状況が分からず混乱の窮みにいた。

「……止めなくて、いいの?」

「まあ、いつものことだからね。余計な手を出して大火傷を負いたくないのが本音かな」
呆然と紡がれたリアスの言葉にルチアは首を振つた。

彼らの争いごとに下手な手出しは無用。

魔術を行使している間に割つて入るなど、火を見るよりも明らかであつた

「それよりもクレイファさん……だっけ? 温かな季節になつてきたとはいえ、夜風に

晒し続けるのはよくないと思うんだ」

魔術を盛大に用いて私闘を繰り広げる彼らから目を逸らしたルチアは、戦場の端で無防備に身を晒す悪魔の女性へと視線を移す。

「——っ！ グレイファイアっ!?!」

「あ……グレイファイアだったんだ」

ルチアの指摘によって、自身を迎えにきた使用人が地に伏せていることに気付かされたりアス。

打ち捨てられた惨状を視界に収めた彼女は血相を変えてグレイファイアに駆け寄った。

「ラウもむごたらしことをするよね。もつと手際よく動きを封じることぐらいできるのに」

全身から流れ出る血潮によって変色した土壤。

青白く色を失った肌に刻まれる無数の傷痕。

腹部や腕部には打撲痕と思われる青痣も見受けられた。

無残にも打ち捨てられた姿を見れば同情の一つも抱きたくなるのが人情だ。

その対象が幽居に押し入った侵入者だとしても然り。

ただ、ラウルの内情を知っているが故に、彼の意思を無下にする訳にもいかない。

分厚い心の壁を一つでも超えれば、必要以上に親身となるお人好しのことだ。

侵入者の撃退という大義以上に、紅髪の姫君の願いを聞き届けようと行動を起こした

ことも窺えた。

また、ルチアの考えが及ぶところではないが、政治的要素もあつたことが否めない。故郷を管理下に置く悪魔たちに対する牽制と巢食うことを決めた魔術師の存在誇示。冥界最強の女王を手酷く打ち倒したことで達成されたと考えるべきだろう。

彼女が一番納得がいく理由としては、ただ単に手合せをして見たかつたのでは、と邪推もしていたりもするのだが。

そんな複雑に絡まった事情を鑑みて額を抑える少女の呟きは、鬨ぎ合う大氣の悲鳴に掻き消されるのだった。

「グレイフィア……こんなにもなって、あなたは……」

打ち捨てられた女王の下へ辿り着いたリアスは、目尻に涙を溜めて後悔の念を滲ませた。

「リアスさん、良かったらこれを使って」

「ええ……ありがとう」

壊れ物を扱うかのように大切に抱いて肩を震わせる悪魔令嬢に、ルチアは女性の身体を隠すようにと虚空から取り出したシーツを手渡した。

「ねえ……ルチアさん。グレイフィアをこんなにしたのは、やっぱりラウルよね……」

「そう、だね。この容赦ないやり方は間違えなくラウの仕業だね」

まるで甚振るかのように四肢へ重点的に刻まれた切創。

その傷痕に魔術を掛けて治療をしていくルチアは麗人の仕業であると断定する。

「グレイフィアさんを傷物にしたのはラウだけど……できればラウのこと怒らないであげてほしいかな？」

最強の名を貶めんとばかりに行われた暴拳の爪痕。

しかし、グレイフィアへの報復は必要悪とも言えた。

元々、ラウルが迎撃に出る羽目となったのは彼女の不当な行いが原因だ。

暴拳には暴拳を――。

所詮、ラウルの行動は血を血で洗う、従来の掟に沿っただけなのだ。

もしも、グレイフィアが幽居の玄関口たる別邸へ菓子折りを携えて現れたのなら、それ相応の対応で迎えていたであろう。

「なんでよっ!!? グレイフィアを傷付けないでって、私はちゃんと言ったのにつ!!」

リアスは納得することなく理不尽な主張を押し通すが、ラウルもルチアも誰一人として傷付けないことに同意した覚えはない。

妥協案としてグレイフィアを生かすことを認め、機会があればリアスに交渉の機会を設けると取り付けただけに過ぎない。

最悪の展開としては、妥協自体を白紙に戻して殺めることも麗人の頭の中にはあつた

はずだ。

擦れ違いの経緯があろうとも、ルチアは身勝手な糾弾を正面から受け止め、必至に喚き声を上げる少女へ油を注ぐような真似をしなかった。

「傷付けないのは無理があつたと思うよ。グレイフィアさんは力尽くでリアスさんを取り戻しにきたんでしょ？」

「でもっ!!」

「グレイフィアさんの实力は、身内であるリアスさんがよく知っているんじゃないのかな？」

殲滅女王は冥界最強と謳われる女悪魔。

例え、百芸に通じた麗人であろうとも、力を振るう彼女を無傷で捕らえることなど不可能に近いだろう。

ルチアの知り得る噂と冥界トリカの中で見聞したりアスが築き上げた理想像。

認識の差異を利用して事実を摩り替え、覆しようのない正論を掲げることで、昂った感情を真つ向から静めに掛かったのだ。

感情的に言葉をぶつけるルチアだからこそ、抑えが利かない時に正論を向けられる弱さを理解していた。

「ラウも頑張ったんだと思うよ。あんまり大きな傷も見られないし」

リアスが俯いたことを確認したルチアは、治療中のグレイフィアへと視線を向ける。血を血で洗う血戦を行ったにしては致命的な傷は見受けられない。

太腿を真つ赤に染める血糊が気になるところだが、ルチアが治療を始めた時には既に傷痕は存在していなかった。

致命傷が見当たらない以上、渦中の麗人が成したのは最小限の損害での対象の生け捕りである。

殲滅女王相手に見事な戦果であると手放しに賞賛すべきものがあつた。

「傷付いた女の子を放つて置くのは減点だけどね」

ただし、小さな切り傷とは言え、それが全身に刻まれているのなら話は別である。

悪魔にとって毒である聖剣によって作られた傷口は、強靱な生命力を以つてしても容易に閉じるものではない。

即急に治療を行わなければ死に至る可能性も否定できなかったのだ。

「リアスさん……ラウの口癖を知ってる？」

「……分かんないわよ」

一通りの治療を終えたルチアは、俯いたまま肩を震わせるリアスへ問い掛ける。

『力が足りない』って……あれだけ色々できるのに力がないって、嘆いているんだよ」

財力、影響力に政治力――。

非力な麗人が切望する力とは何も武力だけではない。

心血を注ぎ打ち上げた剣を売り払い、巨万の富を築けども積年の長には届かず。どれだけ武芸を究め、術を巧みに操ろうとも、未熟者だと蔑ろにされるばかり。

身に余る悲劇を乗り越え、天の名を冠せども所詮は飾りでしかなかった。

加えて、ラウルの権力はほとんどが結社の中でしか拘束力がないもの。

秘匿性の高い組織故に外部への抑制はほぼ皆無であった。

自身の願望に手が届かぬ故に、麗人はその身を焦がし続ける。

望むだけの力があれば、先日の騒動も未然に防げたであろう。

今回の惨劇も悪魔たちを抑えるだけ力があれば起こり得なかつた筈だ。

「この国では若い内の苦勞は買えつて言うらしいけど、ラウが背負うのは苦厄だからね……」

苦難と災い——。

幼き頃より厄災に見舞われ、ラウルは苦汁を嘗めさせられてきた過去を持つ。

たった十六年の歳月で一度や二度ではなく、禍因に繋がれているのではないかと思われるほど幾度も関わり、悲劇を真直で体感してきたのだ。

特異な環境にいつしか、自身の成し得なければならぬことだと、好き好んで背負い込むようになってしまう。

厄災を祓うため貪欲に力を追い求め、しかしそれでは足らず嘆き声を上げ、また力を追い求める。

救いようのない悪循環に陥った後ろ姿は余りにも危い。

連れ立っていたルチアも何度も涙を呑んだものだ。

しかし、儂い彼の生き様から滲み出る魔性の魅力が、人を惹きつけて止まないのも事実であった。

「だからって……グレイファイアへの蛮行を許せて……言うの……？」

ラウルが何を背負っていようとリアスには関係なかった。

忿懣に曇った瞳は鋭く世迷い事を並べ立てるルチアを突き刺す。

「違うよ。ラウが間違ったことをしたなら、どんどん叱って。言葉だけじゃ伝わらないなら、手を上げてもいいから。……でも、感情の赴くままにぶつけないでほしいってこと」

「そんなの……都合が良過ぎるわよ……」

愚直にまで真つ直ぐルチアは真摯に訴え掛ける。

虚勢を張り平然を装う麗人を不用意に傷付けないでほしいと。

少女の無垢なる願いに堪え切ることができずリアスは目を逸らした。

「まあ、リアスさんの言う通りだね。凶々しいけど、これがわたしのお願い！」

ルチアは両手を打ち合わると勢い任せに頼み込む。

「特に今回は、リアスさんの為に剣を取ったんだから、ちよつとぐらゐは褒めないとラウが傷付いちやうから、ね？」

同時に片目を開け小さく首を傾けるお茶目な仕草からは麗人の影が見え隠れする。卵が先か鶏が先なのか、どちらが影響を受けたのかは定かではないのだが。

「はあ……あなたはラウルを甘やかし過ぎじゃないかしら？」

上目使いに様子をうかがう姿にリアスは嘆息を漏らした。

義兄妹共々の道化ぶりを見せ付けられた気分となり、胸内に渦巻く怒りは空回りする。

思い掛けない過剰保護ぶりに怒りを通り越し呆れ返ってしまったのだった。

「みんながみんな、マリーみたいな鞭を振るっていたら、ラウは今ごろ傷だらけだよ」

「……想像しづらだけれど、確かにそうなるわね」

既に行動を起こしているマリナに加え、慈愛の大切さを語るルチア、哨戒に出た黒子に不満を口にしていたティアマット、拳句の果てには温厚そうな魔女つ娘まで。

親しい女性全員から鞭を受けたのなら堪ったものではないだろう。

哀れな情景を思い起こさせる魔術師の手綱を取る為の餌。

これからも付き合いのあるリアスにも一考する価値はある。

むしろ、殲滅女王を打ち倒した実力者を放置する手はない。

精神的負担を無視すれば眷属に迎えたいと思つたほどの逸材だ。

駒の消費もなく優秀な人材を確保できる利点に思い悩むのだった。

情念の悪魔が揺らぐ気配を見せたことを悟つたルチアは、ここぞとばかりに本音をぶちまける。

「それに弟を甘やかせるのはお姉ちゃん役目なのです！」

——ルチアの背後で黄金が炸裂する。

舞い落ちる金の砂による演出は、堂々と胸を張る少女の発言を際立たせる。

意図してのことであれば、教育を受けている麗人には相当の余裕があるのであろう。

「あら？　小猫……わたしの眷属からの報告だと、あなたが妹さんだったはずだけど……」

未恐ろしい現実から目を背けたりアスは小首を傾げることになる。

ルチアの口から漏れ出した空言。

小猫からの口伝に加え、彼女の戸籍からラウルの義妹であることが判明しているのだ。

過剰な演出を受けて言い切った手前、ただの嘘ではないだろうが、リアスの気を引くには十分な発言であった。

「う……………」

「う……………」

リアスの追及を受けた騎士は身体を小刻みに揺り動かす。

まるで鬱憤を溜め込んだ火山のように、静かに——そして、溜め込んだ激情は怒濤の勢いで噴出する。

「裏切ったね!!? 白にゃん!!!」

それは最大の屈辱——拭うの出来ない一生の汚点であり、白き獣の背信行為であった。

「……………白にゃん?」

「白い猫又だから白にゃん! ……じゃなくて!? わたしはラウのお姉さんだからねっ!?」

目を見開いたルチアは感情の起伏を隠すことなく言葉を吐き出す。

小猫は白い猫又であるから、白にゃんという愛称で呼んでいるのだと。

出生が先なのだから、ラウルの姉で間違えないと。

地雷を踏み抜いたリアスに余すことなく真相を突き付ける。

「大体!! ユウのお姉ちゃんが、同級生のラウより年下なわけないでしょ!」

ルチアが佑斗の姉であることは周知の事実。

本来の出生が不明とはいえ、教会の施設でともに育った期間は誤魔化すことができない。
い。

必然とラウルよりも年上となり、本来ならば彼女が姉であることに疑いようもなかった。
た。

「言われてみればそうね。ラウルが妙に落ち着いているから、妹さんだと思ひ込んでしまったわ。ごめんなさいね」

「リアスさん謝る気ないよねっ!? その言い方!」

「ラウルのことを不問にするんだから、これぐらいは許してちょうだい」

禁じ手を使われてルチアの勢いは失速する。

ラウルへの配慮を申し出したのは彼女自身である手前、当て言を受け入れざる負えない。

しかしながら、リアスにからかわれるのは面白くない。

自称姉である義務と許し難い感情が闘ぎ合った結果、ルチアは言葉を詰まらすことになる。

「うぐつ!? ラウの非道を許してくれるのはありがたいけど………やっぱり、それとこれとは関係ないよねっ!」

「さあ、どうかしら? ルチアさんが我慢できないとわたしも我慢しないかもしれないわよ?」

「ううう……リアスさんがラウみたいにイジワルだっ!!」

堪えきれずに忍び笑いを漏らす悪魔の令嬢。

頬を膨らます少女の姿を見て、沸き立つように熱くリアスの胸中で燻っていた下火は、いつの間にか鎮火したのであった。

* * *

ルチアの説得が一応の功を奏した頃――。

二人の魔術師によつて織り成される緊迫した情勢も大きな変化を迎えていた。

「……平行線ですね、良いでしょう。腕が鈍つていないか、直々に見極めてあげましょう」

鬭争による決着を提案をするマリナは、自らの街頭に手を掛け肩口の留め具を外した。

黒地の袖が闇へと滑り落ち、衆目に曝される白靴。

眉間に皺を寄せるラウルの反応を余所に、爪先から二の腕の付け根まで嚴重に巻かれた包帯を紐解く。

「!？」

——唯、一本の腕。

封印の解かれた魔術師の右腕から発せられる重圧にリアスは身体を震わせた。

魔を司る代表格である冥界悪魔。

その公爵家の次期当主の感覚にすら影響を与える異常なもの。

右腕から漏れ出す異常な魔力は悪魔で言うところの最上級に値するかもしれない。た。

「……ルチアさんを疑うわけじゃないけど、彼らを放っておいて本当に大丈夫なの？」

加えて、嚴重に巻かれていた封印具であることは容易に想像が付いた。

存在するだけで畏怖を抱かせるほどの魔を宿した腕を封印する代物だ。

扱え切れないために封印が施されていたのか、はたまた強力な切り札を隠蔽する為の工作であったのか。

どちらにしろ危険な代物が抜き放たれたことにリアスは不安を隠せなかった。

「興奮しすぎかな。普段のラウなら断るところだけど……」

リアスの懸念も尤もであった。

表面上は澄まし顔を作れど、明らかに熱気の帯びた魔術師同士の戦い。

最強の女王を破りて尚も底知れない魔術師と最上級悪魔にも匹敵するオーラを纏う謎の右腕を持った魔術師が激突するのだ。

仮に本人たちが無事であれば巻き込まれるのは目に見えていた。

従者を抱いたまま動く様子のないリアスと険しい顔付きで戦況を見据えるルチアの見出した未来図。

奇しくも彼女たちの懸念は的中することになる。

「乗った。貴方と私、どちらが正しいのか白黒付けようではないか！」

封印を解いたマリナに相對するラウルは動じることなく虚空から抜いた新たな魔劍を双手に携える。

足元からは揺れる影法師から黒鎖を出現させ、周囲は霧と星の魔装具を展開して油断なく受けて立った。

積もり積もった日頃の恨むも込めて、雌雄を決するべく銀と黒の双子糸は対峙した。

「ストップ！ 二人とも、一旦中断だよ！」

闇夜を裂く甲高い声が制止の号音を響かせる。

ルチアは果敢に一触即発の空気の中へ飛び込み、射殺さんばかりの視線を一身に受け止めた。

「下がっている、ルチア。これは私達の問題だ」

「射線上に立たないで下さい。貴女のような未熟者が巻き込まれれば火傷では済みませんよ」

真つ直ぐと邪魔者越しに向ける視線を外すことのない彼らは制止の声を一蹴する。

「もう、お客さんの前で熱くなりすぎだよ。リアスさんだつて驚いているじゃない！」

「え、ええ……本当に色んな意味でね」

蒼銀の尾髪を大きく揺らして感情を顕わにするルチア。

気丈に胸を張る様子を見て、言葉の出しに使われたリアスも息を吐く。

義姉という金字塔が崩されたことに始まり、小手調べであるにも拘らず高度な魔術戦や龍虎の間へ身を躍らせた少女の胆力も含めて驚きの連続であった。

「あなたたちのことを知ることができたのは収穫と受け取るべきかしら？」

困り顔から一転、リアスは小悪魔な笑みを浮かべる。

常識というものを打ち崩された彼女はもはや諦めの境地に達していた。

達していたリアスであったが、微塵に碎かれた理性は反って建設的な答えに辿り着く。

感覚を麻痺させて耳を塞ぐよりも、むしろ目の前で繰り広げられる非常識を受け入れようとしていた。

「んんっ！ これは失礼しました。主が驍不足で申し訳ありません」

「何でも私の所為にすれば良いと言うものではない。舞踏の誘いを断らなかつた私も悪いのだがな」

客人が来ていることを思い出した彼らは、お互いの顔を見合わせバツの悪い顔をして目を伏せる。

ラウルは魔剣を鞘へ納め腰に差した聖剣ごと虚空へと仕舞い、マリナは右腕に靈布をしつかりと巻き直す。

勇氣ある少女の行動は悪魔の協力を得て、魔術師たちの矛を収めさせることに成功したのであった。

「物騒なものまで持ち出した割にはあつきりとしているわね」

「喧嘩するほど仲が良いっていうからね」

ラウルと対峙した彼女の右腕に宿る物は何だったのか。

リアスの疑念をあつきりと流したルチアは、グレイフィアを両手で抱き上げると目的の人物に近づいた。

「はい、ラウ。ラウはグレイフィアさんを屋敷まで運んで」

「いや……あのな……はい、って差し出されても、な？」

純白の布地に包まれたグレイフィアを差し出されたラウルは、彼女を支えるルチアの顔を見て目を白黒させる。

「ラウが仕出かしたんだから、ラウが最後まで責任取らなきゃ」

「ルチアの言う通りだが……私以外に適任はいないが、私では問題があるのだが……」

後に引けない状況を作り出したのが自身が故にラウルは頭を悩ませる。

白布のベールで覆われているとは言え、無防備な婦女子を抱くのは如何なものか。

増してや、抱くことになる対象は、天下に名立たる魔王の細君である。

些細なことで下手を打ち、関係を拗らせるのは拙いものがあつた。

倫理の狭間で思考を巡らせる彼は、ほどなくして深く息を吐くと一つの決意を固めた。

「仕方あるまいか。布越しで残念だが、白玉の感触でも楽しませてもらうかな？」

「ラウツツ!!」

軽はずみな発言を聞き咎めたルチアは、八重歯を剥き出しにして威嚇する。

余りにも不適切な発言に背後からも非難の視線が集中する。

おどけることで場を和ませようとする魂胆であったが、自ら針の筵へ身を投じる結果に終わったのであった。

「グレイフィアさんに嫌らしいことをしようとしたら、わたしもマリナの方に回るからね！」

苛烈な啖呵を切った騎士を前に、道化の演者はぐうの音を上げることすらも許されなかった。

八話 朝露の協定（上）

煌びやかな装飾灯に彩られた屋敷の玄関口。

最上階まで吹き抜ける奥行き豊かな広間に甲高い叫び声が響き渡った。

「って、普通、徒歩で帰るところでしょ!? なんでこんな事態に発展したのか、リアスさんの口から細やかな事情が私情混じりにぼつぼつと零れ出て……! 行く末はラウの寝室に押し入ったことまで発展するの! な・の・につ!! 集団転送で一足飛びに帰宅ってどういうことっ?!?!」

不満を吐き出しているのは、蒼銀の尾髪を振り回す騎士の少女。

望月の照らす夜道を風情の欠片もない魔術に頼って帰還したことへ腹を立てている。

加えて、悪魔令嬢の対応を任せられたせいで、味わうことになった苦汁の分まで、声を張り上げて八つ当たりを敢行していた。

「だ、そうだが……マリナはどのように考える?」

「夢を見過ぎです。そのような非効率な事を我々魔術師が行うはずないでしょう」

「私も同意見だ。不測の事態でもないのに、わざわざ無駄な労力を割く必要が感じられないな」

グレイフィアを腕に抱くラウルは慌てることなく対処する。

ごく自然な動きで隣を歩くマリナへの質疑応答。

参謀の意見を借り受け、自らの主張を確固たるものとした。

「ううう……こんな時だけマリーの影響を受けなくていいのに……」

素っ気のない態度で掌を返されたルチアは、尾髪を萎らせ嘆くのであった。

「そうだっ！ リアスさん！ リアスさんなら分かってくれるよね！」

泣き言を口にするルチアは突如として、弾かれたかのように飛び付いた。

期待を寄せる瞳に映るのは、豊かな紅髪を伸ばした一人の少女。

堅物色に染められていない悪魔の令嬢の存在は、少女にとつて一筋の光明であった

「えくと……その、ね？」

余りの勢いにたじろいだリアスは、戸惑った様子で本心を紡ぎだす。

「できればグレイフィアに負担を掛けたくない、かしら？」

困り顔のリアスが放ったのは申し入れの言葉。

天より垂らされた希望の糸は、目前でまたしても断ち切られることになる。

「うわああああああん！ リアスさんにまで裏切られたあああああ!!? 寄って集ってわたしをいじめるみんななんて大っ嫌いだああああ!!」

親しみを込めて愛称で呼ぶ小猫に続いて、信頼を寄せるラウルや部外者のリアスにま

で。

信じた人々による数多の裏切りにあつたルチアは、両手で顔を覆い隠して瞬く間に屋敷の中へと消えていった。

「飛び出して行つちやつたけど、追わないでいいの？」

「一晩休めば、明日の朝には何事もなかつたように現れるだろう」

「そう……」

ゆつくりと瞬きを行つたラウルは、追い詰められた少女が姿を消した方角を見詰める。

物事に向き合わず、情勢が悪くなると逃げ出すのは、喜怒哀楽の激しい彼女の悪い癖である。

軍事では被害が拡大する前に、撤退を決断する一つの指針となるのだが、生憎いまは私用である。

特に、彼女の性格が災いしてか、弟分の佑斗との折り合いに決着が付くことはなく、機会を作ろうとも本人とも合わず仕舞いに終わつている。

悩ましい問題を埒外に追い遣り一息吐くと、ラウルはゆつたりと歩みを再開した。

「んん……んん……あ……」

ラウルたち一同が入口の広間を抜けて扉を潜る頃。

艶めかしい声を上げてグレイフィアは目を覚ました。

彼女はラウルに抱かれている為に、視界には当然ながら立ち塞がったラウルの容貌が映り込む。

意識が鮮明になるにつれて、見開かれた瞳は鋭さを増してゆくことになる。

「目覚めは如何かな、敗軍のお姫様？」

「……最悪です。前回の目覚めが至福の時に思えるほどには」

「魔王殿は大層のこと愛されているようだな」

棘のある態度に苦笑を浮かべるラウルは、白い薄布を纏う女王の身を革張りのソファーへ静かに下ろしたのであった。

「私はこれで失礼するよ。必要なものがあれば、そこから顔を出しているお調子者に言い付けてくれ」

踵を返したラウルは応接間へ立ち入るためのもう一つの入口に目を向ける。

開け放たれた扉の縁から顔を出す流れ髪。

回折した照明の光によって、廊下に伸びた薄らとした影。

そこには想像した通り一つの人影が息を殺して待ち受けていたのだった。

しかしながら、指摘すれば隠れているにも関わらず、存在を顕わにするが如く跳ね上がる蒼銀の尾髪は、まるで人物の性格を体現したかのようで、実に愉快的気分を抱かせ

た。

「お、お調子者って誰のことっ!? ねえ、誰のことなのっ! って、いうか! 走り去っていった女の子を追いかけずに扱き使おうだなんて、信じられないんですけどっ!」

戸口に影を潜めていた少女は、存在を悟られたことに肩を落とすことない。

意地の悪い麗人が屋敷内部の情報を把握しているのは織り込み済みであった。

激しい剣幕で応接間に踏み入った彼女は、自身を不用意に揶揄したラウルに詰め寄った。

「自覚があつて何よりだ。後は任せるぞ、ルチア」

「ちよつとっ!」 最近、わたしの扱いひどくないっ!」

怒れる騎士の姿にラウルは深々と頷いた。

喜劇を演じる彼らの信頼に言葉は必要なく。

有り余る抗議を無視して俗事を全てルチアへと投げ出したのであった。

「それでは準備が出来次第、会議場へ」足労願う」

不敵に笑んだ麗人は自らの腹心を連れ立ち、少女の声音を背に受けて颯爽と部屋を後にした。

* * *

中央に円盤の卓上が設けられた大広間。

最奥の席を陣取るラウルが両手を広げて、入場する少女たちを出迎える。

「さあ、改めただが——我らの居城へようこそ、グレイフィア・ルキフグス」

先導するルチアに連れられ、仮初の主であるリアスと伴に現れた殲滅女王。

満を持して客人扱いで迎えられた彼女の格好はメイド服から一変、髪も降ろしてラフな服装となっている。

恐らくは、世話を任されたルチアが、屋敷にある衣服から選別したものだろう。

若干、胸部に張り付いた布地の存在から、そのことが容易に想像できた。

「どうぞ、好きな所へ座り給え」

人を誑し込む柔和な笑みを浮かべたラウルは、口元を結び気を引き締める客人を誘った。

「ええ、交渉の場を設けてくれて感謝するわ、ラウル。グレイフィア、あなたも席に座りなさい」

上品に、恐れを知ることなくリアスは対面から逸れた席に腰を下ろす。

ラウルたちの謀略を疑うことなく、無邪気な信頼を寄せて席に着いたのだ。

余りにも無防備な紅の姫の態度にグレイフィアは澁面を作り出した。

されど、実質交渉役を任されたことになる彼女は、慎重に腰を下すことを余儀なくさせられていた。

「手間暇掛けて、漸く体裁を整えたのだ。先のことも含め、お互い恨み言は忘れようではないか」

客人が席に着いたことを確認したラウルたちは共に席に着く。

最後に給仕を終えたルチアが両脇を埋めたことで交渉が始まった。

「さて、彼女たちは兎も角、私の自己紹介は必要か？」

「ええ……是非ともお願いします」

「心得た」

手始めに交渉の場を設けた主催者側の素性の紹介で幕を開ける。

これは悪魔たちの素性を知り得るラウルの配慮でもあった。

「アンヌヴァン戦闘傭兵組織 『円卓の黒騎士』ラウンド・オブ・ワー・ヒーロー 第十三騎士団 混成遊撃師団・団長の八幡・G・ラウル

だ」

「……同組織同師団所属・団長代理マリナ・アンブロジウス」

「同じく騎士隊長の八幡・F・ルチアだよ」

正しく、藪蛇——

素性を知るいい機会だとしか捉えていなかった悪魔たちは、知らされた事実で愕然と

する。

リアスは麗人の片腕と思われる魔術師が、魔法の祖とも謳われる高名な魔法使いの名を冠していたことについて。

一方で、グレイフィアは人間界に留学に出た姫君が、知らぬ間に悪名高い組織の幹部と通じていたことに驚きを隠せなかった。

悪魔たちが驚愕に時を忘れる内容であつても、彼らには氷山の一角を映しただけに過ぎない。

隠し事が得意なラウルたちは、敢えて黒騎士としての素性を曝け出したのだった。

「なるほど……道理であなたの方が手強いわけです」

冥界や天界にすら名の通った悪名高い黒騎士たちの威名。

それは眉間を解き解す魔王夫人の信用を得るには十二分な内容であつた。

「グレイフィア、あなたは何か心当たりがあるの？」

納得を示すグレイフィアとは裏腹に、隣へ座るリアスは首を傾げて盛大に疑問符を浮かべる。

滅びたとされる円卓の名を騙る者たちと冥界最強の女王をも打ち倒した異端の魔術師。

会話の内容から悟ることをできないのが、悪魔令嬢の悲しい性であつた。

「……………」

盟主たるラウルと繋がりを持つに価する人物か、否か。

無知を晒し続ける彼女が、品定めを行っている赫の瞳の存在を知ることはないだろう。

紅の姫の醜態を見兼ねて、ラウルは自慢の美声で古来に謳われた詩曲を奏でる。

——天魔人龍集う血戦の刻

戦乱の地に黄金の双頭龍に率いられた古の英雄が駆け抜けた

——丘を護りし高潔なる騎士、白き鎧を纏いて大いなる災禍を討ち祓い——

——濡れ鳥の羽衣を靡かせ鬼子は人を斬り捨てる——

——鮮血で染まりし鋼の御剣の煌きに御使いさえも平伏した——

——嗚呼、無上なる強者どもを前に、天壤の神すら霞むことだろう

それは円卓の活躍を褒め称える讚美歌。

誇張はあれど、世界を巻き込んだ大戦へ参戦した確固たる証拠であった。

「一時は吟遊詩人にも謳われた程の悪名高き傭兵騎士たちだぞ。まさか、聞き覚えの一つもないとか言わないよな？」

先人の功績を称えたラウルは、記憶の断片が繋がったことを期待して、慈悲深い微笑を向けた。

「お嬢様を虐めないでください。あなた方が活躍したのは三大勢力の戦争末期の頃だったはずです」

心当たりがないリアスは息を詰まらせるが、侮られることを嫌ったグレイフィアが返す手で助け舟を送る。

冥界が把握している円卓の最盛期は、天使と悪魔と墮天使による三つ巴の戦争の終局であった。

しかしながら、戦争の終結から千年の月日が流れているのも、また事実である。

音に聞こえた円卓であっても、新世代のリアスたちが知る由もないのだと、グレイフィアは諫めた。

「十世紀も前のこととは言え、歴史の片隅にでも描かれてはいるだろう？」

ラウルは予想もしていなかった展開に眉を寄せる。

彼らの所属する円卓は過去に幾度となく名を馳せた組織である。

一度目は人界の史実にも数多くの逸話を残し、再編された二度目の円卓は、魔の技術を取り入れることで傭兵としての地位を不動のものとした経歴がある。

表の世界では伝説として、裏の世界では人間にして、人外を葬る猛者たちの集団として。

神話の垣根すらも越えて名を残した存在を覚えがないの一言で済まされてしまつては、流石の麗人も立つ瀬がなかった。

「残念なことには、一般的には伝えられていないのが冥界の現状になります」

「おいおい……だから、冥界の教育は偏りが著しいのか？」

他愛ない冥界事情に呆れ顔のラウルは、対面に座るグレイフィアから一時、目を逸らして悪魔令嬢を垣間見た。

矛先が向いたことに碧玉を揺らがせ、それでも胸を張り背筋を伸ばす紅の姫。

責任を投げ出し優雅に佇もうと気を張る姿は、温室育ちであることに納得ができる。

引き起こした事態の收拾を図る交渉で矢面に立つこともなく、グレイフィアに一任する辺りに彼女の氣質が顕著に表れている。

それは与えられたものを享受してきた証拠なよりのであろう。

自ら追い求めることなく、必要とされたことのみを熟してきた故に、隠された伝聞を

拾う耳もなかったのであろうと結論付けた。

「……どこの勢力も余裕をなくして、戦況が苛烈になっていたのは御存知だと思いますが？ 主要都市ですら、荒廃の一途を辿っていたと聞き及ぶほどですよ。生き残った名家の史書ぐらいいなら記入されているやもしれませんが、中央の書庫には皆無でしょう」

妥当な評価を下すラウルの不躰な視線にリアスが顔を顰める最中、グレイフィアは無知の真相を投下する。

「嘆かわしいな……ダンタリオンの一族も落ちぶれたものだ」

衝撃の余りにラウルは、額へ手を当て自ずと天を仰いだ。

戦後の疲弊を理由に得意の部門を怠るとは愚の骨頂。

増しては、彼ら不手際は後世に語り継いでいかないとならない先人の軌跡だ。

冥界72柱の一柱に数えられた悪魔として有るまじき失態であろう。

王たる四大魔王が滅せられ、多くの名家が断絶したのだから尚更のこと、残された者の意地を見せてもらい所であった。

毒を吐き捨てることで気を取り直した魔道騎士は、音に暗い悪魔令嬢へと円卓の成り立ちを告げる。

「組織の名を聞けば気が付くとはとは思いますが、『円卓の黒騎士』は彼の円卓の生き残りが

再建した対人外向けの傭兵組織だ」

激戦を生き抜いて尚も、千年以上の歴史を誇る世界最強の傭兵騎士団。

それがラウルたち——黒騎士の集う円卓の正体であった。

「近年の活躍で言えば、ルレイ工殲滅戦が大きな戦果だろうな。時代を遡れば、欧州各地の戦場に出没しては戦果を挙げていたそうさ。八十年戦争から続くブリテン革命に、二度の百年戦争など西欧の戦場へと積極的に参加していた経歴がある。活動は故国であるブリテンや新興宗派であったプロテスタントを中心に雇われ、三十年戦争のラ・ロシエル撤退戦では、包囲するフランス軍を撃退した後、三万にも上る市民を亡命させるようなことも行ったそうさ。物好きは東洋の戦場にも足を運んだこともあるようだがな」

冥界に伝わる通りに円卓の最盛期は三大勢力による神話戦争で間違えない。

だが、大戦より千年続く円卓の活動が一つに収まるはずもなかった。

天使の加護を受けた聖人を捕えた一度目の百年戦争。

福音主義を擁護して一国を独立に導いた八十年戦争。

続けざまに起こったブリテンを内分した革命戦争では、各派閥に雇われ戦火を広げることになった。

大英帝国の礎を築いた二度目の百年戦争や欧州から離れた戦場でも、多大な戦果を挙

げたのだった。

時代が移ろい飛び道具による戦いが主流になると、歴史の表舞台から姿を消すことになるが、その後も円卓は歴史の裏側で暗躍を続けることになる。

「随分と教会に入れ込んでいるのですね、あなた方は」

鋭い視線が歴史の語り手を突き刺した。

革命家に、王に、国に――

騎士団の雇用者はいずれも教会と関係を持つ人物であるのだ。

分かっていたとは言え口頭で告げられた情報は、悪魔の身である彼女には受け入れ難いものであった。

「欧州は一部を除き、教会の勢力下にあるからな。三大勢力同士で旗揚げがない限り、雇い主は概ね決まっているさ」

女王の探る視線を一身に受けるラウルは、不敵に笑むと弁解の言葉を紡ぎ出した。

本より組織が拠点を置くブリテンの周辺は、聖書の神の威光が冴え渡る地である。

かつてはケルトの神々が幅を利かせていたが、既に過去の栄光と帰してしまった。

肥大した聖書の勢力へ追いやられた神々は、三つ通りの島々からなる楽園へと移住することになる。

ケルトの神々が去った背景と同様に、欧州に名を馳せた他神話の神々も聖書の勢力の

影響を受け、其々の世界へ隠居を決め込むこととなる。

神々の去った欧州で傭兵活動を行うとなると、雇用者は必然と決まることになる。

聖書の教徒か、教会の敵対者かの二択に絞られる。

後者ならば人狼や邪教の秘密結社など敵対する者は存在するが、支払い能力を疑問視することになる。

雇うだけの能力がある者として、ルーマニアの吸血鬼や妖精が挙げられるが、第一彼らの目的とはそぐわない。

残る候補の悪魔や墮天使は、大戦の折に種の存亡の危機に立つほど疲弊している為、自ら望んで戦いを起こそうともしない。

支払い能力があり、尚且つ戦力を必要とする者は限られる訳だ。

教義の正当性を謳う聖戦に、利害目的で始める侵略戦争。

雇われるに足り得るのは、遍く理由を盾に懲りることなく戦いを引き起こす人間であり、神の信望者となる。

円卓が傭兵組織であっても、雇用者が教徒である以上、教会とは切つては切れぬ存在になっていた。

「なに、冥界に限るなら少し古くはなるが、五百年前の新旧魔王派の内戦に戦力の要請があつたぐらいのことかな？」

基本は故国に、国教たる教会寄りに活動を続ける組織ではあるが、敵対する勢力の要請に応えない訳ではない。

契約を遵守するのであれば、如何なる勢力へも戦力を派遣するのが彼らの流儀であった。

「そうなの、グレイファイア？」

「苦い思い出ではありますが……彼の仰ることに偽りはありません」

悪魔勢力を二分した騒乱の折に、旧魔王派の神輿として祭り上げられていたグレイファイアが、表情を曇らせるのも無理はなかった。

「……………冥界ではこの時の資料も消失したのか？」

清々しいほどの主従の会話を目にしたラウルは唸り声を上げる羽目になる。

「……自尊心の塊である老害どもが、外部の戦力に頼ったなどの恥を後世に残すとお考えですか？」

「在り得んな。内政事情はどこも似たり寄ったりか」

内情険しい怨声に、苦味虫を噛み潰したかのような渋面を表に出して首を振った。

謀らざとも歴史は書き止めた文士や為政者の都合によって改竄される。

原罪を身に宿した人の業ゆえに手を加えられ、欲を剥き出しにする悪魔の性ゆえに認められることはない。

足掻いたところで止めようのない悪行に頭を痛めるのであった。

「まあ、これが私たちの正体と言うところだよ。世間知らずのお姫様も少しは学が身に付いただろう？」

「確かに史実の裏側を知ることができて勉強にはなつたけど……あなたは一言、余計な言葉が多いのよ！」

ラウルはおどけて陰鬱な雰囲気をつい去り、瞳を怒らせるリアスを愉快だと嘲笑う。不用意な一言で表情を次々と変える滑稽な姿は自然と愉悦を覚えさせるのであった。

「はあ……」

まるで子供のようにからかわれる令嬢を目の当たりにして、グレイフィアは心の奥底から深い息を吐き出した。

「グレイフィア!? あなたまで私を馬鹿にするつもりなのっ!？」

義姉として、教育係の従者として、慕っていたグレイフィアの失笑を買ったことに、内心穏やかでいられないのだろう。

冷やかしを受けて気が立っているリアスは、呆れ混じりの嘆息に過剰な反応を示した。

「いえ。お嬢様が彼らの情報について無知なのは、こちらの不徳の致すところです。別に咎めはしませんよ。ただ……これからの展開を予測して胸が詰まっただけです」

理不尽な糾弾を向けられて尚も、殲滅女王が揺らぐことはない。

鉄の仮面を張り付けた彼女は、苦肉と慈しみの入り混じった瞳でいきり立つリアスを諭すのだった。

「あなた方がお嬢様に肩入れしていることを喜ぶべきか、嘆くべきなのか……正直、判断に迷うところです」

迫力に押された紅の姫が口を噤んだことを確認したグレイフィアは正面に向き直り、飄々とした麗人の胸内を覗かんとばかりにすつと瞳孔を細めた。

「難しく考える必要はあるまい。声を掛ければ動員できる戦力が身近にあるのだ。先日のような有事の際には利用しない手はないだろう？」

また一段と鋭くなった女王の眼光を前に、ラウルは毅然とした態度で臨む。

「……傭兵であるあなた方は、金銭で動くと思っていましたか？」

「状況次第と言ったところかな？ 金では買えぬものもあるからな」

彼ら黒騎士は飽くまで傭兵である。

全てが金勘定で成り立っている守銭奴でも、独善を謳い弱き者を助ける義賊でもない。

報酬を以って雇われ、打算があるが故に行動を起さず。

どこまで行っても円卓の黒騎士は、人外相手にまで戦力を提供する死の商人であつ

た。

「そうですか……少し考えを纏める時間を頂きたいのですが、宜しいでしょうか？」
「念を入れて貰って構わない。この場での明言を強いて、後で掌を返されては堪らないからな」

ラウルは猶予の申し入れを快く許可した。

傭兵稼業を展開するに当たって一定の信頼関係は必要となる。

自身の所持する戦力を示し、身を以ってその信用を勝ち得る。

彼女の迎撃の際には複雑な事情が絡まっていた為に、多少手荒な実証となったが、望んだ結果は得られたはずだ。

冥界切つての大悪魔が時間を空けてまで、真剣に取り組んでいるのが何よりの証拠であつた。

そして、この好機を逃さないとすれば、取れる行動は自ずと限られる。

愉しんだとは言え、殲滅女王を打ち倒した労力を余計な一言で水の泡と化するの、あまりにも無意義だ。

僅か一日二日の時機で足掛かりを作り、加えて魔王夫人公認の滞在許可までも下ろされるのなら、待たされるのも訳はなかつた。

「ただし、魔力が回復するまでの時間稼ぎならお断りだぞ？」

一方で、僅かな可能性に備えて釘を差すのも忘れない。

片隅にある邪な考えを見通しながらも、悪感情を薄めるようにお茶目な振る舞いを見せ付ける。

可愛らしく片目を瞑り、窄めた唇の前で人差し指を立て会話に華を持たせる麗人は、軽やかに警告を送るのであった。

「……………呆れて言葉も出ません」

「ごめん、ラウ……………さすがにフォローできないや」

突如として現れた悪癖に左右の席は嘆きの色に染まった。

大胆不敵な麗人へ付き従う彼女たちにすれば、迂闊な行動は頭が痛いの一言に尽きる。

行く先を決めかねない一局で、気の赴くまま悪ふざけを行われては、堪ったものでもなかった。

「まあ、慰安も兼ねて、今日のところは屋敷に泊まっていくといい。程良い緊張感が、反って視野を広げるかも知れんぞ？」

奇行の結果、非難を浴びたラウルは静まり返った会議場で軽く咳払いを響かせる。

険悪な空気を入れ替えると、招かざる客人たちに妙案を示すのだった。

「……………婚姻前のお嬢様を得体も知れぬ狼の巣に投げ出すとお思いですか？」

「杞憂だな。残念ながら、現状で貴方の懸念が実現することは皆無と言えよう。仮に手を出す心積もりならば、既に事を終えた後だろうな」

拒否の一言を発して疑いかかる女王の態度に、宿舎の提供を申し出たラウルは肩を竦める。

善意での行動であつても、責務ゆえに必要な以上の疑念に駆られるグレイフィアの了承を得るのは難しい。

こればかりは、言葉を幾ら紡ごうとも覆らない問題であつた。

「決して、そちらのお姫様を蔑ろにしているわけではないぞ。彼女は魅力的な花ではあるが、同時に甘い毒でもあるからな。生憎のこと、私には手を出す覚悟がないのだよ」
覆らない問題であろうとも、百面相を繰り広げるリアスを見て断言する。

僅かな弾みでタガを外してしまう男女の仲であつても、彼女と一線を超える事態には陥らない。

甘美な花蜜が猛毒と知り得て、無暗に手を出す賢者などいる筈もなかったのだ。

「客室は腐るほど空いている。先程の客間ないし、この会議場でも、好きな所を使用してくれて構わない」

一頻りの弁明の後、最終的な判断を女王と副官に投げ遣り、ラウルは静かに席を立つ。幾ら議論を重ねようと信用がない状態では不毛な口論でしかない。

代表である自身の存在が障害となってしまうために、一層のこと纏まりを欠いてしまっているのは目に見えていた。

夜が明ける前の終結を望むならば、周囲の機微に触れて席を立つのも必然であった。もしも、宿が必要ならば、グレイフィアの方から改めて申し出るだろう。

不要ならば、意を汲み取ったマリナが、彼女たちの居城まで送り届けることになるだろう。

交渉の中断も伴い、この場にいる必要の無くなった彼は、足早に退室を始めたのであった。

「待ちなさい、ラウル！ あなたは来客の対応も真面にできないのっ!？」

扉へ歩を進めていたラウルの鼓膜を女性特有の金切り声が劈く。

身の内に溜めこんだ激情に翻る紅涙の絹糸。

感情を爆発させたのは騒動の発端でもあり、女王に口を嚙まされていた紅の姫であった。

「案内が必要ならば、先の通りに彼女へ頼んでくれ。私はこれから一仕事あるのでな」
腰に手を添えるリアスの行動に頬を掻くことになる。

発破を掛けたのは自身であったが、従者の意見を無視しての英断は想定しえない事態だった。

されど、巡ってきた好機を貪欲な魔術師が逃すはずもなく。

ラウルは動揺を内に秘めて、臆することなくニヒルな笑みを浮かべた。

「もつとも——何処かの誰かさんが暴れ回った後処理ではあるのだが、な？」

口端を吊り上げて意地悪な表情を作り、軽率な悪魔たちの行動を誇る麗人。

恥辱に顔を歪ませる彼女たちを尻目にして、ラウルは会議場に含み笑いを響かせる。

「ふふふ……それでは好き夢を、好き返事が有らんことを期待している」

綺麗な一礼を見せたラウルの姿が霧の如く掻き消えることで、今宵の騒動は一幕の終わりを迎えたのであった。